



ちどのそ、の目度二たして昔教朝今、の初最たして恋み茂のグツライラて昏
(照参頁八八) .。たれらじ感くよもに女彼がさしろ恐たつがちもと吻接の

衆集

5

10

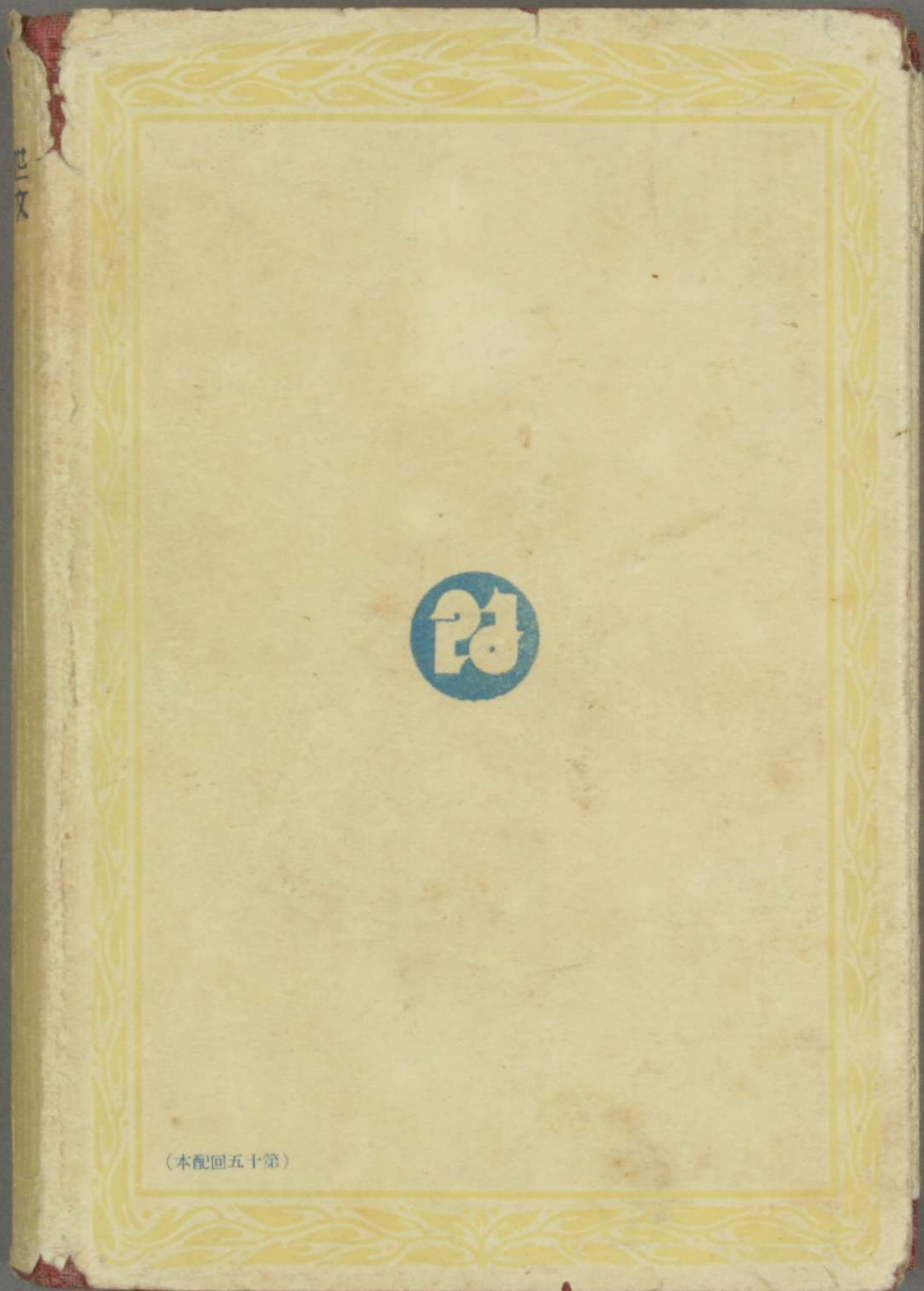
15

20

世文
鼎學
大全
衆集

カチユウシヤ

トルストイ
近松秋江



世
文



(本配回五十第)

世界大衆

(總内容)

1. 假面 藤田 勇
2. 家なき見 菊池 寛
3. 前線 十 藤田 勇
4. ルバ 藤田 勇
5. 精敏。マノン・レス
6. 三銃士 久木 正徳
7. 放蕩息子 菊池 寛
8. ダイヤモンド。カート ライト事件 森下 雨村
9. オリバー・ツイスト 尾形 徳三
10. トウェーン名作集 佐々木 邦
11. 結婚 約木村 毅
12. 巴里の秘密 武井 無忌庵
13. アングル・トムス・クビン 和氣 律次郎
14. 黒 星 豊吉
15. メトロポリス他一篇 近松 秋江
16. カチュウシヤ 近松 秋江
17. 九十年早坂 二郎
18. 寶島。デュケル博士 野尻 清彦
19. スペードのキング。コブラの秘密。フアの四 小井 不木
20. ステラ・ガラス。ラ・ボエム 森 岩 雄
21. シヤフロック・ホウムズ 延 原 謙
22. ゼンダ城の鷹 寺田 鼎
23. 紅はこべ 松本 泰
24. 空中戦争。海底旅行 木村 信兒
25. 平 塚 春夫
26. ルック探偵。河畔の 田中 早苗
27. スカラムッシュ。小田 律
28. 洞窟の女王。ソロモン王の寶窟 平林 初之輔
29. 海の義賊。ロビン・フッド 高橋 邦太郎
30. ボー。ホフマン其他 江戸川 亂歩
31. 三等水兵 マルチン 福永 恭助
32. 幻島ロマンス 野口 米次郎
33. ロモラ 賀川 豊彦
34. 世界滑稽名作集 東 健 而
35. 世界怪談名作集 岡本 綺堂
36. 世界怪奇探偵事案 譯

(赤刷紙行)

世界大衆全集

カチュウシヤ

トルストイ 近松秋江

16



「おちどのお、の目度二たして自教朝今、の初里たして恋のみ次のクツライラて言 (照参頁八八) .。たれらじ感くよにも女彼がさしう恐大つがちもと吻接の

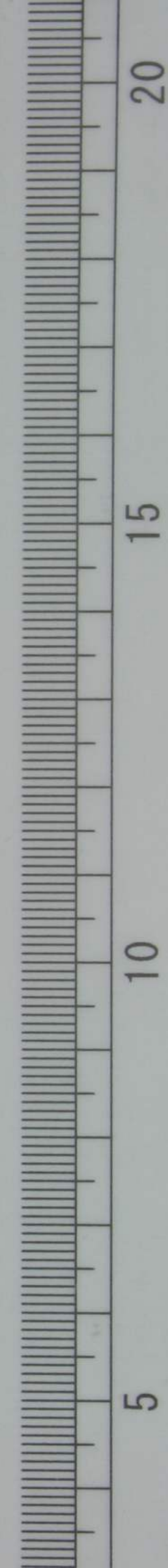
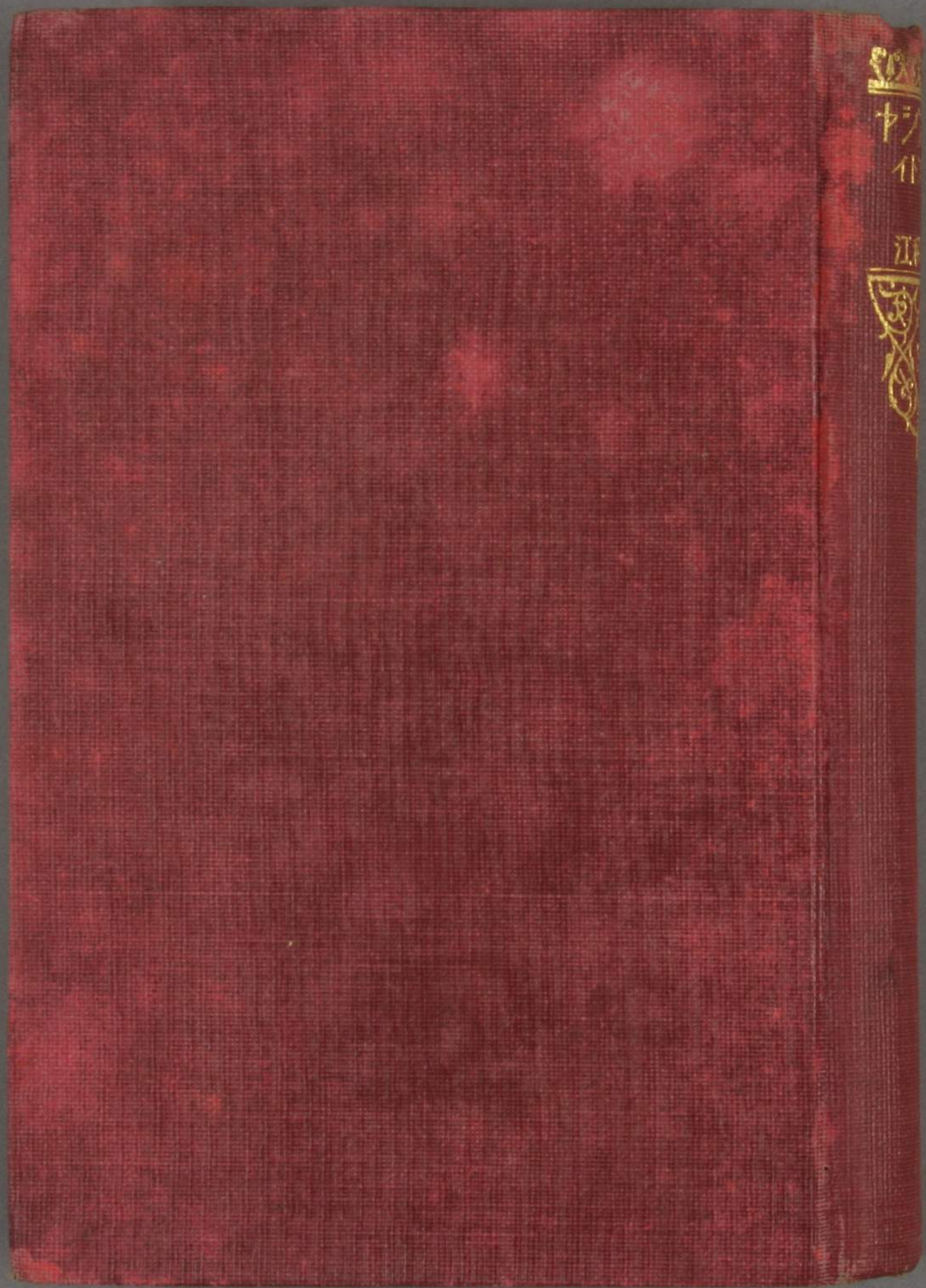
(本配回五十第)

物人要主中篇

ネフリユードフ(公爵、大地主、本篇の主人公)
 マリヤ・イワーノワナ(女地主、ネフリユードフの叔母)
 ソフィヤ・イワーノワナ(マリヤの妹、姉と同棲す)
 カチウシヤ(エカテリーナ・マースロワと云ひ、妓樓にてはリユーブカと云ふ。本篇の女主人公)
 ミツシイ(コルチャギン公爵の令嬢、一時ネフリユードフと婚約あり)
 イワン・ミハイロウイチ(伯爵、前國務大臣)

エカテリーナ・イワーノワナ(イワン夫人、ネフリユードフの伯母)
 マリエット(某大官夫人)
 ウォロリフ(元老院議員)
 ウオロビヨフ(諮議委員會議長)
 ナターリヤ・イワーノワナ(ネフリユードフの姉)
 アグラフェーナ・ペトロウナ(ネフリユードフ家の家政婦)
 イグナーチイ・ニキフォロウイチ(ナターリヤの夫、裁判官)

フアナリーナ(辯護士)
 マースレンニコフ(副知事)
 フョードシヤ(カチウシヤと最も親しき女囚)
 ウェーラ・エフレモワナ(ボゴドゥホースカヤとも云ふ。國事犯の女囚)
 ランツエーワ(エミリア・キリロワとも云ふ。國事犯の女囚)
 タルイリツォーフ(國事犯徒刑囚)
 シモンソン(國事犯徒刑囚、後カチウシヤと結婚す)



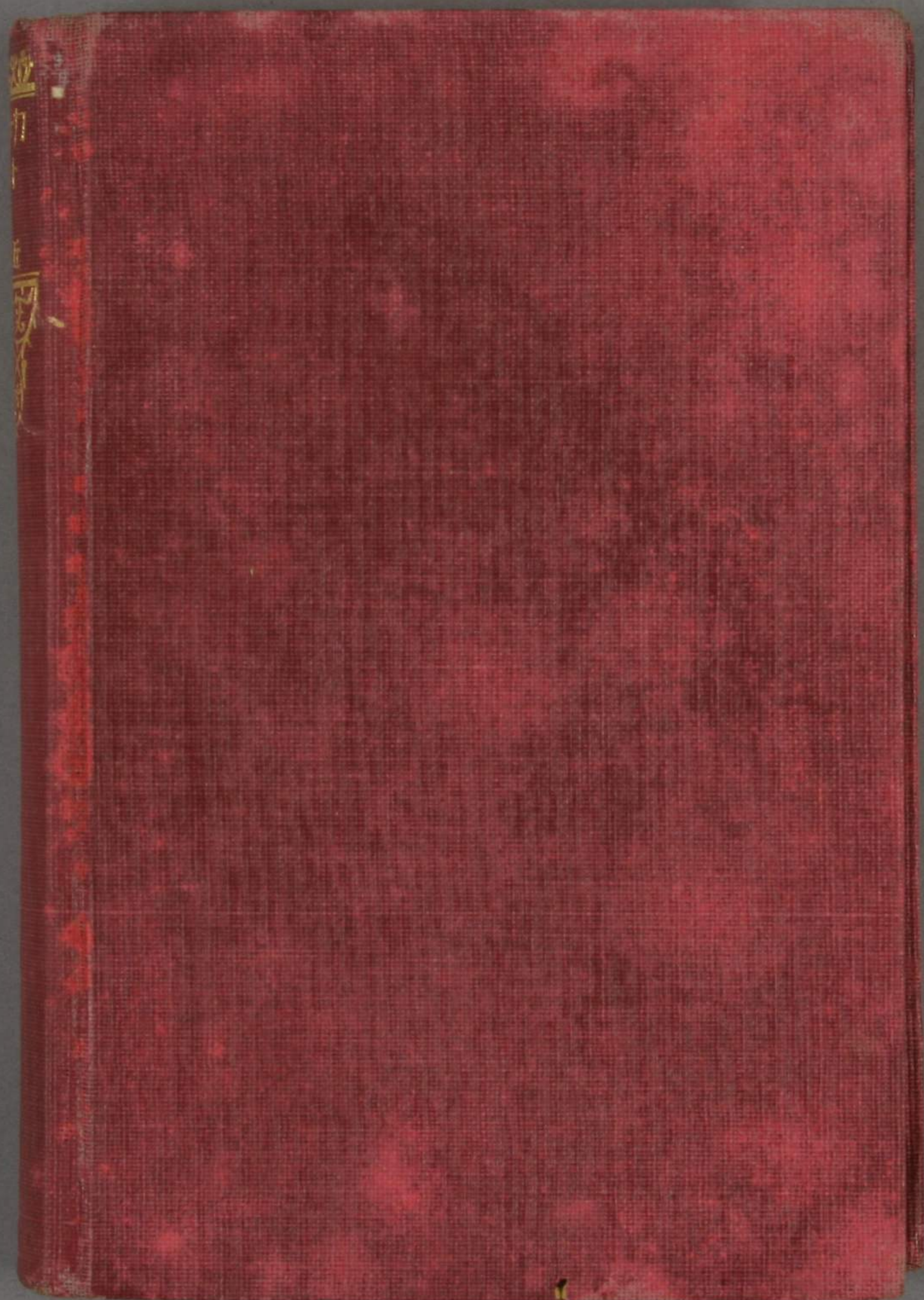


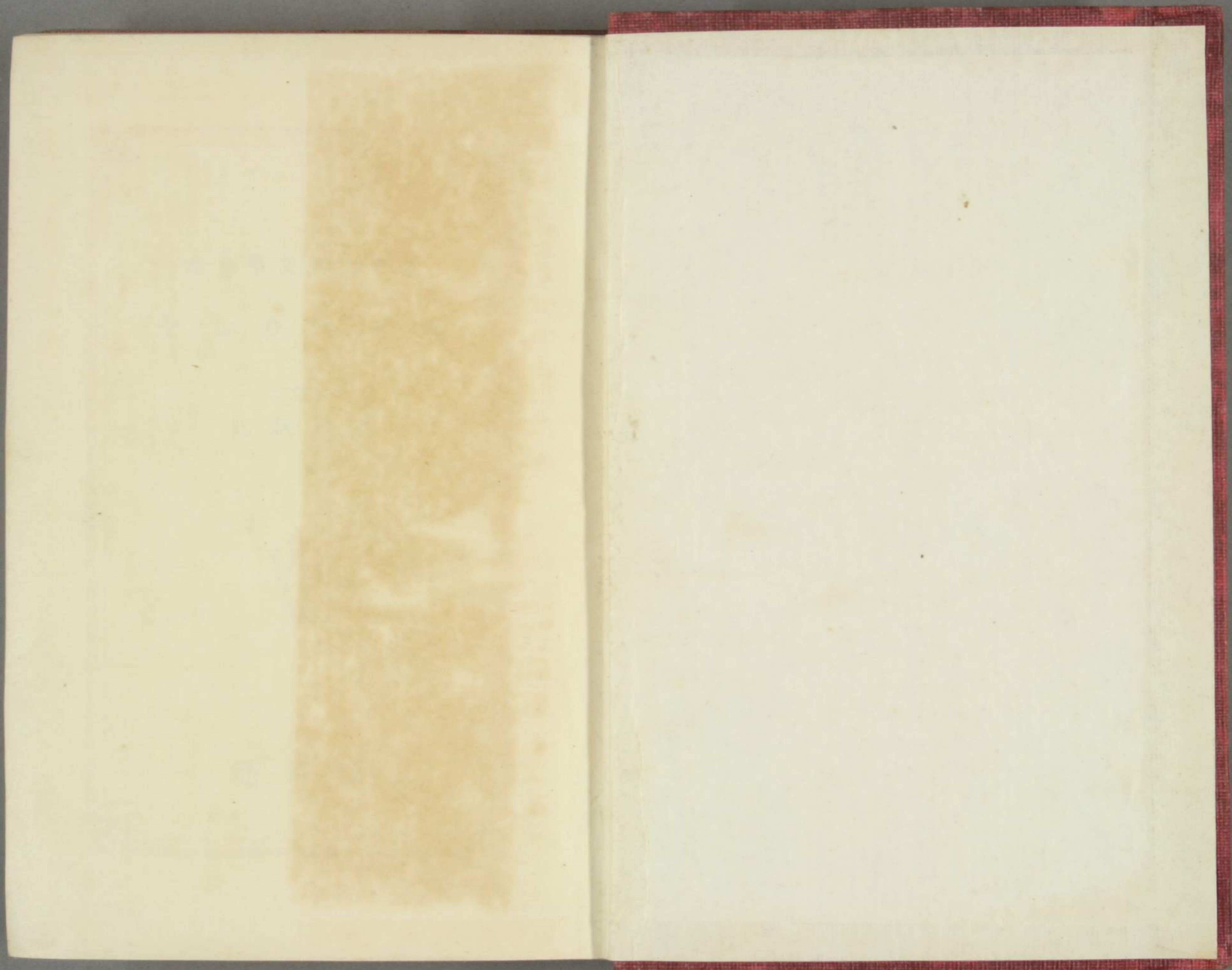
ヤシウエチカ
イトスルト

江秋松近



16





世界大衆文學全集

カチユウシヤ

—
近松秋江



改造社



私たちは顔のフドーユリフネたれはらあに下窓。おたつた杯ーが囚女のりべキしおはに驛車
(照巻頁九一四)。お茶てつ窓に際窓でい急はワロスー▽。たい葉を親親の等女族ちま。





イトスルト



氏江秋松近

譯者の序

カチユウシヤの原作者トルストイについては、もはや日本にも十分知られてゐるから今更こゝに絮説する必要はあるまいと思ひます。又、カチユウシヤその者についても、事新しく申述べる必要のないから、吾々日本人にとつても、馴染み深い名である。カチユウシヤの原作は、御承知のとほり、レサアレクシヨン、即ち日本語に譯して「復活」といふのであります。一篇中の女主人公の名がカチユウシヤといふところから、私の譯書の題名にしたのであります。カチユウシヤの名は、先年故松井須磨子が、この翻譯劇の女主人公に扮して演じたので、我が國の都鄙到るところに、その名を知られるやうになつたが、更に今日では映畫によつて、一層廣く一般觀客に親しみを持たれるやうになりました。その意味に於いて、一小説中の架空人物たるカチユウシヤといふ女性は、今や、世界的の女性として、殆ど實存人物と同様の深く且つ強い印銘を、吾々讀者又觀客に與へてゐるのであります。

私は、自身、文藝家としても、又、單なる讀者としても、居常最も多くトルストイ翁に敬服してゐるのであります。翁の、その他の多くの傑作については、暫く措き、このカチユウシヤについて思つてみるに、これほど力強い、人間の意志と、豊富なる感情と、

悲壯なる悔恨、哀切なる情懷とを溢れる程湛へてある文學が、他にどこにありませうか。
 ト翁の作について、私の最も感激するのは、その、あくまでも人間性の眞實を描寫し
 解剖し、皮と肉とを抉つて最後の骨に徹するまでの深刻さであります。この作の主人公
 たるネフリユードフにしても、女主人公と同様、彼等は決して、浮ついたる、單なる娛樂
 としての文藝物を提供せんがために作られたる人物ではない。個性の問題としては、人間
 生活の内面的の悩み、又外面的の問題としては、種々なる社會制度の缺陷。その二つのも
 のに苛責せられつゝ、神の威力のほかに人間力を以つてして、如何ともすべからざる運
 命の浮沈に漂蕩せられて、果てしもなく流れながれてゆく人の身の行く末。さういふ詩的
 な深い感情が、この作を読み、又、その映畫を眺めてみると、身の内に湧然として起つて
 來るのを覺える。

私は、映畫として見ても、いまだ嘗て、このカチュウシヤくらゐ悲壯哀切なる感興を
 覺えたものはありません。他の映畫は殆ど輕薄なる作爲物です。しかるに、このカチュウ
 シヤのみは、大地の底から、非常な力を以て自然に生えて來てゐるもの、やうな感じがす
 るのであります。私は、この作を読み、且つ觀る時、最も明かに、作者の人格の力とい
 ふことを認めざるを得ぬのであります。

昭和四年早春

譯者誌す

目次

第 一 篇	………	六
第 二 篇	………	一五四
第 三 篇	………	四四五

カチユウシヤ

カチユウシヤ

カチユウシヤ

カチユウシヤ

その時、ベテロ、彼に來りて曰ひけるは、主よ、幾次までわが兄弟の我に罪を犯すを赦すべきか、七次までか？ イエス、彼に曰ひけるは、爾に七次までとは言はじ、七次を七十倍せよ。(馬太傳第十八章第二十一節——第二十二節)

なんぢ、兄弟の目にある物屑を視て、己が目にある梁木を知らざるは何ぞや。(馬太傳第七章第三節)

なんぢ等のうち罪なき者、まづ彼女に石を投ぜよ。(約翰傳第八章第七節)

弟子はその師に踰らず、されど全備なる者は皆その師の如くなるべし。(路加傳第六章第四十節)

第一篇

—

當四月二十八日午前九時、目下拘留中の男囚一人、女囚二人を地方裁判所に出廷せしむべしとの通

告者が、地方監獄の事務所に達した。さうして女囚の一人は主犯として特別に護送すべしとのことであつた。よつて、その朝、命令に従つて、看守長が、薄暗い、厭な臭ひのする女囚監の廊下に這入つて來た。續いて、ちびれツ毛の白髪まじりの、皺くちや顔の女看守が這入つて來た。金筋入りの袖のついたジャケットを着て、その上に、青い縁をとつた帯をしめてゐる。

看守長が鐵の錠をガチャつかせて監房の扉を開くと、廊下よりもまだ厭な臭ひが、さつと鼻をついて來た。

「マースロワ、出廷。」と看守長は嘖鳴つて直ぐまた扉を閉めてしまった。

いくら監獄でも、中庭には風が送つて來る爽やかな野邊の空氣があつた。しかし、一步廊下に這入ると、その空氣は、いろんな汚物の惡臭を帯びて重苦しく、初めて來た者は誰でも氣がふさぎ、頭が重くなるのである。悪い空氣には慣れきつてゐる女看守でさへ、今、外から來ては、やはりそれを感じて、俄かに氣だるくなり、眠氣を催してしまつた。

監房の中からは、女たちの騒ぎや蹺音が入りまじつて聞えて來た。

「おい、早くしないか。」

看守長は、ぢれつたさうに叫んだ。一二分経つと、小づくりな肉つきのおい、若い女が元氣よく出て來て、看守長のそばに行つた。白いジャケットと白い下袴の上は鼠色の上衣をつけ、リンネルの靴下に牢屋靴をはき、頰に白い襟巻をまきつけてゐる。襟巻の下からは眞黒い髪の捲毛の輪が、わざとらし

くはみ出して額に垂れてゐる。長い間、閉ぢこめられてゐたものに特有な、その蒼白い顔は穴倉に貯へられた馬鈴薯の芽を見るやうな感じであつた。小さくて幅の広い手、襟の下から見える太い頸筋なども、同じやうに蒼白かつた。しかし、眞黒な眼は、片方は少し斜視だつたが、生々として不思議な位に潤み輝いてゐた。

彼女は胸を突き出して眞直に歩いたが、看守長の傍に来ると、頭を少しうしろにそらし、相手の眼をまともに見据ゑて、どんな命令でもき、ますといふ風を見せた。

看守長が扉を閉めようとするたん、白髪頭の婆さんが、とげくした皺だらけの顔を突き出して、マースロワに何か話しかけたが、看守長は構はず婆さんの顔を扉で突きとばして閉めてしまつた。と、監房の中からは女の笑ひ聲が聞えて來た。マースロワも笑つて、扉についてゐる小さな格子窓の方に振り向くと、婆さんは、そこに内側からびつたり顔をくつつけ、嗅れた聲で言つた。

「どんなに訊かれても一つことを言ひ張るんだよ、え、かな、入らんことしやべるんぢやねえよ。」

「いゝとも。どうせ、これ以上、馬鹿な目を見ることもなからうからね。どうにか片をつけて貰ひたいもんだよ。」マースロワは答へた。

「むろん、どうにか片はつくよ。」と、看守長はお役人らしく威張つて、「だから、さあ、こつちへ來るんだ。」

婆さんの眼が格子窓から消えると、マースロワは、廊下の眞中を、看守長について行つた。石の階

段を降りて、女囚監よりもつと汚くて騒々しい男囚監の前を通り、どの扉の通風口からも覗いてゐる澤山の眼に送られながら事務所に這入ると、そこにはもう、二人の護送兵が銃を手にして待ち受けてゐた。書記は煙草の煙で煤けた紙片を兵卒の一人にわたし、マースロワを指して「連れて行け」と言つた。

赤いあばた面の、百姓上りの兵卒は、その紙片を外套の袖口にはさみ、女囚をちらと見て、肩幅の広い兵卒の方に何か目くばせをした。それから三人は中庭に出て、そこを突き抜け、石だゝみを敷いた街の眞中に出て行つた。

辻馬車の馭者や、商人や、料理番や、労働者や、官吏などが立ち止つて、物珍らしさうにマースロワを眺めてゐる。中には、首を捻つて「よつほど悪いことをしたんで、あゝなつたらうな」と考へてゐる者もあつた。子供たちも恐しさうに見つめてゐるが、傍に兵卒がついてゐるので、これなら危くはなからうと思つて、やつと安心したらしい顔付になつた。炭賣りを濟ました一人の百姓が茶店に腰を下して茶を飲んでゐるが、不意に立ち上つて、胸に十字を切りながら彼女に「カベイカ恵んでくれた。マースロワは根くなつて何か咬いた。」

彼女は多くの視線が自分に注がれてゐるのを感じて、その人たちの方を、そつと流し目に見やつた。かうも皆の注意を惹いてゐるのかと思ふと嬉しくもあつた。それに、こゝには、監獄の中とは違つて、爽やかな空氣があるので、それも彼女には氣持がよかつた。しかし暫く歩きつけなかつたの

で、でこぼこに傷んだ鋪石の上を、粗末な牢屋靴で歩いて行くのはかなり苦痛だった。ある粉屋の前を通りかゝると、五六羽の鳩がよちよち這ひ廻つてゐた。すんでのことに、マースロワはその中の淡青色の一羽を、足で踏みつぶすところであつた。と、鳩は、ばたくと舞ひ上り、彼女の耳を掠めて、羽ばたきしながら飛び去つてしまつた。彼女は思はずにつこりしたが、直ぐに今の自分の身の上を思ひ浮べて、ほつと溜息を洩らした。

二

女囚マースロワ（カチュウシヤ）の経歴は、ごく平凡なものであつた。母親といふのは、二人姉妹の地主の家畜番をしてゐた田舎女の娘で、死ぬるまで、別にこれときまつた亭主を持たなかつた。而も、毎年赤ん坊を生んだ。そして、田舎者のよくすること、その頼みもしないのに生れて来る赤ん坊に洗禮だけは一々受けさせたが、直きに仕事の邪魔になるといふので、ろくろく食へものもあてがはず、干乾しにしてしまふのであつた。

かうして五人の子供が死んだ。六番目の子は旅廻りのヂブシイ人との間に出来たので、當然同じ運命になるところだつた。が、たまく女主人の一人が、牛臭いクリームを寄越したといふので家畜番の女たちを叱りに小屋へやつて来た。そして見ると、若い女が、綺麗な丈夫さうな、生れたばかりの赤ん坊を抱いて寝てゐる。女主人はクリームのことを叱つたあげくに、産婦を家畜小屋へ入れたこと

を咎めて立ち去らうとしたが、赤ん坊にはひどく心を動かされたと見えて、名付親になつてやらうと自分から言ひ出した。洗禮を受けさせてからは、その子可愛さに母親にミルクをやつたり小銭を恵んだりしたお蔭で、どうやら子供は無事に育つた。

子供が三つになつた時、母親は病みついて死んでしまひ、家畜番のお祖母さんの手ではとても育てることが出来ないで、女主人たちが引き取つて世話をする事になつた。

それは黒い瞳をした可愛い女の子だつたが、日が経つにつれて美しく元氣になつて、女主人たちを樂しませた。

女主人のうち、名付親になつたのは、名前をソフィヤ・イワーノウナといふ、氣質のやさしい妹の方で、姉はマリヤ・イワーノウナといつて、どちらかと言ふと、きつい氣象だつた。ソフィヤは子供をお嬢さんらしくしようと思つて、美しい衣裳を着せたり、読み書きを教へたりしたが、マリヤは、それよりも仕事を覚えさせて小間使に仕立てた方がいゝと考へてなかく嚴重に躰をした。時には叱り飛ばしたり、機嫌が悪ければ打擲したりするやうなこともあつた。かうして少女は二つの違つた感化を受けながら育つたので、大きくなつた時には、小間使のやうでもあり、令嬢のやうでもあつた。彼女はカチュウシヤと呼ばれた。縫物をしたり、部屋の掃除をしたり、聖像を磨いたり、珈琲を炒つたりするのが仕事だつたが、時には女主人たちに本を讀んで聞かせることもあつた。

幾度も縁談はあつたが、彼女は結婚しようとは思はなかつた。氣樂な生活に慣れきつた自分には、

勞働者の妻としての務めは出来さうもないと感じたからであつた。

彼女が十六歳になつた時、女主人の甥にあたる青年公爵の大學生がやつて来て暫く泊つてゐた。カチュウシヤは彼をすっかり戀してしまつたが、それは、誰にも打ち明けず、一人心に秘めてゐた。

それから三年の後、同じ人が聯隊附きになつて任地に行く途中、また寄つて四日間滞在したが、その出發の前夜になつて、カチュウシヤを誘惑してしまつた。さうして百ルーブリの紙幣を一枚握らせ、たきり立ち去つてしまつた。五ヶ月経つて彼女は自分が妊娠してゐることを知つた。以後、彼女は世の中のことがすべて面白くなくなり、たゞ次第に迫つて来る汚辱からどうして遁れようかといふこと許りを思ひ煩つた。だから、主人に仕へるのも氣乗りがしなくなつて、だん／＼怠け勝ちになつた。ある時などは、自分でもどうしてそんなことをしたのだから分らなかつたが、主人に向つて亂暴したあげく突然暇をくれと言ひ出した。

主人たちも愛想をつかして暇を出した。そこで、彼女は或地方警察署長の家の女中になつたが、ここでは三月しかあなかつた。といふのは、署長が五十男でありながら、しきりに彼女を口説き出したからであつた。一度などは餘りしつこかつたので、彼女は腹立ちまぎれに「馬鹿」「老いぼれ色魔」と嘔鳴つて、いきなり突き飛ばしてしまつた。亂暴な奴だといふので彼女は追ひ出されたが、臨月は近づいてゐるし、どこにも傭つてくれるところはない。仕方なく彼女は一方で酒の商ひをしてゐる村の産婆の家を尋ねて厄介になることにした。お産は輕かつた。しかし、産婆の不注意から彼女は産褥

熱に罹り、生れた男の子は養育院に送られ、そこで直ぐに死んでしまつたといふことである。

カチュウシヤが産婆の家に行つた時、彼女は百二十七ルーブリの金を持つてゐた。働き溜めた二十ルーブリと、誘惑した大學生から貰つた百ルーブリとである。ところが、そこを出る時には六ルーブリしかなかつた。彼女は金を貯めることを知らなかつたので、自分でも使つたし、ねだられ、ば誰にでも氣前よくくれてやつた。産婆には二ヶ月の食費と世話料とを四十ルーブリ取られ、赤兒を養育院に入れる時の費用に二十五ルーブリかかり、牝牛を買ふのだからといつて産婆に四十ルーブリ借り取られた。別に二十ルーブリばかりは着物代や菓子代に消えてしまつた。そんなわけで、カチュウシヤは直ぐに又奉公口を探さなければならなかつた。都合よく森林監視人の家に口があつた。女房持ちのくせに、この監視人も、お目見得の日から口説き出した。彼女はなるべく避けるやうにしてゐたが、何しろ主人といふ位置を利用してどこにでも連れ出した上、世慣れたずるい男だつたので、彼女はとう／＼丸めこまれてしまつた。細君はそれに氣づいて、夫とカチュウシヤとが一つ部屋にゐるところを見つけて彼女に打つてかゝつた。カチュウシヤも負けずにやり返したので、そのあげく彼女は給料も貰はずにその家から出て行かねばならなかつた。

それから彼女は町に出て叔母の家に身を寄せた。叔母の亭主は製本屋で、一時は景氣よく暮してゐたが、今では、得意をすつかり無くして、何でも手あたり次第に質入れしては費つてしまふのであつた。だから、叔母は小さな洗濯屋をはじめ、子供とだらしのない夫とを養つてゐた。叔母はカチュウ

ウシヤに洗濯を手傳つてみたらどうかと言つた。しかし、そこに働いてゐる女たちの惨めな辛いありさまを見ると、彼女はともその氣になれないで、職業紹介所の門をくゞつた。中學校通ひの子供が二人ある或貴婦人の家に見つかつた。ところが、その家に奉公して一週間経つか経たない内に、口髭などを生やした上の子が、勉強はそつちのけにして彼女をつけまはずので、ちつとも油断がならなかつた。母親は一切をカチュウシヤの罪にして暇を出してしまつた。

新しい口をさんざん骨折つて探した後、また職業紹介所へ行つて、そこで、露はな太い腕に腕輪を巻き、どの指にも指輪をはめた女と會つた。その女は、カチュウシヤが口がなくて困つてゐることを話すと、名刺をくれて、自分の家へ来てはどうかと勧めた。で、カチュウシヤは行つて見た。女は、ちやほやと菓子や酒を出してもてなしてから、手紙を書き女中に持たせて誰かのところへやつた。すると、夕方になつて、髪の毛の長い、ごま鬘頭の、白い顎髭を生やした脊の高い男が部屋に這入つて来て、いきなりカチュウシヤの傍に進み寄つた。そして、にや／＼しながら眼を光らして彼女を上げしげ眺めたり、ふざけたりし始めた。女將は彼を隣室へ連れて行つたが、「田舎から来たばかりの初心な女ですよ」と言つてゐるのがカチュウシヤに聞えた。それから今度はカチュウシヤを呼んで、あの人は小説家で、金持だから、氣に入らさへすればいくらでも金を出してくれるよと話した。

小説家は彼女が氣に入つたと見えて、時々會ふ約束をしてから二十五ルーブリくれた。しかし、その金は叔母の家の間代や食費を支拂つたり、帽子やリボンなどを買つたりしたので直ぐなくなつてしまつた。數日経つと小説家から迎へが来たので、彼女は行つた。男はまた二十五ルーブリくれて、別に家を借りて引越すやうにと言つた。

小説家の借りてくれた宿には、隣りに陽氣な若い店員が住んでゐて、直ぐにカチュウシヤと戀に落ちてしまつた。彼女はそのことを小説家に打ち明けて、小さな家へ移つた。ところが、結婚の約束をしたその店員は黙つてニージュニイへ行つてしまひ、彼女は置き去りを食つたのであつた。それから一人で世帯を持たうと思つたが、さうして暮しを立て、行くには、黄色い鑑札を貰つて、(淫賣婦になつて)健康診断を受けなければ駄目だと巡査から注意された。そこで又叔母の家へ歸つた。叔母は、カチュウシヤの派手な衣裳や帽子や外套などを見て、よほど出世したものと思つたらしく、もう洗濯の手傳ひを勧めたりはしなかつた。カチュウシヤの方でも洗濯女になるならな問題をなしてゐなかつた。石鹼の湯氣の立ちこめた仕事部屋で、細い腕をした女たちが、中には肺病に罹つてゐるものも交つて、一生懸命に洗濯したりアイロンをかけたりのを見るに彼女はたまらなく氣の毒になつた。自分も同じ運命になることがないとも限らぬと思ふとぞつとした。一人の「保護者」も見つからないで弱りきつてゐた丁度この時、幸か不幸か彼女は遊女屋へ女を世話する女術の手にかゝつたのであつた。

カチュウシヤはよほど前から煙草を始めてゐたが、例の若い店員に棄てられてからは、だん／＼酒を飲む癖がついてしまつた。酒が旨いからといふわけではなく、飲めば一切の苦しみを忘れ、素面

の時には味はへない自由な氣持になり、自分の價値をより強く感じるやうになるからであつた。だから、酒がないと氣が減入つて恥づかしかつた。女術は叔母の喜ぶやうな色んな手土産の他に酒も持つて來た。そして、カチュウシャが飲んでゐる間に、都會の大きな家へ行つて稼ぐと随分お金になるといふことを盛んに説き立てた。カチュウシャは二つの道のどちらを採らうかと考へた。一つは男から挑まれて時々こつそりと關係する卑怯な女中奉公、も一つは、法律で許された不斷の關係をする、安全確實な、而も利益の多い娼婦の生活、——彼女は後者を選ぶことにした。それに、彼女には、さうすることによつて、自分を誘惑した者や、店員や、その他自分を苦しめたすべての人々に復讐することが出来るやうに思はれたからであつた。もう一つ彼女を咬り立て、愈々それと決心させるに至つた原因は、どんな衣裳でも——天鵞絨でも縞子でも絹でも舞踏服でも、欲しいものは何でも作ることが出来るといふ女術のうまい口車であつた。彼女は黒い天鵞絨で縁をとつた、びか／＼する黄色い着物を肌も露はにま／＼とつてゐる自分の姿を眼の前に描くと、もうとてもたまらなくなつて、直ぐに籍を渡してしまつた。その夜、女術は辻馬車を雇つて來て、彼女を名高いキタエワの遊女屋へ連れこんでしまつたのである。

その日から、カチュウシャ・マースロワは、人間及び神の誠に背いた慢性的罪惡の生活に入ることになつた。その生活は、幾十萬の女によつて營まれ、而も、人民の幸福を考慮する政府の許可と保護とを受けてゐるものではあつたが、その女たちの十中の九までは、恐しい病氣になつて、早く老いる

か早く死ぬるかしてしまふにきまつてゐた。

夜の騒宴につゞく朝から午後にかけての深い睡眠。三時か四時頃になつて、疲れ切つた身體を汚れた寢床から起し、ソーダ水と珈琲を飲み、寢間着か化粧着のまま、懶げに部屋中を歩き廻つたり、カーテンの蔭から窓越しに、ぼんやり戸外を眺めたり、仲間同志で喧嘩したりする。それから身體や髪を洗つたり塗つたり、衣裳を調べたり、そのことで女將と言ひ争つたりする。鏡を覗きこんで顔や眉の化粧をしてから油つこい食事をやる。肌の大部分をあらはにした派手な絹の衣裳をつけ、びか／＼に飾り立てた眩しい大廣間に出る。そこへ客がやつて來る。音楽、舞踏、酒、そして誰とでも寢てしまふ。老人、青年、中年、少年、獨身者、女房持、商人、番頭、アルメニア人、ユダヤ人、鞆韃靼人、金持、貧乏人、元氣な男、病氣の男、酔ひどれ、素面、亂暴者、優男、軍人、役人、學生、生徒、——あらゆる階級、年齢、性質のものに身を委してしまふ。それから又亂癡氣騒ぎ、酒、煙草、音楽が夕方から夜明けまで續く。朝になつて漸く自由な身體になつて深い眠りに入る。これが毎日、毎週、休まずに繰り返される生活である。そして一週間の終りには、警察署へ出かけなければならぬ。そこには官吏である醫師があつて、時には眞面目に、時にはふざけ半分に、神から賦與された羞恥の念を無視して彼女等を檢査し、彼女等が過去一週間にその相手と行つた罪惡を更に續けるや／＼許可するのである。かくして、夏でも冬でも、平日でも祭日でも、同じ夜、同じ日が繰り返される。カチュウシャ・マースロワは、かうして七年間の間暮して來た。一二度抱へ主を替へ、病院にも一

度這入つた。ところが七年目、彼女が二十七歳になつた時、不意に一事件が起つて、そのため彼女は獄に入れられ、強盗や人殺しなどと一緒に、三ヶ月以上、臭い監房に閉ぢこめられた後、漸く今日、法廷へ呼び出されることになつたのである。

三

マスローワが二人の兵卒に護送されて、地方裁判所に着いた頃、最初に彼女を誘惑した、ドミートリイ・イワーノウイチ・ネフリュードフ公爵は、まだ、高いばね仕掛けの寢臺の上に、ふはくしま、巻煙草をくゆらしながら、今日しなければならぬことや、昨日の出来事などを考へてゐた。彼はコルチャーギン家で過した昨夜のことを思ひ出すと、ほつと溜息をつき、吸殻を捨て、又新しく銀製の煙草入れから一本取り出さうとした。コルチャーギンといふのは金持ちの貴族で、世間では誰でもその令嬢と彼とが結婚するものと噂してゐた。

ネフリュードフは、ふと氣を變へて、すべくした白い兩足を寢臺から下し、スリッパを突つかけて絹の部屋着を肩から掛けて、足早に、香油や香水の匂ひの高い化粧室に這入つて行つた。そこで彼は齒を（その大部分には填込みがしてある）丁寧に磨き、いゝ匂ひのする含嗽薬で口を嗽いだ。それから、兩手を洗ひ、長い爪を特別念入りに磨き、顔や頸筋などを洗つてしまつてから、三つ目の部屋

へ這入つた。そこには灌水浴の支度がしてあるので、まづ肉つきのおい、白い身體に、ざアと冷水を浴び、大きなタオルですつかり拭き、新しい下衣をつけ、靴を穿いて、ゆつたりと鏡臺の前に腰を下した。そして髭の手入れをし、前方がや、薄くなりかけた髪に櫛を入れ始めた。彼が身嗜みに使用してゐる品物は悉く、シャツにしる、服にしる、靴にしる、ネクタイにしる、ピンにしる、飾釦にしる、すべて最上等、最高價のもので、典雅であり滋味があり丈夫であつた。彼は十種もあるネクタイやピンの中から、最初手に觸れたのを無難作に取り上げてつけ、ブラシをかけて椅子の上に置いてある服を着、さつぱりした氣持になつて食堂に行つた。獅子の足に似た彫刻が四本の脚にしてある如何にもどつしりしたテーブルと、それにふさはしい大きな食器棚とが、昨日三人の男の手で床を拭きこんだといふ細長い食堂の真中に据ゑてあつた。大きな組合せ文字をあしらつた卓布のかゝつてゐるこのテーブルの上には、香ばしい珈琲の這入つた銀の珈琲壺や、砂糖壺や、温いジャムのつまつたジャム入れや、出来たての巻パンだの乾パンだのビスケットだのを盛り合したパン籠などが置かれてゐて、その傍に、「再世界評論」の最近號と、新聞と手紙とが載せてあつた。

ネフリュードフが手紙の封を切らうとする途端に、喪服をつけ、レースの帽子を冠つて髪分け目を隠した、中年の、よく肥つた女が、そつと食堂に這入つて來た。彼女はアグラフェナ・ペトロウナといつて、以前はネフリュードフの母親附の小間使だつたが、その母が最近亡くなつてからは家政婦として働いてゐた。アグラフェナは、ネフリュードフの母親と一緒に外國に十年ばかりも暮したこ

ともあつて、風采にも態度にも、どことなく貴婦人らしいところがあつた。ネフリユードフの幼い頃からのことをよく知つてゐた。

「お早うございます、ネフリユードフ様。」

「お早う。何か用なの？」と、ネフリユードフは訊いた。

「公爵家からのお手紙でございます。奥様からお嬢様からかでございます。さつき女中が持つて参りました、私の部屋で、お待ちしてをります。」

アグラフェナは手紙を渡して、意味ありげに、につこりした。

「さうか、直ぐに讀まう。」

ネフリユードフは手紙を受け取つたが、彼女の微笑に氣がつくと急に厭な顔をした。

彼女の微笑は、その手紙がネフリユードフの結婚しようとしてゐる（と彼女は推測してゐるのだが）コルチャーギン家の令嬢から來たものだといふことを意味してゐる。その、アグラフェナの推測が彼には不愉快なのであつた。

「では、もう少し待つやうに申して置ませう。」と言つて、アグラフェナは、置き場所の違つてゐるテーブル刷毛の位置を直してから、迂るやうに部屋を出て行つた。

ネフリユードフは、い、薰のする手紙を開いて讀みはじめた。

「失禮ではございますが、あなた様の御記憶を呼び覚ますために一言申し上げます。今、四月二十八

日、あなた様は陪審員として地方裁判所に御出頭なさらなければならぬ筈でございます。したがつてあなた様がコロソフや私どもを繪畫展覽會へおつれ下さるといふ、いつもの安請合でなさいました昨日のお約束は、自然お流れになるわけでございますね。裁判所へは時刻を違へずにお出でにならないと、いづぞやあまり高價なのでお手をお引き遊ばした馬の値段と同じ三百ループリといふ大金を、罰金として重罪裁判所へお納めにならなければなりませんよ。昨夜、お歸りになつた後で氣がつかましたので一寸お知らせいたします。——エム・コルチャーギナ」

裏面に追白として、

「今日の晚餐には、夜分になつても、あなた様のお席をすつと取つて置きますから、と母が申してをります。どんなに遅くても差支へございませんから、是非々々お出で下さいませ。」とあつた。

ネフリユードフは顔をしかめた。この手紙は、公爵家の令嬢が、目に見えない糸で彼をだん／＼きつく締めつけようとして、二ヶ月も前から試みてゐる、巧妙な策略のつゞきであつた。烈しい戀愛に落ちてゐる者は別として、一般に、青年期を過ぎると、結婚に對して躊躇するやうになるものであるが、ネフリユードフには、さうした理由を外に、たとひ決心したとしても直ぐに結婚を申込むことの出來ない深いわけがあつた。それは十年前に、カチュウシヤを誘惑して見棄てたからといふのではない。そんなことはもうすっかり忘れてしまつてゐたから、それを結婚しない理由と考へる筈もなかつた。實は、彼は以前から關係のある或亭主持ちの女に惱まされてゐたのである。而も彼の方では手を

切つたつもりであたが、困つたことに、女の方ではさう容易く切れてくれなかつた。

ネフリユードフは、どちらかといふと女には臆病な質であつた。その臆病なところが、亭主持ちの女の心に、一つ生捕つて見ようかといふ望みを起させたのである。女といふのは、ネフリユードフが選挙の時に出張した郡の貴族長夫人であつた。夫人は日ましに彼を深い仲に引摺りこんで行つたが、彼にはそれがだん／＼厭で／＼ならなくなつた。そして自分を罪深いものと思ふやうになつた。しかし彼女の承諾なしにこの關係を断ち切つてしまふ勇氣がなかつた。——これがコルチャーギン家の令嬢に結婚を申込む氣にはなれなかつた理由である。

ティブルの上の手紙の中には、この女の夫から來たのも混つてゐた。この手蹟と消印とを見ると、ネフリユードフは顔を赧めて、いつも危険の瀬戸際に經驗する事であるが、身内が火照の覺えた。

しかし、その昂奮はすぐに消えてしまつた。といふのは、ネフリユードフの一番廣い領地のある郡の貴族長をしてゐる彼女の夫からの手紙といふのは、たゞ五月の末頃に臨時會議があること、その時には、學校や道路などに就いての重大議案があるが、反對黨の猛烈な運動もあるらしいから、是非會議に出席して大いに援助して頂きたいといふことを言つて來ただけのものであつた。

貴族長は自由主義の男で、同志と團結して、アレキサンドル三世時代に擡頭した反動派と争ふことばかりに夢中になつてゐたので、自分の家庭にどんな不幸が起つてゐるか、そんなことには全然氣がつかなかつた。

ネフリユードフは、この男との關係上、恐しい氣持を味はつた刹那を一々思ひ浮べた。或時はこの男が遂に感づいて自分に決闘を申込んだ場合を考へ、その時は空中へピストルを射たうと思つたりしたこともある。また或時は、彼女が絶望のあまり溺死しようとして公園の池を目掛けて駆け出したのを、自分が追つかけて行つたこともある……。

「さうだ、今は行つちやいけない。彼女の返事を聞かないうちは何も出來ないのだ。」と、ネフリユードフは考へた。實は、一週間前に、彼はきつぱりした書面を彼女に送つて、今までのことは自分の過失であるから、その責任は充分に負ふつもりであるが、今後は、彼女自身の爲でもあるから綺麗に別れてしまひたい、といふことを言つてやつたのである。返事はいくら待つても來なかつたが、その來ないといふことはい、徵候かも知れなかつた。何故かといふに、若し彼女が別れ話に不服ならば、直ぐに返事を書いて寄越すか、でなければ、この前の時のやうに自分で押しかけて來る筈だからである。彼は近頃、彼女が或士官と兎角の噂があるのを聞いて、さすがに少し嫉妬を感じたが、同時にまた彼を惱ましたつた虚偽から遁れることが出來さうだと思ふと嬉しい氣持もするのであつた。

次の手紙は土地管理人から來たものであつた。それには、まづ土地相續權を確定するために是非當方へ來て頂きたいといふことが書いてあり、更に、今後の土地の處置に就いて、どちらかに決定して置きたいといふことが書いてあつた。といふのは「田舎の領地は母堂の御生存中の通りに處理すべきだらうか、それとも自分が以前から申述べてゐる方法によつて、現在百姓たちに貸付けてゐる土地を

取上げ、こちらの手で耕作した方がよくはあるまいか」といふ相談であつた。管理人は、後者の方が遙かに有利であることを書き添へ、尙一日に這入るべき三千ルーブリを送るのが遅れたことを詫びてそれは次便で送ると記してあつた。その遅れた理由は、近頃百姓が横着になつて、その筋に訴へて出なければ金を出さなくなつたからだであつた。この手紙は半ば不愉快であり、半ば愉快であつた。つまり、こんな廣い土地がどうにでもなるのだと思へば一寸愉快でもあつたが、また一方、ネフユリドフは、ハーバート・スベンサアの熱心な崇拜者だつたことがあるので、考へて見ると不愉快でもあつた。殊に現在、自分が大地主の當主となつて見ると、特に、スベンサアが、その「社會平衡論」に説いてあるところの、正義は土地の私有を許さずといふ命題に打たれたのである。當時、彼は、青年時代の果斷直截をもつて、單に土地は私有財産と見るべきでないことを證明する言辭を弄してゐたばかりでなく、また、大學の卒業論文にその問題を取扱つたばかりでなく、實際に於いても、その信念に従つてゐたのである。例へば彼は土地私有を罪惡と考へて、父親から譲られた五百エーカーの土地を百姓たちに分けてやつてしまつたことがある。ところが、今、母から譲られた土地を相續して大地主になるとすれば、二つの内一つを選ばなければならぬ破目になつた。即ち、十年前に父親から貰つた土地を處分したやうに、すべてを棄て去るか、それとも以前の自分の思想は皆誤つた、でたらめのものであるとして黙つて收まつてしまふかである。

しかし前者を選ぶことは出来なかつた。何故かといふに、彼は、その土地がなくては生活して行かなかつたからである。(彼は役人にならうとは考へても見なかつた。)それに、彼には最早容易に脱けることの出来ない氣儘整潔な習慣が芯まで滲みこんでゐた。そのみではない、彼には、昔のやうな信念も、決斷も、人の意表に出ようとする野心も、もうすっかり無くなつてゐた。ところが、後者を選ぶことは、——つまり、スベンサアの「社會平衡論」から學んだ、明々白々の土地私有不法論を否定し去ることは、彼にはとても不可能なことであつた。管理人からの手紙が不愉快だつたのは、そんなわけからであつた。

四

ネフユリドフは珈琲を飲み終ると書齋に這入つて行つた。通告状を探して裁判所への出頭時刻を調べるため、また公爵令嬢への返事を認めるためである。書齋へ行く途中には製作室があつて、そこには書架の上に未完成の繪が裏返しに架けてあつたり、壁にいろ／＼の習作が吊るしてあつたりしたが、それを見ると、彼は、自分はとても繪には見込みがない、才能がないといふ、最近特に痛切に感じてゐることをまた思ひ出した。彼はこれを自分のあまりに繊細に發達した美感のためだと解釋したが、何にしてもこの感情は不愉快なものであつた。七年前、彼は自分に繪の天才があると信じて軍職を去つてしまつた。そして、高い藝術的立脚地から他の一切の仕事を見下してゐたものである。ところが彼にそんな權利のなかつたことが今日はずきりわかつた。だから、このことに關する思ひ出はず

べて彼には不快であつた。彼は黯然とした氣持になつて製作室の贅澤な設備を見まはした。

書齋は廣々として天井が高く、あらゆる裝飾と調度と便利とを兼ね備へてゐる。通告狀は大きな書卓の「至急」と記した部門に這入つてゐるのが直ぐに見つかつた。十一時に出頭せられたしと記してある。そこで彼は腰を下して、令嬢宛ての手紙を書きはじめた。招待の禮を述べて、なるべく晩餐に間に合ふやうに行くといふ意味を認めたが、それは文句があまり馴れくし過ぎたので破つてしまつた。それから改めて書き直したが、今度はまた、あまりに冷やか過ぎて、令嬢の機嫌を害ねさうな氣がしたので、やはり破つてしまつた。彼は呼鈴のボタンを押した。すると、エブロンをつけた、中年の、陰氣くさい顔をした召使があらはれた。

「辻馬車を呼びにやつておくれ。」

「畏まりました。」

「それから、コルチャーギン家から來てゐる人に、御招待ありがたうございます。なるべく参りますから、と言つておくれ。」

「畏まりました。」

「少し失禮だが書けないのだから、どうにも仕方がない。まあいゝ、どうせ今日のうちに會ふんだから。」と、ネフリユードフは考へて外套を取りに部屋を出た。

玄關には、見慣れたゴム輪の辻馬車が彼を待つてゐた。

「昨夜はコルチャーギン家で旦那様と行き違ひになりました。」日に焼けた顔を半ばこちらに向けながら馭者は言つた。「私が参りましたら、玄關番が、只今お歸りになつたところだと申しました。」

馭者はネフリユードフがコルチャーギン家を訪問してゐることを知つてゐて、庸つて貰ふつもりで出懸けたものらしい。して見ると、馭者までが自分とコルチャーギン家との關係を知つてゐるのだな、とネフリユードフは考へた。するとまた、その令嬢と結婚すべきかどうかの問題が、頭をもたげて來たが、それは現在彼の心中に蟠つてゐる多くの諸問題と同様、どうにも解決がつかなかつた。

第一に、結婚の利益を一般的に考へて見ると、まづ家庭團樂の樂しみがあつて、道徳に適つた生活をする事が出來、それから（ネフリユードフは殊にこの點に望みをかけてゐたのであるが）家族——つまり子供が、彼の現在の空虚な生活に或目標を與へてくれるだらうといふ點にある。第二に結婚を否定する氣持を考へて見ると、それは青年期を過ぎた獨身者が誰でも持つてゐるところの自由を奪はれる恐怖と、女性といふ神秘な存在に對する無意識の恐怖とがあるからである。

そこでネフリユードフ自身の場合——彼がコルチャーギン家の令嬢と結婚した場合を考へて、そのいゝ方面を擧げて見ると、第一に彼女は上流の家庭に育つただけに、すべての點に於いて——例へば口の利き方でも歩き方でも笑ひ方でも、世間普通の女とちがつて非常に上品である。つきに彼女は誰よりも彼をよく評價し、よく理解してゐる。彼に對するこの理解、即ち彼の優秀な素質を認めてゐるといふことが、彼女の感覺や判斷の正しいことの證據であると、ネフリユードフには思はれた。しか

しこの結婚の厭な方面を考へて見ると、世の中には彼女よりもつと、素質のよい娘があなとも限らない。それに、彼女は二十七歳であるから、これが初めての戀であるかどうか怪しいものである。かう想像すると、ネフリユードフは苦しめた。いくら過去のことにしても彼女が自分以外の男を愛したかも知れないことを考へると、彼は自分の誇りを傷つけられたやうな氣がするのであつた。

こんなわけで、どちらにも決定することが出来なかつた。彼は苦笑して、自分を、どちらの草を食はうかと迷ふ寓話の中の驪馬に喩へた。

「とにかく、貴族長夫人からの返事が來て、きつぱり話の片がつかない以上、僕は何もすることが出來ないんだ。」と彼は心の中で呟いた。

「さうだ、この問題は後でよく考へることにしよう。」

この時、馬車が音も立てずに裁判所のアスファルトの車寄せに着いた。

「さあ、これから、いつものやうに社會的義務を忠實に果たすでしょう。而もその方に面白い場合が多いのだ。」

彼は裁判所の中に這入つて行つた。

五

裁判所の廊下は、もう非常に混雜してゐた。廷丁等は息を切らして委任状や書類をあちこち持ち廻

つてゐた。廷吏や辯護士や判事なども忙がしさに歩いてゐる。原告や、監視を解かれた被告などは陰氣な顔をして壁傳ひに歩いたり、中には椅子にかけたりして開廷を待つてゐた。

「法廷はどこですか。」ネフリユードフは廷丁に訊いた。

「どちらですか、民事と刑事とありますが。」

「僕は陪審員です。」

「ちや、刑事です。こゝを右にお出でになつて、それから左に曲つて、二番目の戸口がさうです。」

ネフリユードフはその通りに行つた。教へられた戸口には二人の男が立つてゐた。一人は善良さうな、脊の高い肥つた商人で、一杯やつて來たと見えて頗る上機嫌だつた。もう一人はユダヤ系統の店員で、彼等は獸皮の相場についてしきりに話し合つてゐた。そこへネフリユードフがやつて來て、陪審員の部屋はこゝかと訊いた。

「え、さうです。旦那も私どものお仲間で、やはり陪審員でいらつしやいますか。」商人は嬉しさうに目ばたきしながら言つた。ネフリユードフが黙つて頷くのを見て、彼はまた續けた。

「それでは御一緒にお願ひいたしませう。私は第二同業組合のものでバックラシヨフと申します。」と言ひながら、彼は、幅の広い手を差出して、「どうぞ宜しく。……どなた様でございませうか。」

ネフリユードフは名前を告げてから陪審員の部屋へ這入つた。

部屋には、いろんな種類の人たちが十人ばかりゐた。皆、今來たところらしく、坐つてゐるものも

歩き廻つてゐるものも、顔を見合したり名乗り合つたりしてゐた。退職の大佐が制服を着てゐたが、他の者はフロックコートか、モーニングコートかで、中に一人だけ百姓服の男がゐた。彼等の多くは仕事を休んで出頭したので、いづれもその愚癡をこぼしてゐたが、その顔には、重大な公務を果すのだといふ希望に充ちた満足の色が漂つてゐた。

陪審員たちは天候のことだの、春が来たことだの、仕事の見込みのことだけを話し合つてゐた。互ひに近づきになつた者もあるが、多分あの人だらう位に見當をつけて話しかけてゐる者もある。ネフリュードフが這入つて来ると、面識のない者は、それが一種の名譽で、もあるかのやうに、急いで寄つて来て近づきにならうとした。彼も未知の人たちの中でいつもするやうにそれを當然のこととして受けた。彼は、何故一般多數の人々よりも氣取つてゐるのかと問はれたら、返答に窮したにちがひない。彼の近頃の生活には、あまり感心すべき特色がなかつたからである。なるほど、彼は英語、フランス語などを正しいアクセントで話すことも出来るし、また身につけてゐるシャツや、服や、ネクタイや、ピンなどは悉く一流商店から買ひ入れた最上等のものばかりであるが、そんなことは彼が他人よりも優れてゐることの理由にはちつともならなかつた。しかし、彼は自分の優越性を認めて疑はない。だから、自分に捧げられる尊敬だけは當然のこととして受けるが、尊敬されない場合には侮辱されたやうに感じるのであつた。

ところが、この陪審員の部屋で、ある男から彼は思ひがけなく馬鹿にされたやうな取扱ひを受け、すつかり氣持を悪くしてしまつた。その男といふのは、偶然に陪審員の一人となつてゐたので、以前は、ネフリュードフの姉の子達の教師をしてゐたピョートル・ゲラシモウイチといふ男であつた。(ただし、ネフリュードフは、この男の苗字を知らなかつたし、また、その知らないことを一つの誇りにしてゐた)ゲラシモウイチは現在では中學の先生になつてゐたが、その馴れくしい態度や、一人よがりの高笑ひ、その他——一口に言ふと、その野卑なところを、ネフリュードフは、たまらなく嫌つてゐた。

「おや、はつはつ。あなたも捕まりましたね。」と、ゲラシモウイチは、ネフリュードフを迎へて、破れるやうに笑ひながら、「して見ると、逃げられなかつたですな。」と言つた。

「別に僕は逃げたりなんかしませんよ。」ネフリュードフは退屈さうに、しかし、しかつめらしく答へた。

「なるほど、公民としての精神をお持ちになつてるといふわけですな。しかし、あなただつて、いざ、寝るところもなく食ふものもないとなれば、そんなことは言つてゐられませんか。」と、相手は尙更高笑ひしながら言つた。

「この坊主の倅めが、今度は『君、僕』で話し出すぞ。」とかんがへながら、ネフリュードフは、身内のものこらずが死んだ時でもなければ相應はしくないやうな陰惨な顔をして、ゲラシモウイチの傍を離れた。そして、さつぱりと鬚を剃つた脊の高い、いかにも、もつたい振つた紳士が、何か盛

んに氣焰を擧げてゐるのを取りかこんである群のはうへ近づいた。その紳士は、現に進行中の民事裁判に就いて語りながら、有名な判検事や辯護士などを友だちあつかひにして、いかにも物知り顔であつた。

ネフリュードフは他の人たちよりもおそく來たのだが、それでも長く待たせられた。つまり、係りの裁判官の一人がまだやつて來ないといふだけの理由で、すべてが待たせられてゐるのであつた。

六

裁判長は早くから出勤してゐた。長い頬髯を生やした、脊の高い、でつぶり肥つた男である。むろん彼は女房持ちでゐながら、随分だらしない生活をしてゐた。ところが細君の方でも同じことをしてゐるので、結局、お互ひに邪魔になるやうなことはなかつた。今朝も彼は、以前自分の家の家政婦をしてゐて今は南ロシアからベテルスブルグへ旅行中のスイス生れの女から手紙を受取つたところであつた。彼女は五時から六時までの間に、イタリヤホテルで彼を待つてゐるといつて寄越したのである。そこで、彼は、今日の法廷は出来るだけ早く開き早く閉ぢて、去年の夏、田舎の別荘で初めてローマンスを語り合つた彼女を是非とも六時までに訪ねたいと考へてゐた。

彼は自分専用の部屋に這入ると、扉に錠をかけて、戸棚から一對の啞鈴を取り出し、二三十回、腕を、上へ、下へ、前へ、横へと動かしてから、そのまゝ、啞鈴を頭上に高く差し上げて三回軽く膝を折つた。

「冷水浴と運動が一番身體の藥だわい。」と、ひとり言を言ひながら彼は左手で右手の上膊筋に觸つて見た。その真中の指に金の指輪のはまつてゐるのが殊更に目立つた。それから、彼はまた旋回運動をする筈であつたが、(長時間法廷に坐る時には彼は常に、この二種の運動を豫めするのだつた)その時、誰か戸を開けようとする氣勢がした。彼、裁判長は急いで啞鈴を元の場所へしまひ込んで、戸を開けながら、

「いや、失禮しました。」と言つた。

金縁眼鏡の、いかつい顔をした判事が這入つて來た。

「マトフェイ君がまだやつて來ませんよ。」不満さうに彼は言つた。

「まだ來ない？」裁判長は制服をつけながら、「いつも遅いんだね。」

「どこまで圖々しいんだか知れやしない。」と同僚はぶり／＼しながら椅子にかけて、巻煙草を取出した。

彼はごく綿密な男だつたので、今朝も細君と一問答して來たのであつた。細君は一ヶ月分として渡されてある金を月末にならないうちに費ひ果したので、次の月の分を前渡しして貰ひたいと頼んだが、彼が決してその要求を容れないため、とう／＼喧嘩になつてしまつたのである。それでは家では食事の用意は出來ないからそのつもりでゐて下さい、といふのが細君の言草であつた。どんなことで

もやり兼ねない女だから、嚇し文句の通りにするかも知れないと、内心びくびくしながら彼はそのまま家を出た。

「この人はいつも氣楽さうだが、おれは何てみじめなんだらう。」と彼は今、晴れ々々として健康で快活な裁判長を眼の前に見て羨ましく思った。

その時、書記が這入つて来て、一束の書類を届けた。

「ありがたう。」裁判長は巻煙草に火をつけながら言った。「さてどの件を先にしようかな。」

「毒殺事件がよろしいでせう。」と書記は無難作に答へた。

「よからう、毒殺事件にしよう。」と、裁判長はこの事件なら四時までに終るだらうから、それから出懸けようと考へながら、「ところで、マトフェイ君は來たのかね。」

「まだでございます。」

「ではブレーウエ君は？」

「お見えになつてゐます。」

「では、ブレーウエ君に會つたら毒殺事件から始めると言つてくれたまへ。」

ブレーウエといふのは、この事件の論告に當る副検事であつた。

廊下に出ると直ぐに書記はブレーウエに會つた。彼は肩をそびやかし、折靴を小脇にか、へ、踵を床に叩きつけるやうにして活潑に歩いてゐた。

「お支度はよろしいですかと裁判長がおつしやつてゐました。」

「いゝとも、いつでもいゝよ。」と副検事は言つた。「で、どの事件から初めるのかね。」

「毒殺事件からださうです。」

「よからう。」と、副検事は言つたが、實は、あまりよくなかつたのである。彼は昨夜、友人の送別會があつたため、ホテルで朝の五時頃まで飲み明してしまつた。だから、この毒殺事件を読む暇がなかつたので、丁度今、急いで一通り眼を通さうと思つてゐた矢先であつた。ところが、書記の方では、その事情を知つてゐたので、わざと裁判長に、この事件から始めようと勧めたのである。書記は、自由思想系の、といふよりは寧ろ急進思想系の男だから、保守主義者であり正教派であるブレーウエを好かなかつた。また、その位置を妬ましくも思つてゐた。

副検事は片手を振り／＼自分の事務室へ駆けこんでしまつた。

七

やつとマトフェイ・ニキーテイチが出勤した。そこで、瘦せた、頸の長い、變な歩き方をする廷吏が陪審員の部屋へ這入つて來た。この男は正直者で、大學教育も受けてゐるのだが、酒癖が悪いため、どこでも永續きがしなかつた。それが三月程前、彼の細君を可愛がつてゐる或伯爵夫人の斡旋で漸くこの職に就くことが出來たので、彼は今度こそと思つて後生大事にとめてゐた。

「皆さん、お揃ひになりましたか。一彼は鼻眼鏡をかけながら、ぐるりを見廻した。

「お揃ひのやうですな。」と陽気な商人が言った。

「それでは読み上げて見ませう。」

廷吏はポケットから紙片を取り出して、一人々々の名前を読みはじめた。

「参議官、イ・エム・ニキフオロフ。」

「はい。」法廷のことには一切通じてゐる、もつたいぶつた紳士が答へた。

「退職大佐、イワシ・セミヨノウイチ・イワーノフ。」

「はい。」制服姿の痩せた男が返事をした。

「第二同業組合員、ビョートル・バクラシヨフ。」

「はい、待つてました。」一杯やつて機嫌のよくなつてゐる商人は、にこ／＼して言った。

「近衛中尉、公爵、ドミートリイ・ネフリユードフ。」

「はい。」

廷吏は鼻眼鏡越しに彼を見て、丁寧にあれよくお辭儀をした。彼だけを特別扱ひにしたいらしい様子であつた。

「大尉、ユーリイ・トミトリエウイチ・ダンチュニコ。商人、グリゴリイ・エフィモウイチ・クレシヨフ

つぎ／＼に読み上げたが、結局缺席者は二人だけであつた。

「では皆さん、どうか法廷の方へいらして下さい。」廷吏は扉を指して言った。

そこで皆屏のころへ行き、互ひに譲り合ひながら廊下に出て、それから法廷に這入つた。

法廷は廣々とした長い部屋であつた。三段で上るやうになつてゐる高座が一方の端にあつて、その上に、緑色の卓布をかけた一脚のテーブルが置いてあり、テーブルの周囲には、かなり高い背當のついた肱掛椅子が三脚据ゑてある。そのうしろの壁には、正装して綬を帯び劍を握つて一歩前に踏み出した皇帝の全身像が、金縁の額にはまつて懸かつてゐた。右手の一隅には、荆の冠をつけたキリストの像が枠に入れられて吊るしてあり、その下には讀經臺も置いてあつた。検事の机も同じ右手にあつた。それと向ひ合つた左手には書記のテーブルがあり、傍聴席の近くには檯製の柵があつて、その中に被告の腰掛が並べてあつた。高座の右手には、やはり高い背當のついた陪審員たちの椅子があり、その下が辯護士席になつてゐた。これ等のすべては法廷の前部にあるので、柵によつて後部と區切られてゐた。

後部は、一列毎にだん／＼後上りになる腰掛で埋まつてゐたが、その前の方に、女中か女工かと思はれる女が四人と、勞働者らしい男が二人、腰を下してゐた。彼等はこの法廷の嚴重さに氣おくれがしたと見えて、こつそりと、ひそ／＼話をしてゐた。

陪審員が這入ると間もなく、例の廷吏が現れて、列席の人たちをびつくりさせるつもりではなから

うかと思はれる程の大聲で、

「開廷！」と叫んだ。

一同が起立して、裁判官の面々が高座に現れた。第一番に、筋骨の逞ましい、頬髯の立派な例の裁判長、つぎが金縁眼鏡の、陽氣な裁判官である。彼は先刻裁判長と話してゐた時よりも尙暗い顔をしてゐたが、それには、こんなわけがあつた。開廷の一寸前に、義弟が彼に面會を求めて、今姉（つまり彼の細君）のところへ行つて見たが、家では今日は食事の支度をしないのだと言つてゐた、といふことを傳へた。そして義弟は笑ひながら、

「だから、お茶屋へ行つて食べるよりほかありませんね。」と言つた。

「冗談ぢやないよ。」と陰氣な裁判官は言つて一層陰氣になつた。

さて最後に現れたのが、いつも遅刻するので有名なマトフェイ・ニキータチであつた。彼は、おとなしい眼つきをした鬚だらけの男で、すつと前から胃加答兒に惱まされてゐた。で、今朝から、醫師の勧めで新しい療法をはじめたため、尙更いつもよりおそくなつたのである。ところで、彼が高座に上つて行く様子を見ると、いかにも沈黙考してゐるといふ風であつたが、それには理由があつた。元來彼は、自分で判断のつかない問題になると、いろんな奇妙な方法によつてこれを占つて見る癖があつた。實は今も、事務室の扉から自分の席までの歩数が三で割り切れたら、今度の新しい療法は成功するだらうと考へながら歩いてゐたのである。ところが、歩数は二十六であつた。しかし彼は

最後に巧みな調節をして丁度二十七歩目に椅子に着くやうにした。

襟に金モールを縫ひとつた制服をつけた裁判官たちの姿は頗る堂々たるものであつた。彼等自身もそれを感じてゐるらしく、三人とも、自分のいかめしさを氣にして、あわて、椅子に腰を下した。彼等の前のテーブルには緑色の卓布がかけられ、その上に、頭に驚のついた三角の文鎮や、二個の硝子瓶や、インキ壺や、白紙や、削り立ての鉛筆などが置いてあつた。

副検事も裁判官たちと一緒に出廷した。彼は、例によつて折鞭を小脇にか、へ、片手を元氣よく振りながら急いで窓際の自分の席に着いた。そして、一分も無駄にしないで書類の調査に没頭して論告の準備を整へようとした。彼は副検事になつてまだ間がないので、告發したのはこれが四度目である。しかし、野心家でもあるし、この道で出世しようと固く決心してゐたので、自分で告發した事件は是が非でも有罪にする必要があると彼は考へた。今度の毒殺事件は大體呑み込んで既に論告の腹案も出来てゐたのであるが、尙多少の事實を加へようとして、今盛んに書き抜きをしてゐるところであつた。

書記は高座と反對側の端に腰を下して、必要な書類を全部整理してしまつてから、發賣禁止になつた新聞の論文に読み耽つてゐた。それは昨日手に入れて讀んだものであるが、彼は自分と意見の一致してゐる例の鬚の裁判官マトフェイとこの論文に就いて話して見たいと思つたので、また讀み返してゐるのであつた。

裁判長は一通りの書類に眼を通してから、廷吏と書記とに二三の質問をしたが、さうですといふ意味の答へを受けると、直ちに被告の出廷を命じた。

柵のうしろの扉が開かれて、帽子を冠つた抜劍の憲兵が二人あらはれ、囚人を導き入れた。赤茶けた髪をした雀斑だらけの男囚が一人と、女囚が二人である。男の方は、だぶくの獄衣を着てゐたが、しきりに兩腕を脇にくつつけて、ずり落ちて来る袖を支へてゐた。そして、裁判官の方には眼もくれずに、腰掛ばかりを見つめながら歩いたが、他の者が充分に掛けられる餘地を残して、その一方の端に腰を下した。それから裁判長の顔に眼を据ゑて、何か囁くやうに頬の筋肉をびくびくと動かしはじめた。この男に續いて這入つて来たのは、やはり獄衣姿の、頭を襟巻で包んだ、相當に年とつた女囚で、顔は蒼ざめ、睫毛も眉毛もなかつた。落ちつき拂つた態度で、席に就く時も着物の端が何かに引つ掛かつたが、少しもあわてないで注意深くそれを外した。

三番目がマースロワであつた。

彼女が姿をあらはすと、法廷内にあるすべての男の眼がそちらに向けられて、その白い顔と、きらきらする黒い瞳と、獄衣の下に盛り上つた胸とに吸ひ寄せられた。憲兵でさへ、彼女がその前を通つて席に就くまでの間、ちつと見つめてゐたが、急にこれはいけないと思つたらしく、くるりと向き直つて、身體を揺すぶり、それから正面の窓を眺め出した。

裁判長は被告が着席するのを待つてゐた。そして、マースロワが席に就くと同時に書記のはうを向いた。

いつもの通り、陪審員の人數調べ、その他の細々したことからはじまつた。裁判長は小さな札をたんで、それをタイプルの上の硝子瓶の一つに入れ、制服の袖を少しまくし上げて毛むくぢやらかな手首をあらはし、手品師のやうな身ぶりで、一枚々々その札を取り出しては開いて讀んだ。それが濟んでから、彼は袖を下して、司祭に、陪審員の宣誓を執行するように頼んだ。

鶯色の洋服に金の十字架を吊るした老司祭は、その硬はつた兩足をしづかに引き摺りながら、聖像の下にある讀經臺の方に進み寄つた。陪審員たちは立ち上つて、がやくとそこに集まつた。

「どうか、こちらへ。」と、老司祭は、その肉づきのいゝ手で胸の十字架を押へて、陪審員が全部揃ふのを待つてゐた。

彼は四十六年間勤續してゐるので、もう四年経てば、この間或本山の主教が祝はれたやうに、在職五十年の祝賀會を催して貰ふ筈であつた。裁判所勤務は、この裁判所の開かれた最初からで、彼の誇りは、今日までに數萬の人々を宣誓せしめたこと、この高齡でありながら、尙、教會と祖國との福祉のため、また彼肉身の家庭の幸福のために活動してゐるといふことであつた。家族たちには、家屋の他に、三萬ルーブリ以上の金を利札をつけて残したいと考へてゐるのである。福音書の中には、明ら

かに、あらゆる宣誓が禁じられてゐる。したがつて、その福音書の前に人々を誓はせるといふことが不当な役目であるのは明白であるのに、彼は嘗てそんなことに拘泥したことがない。否、寧ろ、上流の人々と近づきになる機会が多いので、この手慣れた役目を好んでゐた。

陪審員全部が高座の階段を上ると、司祭は禿げた白髪頭を振つて彼等の方に向き直つた。

「さあ皆さん、右手をお舉げ下さい。かういふ風に、指をかう揃へて。」

彼は年寄りじみた震へ聲で言ひながら、片手を舉げて、親指と人指指と中指とで、物をつまむやうな形をして見せた。

「さあ、私の言ふ通りに後をつけるのです。聖かなる福音書と生命を給ふ十字架の御前に、全能の神を指して誓言します。この裁判に於いて……」と、一句々々切りながら言つた。「手を下してはいけません。かういふ風に舉げてゐて下さい。……この裁判に於いて……」

頬髯の、もつたいぶつた紳士、大佐、商人、その他二三の者は司祭の指圖通りに、さうするのが面白らしく、指を揃へた手を高く舉げてゐたが、他の者は、いや／＼ながら、加減にやつてゐた。

宣誓が終ると、裁判長は陪審員長の選挙を命じた。そこで、彼等は押し會ひながら會議室に這入つたが、そこでは、さも待ち兼ねてゐたやうに一齊に巻煙草を取出して吹かしはじめた。誰か例のもつたいぶつた紳士を推薦したので直ぐそれにきまつてしまつた。彼等は吸殻を棄て、また法廷に歸つて行つた。員長は自分が選挙されたことを裁判長に報告し、それが済むと一同は再び背當の高い椅子

に腰を下した。

すべてが圓滑に、そして嚴かに進行した。その規律と秩序と嚴肅さが、明らかに、それに與かる者を喜ばした。つまり、それが、眞面目なる公務を履行しつゝあるのだといふ彼等の感銘を深めたのである。ネフリュードフもまたさう感じた。

裁判長は陪審員の権利と義務と責任とに就いて述べ立てた。それによれば、陪審員には、裁判長を通じて被告に質問をすること、紙や鉛筆を用ひること、證據物件を調べることの権利があつた。その代り正しい審理をしなければならぬ。そして、法廷に於ける審理の秘密を發したり局外者に洩らしたりすれば懲罰に處せられるとのことであつた。皆、緊張して聞いた。例の商人は、酒の匂ひをあたりには漂はしながら、一句々々、なるほどといふやうに頷いてゐた。

九

裁判長はその演説を終ると、被告たちの方へ向き直つた。

「シモン・カルティンキン、起立。」

シモンは飛び上つた。肩がびく／＼と震へた。

「姓名は？」

「シモン・ベトロフ・カルティンキン。」

たしかに返答の用意をしてゐたらしい、彼は大きな聲で早口に述べた。

「身分は？」

「百姓でござえます。」

「出生地はどこか？」

「トウーラ縣、クラピウエンスキー郡、クビヤンスカヤ聯合村、ボルカ村。」

「何歳になる？」

「三十四でござえます。生れましたのは千八百……」

「宗旨は？」

「ロシア正教の信者でござえます。」

「妻はあるか？」

「ござえませぬ。」

「職業は、何をしてゐたか？」

「マウリタニヤ旅館に奉公してゐました。」

「前科はあるか？」

「そのやうなことはござえませぬ。手前はこれまで……」

「では、前科はないのだな？」

「減相なことで、決してござえませぬ。」

「起訴状の謄本は受取つたか？」

「へえ。」

「着席。」

「裁判長はつぎの被告へ移つた。」

「エウフイミヤ・イワーノウナ・ポーチコフ。」

ところが、カルテインキンは立つたまゝで坐らうとはしなかつた。

「カルテインキン、着席。」

それでもまだ立つてゐるので、とうとう廷吏が駆けつけて、「坐るんだよく」と小聲で繰返した。

やつと腰を下すと彼は上衣をしつかりと身體にまきつけて、また肩をびくびくと動かした。

「姓名は？」と、裁判長は、退屈さうな溜息を洩らして、被告の顔も見ずに、書類に眼を通しながら

訊いた。

ポーチコフは四十三歳、コロムナ生れのやはりマウリタニヤ旅館に奉公中の女である。答辯ははきはきして大膽であつた。そして、別に着席と言はれないでも、訊問が終ると同時にさつさと腰を下し

てしまつた。

「姓名は？」と、女好きの裁判長は、三番目の被告マースロワには特に愛想よく言つた。彼女が坐つ

たまゝであるのを見ると、「起立するんだよ。」と、やさしく、穩かに附け足した。

マースロワは直ぐに立ち上つた。そして胸を張つて、つやくとした黒い斜視の眼を輝かして、ちつと裁判長の顔に見入つた。

「名は何といふ？」

「リュボーヴィ (遊女屋での彼女の稱呼) と申します。」

ネフリュードフは、さつきから、鼻眼鏡をかけて、訊問される順序に被告たちの様子を見てゐたが、今のマースロワの返答を聞くと、

「いや、そんなはずはない。」と、眼を離さずに考へた。「リュボーヴィだつて。そんなことがあるものか。」

裁判長はそのまゝ、訊問を進めるつもりだつたが、金縁眼鏡の同僚が何か怒つたやうに囁いて彼を遮つた。彼は頷いてマースロワの方に向き直つた。

「何だと？ こゝにはリュボーヴィとは書いてないぞ。」

マースロワはしばらく黙つてゐた。

「本名を訊いてゐるのだ。」

「洗禮を受けた時の名前は何といふのか？」と、怒つた同僚も横から口を出した。

「以前はカテリーナと申しました。」

「いや、そんな筈はない。」と、ネフリュードフは考へた。彼には、これが彼女であることが今はつきりわかつた。彼女——叔母の家にゐた半ば養女であり半ば小間使であつた彼女。自分が戀して、眞實に戀して、無我夢中に手籠めにしたあげく見棄て、しまつた彼女。その彼女に違ひなかつた。ネフリュードフはその後、彼女のことを忘れてしまつてゐたが、それといふのも、思ひ出せば苦しくてたまらないからであつた。上品といふことを誇りにしてゐる彼にとつては、あんな淺ましくも恥づかしい仕打ちを彼女にしたことを思ひ出すと、良心の苛責に堪へられなかつたのである。

さうだ。正しく彼女であつた。彼女の顔にあらはれてゐる獨特の特徴を、彼は今、あり／＼と見ることが出来た。顔はやゝ腫れて蒼白かつたが、あの可愛らしい一種不思議な特徴は、その唇に、その眼に、その聲に、殊に無邪氣な微笑に、そして、姿態に、明らかにあらはれてゐた。

「初めにさう言へばよかつたのだ。」と、裁判長は、また優しい調子に返つて言つた。「父稱は何といふ？」(ロシア人には父の名前から取つた父稱といふものがある)

「私は私生兒でございます。」

「でも名付親の名があるだらう？」

「はい、ミハイロワと申しました。」

ネフリュードフは、一體この女が何をしたのだらうと考へると呼吸がつかまるやうな氣持ちがした。「姓は何といふ？——つまり苗字だな。」

「母方の苗字で、マースロワと申します。」

「身分は？」

「平民でございます。」

「宗旨は？ 正教かね？」

「正教でございます。」

「職業は？ つまり何をしてゐたか？」

マースロワは黙つてゐた。

「どんな勤めをしてゐたか？」

「商賣屋に在りました。」

「どんな商賣屋か？」 眼鏡の同僚が厳しく訊いた。

「御存知のくせに。」彼女は言つて、につこりした。と、直ぐに、あたりを慌しく見廻してから、また裁判長の方に向いた。

彼女の顔にはたゞならぬ表情が漂つた。その言葉の意味にも、その微笑にも、そのあたりを見廻した眼差しにも、恐しい惨ましい或ものが潜んでゐたので、裁判長も一寸顔を根くした。そして、その瞬間、法廷全體がしんと静まり返つた。傍聴人の中に笑ひ出した者があつたので、その沈黙は直ぐに破られた。「レッ！」と誰か言つた。

裁判長は續けた。「前科はないか？」

「ありません。」

「起訴狀の謄本は受取つたか？」

「はい。」

「着席。」

マースロワは貴婦人が裳を直す時のやうな身ぶりで、うしろから下袴を持ち上げて腰を下した。そして小さな白い兩手を組み合したが、眼はやはり裁判長に注がれてゐた。

證人が呼び出されたり、その中の或者が退出したり、鑑定醫が選ばれたりした後で、書記が立つて起訴狀を読みはじめた。読み方は明瞭で聲も大きかつたが、あまりに早口であつた。裁判官たちは右に肘をついたり左に肘をついたり、前のテーブルに凭れかゝつたり、後の背當に倚りかゝつたり、眼をつぶつたり開いたり、互ひに囁き合つたりしてゐた。憲兵の一人は何度も欠伸を噛みつぶした。

マースロワは身動きもしないで、ちつと書記を見つめてゐたが、ときん、さも答辯したいやうに身體を震はした。そして、顔を根らめ、深い溜息をついて、兩手の位置を變へながら、あたりを見廻した。

ネフリュードフは鼻眼鏡をかけたまゝ、マースロワに眼を注いでゐたが、心中には、複雑な胸を刮られるやうな惱みが渦をまいてゐた。

起訴状は次のやうなものであつた。――

千八百八十×年一月十七日、マウリタニヤ旅館に於いて、一人の客が頓死した事を館主から警察に届けた。客はシベリヤから来た第二同業組合の商人で、名前をフェラポント・スメリコフと言つた。

警察は、アルコオル飲料の過度から生じた心臓破裂が死因であると認めた。そこでスメリコフの死體は埋葬に附された。ところが、四日後になつて、死者の同郷人であり同業者であるテイモヒンといふ男が、ホテルブルグから歸つて来て、スメリコフ死亡前後の事情を聞き、これには所持金及びダイヤモンド入り指輪の強奪を目的とした毒殺の疑ひがあると言ひ出した。取調べの結果、次の事實が判明したのである。

第一、スメリコフは銀行から引出した三千八百ルーブリといふ大金を所持してゐるはずであつた。この事實は館主も番頭も認めてゐるのであるが、死後、彼の財布には三百十二ルーブリしかなかつた。その差の三千五百ルーブリはどこに行つたか。

第二、スメリコフは死の前日、リユーブカ（マースロワ）と共に、キタエワ樓及びマウリタニヤ旅館に過した。そして、マースロワは彼の依頼によつて、キタエワ樓からマウリタニヤ旅館に彼の金を取りに来て、旅館の召使、ポーチコフ、カルテインキン兩名立會の上、彼の鞆を開けた。

第三、問題のダイヤモンド指輪はマースロワが持つてゐて、翌朝それをキタエワ樓の女將に賣却した。

第四、同じく翌朝、マウリタニヤ旅館の召使ポーチコフは一千八百ルーブリを當座預金として銀行に入れた。

第五、マースロワの陳述によれば、召使カルテインキンは彼女に白い散薬を與へ、それをブランドエの盃に入れてスメリコフに飲ませるやうにすゝめたので彼女はその通りにした。

大體以上の通りであるが、詳細取調べの際にマースロワは次の意味のことを陳述した。つまり、自分の稼いであるキタエワ樓で、スメリコフが遊興してゐる間に、その依頼を受けて、マウリタニヤ旅館の彼の部屋にお金を取りに行つたのは事實であるが、その時は、スメリコフから預けられた鍵で鞆を開けたので、出したのは命ぜられただけの金額、即ち四十八ルーブリである。決してそれ以上は手を觸れなかつた。そのことは立會つてくれたポーチコフとカルテインキンとが證明してくれるはずである。また、自分が二度目に旅館に行つた時、カルテインキンに煽てられて何だか知らぬ白い散薬をブランドエに入れてスメリコフに飲ましたのは事實であるが、それは催眠劑だと思つたので、全く早く彼を眠らせて、自分ひとりの自由な身體になりたいとばかり考へてしたことであつた。尙、指輪は、スメリコフに毆られた時に、泣いて歸らうとしたら、御機嫌とりに彼自身がくれたのであつた。

一方、ポーチコフの陳述によれば、自分は紛失したお金のことは全然知らないし、またスメリコフ

の部屋なんかへ這入つたこともない、あの部屋でこそくやつてゐたのはマースロワ一人だから、若し何か盗難品があつたとすれば、マースロワが鍵を持つて金を取りに来た時の仕業にちがひない、といふのである。

そのところを書記が読み上げた時、マースロワは飛び上つて、口をあんぐり開いてポーチコフの方を見つめた。

書記は更に読みつづけた。

ポーチコフは、一千八百ルーブリの銀行受取證を突きつけられて、どこからこの大金を得たかと訊問された時、それは、十八年間かゝつて自分と、カルティンキンとが稼ぎ溜めたもので、つまりは二人の結婚準備金であると申立てた。

シモン・カルティンキンの陳述はどうかといふに、最初の取調べの際は、彼とポーチコフとが、マースロワの教唆によつて金を盗み、三人で等分に分けたと自白し、同時に、マースロワを眠らせるために散薬を與へたことも自白したが、二度目の取調べに際しては、所持金を盗んだことも、マースロワに散薬を與へたことも一切否定して、それはすべてマースロワ一人の仕業であると言ひ出した。ポーチコフが銀行に預け入れた金に就いては、ポーチコフと同様、即ち十八年間に、お客からチップとして貰ひ受けたものを蓄めたのであると申立てた。

起訴狀の結論は左の通りである。

「第二同業組合員マースロワは、豫て飲酒遊蕩に耽り居たる者なるが、千八百八十八年一月十七日、樓キタエワに於いて、マースロワと關係を結び、彼女に誘はれたるあまり、自己の靴の鍵を預けて彼女を自己の宿泊せる旅館に遣はし、遊興に要する四十ルーブリを取出さしめんとしたり。然るにマースロワは旅館マウリテナヤに行きて、ポーチコフ及びカルティンキンが、マースロワの所持せる金圓を他の盗取して互ひに分たんとするに同意したり。而して彼等はこれを遂行せり。」

こゝでマースロワはまた飛び上つて、顔を根らめ何か言ひたさうな身ぶりをした。

「その結果、マースロワの受取りたるものは、ダイヤモンド入りの指輪と小額の金圓なりしが、當夜彼女は酩酊し居たるため、金圓は紛失したるか又は隠匿したるもの、如し。彼等はその犯跡を蔽はんがため、マースロワをその旅館に連れ來りて、カルティンキン所持の砒素を用ひて毒殺することに決心したり。マースロワは、この目的のため、マースロワを説得し、彼をマウリテナヤ旅館に同道し歸れり。旅館に歸りて後、マースロワは豫めカルティンキンの用意したる散薬を受取り、これをプランデイに混入してマースロワに飲ましめたり。これによりて彼は死亡したるものなり。」

以上述べしところに依れば、シモン・カルティンキン（二十三歳）、エウフィミヤ・ポーチコフ（四十三歳）、エカテリーナ・マースロワ（二十七歳）は、千八百八十八年一月十七日、共謀して金圓及び指輪二千六百ルーブリに値するものを盗取し、殺害の意志を以つてマースロワに毒薬を服用せしめ、遂に彼を死に至らしめたるものなり。

この犯罪は刑法第一千四百五十五條に相當するものとす。依つて、カルテインキン、ボーチコフ、及びマースロワを、地方裁判所に於ける陪審員参加の公判に附するものとす。」
書記は、この長たらしい起訴狀を朗讀すると、垂れ下つた髪の毛を直しながら書類をたゞんで着席した。一同は、これから審理が始まり一切が明白になつて正義が勝利を得るだらうと考へて、安堵の吐息を洩らしたが、たゞ一人、ネフリユードフだけはその感じを味はふことが出来なかつた。彼は十年前に無邪氣な可愛い少女としてのみ覺えてゐるこのカチューシャ・マースロワが、一體何をしでかしたのだらうといふことを考へて、たゞ恐怖の念に襲はれるばかりであつた。

一一

裁判長は起訴狀の朗讀が終ると、同僚と協議をした上、「何も彼も本當のことを白狀させてくれるぞ」といふ様子で、まづカルテインキンに向つた。

「農、シモン・カルテインキン。」

カルテインキンは起立して相變らず頬をびく／＼と動かした。

「その方は、ボーチコフ並びにマースロワと共謀して商人スメリコフ所有の鞆から金圓を盗取し、且つ砒素をマースロワに與へてスメリコフに服用せしめ、遂に彼を死に至らしめたと起訴されてゐる。その方はこれに服罪するか。」

「へえ、飛んでもねえこつて……手前どもの仕事と申しますのは、お客さまのお世話をして……」

「そんなことは後で述べるが、服罪するかどうかといふのだ。」

「どうつかまつりまして、手前は……」

「餘計なことは後で言へ。服罪するかどうか。」と、裁判長は落ちついて極めつけるやうに言つた。

「そんなことをするわけがござえません。と申すのは……」

そこでまた左側の廷吏が飛び出して小聲で彼を制した。裁判長は、これで済んだといふ風に、書類を持つてゐた片手の肘を置き變へて、次のボーチコフに向つた。

「エウフィミヤ・ボーチコフ、その方はカルテインキン並びにマースロワと共謀して、スメリコフの鞆から金圓と指輪を盗み、分配したる後、彼に毒藥を服用せしめて死に至らしめたと起訴されてゐるが、それに服罪するか。」

「私は何も悪い事はいたしません。」と、ボーチコフは決して悪びれないで、きつぱりと言つた。「何しろ私はその部屋の近くへも寄らなかつたのですからね。こゝにあるあばずれが這入り込んでこそこそやつた仕事なのでございますよ。」

「そんなことは後でよい。では、服罪しないといふのだな。」

「私はお金も取らなければ薬も飲ませず部屋にも這入らなかつたのでございます。私が部屋に這入つたら、このあばずれを蹴飛ばしてやりましたとも。」

「では服罪しないのか。」

「いたしません。」

「よろしい。」

裁判長はマースロワに向つた。

「エカテリーナ・マースロワ、その方、スメリコフの鞆の鍵を持つて妓楼から旅館の彼の部屋に来て、金圓と指輪とを盗み、これを各自に分配した後、再び、スメリコフを同道して旅館に行き、毒酒を飲ませて死に至らしめたといふことであるが、それに相違ないか。」

「私は悪いことはいたしてをりません。前にも申し上げましたが、私は取りません、取りません。何も取りません。指輪は、あの人が自分でくれたのです。」

「では二千六百ルーブリ取つたといふことを承認しないのだな。」

「前に申上げた通り四十ルーブリ以外には決して手を觸れません。」

「よろしい。では毒薬入りのブランドイを飲ましたことは承認するか。」

「はい。でも、私はそれは眠り薬で、少しも害のないものだと思ひましたので、まさか、あんなことになるだらうとは思ひも寄りませんでした。神様に誓つて申します。思ひも寄らないことをごさいます。」

「さうすると、その方は、スメリコフの所持品を盗んだことは承認しないが、薬を與へたことだけを

承認するのだな。」

「はい。申上げました通りです。でも、私は眠り薬だとばかり思つておりました。あの人を早くやすませたかつたのです。それがあんなことにならうとは思ひませんでした。」

「よろしい。」裁判長は満足したらしく頷いて、「では事の顛末をくはしく話すがい、。ありのまゝに述べる方が利益だよ。」と椅子の背に凭れかゝつて言つた。

マースロワは黙つて裁判長を真正面に見据ゑてゐた。

「その時の事情を述べるんだよ。」

「事情はかうなんです。」急に早口にマースロワは、しやべり出した。「私が宿屋に行つて部屋に通りますと、あの人はもうすつかり酔つておりました。(彼女は、あの人といふ時、眼を大きく見張つて恐しさうな顔つきになつた。)で、私は歸りたかつたのですが、あの人は歸してくれません……」

彼女は記憶の蔓を失つたのか、或ひは別の事を急に思ひ出したのか、そこで口を噤んでしまつた。

「うむ、それから？」

「え、それから、あの何です、一寸の間あて家へ歸りました。」

その時、副検事が、變な恰好に片肘を突きながら半身を乗り出した。

「質問でもあるんですか。」と、裁判長は言つたが、相手が頷くのを見ると、身ぶりで質問を許した。「私が訊きたいと思ふのは、この被告が以前からカルテインキンと懇意だつたかどうかといふこと

です。

副検事はマースロワの方を見ないで、かう言つたかと思ふと、固く唇を閉ぢて、いかにも不快さうな顔をした。裁判長は、その通りを繰返して訊いたので、マースロワは呆れたやうに副検事の顔を見つめた。

「カルティンキンとですか？ え、悪意でした。」と彼女は答へた。

「どんな風に悪意だつたか？ 知りたいのだよ。しよつちう會つてゐたのかね。」

「どんな風にといつたつて……あの人はお客がある時に呼んでくれたんですよ。別に深い関係はありません。」と答へて、マースロワは不安さうに、視線を副検事から裁判長の方へ、また裁判長から副検事の方へと移した。

「然らば何故カルティンキンはマースロワばかりに客の周旋をして、他の女たちを呼ばなかつたのか、その理由を私は訊きたいのです。」

副検事は眼を半ば閉ぢて、悪魔のやうな、ずるい笑ひを頬に浮べて、かう言つた。

「私、存じません。」マースロワは、怯えたやうにあたりを見廻しながら、そして、丁度、ネフリエードフに視線を送りながら、「たゞ呼びたい者と呼んだのでせう。」と答へた。

「氣がついたらうか。」と考へると、ネフリエードフは顔へ血の氣が上るのを感じた。しかし、マースロワは別に何とも思はなかつたらしく、直ぐにまたおどくした眼を副検事の方に向けた。

「すると、被告はカルティンキンと特別關係はなかつたといふのだな。よろしい、質問は終りです。」と言ひながら、彼は紙片に何か書きつけた。が、實は何も書いたのではなく、たゞ書きつける風をしたに過ぎなかつた。今までに検事や辯護士などが巧妙な質問をした後で、更に相手の急所を衝くべき要點を手帳に記入するのを見てゐるので、その眞似を一寸やつて見たのである。

そこで裁判長は訊問をつづけた。

「うむ、それからどうしたのか？」

「家へ歸つて、お金を女將さんに渡してから寝みました。うとくしたかと思ふと、ベルタといふ妓が来て、あなたのお客がまた来たわよと言つて私を起すのです。私はいやでしたけれど、女將さんの言ひつけですから仕方なくまた出ました。あの人は（前にもさうであつたが、今度も、あの人といふ時に彼女は恐しさうな顔つきをした）他に女をあげて、もつと酒を持つて来い、酒だくと取鳴つてゐましたが、お金はもう無くなつてゐましたし、女將さんも信用しないので、あの人は私を宿の方へ使ひにやつて、どこそこにお金があるから、幾らく持つて来いと言つたのです。そこで私が行きま

した。」

裁判長は左隣りの同僚と、こそく話をしてゐて、彼女の陳述はろくろく耳に這入らなかつたが、残らず聞いてゐたといふことを示さうとして彼女の最後の言葉を繰返した。

「そこで行つたといふんだな。うむ、それから？」

「言ひつけられた通り、何も彼もいたしました。まづ部屋へ通りましたが、それも私一人ぢやございませぬ。カルテインキンと、あの人と呼びました。」彼女はポーチコフを指して言つた。
「謔ですよ、私は部屋なんかに入らぬやしない。」と、ポーチコフは言ひ出したが、直ぐに中止を命ぜられた。

「それから二人立會の上で、十ループリ札を四枚取りました。」と、マースロワは、ポーチコフの方を見ないやうにして言ひつづけた。そこへまた例の検事が口を出した。

「被告はその四十ループリを取出す時、そこにどの位の金があつたか気がつかなかつたか。」

マースロワは検事に聲をかけられて身震ひした。何故だか知らないが、この検事は悪意を持つてゐるらしく彼女には感じられた。

「數へては見ませんでしたでしたが百ループリのお札が幾枚かあつたやうでした。」

「さうか、被告は百ループリ紙幣があるのを見たのだな。よろしい。」

「で、その金を持つて歸つたか。」裁判長は時計を見ながらつづけた。

「はい。」

「それから？」

「それから、あの人は私を連れて宿屋に歸りました。」

「よし、ではどういふ風にして薬を飲ましたか。」

「お酒の中へ入れて飲ませました。」

「何故飲ましたか。」

マースロワは直ぐには答へないで、ほつと深い吐息を洩らした。

「あの人はどうしても歸してくれませぬ。私、もうへと／＼に疲れておましたので、廊下に出てカルテインキンに、『私、草臥れてしまつたから、何とかして歸して貰ひたい』と話しました。すると、カルテインキンが『あの人には私たちも手を焼いてゐるので、眠り薬を飲ませようかと思つてゐるんだよ。寝さへすればお前さんだつて歸れるからね』と申しますので、『それがいいわ』と私も申しました。毒にはならない薬だとばかり思つたものですから、カルテインキンから紙包を受取りまして、部屋に引返して見ますと、あの人は衝立の向うに寝轉んでゐて、直ぐにブランデーをくれと申します。そこで私はティブルの上にあつた上等のシャンパン酒の瓶を取つてコップに注ぎ、それに薬を入れて出しました。毒だと知つてゐましたら、そんなことをするわけがありません。」

「よろしい。ところで指輪はどうしてお前の手に這入つたのか。」

「あの人が自分でくれたのです。」

「いつくれたのか。」

「宿屋に連れられて行つた時です。私が歸らうとしますと、頭を毆つて櫛を折つてしまひました。私はいくやしくつて、どうしても歸ると言ひ張りましたので、あの人は指輪をはづして、これをやるから

「歸るんぢやないと申しました。」

この時また副検事が腰を浮かして質問をはじめた。

「被告はスメリコフの部屋に何時間位ゐたか、それをまづ聞きたい。」と彼は言ひ出した。

「マースロワはぎつくりとしたらしかつた。そして例のおどくした眼を副検事から裁判長の方へ移しながら口早に答へた。

「覚えてをりません。」

「さうか、しかし、スメリコフのところを出てから、どこか他の部屋に行きはしなかつたか。どうだ、覚えはないか。」

マースロワはしばらく考へてゐた。

「はい。次の空いた部屋へ一寸寄りました。」

「何のために寄つたのか。」

「少し休まうと思ひまして。それから辻馬車の来るのを待ちました。」

「その部屋にカルテインキンがゐたぢらう。」

「あの人も這入つて來ました。」

「何のために這入つたのだ。」

「スメリコフのブランデイが少し残つてゐましたので、一緒に飲みました。」

「ほ、う、一緒に飲んだのだな。よろしい。その時、カルテインキンと話をしたぢらう。どんなことを話した？」

マースロワは急に眉をひそめて、眞赤になり、「どんなことツて、別に何も話しやいたしません。私の知つてゐることはこれだけでございます。私のことはどうでも好きになすつて下さい。私はちつとも悪いことはしてゐないので。」と言つた。

「最早質問することはありません。」と検事は裁判長に言つて、被告がカルテインキンと一緒に別室に立寄つたといふことを紙片に手早く記入しはじめた。

法廷はしばらく静かになつた。

「その方はもう言ふことはないか。」

「みんな申上げてしまひました。」と、彼女は溜息まじりに言つた。

裁判長は書類に何か記入してゐたが、左側の同僚が耳許で囁くのを聞くと、直ぐに十分間の休憩を宣し、急いで立上つて退廷した。左側の同僚は何を囁いたかといふに、胃の具合がこの時變になつたので、マッサージをしたり服薬したりしたいといふのであつた。そのため、十分間の休憩となつたわけである。

陪審員、辯護士、證人なども立上つて、公務の一部が片づいたといふ快感に浸りながら、あちこちと動き出した。

ネフリュードフは陪審員室に這入つて窓際に腰を下した。

一一一

「さうだ、あれはカチユウシヤだ！」

ネフリュードフとカチユウシヤとの關係を述べると、つぎの通りである。——
ネフリュードフが初めてカチユウシヤに會つたのは大學三年の時であつた。彼は土地私有權に關する論文の準備中で、その暑中休暇を田舎の叔母の家で暮してゐた。それまでは毎年、母や姉と一緒にモスクワ附近の別荘で過すことにきめてゐたが、その夏は、姉は他家に縁づき、母は外國の或溫泉場に行つてしまつたので、論文の仕事を持つて叔母の家へやつて來たのである。そこは實に閑靜な田舎の別天地で、何一つ心を亂すやうなものもなかつた。叔母たちも彼を愛してくれたが、彼も叔母たちが好きであつた。それに、質朴な昔風の生活も氣持ちがよかつた。

その年、彼はスベンサーの「社會平衡論」を大學で讀んだのであるが、その土地私有論は、大地主の子として生れた彼にとつては殊に感銘が深かつた。彼の父は別段富裕ではなかつたが、母が一萬エーカーの土地を持參して嫁に來たのであつた。當時彼は土地私有制度の殘忍不正なことを明らかに理解した。そして、良心の要求に依つてなされる犠牲は最高の魂の喜びをもたらすものであることを知つて、遂に父から遺産として譲られた土地を農民たちに分配してしまつたことがある。彼の論文は

このことを主題にしたものであつた。

叔母の家での彼の生活は、——まづ朝は、ごく早く、時には三時頃に起きて、朝霧の立ちこめてゐる中を、山裾の小川へ水浴に行き、草花の露のまだ乾かぬうちに歸つて來るのであつた。朝の珈琲をすましてからは、論文を書いたり参考書を讀んだりすることもあつたが、それよりもまた家を飛び出して野原や森をぶらつくことの方が多かつた。書食前に廣い庭のどこかに寢そべつて一眠りし、食事中は快活な調子で叔母たちと話したり笑つたりした。それから騎馬で出懸けたり、ボートを漕ぎに行つたり、夕方になると叔母たちの仲間に這入つて、カルタ遊びをしたりした。

夜は大抵、——殊に月の明るい夜などは、生の喜びが感情に満ち溢れて、たゞそのみのために眠ることが出來なかつた。だから、眠る代りに、時としては、夜明けまで、夢想しながら、庭中をあてもなく、ぐる／＼歩き廻つたりした。そんなわけで、叔母の家へ來てからの最初の一ヶ月間は、たゞ平和、幸福に暮し、その家の半ば養女、半ば小間使ともいふべき可憐なカチユウシヤには殆んど氣もつかなかつたのである。その時は、ネフリュードフも、まだ十九歳で、母親の翼に抱きしめられて育つて來た純真無垢な青年であつたから、若し女のことを考へるとすれば、それはたゞ妻としての女のことのみであつた。當時の彼の考へによれば、結婚の相手になり得ない女はすべて女ではなく單なる路傍の人間に過ぎないのであつた。

ところが、その夏の昇天祭の日に、隣家の家族（それは若い娘二人と中學生一人とだつたが）が、

その家に寄寓してゐる百姓上りの若い畫家と一緒に、一日中遊びにやつて来た。お茶の後で、皆は、すぐ家の前の、もう草刈り取られてしまつた牧場に出て行つて、ゴレールキ（鬼ごつこに似た遊戯）をすることになり、カチュウシヤも仲間に加へられた。何回も組が變つてから、ネフリユードフはカチュウシヤと組んで逃げることになつた。その時まで、彼は彼女を見るのが好きではあつたが、まさか深い特別の關係が生じて來やうなどとは全然思ひも染めなかつた。

「ころびでもしなきや、こいつは掴らないぞ。」と「鬼」になつた陽氣な、田舎もの、畫家は言ひながら、日に焼けた頑丈な足を振りくゞ追つかけて來た。

「あなたが鬼！……で、掴りませんか？」とカチュウシヤが言つた。

「一、二、三、」畫家は三度手を拍つた。

やつと笑ひを噛みしめながら、カチュウシヤは、「鬼」のうしろで、ネフリユードフと位置を變へ、自分の荒れた小さな手で男の大きな手をおさへてから、硬ばつた下袴をばさくいはせながら、左手に逃げて行つた。ネフリユードフは畫家の「鬼」に掴まるまいとして右手の方へ懸命に駈けた。そして、一寸振り返つて見ると、畫家はカチュウシヤをしきりに追ひ廻してゐる。と見ると、前方にライラックの茂みがあつたので、カチュウシヤは首を振つて、その蔭で落合はうといふ合圖をネフリユードフにした。組になつた者が手をつなげば「鬼」は掴へることが出來ないといふのがこの遊戯の規則であつた。ネフリユードフは合圖の意味がわかつたので、茂みの蔭へ駈け込んだ。ところが、そこ

には彼の知らない小さな溝があつて、而もそれが蕁麻に蔽はれてゐた。彼は、その蕁麻の上のところんで、刺でさゝれた上に、兩手を、もう夕方だつたので一杯にたまつてゐた露に濡らしてしまつた。でも、直ぐに、自分の失敗を笑ひながら起き上つた。

眞黒い、艶々した瞳を輝かして、カチュウシヤは、彼の方に飛んで來た。そして二人は手を繋いだ。「引つ掻きはなさらなくつて？」と、彼女は片方の手で髪を掻き上げながら、につこりして、呼吸を弾ませ、ちつと相手の顔を見上げて言つた。

「こんなところに溝があるとは知らなかつた。」

ネフリユードフも、につこりして、やはり手をつないだまゝ言つた。すると、彼女は男に寄り添ふやうにした。で、彼も、どうしてそんなことになつたものか、いきなり女の方へ顔を寄せしまつた。彼女は身動きもしない。彼は女の手を握りしめて、唇に接吻してしまつた。

「まあ！」彼女は、いきなり男の手を振り離して駈け出した。

もう花の散りかけた白いライラックの小枝を二本折り取つて、カチュウシヤはしばらく火照つた自分の顔を煽いでゐたが、やがて、男の方を一寸振り向いて、直ぐにまた元氣よく兩手を振りくゞ皆のところへ歸つて行つた。

このことがあつて以後、ネフリユードフとカチュウシヤとの間には、戀し合ふ純眞な青年男女の間によく見るやうな、一種特別な關係が生じてしまつた。

カチュウシヤが自分の部屋に這入つて來れば、いや、たゞ彼女の白いエブロンを遠くから、ちらと眺めただけでも、ネフリユードフには、世の中の一切のものが輝かしく見えた。それは丁度、太陽があらゆるものを明るく楽しく、また意味深く見せるのと同じである。彼の生活全體は喜びに満たされた。むろん、彼女のはうでも同じ感じであつた。而も、ネフリユードフにとつては、たとひカチュウシヤが眼の前にあなくても、たゞ彼女が存在してゐるといふことを考へるだけで、同時に、カチュウシヤにとつては彼が存在してゐるといふことを考へるだけで、たまらなく嬉しく楽しくあつた。彼は母親から不愉快な手紙を受取つても、論文が思ふやうに進まなくても、青年時代にありがちな理由のない悲しきを感じても、いや、カチュウシヤがある、カチュウシヤと會ふことが出来るといふことさへ思ひ出せば、一切の悩みが忽ち消え去つてしまふのであつた。

カチュウシヤには、しなければならぬ仕事に澤山あつた。でも、彼女は、用事を片づけて暇を作つては本を讀んでゐた。で、ネフリユードフは自分が讀み終つたばかりのドストエフスキイやツルゲーニエフの小説を貸してやつた。彼女はツルゲーニエフの「靜寂」が好きであつた。二人は、廊下とか露臺とか庭先とかで會つた時、または古くからある老婢マトリヨナ・ペーウロウナのところへ、ネフリユードフが茶を飲みに出懸けて、たまたまそこにカチュウシヤが居合せたりする時に、ごく簡単な話をする位のものであつた。而も、ペーウロウナが眼の前にある時の方が話はずんで、二人きりになると、かへつて面白くなかつた。彼等の眼は、直ぐに、口で言つてゐること、は非常にちがつた、もつと意味のあることを囁き合ふやうになるので、何だか恐しくなつて急いで別れてしまふのであつた。

ネフリユードフとカチュウシヤとの、かうした關係は、彼が叔母の家での逗留中つゞいてゐた。叔母たちも、それに氣がつくと、びつくりして、ネフリユードフの母、エレナ・イワーノウナの許へ手紙で知らせてやつたりした。叔母のうちでも、マリヤの方は、もつと深い關係になりはしまいかと心配したが、それは取越苦勞に過ぎなかつた。何故かといふに、ネフリユードフは、自分でははつきり意識してゐなかつたが、清い純な戀の相手としてカチュウシヤを愛してゐたからであつた。彼女の身體を自由にしようなどと全然思はなかつたばかりか、そんなことは考へるだけでも彼には恐しかつた。だから寧ろ、もう一人の叔母、詩人肌のソフィヤが感じてゐた不安、——つまり、ネフリユードフが持ち前の一本氣な氣象から、女の素性も位置も考へないで、愛するあまりに結婚する氣になりはしないだらうかといふ不安の方が、はるかに根據があつた。

若し當時、ネフリユードフが自分のカチュウシヤに對する戀をはつきり意識したならば、また特に、あんな素性の女と運命を共にしてはいけなさと誰かに注意されることでもあつたとしたら、一本氣な彼としては、たとひ相手がどうであらうと愛する以上は結婚するのが當然だと考へないとも限らなかつたのである。けれども、叔母たちは、内心の不安を決して彼に洩らさなかつた。さうして、彼は遂に、カチュウシヤに對する自分の眞實の戀を、明らかに意識しないで、この家を去つてしまつ

た。彼は、彼女に對して感じた氣持も要するに自分の全身に満ち溢れてゐる生の歡喜のあらはれの一
つに過ぎない、そして、たま／＼この可憐な快活な少女がその喜びを共にしたに過ぎない、と思ひな
がら立ち去つたのである。しかし、いよく出發となつて、カチュウシャが叔母たちと一緒に玄關先
に立ち、その黒い瞳に一杯涙をためながら、ぢつと彼を見つめた時、さすがに彼も、二度と手に入れ
ることの出来ない美しい寶玉のやうなものを残して行くやうな氣がした。そして、たまらなく悲しく
なつた。

「さよなら、カチュウシャ。いろ／＼お世話さま。」

ネフリュードフは馬車に乗りかけて、叔母ソフィヤの帽子越しに言つた。

「さよなら、ネフリュードフ様。」

彼女は眼に溢れて來る涙を押しかくして、快活に優しく答へた。そして、玄關内に駈けこみ、そこ
で思ふさま泣きつゞけた。

一三

その後三年近く、ネフリュードフはカチュウシャに會はなかつた。そして再會したのは、彼が士官
になつて聯隊へ赴任の途中、叔母たちの家へ立ち寄つて數日間滞在した時であつた。しかし、この時
の彼は、三年前の夏をこゝで送つた頃とは、まるで別人のやうに變りはてゝゐた。

當時は正直で善良で、すべて正しいことには身を犠牲にするといつた風の青年であつたが、今は墮
落しきつた、自分の快樂の他には何も考へない、おしやれの自我主義者になつてゐた。當時は神によ
つてつくられたこの世界を神祕なものと思つて、狂喜してその謎を解かうとしたものであつたが、今
では、人生のあらゆる事物が生活の條件から割り出された簡單明瞭なものとか考へられなかつた。
當時は自然と親しんだり、昔の哲學者や詩人と親しんだりすることが必要でもあり重大でもあつた
が、今では人間のつくつた制度とか交際とかの方が大切であつた。當時は女を神祕的なもの魅惑的な
ものとしてのみ見てゐたが、今では、すべての女を（と言つても家族や友人の細君などは別として）
單なる享樂の一機關であり、その最上のものであるに過ぎないと定義してしまつてゐた。當時は金も
いらなかつたので、母から許されてゐる三分の一も貰はずに濟んだし、父から譲られた土地を農夫た
ちに分けてやることも出來たが、今では、母から送られる月々千五百ルーブリでさへも足りなかつ
た。當時に於ける精神的自己は、今、動物的自己に一變してしまつたのである。

かやうな恐しい變化は何から生じたか？ それは彼が自己を信じてゐることを止めて、他人を、そして
世間を信じるやうになつたからである。自己を信じつゝ、生活することは非常に困難なことであつた。
何故かといふに、自己を信じる時は、すべての問題を、常に安價な享樂を求めつゝ、ある動物的自我に
味方せずに、多くはそれに逆らつて解決しなければならぬ。ところが、他人を信じる時は、何事も
解決するには及ばない。一切萬事が既に解決されてゐる。而も、精神的自我のためでなく、動物的自

我のために都合よく解決されてゐるのである。そればかりではない、周囲の人々は、彼が自己を信じれば常に非難し、他人を信じれば常に賞讃するのであつた。

例へばかうである。ネフリュードフが人生に於ける眞面目な問題——神とか眞理とか富とか貧とかに就いて、考へたり話したりすると、周囲の人たちは、それを柄にもないこととしてや、滑稽視した。そして母や叔母などは、優しい皮肉をこめて、うちの哲學者先生と呼んだりした。ところが、下らな小説を讀んだり、でたための茶話をしたり、フランス式の滑稽な狂言を見に出かけたり、歸つて来て、それを面白おかしく話して聞かせたりすると、不思議に皆が彼を褒めそやすのであつた。又、儉約しなければならぬと考へて、古外套を着たり禁酒したりすると、皆が寄つてたかつて、變な、一人よがりの、わざとらしい振舞ひをするといふのであつた。が、獵のためとか特別贅澤な書齋のためとかに借氣もなく大金をつかへば、皆がその趣味を持ち上げて、高價な贈物をよこしたりした。結婚までは純潔に童貞を守らうとすれば、誰も彼の健康を氣づかつて心配したが、反對に、彼が或友たちの手からフランス美人を奪ひ取つたと聞いた時には、母親までがそれを悲しまないばかりか、寧ろ、男らしい男になつたと内心は喜んだくらいである。(たゞし、カチュウシヤのことでは、母も、もしや結婚する氣になりはしまいかと恐れなくてもなかつた。)

そんなわけで、ネフリュードフが丁年に達して、土地私有が不正であるとの理由から、父から讓られた少しばかりの土地を農夫たちに分配してやつた時も、母親はじめ家族のものがびつくりしてしまつた。そして、親戚一同も、これをもつて彼を嘲笑する種子にした。農夫たちは土地を買つてからは、富裕になるどころではなく、三軒の酒場をつくつたりして全く倒れかなくなつたので、かへつて貧乏になつた、といふ話を、ネフリュードフは幾度となく聞かされた。ところが、彼が軍隊に入つて、同僚の貴族仲間と遊蕩賭博三昧の生活に浸り、大金を浪費した際には、母は基本財産に手をつけて、やうやくその後始末をしたのであつたが、それでも彼女は、そんな道樂は、若い、上流社會のものにとつては當然のこと、寧ろいゝこととして、殆んど悲しみの色さへ見せなかつた。

最初、ネフリュードフは内心の戦ひをつけた。彼が自己を信じてゐた時に善と考へてゐたものは、周囲の人々にとつては、すべて悪であり、彼が悪と考へてゐたものがすべて善であつた。そこで、彼は次第に戦ひに負け、遂に降服してしまつた。つまり、自己を信じてゐることを止めて、他人を信じてゐることにしたのである。さすがに初めは、不愉快でたまらなかつたが、それもちよつとの間で、酒と煙草を始めてからは、その不愉快を感じなくなつたばかりか、非常に安易な氣持ちさへ覺えるやうになつた。

ネフリュードフは、かくして、その熱情的な性格から、一氣に、周囲の人々すべてが是認する、この新しい生活様式に身を投じてしまつた。そして、他の何物かを探し求める内心の聲には全然耳を傾けることをしなかつた。これは、ベテルブルグへ移つてからの變化であるが、軍隊生活をするやうになつてからは、それが一層甚だしくなつた。

軍隊生活といふものは概して人間を墮落せしめる。軍隊に入ることは完全な怠惰の世界に入ることである。——そこでは、合理的な有益な労働はかへり見られない、一般人間としての義務を果すには及ばない。たゞ、聯隊、軍服、軍旗のみを尊敬して、上官は絶対の権力を振り、部下は絶対の服従をしてあさへすればいいのである。

殊に、富豪や貴族の將校ばかりが勤務してある近衛聯隊に於いては、單なる軍隊生活の墮落に、金力による墮落と、皇室に近接することによつて生じる墮落とが結びつくので、遂にその墮落は驕慢病の状態に陥つてしまふのである。ネフリユードフも軍隊に入つて仲間のもと同じ生活を始めるやうになつてからは、この驕慢病にかゝつてしまつた。きらびやかな軍服をつけ、びか／＼した武器を持ち、よく肥えた馬に乗つて、意氣揚々と練兵場に出かけて行く以外には何の仕事もない。さうして、彼等にとつて大切なことは、出所不明の金を投げ出して、將校俱樂部や一流の料理屋へ、食事に、といふよりも酒を飲み集まることであつた。他に、芝居、舞踏、女、——それからまた、馬に乗り劍を振り、酒、カルタ、女、と同じことがくり返されるだけである。

かういふ生活は、普通の人々にとつては、恥づかしくて到底堪へられるものではないが、軍人だけはその誇りにしてゐる。殊に、ネフリユードフが入隊した頃は、トルコに宣戦を布告して間もなくであつたから、一層それが甚だしかつた。「われ／＼は戦地に行つて身を犠牲にしなければならぬ。だから現在、かういふ愉快な生活は許されていゝばかりか、まつたく必要なことなんだ」といふ風であつた。

三年後に叔母たちの家へあらはれたネフリユードフは、かうした生活にすっかり慣れきつてしまつてゐた。

一四

ネフリユードフが叔母たちの家を再び訪ねたのは、その土地が、既に前進した彼の所屬聯隊への道筋に近かつたからでもあり、また、かね／＼立寄つてくれと勧められてゐたからでもあつたが、實は、カチュウシャに會ひたいといふのが、そのおもな目的であつた。恐らく、心の奥底には、放縱な動物的自我にそゝのかされた、カチュウシャに對するよくない慾望が萌えてゐたのであらうが、彼自身は、それを意識してはゐなかつた。彼はたゞ、會つて楽しく暮したことがある土地へ再び寄つて、いつも優しいもてなしをしてくれる、なつかしい叔母たちに會ひ、同時に、うれしい思ひ出を心に残してくれたカチュウシャの可憐な姿を見たいといふ氣持ちだけであつた。

彼が着いたのは、もう雪解けのはじまつた三月末の受難日（復活祭前の金曜日）だつた。雨がひどく降つてゐたので、ぐぶ濡れになつて、たまらない寒さを感じたが、それでもその頃の彼は、常に勇ましく元氣であつた。

「彼女はまだゐるだらうか。」

彼は馬車の中で考へながら、低い煉瓦塀でかこまれた、そして今は屋根から落ちた雪で眞白に蔽はれてゐる、見慣れた、昔風の中庭に向つて這入つて行つた。

馬車の鈴の音を聞いて彼女が出て来るかと楽しみにしてゐたが、それはあてがはづれて、顔なじみのない二人の女中が勝手口のところからあらはれた。拭き掃除をしてゐたらしく、手にバケツをさげ、はだしになつて、而も裾をからげてゐた。

正面の玄關にもカチュウシヤはゐなかつた。應接間に這入ると直ぐに、ソフィヤ・イワーノウナが絹の服に帽子をかぶつて出て來た。

「まあ、よくいらつしやいましたね。」と言ひながら、ソフィヤは接吻した。「マリヤは祈禱疲れで、ちよつと身體を悪くしてゐますの。家ではもう聖餐式（キリストがその弟子たちと行つた最後の晩餐を記念する儀式）を済ましたのよ。」

「それはお目出度う。」と言ひながら、ネフリユードフも叔母の手に接吻した。「や、御免なさい。叔母さんの服を濡らしちまいましたね。」

「かまひませんよ、そんなこと。直ぐに、あなたのお部屋へいらつしやい。随分濡れたぢやありませんか。おや、もう口髭なんか生やして……カチュウシヤ、カチュウシヤ！ 珈琲を差上げておくれ、大急ぎでね。」

「はい、只今。」

聞き慣れた例の快活な聲が、廊下から聞えて來た。

「ゐた！」

ネフリユードフのこゝろは躍つた。太陽が雲間からあらはれたやうな氣がした。

ネフリユードフは、下男のティーホンの案内で、自分の以前の部屋へ、濡れた服を着かへに、足取りも軽く這入つて行つた。カチュウシヤのことを彼はいろ／＼聞いて見たかつた。——どうして暮してゐるか、お嫁に行くのではないのか？ しかし、ティーホンは、いやに丁寧に、而も眞面目くさつて、お手に水を掛けませうなどと、固苦しいことばかり言つてゐるので、とう／＼彼女のことは聞く氣になれなかつた。で、ティーホンの孫たちのことや、年寄りの馬のことや、番犬のことなどを尋ねて見た。番犬だけは去年の夏、氣が狂つて死んでしまつたが、他は皆變りなく達者だといふことであつた。

濡れたものを脱ぎ棄て、新しいのを着かへようとしてゐると、廊下に蹺音が聞えて、誰かが扉をノックした。ネフリユードフにはそれがよくわかつた。そんな風に歩きそんな風にノックするのは、カチュウシヤの他にはゐなかつたから。

彼は濡れた外套を肩から引つかけて扉を開けた。

「お這入り。」

カチュウシヤであつた。以前よりも更に美しくなつたカチュウシヤであつた。無邪氣な、心持ち斜

視の黒い瞳が、以前と同じやうに、ぢつとネフリユードフを見上げた。白いエプロンを掛け、手には封を切つたばかりのい、香のする石鹸と二枚のタオルとを持つてゐる。新しい石鹸とタオルと、さうして彼女自身、――すべてが清浄、無垢で氣持ちよかつた。久しぶりに會つたといふ、包みきれぬうれしさの微笑を見せながら、彼女は、引きしまつた愛くるしい唇を開いた。

「ごきげんよろしう、ネフリユードフ様。」彼女は口ごもつて、頬を薔薇に染めた。

「やあ、ごきげんよう。相變らず達者ですか。」

と、彼も根くなつて言つた。

「はい、お蔭さまで達者でございます。……これは叔母様からの、あなた様のお好きな石鹸とタオルとでございます。」

彼女は石鹸をテーブルに置き、タオルを椅子の腕に載せた。

「何もかも持つていらつしやるよ。」とティーホンはネフリユードフの化粧箱を指して言つた。その中には、刷毛や香水や瓶や、その他あらゆる化粧道具が一杯つまつてゐた。

「叔母さんによろしく。あ、本當に來てよかつた。」

ネフリユードフは、昔と同じ明るい嬉しさが胸に溢れるのを感じた。カチュウシヤは、返事の代りに、につこりして出て行つた。

叔母たちはいつも彼を可愛がつてくれるにきまつてゐたが、今度は常にも増した歡待ぶりを見せ

た。ネフリユードフが或ひは死ぬかも知れない戦地へ行くのだといふことが、彼女たちの心を動かしただからである。

はじめ、ネフリユードフは、ほんの一晝夜だけ逗留するつもりでゐたが、カチュウシヤの顔を見てからは氣が變つて、二日後に迫つてゐる復活祭をすましてから出發することにした。そして、オデッサで落ち合ふことになつてゐる同僚にも電報を打つて、叔母の家へやつて來ないかとすゝめたりなどした。

ネフリユードフはカチュウシヤを見ると、たちまち彼女に對する以前の戀ひごころを覺えはじめた。再び彼は、心ときめきを感じないで彼女の白いエプロン姿を見ることが出來なくなつた。彼女の聲音、話聲、笑聲などを聞くのが嬉しくてたまらなかつた。黒莓のやうな瞳を、殊につこりした時に見るのが可愛くてたまらなかつた。さらに、面と向つた時、さつと根くなる彼女を見ては、もう惱ましさに堪へられなかつた。彼は自分が戀してゐるのを感じたが、それは昔の戀とは全然性質がちがつてゐた。當時の戀は、一種神祕的なもので、戀してゐるといふことを自分自身でも、はつきり氣づかなかつた。それに人は一生に一度しか戀し得ないものだと思つてゐた。ところが、今は彼は自分が戀してゐることを知り、それを喜び、そして、その戀の性質がどんなものであるか、どんな結果を生じるかを、大體知つてゐるのである。ネフリユードフにも、すべての人々がさうであるやうに、内に二つの自我があつた。一つは精神的自我で、これは他人にとつても幸福となるやうな自己の幸福

を求めたが、今一つは、世界中の人間の幸福を犠牲にしても自己のみの幸福を求めようとする動物的自我である。しかし、ベテルブルグに於ける生活と軍隊生活とによつて、今は、彼の内にある精神的自我は、動物的自我のために全然壓倒されてしまつてゐた。

とはいへ、カチュウシヤに會つて、三年前に抱いたと同じ感情を覺えると、再び精神的自我が頭をもたげてその權利を主張しはじめた。で、復活祭までの二日間、彼の心内には、彼自身にもはつきりしない不斷の苦しい戦ひがつゞいたのであつた。

心の奥底では、早く出發しなければならぬ、逗留すべき何等の理由もないことを知つてゐた。い、結果の生じないこともわかつてゐた。而もたゞ楽しく嬉しくてたまらないので、眼を閉ぢて、日を延ばしたのである。

復活祭の前夜には、司祭が補祭をつれて、早課祭（禮拜式の前行祈禱）を行ふためにやつて來た。ネフリユードフは叔母や召使たちにまじつて、この早課祭に臨んだ。そして、カチュウシヤが戸口に立つて、時々司祭のところへ香爐を運んで來るのばかりをちつと見つめてゐた。式が終つてから寢室に行かうと思つてゐると、丁度、老婢マトリヨナ・パーウロウナが、カチュウシヤと一緒に教會へ行つて、クリイチヤバスハ（いづれも菓子の名、復活祭の供物）を聖めて貰ひに行く支度をしてゐる様子であつた。

「僕も行かう。」と彼は思つた。

教會への道は、ひどく悪くて橋も馬車も利かなかつた。それで、叔母の家を自分の家同様にしてゐるネフリユードフは、昔から飼はれて「兄弟」と呼ばれてゐる馬に鞍を置くことを命じた。そして、軍服をつけ、乗馬ズボンをはき、その上に外套をまとひ、肥り過ぎて嘶いてばかりゐる老馬に跨つてどろ／＼になつた雪解けの、暗い夜道を、教會へと急いだのであつた。

一五

ネフリユードフにとつて、この時の儀式は、その後永久に、最も輝かしい、最も鮮かな思ひ出の一つとなつた。ところ／＼雪明りのする暗い道をやうやく乗り切つて教會に着いた時には、もう儀式がはじまつてゐた。彼がマリヤ・イワーノウナの甥であることを知つてゐる農夫たちは、ふいにまぶしい燈火を見て耳をびく／＼させてゐる老馬を、乾いた地面のところへ連れて行き、そこで彼を下して食堂へ案内してくれた。中には、人がぎつしりつまつてゐた。右側は男、左側は女であつた。男の中でも年寄りや手織りの上衣をつけ、さつぱりした白い脚絆をあてゝゐるが、若ものは新しい羅紗の上衣に、派手な色氣の帯をしめ、長靴をはいてゐた。若い女たちは頭に赤い絹ハンカチを捲き、黒い袖なしのジャケットと、その下に眞赤なシャツを着、青、緑、赤などの、ぼつとした下袴をつけて、厚い革の靴をはいてゐた。

ネフリユードフは前の方へ進んで行つた。法壇の右側にマトリヨナとカチュウシヤとが立つてゐ

た。カチュウシヤは、胴のあたりに髪かみのついた白い服しろいふくに、青い帯あおひをしめ、黒い髪くろいに赤い蝶形てふがたのリボンリボンを結むすんでゐた。

すべてが、お祭まつりらしく嚴げんかで明るく美しくかつた。金色きんいろの十字架じくわのついた銀色ぎんいろの法服ほふくをまとつた司祭しさいや補祭ほさいなどの姿すがたも、髪かみをてかく光ひかりらせて晴着はれぎをつけた歌手かしゅたちも、舞踏曲ぶたなまのやうにひびくお祭まつりの歌うたの樂たのしさうな調子てうしも、司祭しさいたちが花はなで飾かざつた大きな蠟燭ろうそくをもつて絶えず人々ひと々を祝福しゅくふくするありさまも、それから「基督キリストは蘇生よみがへりたまへり」と繰返くりかへしく叫こゑばれる聲こゑも、そのすべてが美しくかつた。しかし、何なによりも美うつくしかつたのは、白い服しろいふくに青い帯あおひをしめ、黒い髪くろいに赤いリボンあかをつけて、恍惚まぼろしとした眼めを輝きらかしてゐるカチュウシヤの姿すがたであつた。

ネフリユードフには、彼女かのぢよが自分じぶんの方かたを見みないでも、自分じぶんのゐることを知しつてゐるのだといふことがわかつてゐた。それは彼女かのぢよの傍そばを通とおつて祭壇さいだんの方かたへ歩いて行く時ときに感かんじたのであつた。その時とき、彼は話はなすことが何なにもなかつた。でも、何なにか言いつて見みたかつたので、通とおり過ぎながら、「叔母おばさんは儀式ぎしがすんだら、ものいみ明けの御馳走ごちそうをすると言いつてたよ。」と言いつた。

ネフリユードフを見る時ときのいつもと同じにカチュウシヤの可愛かほいい顔かほには、若々わくわくしい血ちの氣けがさつと漲もつた。黒い瞳くろいひとまは微笑ほほえんで、うれしさに満みち輝きらき、無邪氣むじやうきにちつと彼かれを見み上げた。

「存ぞんじてゐますわ。」彼女かのぢよは、につこりして言いつた。

その時とき、淨水じよすいを入いれた銅どうの壺つばを持つた讀經者よきんしやの一人ひとりが出て来て、何なんの氣きもつかずに法衣ほふいの袖そでで彼女かのぢよを撫なでて通とおつた。明らかにそれはネフリユードフに敬意けいぎを表あらわして道を避さげようとした爲ために彼女かのぢよに觸ふつたのであつたが、そのことがネフリユードフには、たまらなく腹立はらだたしかつた。——こゝにある一切いっけつのもの、いや、この世よの中なかにある一切いっけつのものは、たゞ單たんに彼女かのぢよのためにのみ存在そんざいしてゐるのである。だから、他のいかなるものも無視むししてもかまはないけれども、彼女かのぢよばかりは誰たれからも尊敬そんけいされなければならぬ。何故なぜかといふに、彼女かのぢよは一切いっけつの中心ちゆうしんだからである。眩くらしい燭臺しゆくたいの灯あかりも彼女かのぢよのために輝きらき、樂たのしい讚美歌さんびかの調しらべも彼女かのぢよのために歌うたはれる。いはゞ、この世よに於おける一切いっけつの美うつくしは彼女かのぢよのために存在そんざいしてゐるのであつた。ネフリユードフは彼女かのぢよの白い服しろいふくをつけた姿すがたを見み、恍惚まぼろしとしたその顔かほの表情へうじやうを眺ながめながら、カチュウシヤ自身じしんも、あらゆるものが彼女かのぢよのために存在そんざいしてゐることを知しつてゐるのだと思おもつた。自分じぶんの魂たましひの中なかで歌うたつてゐるものと全く同じおなじものが彼女かのぢよの魂たましひの中なかでも歌うたつてゐるのだといふことがよくわかつた。

儀式ぎしの間に、ネフリユードフは會堂くわいどうの外そとへ出でた。あたりの人々ひと々は道をよけてお辭儀じぎをした。入口いりぐちのところところに立ちどまると、乞食こじきの群ぐんが、がやくと彼かれを取りまいた。彼は財布さいふにあるツタつたの小錢こせんを興あへてから階段かくだんを下くだりて行いつた。もう、夜よは明あけてゐたが、まだ太陽たいやうは昇のぼつてゐなかつた。人々ひと々は會堂くわいどうのぐるりぐるりにある墓地ぼちへ散ちつた。カチュウシヤは堂内どうないに残のこつてゐたので、ネフリユードフは彼女かのぢよを待つことことにした。

「御復活ごふくたつお目出度めでたう。」

新調の服に緑色の帯をしめた若い百姓が、かう言ひながら、にこくと近寄つて、彼の肩の真中のところを三度接吻した。丁度そこへ、マトリヨーナとカチュウシャとが出て来た。カチュウシャは前を行く人たちの先の方に、ネフリユードフが立つてゐるのを見つけた。彼も、彼女の顔がぱつと輝いたのを見た。

彼女は入口のところ、マトリヨーナと共に乞食たちに施しをしてゐた。鼻が缺けて、その跡に赤いかさぶたのくつついてゐる一人の乞食が彼女の前に寄つて来ると、彼女は、ちつとも厭がる様子もなく、自分の方から近づいて何か施した。そして、うれしそうに眼をきら／＼させながら三度接吻をした。その時、ネフリユードフの視線と出會つた彼女の眼は、「私、こんなことをしてよろしいのでせうか。」と訊いてゐるやうに、彼には思はれた。

「いゝとも、いゝとも。みんないゝ。みんな美しい。僕は好きだよ。」

彼女たちが入口の階段を下りて来たので、ネフリユードフはその方へ行つた。別に接吻禮をしようと思つたわけではなく、たゞ彼女の傍にゐたいためだつた。

「御復活お目出度う。」マトリヨーナは、につこりしてお辭儀をした。その聲には、「今日は皆平等でございますわね。」といふ意味の調子を含んでゐた。そして、圓めたハンカチで口を拭いてから、肩をネフリユードフの方へ寄せて来た。

「お目出度う。」と答へて、ネフリユードフは彼女に接吻した。それからカチュウシャを見た。と、彼女は顔を染めて近づいて来た。

「御復活お目出度う、ネフリユードフ様。」

「お目出度う。」

ネフリユードフは答へて彼女と二度接吻をした。そしてもう一度する必要があるだらうかと考へてゐるらしく暫くもぢ／＼してゐたが、思ひきつて三度目の接吻を交はした。そして笑つた。

「司祭さんのところへは行かないんですか、皆さん。」と、ネフリユードフは訊いた。

「え、少しこゝにゐますの。」

カチュウシャは何かうれしい仕事をすました後のやうに、ほつとした調子で答へてから、胸一杯に深い吐息をつきながら、例の、心持ち斜視の眼に敬虔と純真と愛の光りを籠めてぢつと男の顔に見入つた。

男女間の愛には、常に、その愛が頂點に達する瞬間がある。その瞬間には意識的、理性的なものは何もなく、而も何等肉感的なものを伴はないのである。ネフリユードフにとつては、この復活祭の夜は、まさに、さうした瞬間であつた。今、カチュウシャのことを想ひ出して見ると、あらゆる場合の中で、その夜の彼女が、もつとも鮮やかな印象を残してゐる。黒い、つやくした髪、處女らしい美しさの、のつた姿態にびつたり合つてゐる新しい白い服、まだ發育しきらない胸、直ぐに薔薇色に染まる頬、やさしく光る黒い瞳、——それ等すべてに、つゝましまやかな愛と純潔とが満ち溢れてゐる。

る。而も、その愛は、ひとり彼のみに向けられるのではなく、あらゆる人々、あらゆるもの、例へば彼女が接吻を交した乞食のやうなものにも注がれるのであつた。

彼は彼女がかうした愛を持つてゐることを知つた。何故ならば、彼自身の中にもこの愛があることを、復活祭の夜から朝にかけて意識したからである。あゝ、もし一切のことがその夜の純潔のまゝであつたならば、その瞬間のまゝで止まつてゐたならば！

「さうだ、あの恐ろしいことは、復活祭の晩にはまだ起つてゐなかつたのだ。」

ネフリユードフは、陪審員室の窓際に凭れて考へた。

一六

ネフリユードフは、教會から歸つて叔母たちと一緒に大齋明け（復活祭前の七週間を大齋期といつて、その間は肉食を斷つことになつてゐる）の御馳走を食べ、軍隊生活の習慣でウオッカと葡萄酒を飲んでから直ぐに自分の部屋に引き上げた。そして寢間着にもならず、そのまま寢こんでしまつた。しばらくして誰か、扉をノックする音に眼を覺まされた。ノックの仕方だといふことがわかつたので、眼をこすりながら起き上つた。

「カチユウシヤかい？ お這入り。」

彼女は扉を開けて、

「お食事でございます。」と言つた。やはり同じ白い服だつたが、髪の毛のリボンはなくなつてゐた。彼女は何かうれいしことを知らせに來たのかと思はれるやうに、につこりして男の顔を見た。

「今行くよ。」と言つて、ネフリユードフは髪に手を入れるために櫛を取上げた。

彼女はやはりそこに立つてゐた。それに氣がつくと、櫛を投げすて、一歩その方に寄つた。けれども彼女は、とつさに、くるりと身をひるがへして、廊下の真中に敷きつめた絨毯の上を、すべるやうにして去つてしまつた。

「われながら何て間拔けなんだらう。つかまへたらい、んぢやないか。」

彼は駈け出して、廊下の途中で追ひついた。

彼女をどうしようといふのか、それは自分でもわからなかつた。しかし、女が這入つて來たならば、さういふ時に大抵のものがするやうなことをすればよかつたのだ、それを、自分はしなかつたのだ、と思つた。

「カチユウシヤ、お待ち。」

「御用でございますか。」彼女は立ちどまつて言つた。

「何でもないが、ちよつと……」

かういふ場合、普通男はどうするだらうかと思ひながら、彼は腕を女の腰にまはした。彼女は立つたまゝで男の眼に見入つた。

「およしなすつて、ネフリュードフ様、いけません。」

涙を一杯ため、眞赤になつて、カチュウシヤは、強く男の手を押しつけた。ネフリュードフは手を離してしまつた。瞬間、どきまぎして氣はづかしさを感ずると同時に、自分自身がまったく厭になつてしまつた。實は、その時の氣はづかしさは、魂の底から迸り出た最善の感情だつたのであるが、彼はそれを悟らなかつた。いや、反對に、それを自分の臆病のためだと思ひ、人並のことをするのが當然ではないかと考へた。

彼は再び追つかけて頸に接吻した。しかし、この接吻は、嘗てライラックの茂みの蔭でした最初の接吻、今朝教會でした二度目の接吻、そのどちらとも非常にちがつたものだつた。これは恐しい接吻であることが彼女にもよく感じられた。

「まあ、何をなさいます？」

彼女は何よりも尊いものを毀されてしまつたかのやうに叫んで、ぼたくと駈け去つてしまつた。ネフリュードフは食堂に這入つた。叔母をはじめ馴染の醫者、隣りの客が、さつきから待ち受けてゐた。何も彼も平生と同じだつたが、彼の心内には嵐が荒れ狂つてゐた。カチュウシヤのことばかり思ひつめてゐて、皆の話してゐることがちつともわからないので、時々、あわて、とつてつけたやうな返事をした。廊下でつかまへて無理にしたあの接吻の感じを思ひ出すと、他のことは何も考へられないのであつた。

やがて彼女が來たことを、眼で見たのではないが、彼は全身をもつて感じた。そして、その方を見ないやうに努力しなければならなかつた。

食事をすますと直ぐ自分の部屋に歸つて、いつまでも興奮しながら、あちこち歩きまはつてゐた。家中の物音に耳を澄まして、もしや彼女の聲音が聞えはしまいかと、そればかりを心待ちにした。内に潜んでゐた動物的自我が盛んに頭をもたげて、三年前にこの家に來た時の精神的自我は、いや、つい今朝教會にゐる時までどこかに残つてゐた精神的自我は、すつかり影を消してゐた。動物的自我のみに彼は支配されてゐたのであつた。

ネフリュードフは、その日、とう／＼彼女と二人きりで會ふ機會が得られなかつた。恐らく彼女の方で避けてゐたのであらう。しかし、夕方になつて、彼女は、ネフリュードフの隣室へ來なければならぬ用事が出來た。例の醫者が泊つて行くことになつたので、その寢床の支度をしなければならなかつたからである。

彼女の聲音を聞くと、ネフリュードフは何か罪を犯さうとする時のやうに、そつと、呼吸を潛めて、後から這入つて行つた。

彼女は枕に覆ひをかけてゐるところだつた。きれいな覆ひに兩手を通してその角を持つたま、彼を振り返つて微笑した。しかし、それは以前のやうな、うれしさうな微笑ではなく、怯えた、悲しさうな微笑で、「あなたのなすつたことは悪いことです。」と語つてゐるやうに思はれた。彼はちよつと立

ちどまつた。まだ内心の争ひをつゞける力が残つてゐた。かすかではあるが、眞實の愛の聲が、彼女を、彼女の感情を、彼女の生活を語つてゐた。ところが、今一つの聲があつて、こんなことを囁きかけるのであつた。「氣をつけろ。お前の幸福を、お前の快樂を逃がしちやいけないよ。」

第二の聲が完全に勝利を占めて、彼は、つかくと進み寄つた。恐しい、狂ふばかりの慾情に彼は捕へられてしまつた。

片腕で彼女を抱きかゝへて寢臺の上に坐らせながら、彼も竝んで腰をかけた。心の中では、もつとしなければならぬことがあると考へてゐた。

「ネフリユードフ様、どうぞ後生ですからお放し下さい。」カチュウシヤは訴へるやうに言つた。「マトリヨーナが参ります。」

彼女は身を振りきつた。戸口には、たしかに誰かの聲音がした。

「ぢや今夜行くよ。お前一人だらう？」彼は小聲になつて言つた。

「何をおつしやるんです？ いゝえ、いけません。」と彼女は言つたが、それは唇で言つたに過ぎない。おどくした全身の容子は、まったく別のことを囁いてゐた。

やつて来たのは果してマトリヨーナであつた。彼女は片手に毛布を抱へてゐたが、咎めるやうにネフリユードフを噴めながら、カチュウシヤが悪い毛布を持つて来たといつて、がみく吐り出した。

ネフリユードフは黙つて部屋を出た。別にはづかしいとも思はなかつた。マトリヨーナは自分を咎

めるやうな顔をしたが、それは當然で、たしかに自分の行ひはよくなかつたと思つた、しかし今は、カチュウシヤに對する以前の眞實な戀愛感情は全然影を潜めて、淺ましい情慾のみが彼を支配してゐる。而も、その情慾を満たすにはどうすればいい、か、彼にはわかつてゐる。だから、その實行の機會をとらへることばかりを、しきりに考へた。

日が暮れてから、彼は氣のふれた人のやうに、叔母たちのところへ行つたり自分の部屋に歸つたり女關に出て見たり、たゞうろくして、彼女と二人きりになる方法を考へてばかりゐた。しかし、彼女の方で會はないやうにしてゐたし、マトリヨーナも監視の眼を光らしてゐるので、なか／＼い、機會は見つからなかつた。

一七

宵も過ぎ夜になつて、醫者は寢室に行き、叔母たちも部屋に引きとつてしまつた。マトリヨーナは叔母のところにあるので、今、女中部屋にはカチュウシヤだけしかゐないことがわかつてゐた。彼はまた女關に出て見た。外は眞暗で、空氣が濕つぽく生暖かつた。名残りの雪を溶かし、またその溶けるために新しく生じる白い春の霧が、あたりに立ちこめてゐる。百歩ばかり先にある丘の下の河からは時々へんな音が聞えて来たが、それは氷の割れるひびきであつた。

ネフリユードフは、女關の階段を下りて、凍つた雪を踏みながら、女中部屋の窓際に忍んで行

つた。心臓の鼓動がはげしくなつて、自分の耳にも聞えるくらゐだつた。呼吸が苦しくなつたかと思ふと深い吐息になつたりした。部屋には、一つ小さなランプがともつてゐる。見ると、カチュウシヤがひとり机に向つて、何か考へながら、眼の前をぢつと見つめてゐた。ネフリユードフは長い間、身動きもしないで、他人に見られてゐることを知らない彼女が何をこれからするだらうと思つて眺めてゐた。二分間ばかり彼女はぢつとしてゐたが、やがて眼を上げて微笑したかと思ふと、自分自身を吐るやうに首を振つた。そして、居すまひを直し、急に両腕を机の上に置いて、またぢつと前方を見つめ出した。ネフリユードフは立つたまゝ、彼女を眺めながら、聞くともしなして、自分の心臓の鼓動と、白い靄につゝまれた遠くの河から聞えて来る氷の割れるひびきに耳を澄ましてゐた。

彼はやはり立つたまゝ、カチュウシヤの惱ましさを顔に眺めてゐた。彼女がこゝろの中で苦悶してゐるらしいのを見ると、たまらなく可哀さうになつたが、不思議なことに、可哀さうだと思へば餘計に慾望が募つて来るのであつた。彼はまつたく慾望のとりこになつてしまつた。

彼は窓をたゞいた。彼女は電氣にでも打たれたやうにぎくりとした。全身をぶる／＼顫はし、顔一杯に恐怖の色を浮べた。そして急に飛び上つて、その窓に近づき、顔を硝子に押しつけた。眼の上に両手をかざして彼にちがひないことを確かめてからも、その恐怖の色は去らなかつた。彼女の表情はいつもとちがつて非常に沈痛だつた。ネフリユードフが微笑するのを見ると、自分でも微笑を返したがそれは、ほんのお座なりのもので、こゝろの中には、微笑どころか、恐怖ばかりが一杯であつた。

彼は、庭に出て来るやうにと手招きしたが、女は首を振つて動かうともしなかつた。彼が窓硝子に顔を寄せて聲をかけようとするのとたんに、彼女は扉のはうを振り返つた。誰か、彼女を呼んだらしかつた。

ネフリユードフは窓から離れた。靄が深く立ちこめてゐるので、五歩も離れると、もう窓が見えないくらゐであつた。たゞランプの灯だけが赤く光つて、ぼんやりと黒い塊のやうなものがそのまはりにはひろがつて見えてゐた。河の方からは相變らずみし／＼、きり／＼と氷の裂ける音がつゞいてゐた。どこか、あまり遠くないところで、鶏が一羽鳴くと、それに合して、また近くの鶏が鳴いた。つゞいて方々から鳴聲が聞えて來た。

ネフリユードフは裏の方を行つたり來たりしてゐるうちに、二回はかり足を水たまりの中へ這らした。それからまた窓際へ忍び寄つた。やはりランプがともつて、彼女が思案にあまつたらしく、しよんぼりと机に凭れてゐた。窓際に近寄ると同時に彼女は眼をあげてこちらを見た。彼はノックした。女はよくも見ないで、直ぐに立ち上つて部屋を駆出した。出口の扉が開いてまた閉まる音が聞えた。横手の門のところを女を待ち受けて、物をも言はず抱きかゝへた。彼女も男に寄り添つて、顔を上げて接吻を唇に受けた。二人は門の隅の、土の乾いたところに立つてゐたが、ネフリユードフは、いらだたしい、満たされぬ慾望に身を焼かれるやうな思ひがした。と、再び扉が開いてマトリヨーナの不機嫌な甲高い聲が聞えた。

「カチユウシャ！」

彼女は男の腕をのがれて女中部屋に歸つて行つた。かちやりと鍵をかける音がしたきりで、後はしんと静まりかへつた。赤い灯も消えて、白い霧と川の音とだけになつてしまつた。

ネフリユードフは窓に顔を寄せて見たが、誰の姿も見えなかつた。ノックしても答へはなかつた。仕方なく玄關から這入つて、自分の寢室に歸つたが、どうしても眠れなかつた。

彼ははだしのまゝ、廊下傳ひに彼女の部屋の戸口に行つた。隣りのマトリヨーナの部屋からは静かな軒が聞えたので、彼は思ひきつて忍びこまうとしたが、その瞬間、マトリヨーナは咳をはじめ、寢臺をきしく鳴らして寢返りをうつた。ぎくりとして、五分間はかり立ちすくんであるうちに、また、あたりがしいんとして、軒が聞え出した。そつと、音のしないやうに、一足々々床板を踏みしめて、カチユウシャの部屋に、びつたりと身を寄せた。あたりには何の物音もしない。彼女はたしかに起きてゐるらしく、呼吸が聞えなかつた。

「カチユウシャ！」

低い聲で呼ぶと、彼女は直ぐに立ち上つて来て、お歸り下さいと怒つたやうな口ぶりで言ひ出した。

「どういふおつもりなんです？ 何をなさるんです？ 叔母さんたちに聞えますよ。」

かうは言つたが、彼女の全身は、「私はすつかりあなたのものですわ。」と囁いてゐた。ネフリユードフには、それだけのことがわかつた。

「開けておくれ。ちよつとでいゝから入れておくれ。お願いだよ。」

彼女は答へなかつた。やがて、かちやりと鍵が鳴つた。彼は這入つて、肌衣一枚になつてゐる女のあらはな腕をつかんで抱き上げるなり、そのまゝ、連れ出した。

「あれ、どうなさいますの？」

彼女は小聲でかう言つたが、彼は耳をかさず、いきなり自分の部屋へ抱きこんだ。

「あれ、いけませんわ。いけませんわ。放して下さい！」

言ひながら女は男に寄り添つた。

.....

女が、彼の言ふことには、一言も答へずに、慄へながら歸つてから、彼はまた玄關に出て行つた。そして、この出来ごとの意味を、はつきり考へようとして暫くそこに突つ立つてゐた。

外は次第に明るくなつた。下の河からは、氷のはじける音がますます強くなつて、さらさらと水の流れるひびきまでが今は聞えて來た。空の霧は沈みかけて、その上から下弦の月が、ぼんやりと、黒い不氣味な何かを照らしてゐた。

「これは一體どうしたことだ。おれには大きな幸福が來たのか、それとも大きな不幸が來たのか。」

彼はこゝろに反問した。

「誰にもこんなことはあるんだ。——誰でもすることなんだ。」

彼はひとり言をいって寢床に這入り眠つてしまった。

一八

あくる日、陽氣で派手なシェンボークといふ、ネフリユードフの同僚が訪ねて来た。そして、上品な、愛嬌のある調子と、元氣と、鷹揚と、ネフリユードフに對する愛情とで、すっかり叔母たちの氣に入つてしまつた。

叔母たちは彼の鷹揚な點を賞めはしたが、それがあまり大袈裟なので少し眉をひそめてゐた。例へば彼は門口に來た盲目の乞食に一ルーブリづつやつたり、召使のチップに十五ルーブリづつやつたりした。ソフィヤの可愛がつてゐる犬が脚を怪我して血を出した時などには、直ぐに縁に縫ひとりしてある麻のハンカチ（一ダース十五ルーブリくらいはするとソフィヤは見た）を引き裂いて、繻帶を作つたりした。叔母たちは今までに、かうした質の男を見たことがなかつた。ところが、實は、二十萬といふ借金を背負ひながら、それを返さうとは思つてもゐないほどの彼だつたから、二十五ルーブリそこの金は何でもないのであつた。

シェンボークは一日あたきりで、その晩、ネフリユードフと一緒に出發した。入隊しなければならぬ期日がぎり／＼に迫つてゐたからだつた。

前夜の記憶がまざ／＼と残つてゐるこの叔母の家での最後の一日になつて、ネフリユードフの心内

には二つの感情が渦をまいてゐた。一つは燃えるやうな烈しい肉感の思ひ出に、目的を達したといふ或満足の交り合つたもの、今一つは、非常に悪いことをした、これは彼女のためでなく自分のために改めなければならぬといふ意識であつた。

今のネフリユードフには自分自身以外のことは何も考へられなかつた。自分のしたことが、明るみに曝されたら、世間から非難されはしないかといふことのみを考へて、カチュウシャが今どうしてゐるか、今後どうなるかに就いては少しも思ひ及ばなかつた。

シェンボークが彼女との關係に氣づいてゐることがわかつたが、それは、かへつて彼の自惚れをそり立てた。

「なるほど、君が一週間近くも逗留する氣になつたのがよくわかるよ。」と、シェンボークは、カチュウシャを見た時に言つた。「僕だつてさうだよ、同じ事をするにきまつてゐる。まつたく美人だよ。」

ネフリユードフは、またかうも考へた。彼女との戀を、こゝろゆくまで味ははないで立ち去るのは残念ではあるが、どちらにしても長い關係を續けられないものならば、今きつぱりと別れる方が得策である。そこで、彼は女にいくらか金をやらうと思つた。たゞし、それは彼女のためにするのではなく、たゞさうするのが當然のことであり、また、女を利用した以上、その報酬をしないのは體面にかはることだと考へただけのことであつた。

それで彼は、雙方の身分にふさはしいと思ふだけの額を與へた。それは出發の日の午後だつたが、

彼は横手の門のところまで女を待つてゐた。女は彼を見ると、眞赤になつて、女中部屋の扉の開いてゐるのを眼で知らせながら通り過ぎようとした。彼は呼び止めた。

「さやうならを言ひに来たんだよ。さ、これを……」

彼は百ルーブリ紙幣一枚を入れた封筒を、くちやく／＼にして言つた。女はその意味がわかつたので首を振つて彼の手を押しつけた。

「取つておくれよ、どうか。」

女のエプロンのポケットに封筒を押しこんでから彼は部屋に駆け歸つた。そして、氣持ちでも悪くなつたやうに、眉に皺を寄せて深い溜息をついた。

長い間、彼は悩ましさに、あちこち歩きまはつてゐた。最後の光景を思ひ出しては聲を出して唸つたりした。

「だつて他にやりかたがなかつたぢやないか。誰でもすることぢやないか。シエンボークと女教師とだつてさうだし、グリーンシャ叔父さんだつてさうだつた。親父だつて、田舎にゐた頃、百姓女と出来てしまつて、今も生きてゐるあのミーテンカといふ私生子を生ましたので。みんながみんな同じことをするのなら……さうだ、自分もやつぱりするより他仕方がないのだ。」

かう思つて安心しようとしたが、思ひ出すと良心の苛責に堪へられなかつた。彼も心の底では、自分が淺ましい殘酷な卑怯なことをしたことを知つてゐた。自分の行ひをかへり

見ると、他人の缺點を指摘することが出来ないばかりか、以前のやうに、自分を優れた立派な高尚な人物だと考へることも出来なかつた。しかし、人生を大膽に、そして愉快に暮して行くためには、どうしても以前のやうな人間だと考へなければならぬ。そこで問題を解決するには、たゞ一つの方法しかない。——つまり、一件を考へないことである。

彼はその方法を實行して成功した。それからの彼の生活、——新しい環境と新しい友だちと戦争とが、一切を忘れることの手助けをしてくれた。そして、日がたつにつれて、ますます考へなくなり、遂には、まったく忘れ果て、しまつた。

たゞ一度、戦争がすんでから、彼はカチュウシヤに會ふつもりで叔母の家を訪ねたことがある。その時、彼女が彼の出發後間もなく暇を取つたことや、どこかでお産をしたことや、それからまつたく墮落してしまつたことなどを聞いて、胸の疼くのを感した。お産の月から考へて見ると、その子は彼の子のやうにも思はれ、またさうでないやうにも思はれた。叔母たちは彼女をさん／＼にけなした末、それもみんな、あの母親の淫蕩性を受けついたのでと言つた。その意見は何だか自分を辯護してくれてゐるやうで彼にはうれしかつた。はじめのうち、彼は女と子供とを探さうとしたが、女のことを考へると、心中ひどく恥づかしくもあり苦しくもあつたので、必要なだけの努力をしなかつた。さうして再び自分の罪を忘れ、一切を考へなくなつてしまつた。

ところが、今度の不思議な事件は、過去のすべてを思ひ出させて、この十年間さうした罪を抱きな

がら平氣で暮すことの出來た自分の冷酷さ、卑劣さを承認するやうに要求した。しかし、彼はまだ承認しなかつた。現在恐れてゐるのはたゞ一切のことが暴露しないやうに、そして、彼女や辯護士がすべてを陳述して自分の恥を公衆の前に曝すやうなことをしないやうに、といふことだけであつた。

一九

ネフリュードフは、そんな氣持ちで法廷を出ると陪審院室に這入つた。そして窓際に腰を下して、あたりの話を聞きながら煙草ばかり吹かしてゐた。

例の陽氣な商人は、スメリコフのやつた時間つぶしの方法に大いに共鳴したらしかつた。

「奴さん、さかんにやつたんですね。まったくシベリヤ式ですよ、やり方を心得てゐます。女もあれくらゐなら、私だつて參りますよ。」

ネフリュードフは、何を聞かされても、ごく簡単な返事をするだけで、そつと觸らずに置いてもらひたいとばかり考へてゐた。

例の變な歩きかたをする廷吏が陪審員たちを呼びに來た時、ネフリュードフは、自分が裁判しに行くのでなく、裁判されに行くのだといふやうな恐怖を感じた。心の底では、自分ももう人と顔を合はせるのも恥ぢなければならぬ悪漢であると感じてゐたが、習慣になつてゐるお蔭で、いつもの通り落ちつき拂つた容子をして高座の席に就いた。そして、足を組み、鼻眼鏡をいぢくりはじめた。

一日連れ出されてゐた被告たちもまた法廷に這入つて來た。數人の新しい證人が出頭してゐたが、その中の、柵の前の席に掛けてゐるでぶくした女を、マースロワは一心に見つめてゐた。女は絹と天鵝絨づくめの非常に派手な服を着て、大きなリボンのついた高い帽子をかぶり、肘まであらはした腕に小さな可愛い手提げをかけてゐた。これは、後からわかつたが、マースロワの抱へられてゐた妓樓の女將キタエワであつた。

彼女はこの事件に就いて知つてゐることを逐一述べて見よと言はれて、につこり氣どつた笑ひ方をして、一句ごとに自分で頷きながら、くはしい陳述をはじめた。

事件は、彼女が、かねて顔馴染の旅館の下男シモン・カルティンキンから金持のシベリヤ商人に向く女の世話を頼まれてマースロワを見立て、やつたことから始まつた。かなり時間がたつてから、マースロワは商人と一緒に歸つて來た。その時、商人はもう大分いゝ機嫌になつてゐたらしいが、それからまた飲みつけて、女たちに御馳走したりなどした。ところが金が足りなくなつたので、氣に入りのマースロワを旅館の自分の部屋へ使ひにやつたのである。(そのところを述べながら女將は被告席のマースロワの方を見た。)

マースロワは微笑したやうだつた。それが、ネフリュードフには何だか氣持ちよくなかつた。はつきり言へない厭な惱ましい感じがした。

「ところでマースロワに對するあなたの意見はどうですか。」マースロワの辯護をすることになつてゐ

る判事補が、はづかしさうにおどくして訊いた。

「それやい、女ですわ。學問があつて、器量がよくつて、それにいゝ家に育つたのでフランス語も讀めますしね。時々飲み過ぎることはあつても前後を忘れたことはありません。まったくいゝ女でございますよ。」と、キタエワは言つた。

カチユウシヤは女將の方を見て、つぎに不意に、陪審院席のネフリユードフを、その一方が斜視の眼で、ぢつと見据ゑた。と、顔が眞面目に、といふよりも峻しくなつた。彼は、はつとしたが、でも、そのつやくくした白い女の眼から視線をそらすことが出来なかつた。

彼はあの恐しい一夜のことを思ひ出した。——あの霧、下の河から聞えて来るあの氷の割れる音、明方近く昇つて来た下弦の月、などのことを、つきく思ひ出した。今、彼を見つめてある女の眼が、あの時の月に照らされた、黒い、不気味な何物かを思はしたのであつた。

「自分がわかつたな。」と彼は思つて、打ちのめされたやうに身をすくめた。しかし、わかつたのではない、彼女は靜かに溜息をついて、また裁判長の方に眼を注いだ。ネフリユードフも溜息をして、「ああもつと早く進行してくれたら。」と思つた。

彼は獵に出かけて怪我をした鳥を絞め殺す時の、たまらない厭な、不憫な、惱ましさと同じものを今感じた。怪我をした鳥が袋の中に入れて苦しみがいてある。厭でもあるし可哀さうでもあるが、人はそれを早く殺して忘れてしまひたいのである。

證人の陳述を聞きながら、ネフリユードフは、そんな風な複雑な氣持を味はつてゐた。

110

彼はかう思つてゐるのに審理は非常に手間どつた。證人の訊問、鑑定人の訊問、副検事や辯護士の無用な質問など、いろくあつて後、裁判長は陪審員たちに證據物件を檢分して欲しいと言つた。ダイヤモンド入りの大形の指輪と、毒藥を分析した試験管とであつたが、どちらにも封印がしてあつた。

陪審員たちがその品々を檢分しようとした時に、例の副検事はまた起立して、檢分の前に、醫師の檢屍報告を讀み上げられたと言ひ出した。裁判長は女に會ひに行きたいので、出来るだけ早く仕事を片づけたいと思つてゐたところだつたし、そんな書類を朗讀したところで退屈するのと食事の時間が遅れる以外には何の効果もないことをよく知つてゐた。同時に、副検事がそんな要求をするのも、その要求權を持つてゐることを知つてゐるといふだけの理由に過ぎないのがよくわかつてゐた。しかし許さぬといふわけにも行かないので、承認するより他なかつた。

書記が朗讀をはじめた。外部の檢屍によつて、つぎの諸點が判明した。

- 一、スメリコフの身長は六フット五インチあつたこと。
- 二、推定年齢は四十歳であること。
- 三、全身が腫れ上つてゐたこと。

- 四、皮膚は緑色があり、數ヶ所に黒い斑點を生じてゐたこと。
 - 五、種々の大きさの水腫があり、ところ／＼皮膚が裂けてぶらさがつてゐたこと。
 - 六、毛髪は黒亞麻色で濃密であるが、觸れると直ぐに抜けたこと。
 - 七、兩眼ともに眼窩から飛び出し角膜が朦朧となつてゐたこと。
 - 八、鼻、耳、口から泡立つた粘液が流れてゐたこと。口を半ば開いてゐたこと。
 - 九、顔と胸とが腫れ上つてゐたため、頸は殆んどなくなつてゐたこと。
- その他種々、全部で二十七項目あつた。

ネフリユードフの厭な氣持ちは、この検屍報告を聞きながら一層募つた。カチュウシヤの生活も、死骸の鼻から流れた粘膜も、眼窩から飛び出した眼玉も、彼がカチュウシヤに對してとつた態度も、すべてが同じ種類のものであるやうな氣がした。而も自分がその中にまきこまれてゐるのを感じた。書記はつきに内部検診の報告を読み出したが、皆いかにも退屈さうな顔をして聞いてゐた。これは全部で十六項目あつた。

最後の検案書によると、胃中の變化と、腸及び腎臓内の局部的變化とは、スメリコフの死が酒と共に胃中に這入つた毒物に原因してゐることを確實に證據立てるものである。毒物の何であるかは判明しないが、胃中に多量の酒があつた事實から、その毒物が酒と共に這入つたと推定すべきである。「なかく／＼飲み手だつたんだな。」と、今までこくり／＼やつてゐた例の商人が眼を覺まして呟いた。

この報告の朗讀には、たつぶり一時間かゝつたが、それでも副検事は満足しないで、今度は内臟解剖の報告を願ひたいと言ひ出した。胃カタルに罹つてゐる判事はすつかり疲れを覺えて、裁判長を振り向いて言つた。

「こんなものを讀んで何になるんでせう。手間がとれるばかりぢやないか。」
 金縁眼鏡の判事の方は、暗い顔をして、何も言はず、どうせ自分の妻からも、人生からも楽しいこととは期待されないのだと考へてゐた。

この報告の朗讀がはじまつた時、裁判長は同僚に何か耳うちをし、その同意を得て急に中止を命じてしまつた。

「法廷はこの報告書の朗讀を無用と認める。」

副検事は、ぶり／＼して何か書きつけはじめた。

「陪審員の方々に證據物件の檢分を願ひます。」裁判長は言つた。

一同はテーブルに寄つて、指輪や試験管などを見た。商人は指輪をわざ／＼はめて見て、「や、こいつはでかい。胡瓜みたいな指だ。」と言つた。

一一一

證據物件の檢分がすむと、裁判長はこれで審理の終つたことを宣し、直ぐに副検事の論告に移つ

た。副検事も人間であるから、煙草も吸ひたい、食事もしたいだらう、だから、他人の氣持ちも少しは察してくれるだらうと裁判長は思った。ところが、副検事は我をも人をも決して容赦しなかつた。この男は生來鈍感だつたが、不幸にも中學卒業の時に金メダルを貰つたり、大學で羅馬法の研究中、土地使用權に關する論文を書いて褒美を貰つたりしたので、非常な自信家になつてしまつた。そしてますます鈍感になつた。

「陪審員諸君、今諸君の前に提出された事件は、本職に言はしめれば、非常に特色ある犯罪、世紀末的犯罪であります。言は、現代社會の各分子が今日陥りつつある悲惨なる現象の特徴を帯びたもので、それがたまく、この事件の光りに照らし出されたのであります。」

彼は滔々と淀みなく論じようと努めながら一時間十五分に亘る長廣舌をふるつた。彼の斷定するところによれば、商人スメリコフは眞に頑健なロシア人の代表的人物で、その大まかな他人を信じ易い性質のために、墮落し果てた連中の手にあやつられて、遂に死を招いたのである。

それから、シモン・カルティンキンは農奴制の遺産であり、愚鈍であり、無智であり、無主義、無宗教の人間、エウフィミヤ・ポーチコフは、その情婦で、遺傳の犠牲的人物である。彼女の中には、悪化した人間のすべての特徴が認められる。そして、主犯者たるマースロワは最も下等な、墮落者中の墮落者である。

「この女は、」と、副検事はマースロワを見つめながら、「この法廷に於いてその抱主たる女將が陳述

した通り、教育もあり、たゞに読み書きが出来ればかりでなく、フランス語をも知つてゐる。しかし、孤兒であるから、多くの孤兒がさうであるやうに、或ひは生れながらにして犯罪性の萌芽を持つてゐたのかも知れないのであります。明るい貴族階級の家に養育せられたのだから、正直に働きさへすれば安樂に暮して行ける身分である。しかるに、この女は恩人を見棄て、情慾の奴隸となり、それを満足させるために妓樓に身を沈めるに至つたのであります。妓樓では他の明輩の到底及ばない不思議な魅力を持つてゐた。だから、お目出度い金持の客を籠絡し、その信用を利用して、最初は金を盗まうとしたが、後には遂に殘忍な殺人を犯すに至つたのであります。」

裁判長はうすら笑ひを浮べて聞いてゐたが、同僚にこそく囁いた。——「仰山なしやべり方をするぢやないか。」

「圖々しい奴だよ。」と同僚も調子を合した。

副検事は更に續けて、「陪審員諸君、これ等被告の運命は諸君の掌中に握られてをります。のみならず、諸君の裁決は社會に影響を及ぼすものでありますから、社會の運命も或程度までは諸君の掌中に握られてをります。故に、諸君はこの犯罪の意義を充分に會得されて、マースロワの如き一個の病理學的存在が社會をいかに毒するかを御考慮あらんことを希望いたします。」

彼の論告は大體、つぎのやうな意味のものであつた。即ち、マースロワは商人の信用を得たのに乗じ、彼に催眠藥を飲ました後、金員を奪ふ目的で旅館にやつて來たが、生憎カルティンキンとポーチ

コフとに現場を発見されたので、止むを得ず三人で金を分配することにした。そして犯跡をくらすためにマースロワが商人を旅館に同道して毒殺してしまつたのである。

この副権事の論告が終ると、カルテインキン、ポーチコフ及び二人の辯護士が立ち上つた。燕尾服姿の中年の男である。彼は三百ルーブリの約束で依頼されたものだから、二人に有利な辯論をふるつて、マースロワ一人に罪の全部を背負はせてしまつた。彼は、金を靴から取出す時カルテインキンとポーチコフとが立會つたといふマースロワの陳述を否認して、毒殺の嫌疑あるもの、陳述は信じるこゝとが出来ないと言つた。また、二千五百ルーブリの金は、正直で勤勉な二人が一日に三ルーブリ乃至五ルーブリの客からの心付けを溜めたもので、容易に首肯し得る性質のものであると述べた。商人の金はマースロワ一人が盗んで誰かに渡してしまつたか、或ひは、彼女が正氣を失つてゐて無くしてしまつたかである。毒殺は言ふまでもなく彼女一人の仕事である。

彼は、陪審員たちに、カルテインキンとポーチコフとが金を盗まないことを承認して貰ひたい、もし、それが出来なければ、せめて、毒殺には全然無關係であることだけを承認して貰ひたいと主張した。

つぎに起立したのはマースロワの辯護士であつた。おどくした生ぬるい調子の辯論で、マースロワが窃盗に加はつたといふことを全然否定さへもしなかつた。そして、散薬を飲ましたのは、たゞ男を早く眠らしたいばかりで、毒殺の意志は少しもなかつたといふ點ばかりをしきりに述べ立てた。

それが終ると、被告自身の辯明が許されることになつた。すると、ポーチコフは相變らず自分は何も知らない、何もしない、一切はマースロワの罪であると言ひ張つた。カルテインキンも知らぬ存ぜぬの一點張りであつた。マースロワだけは何も言はなかつた。辯明することはないかと裁判長に促されて、彼女はそつと眼をあげたが、直ぐに追ひつめられた野獸のやうに、法廷中をぐるりと見まはしてから、うなだれて、聲高く啜り泣きはじめた。

ネフリエードフはそれを見て思はず變な溜息を洩らした。どうかなすつたんですかと陽氣な商人に訊かれたほどだつた。しかし、彼はまだ、おのれの良心がどんなに惱んでゐるかには気がつかなかつた。眼に一杯たまつて来る涙を、たゞ神経衰弱のせみだらうとだけ思つた。で、涙をかくすために鼻眼鏡をかけ、ハンカチを出して涙をかんだ。

昔自分のやつたことが今この法廷の明るみへ持ち出されたらどんなに恥曝しだらうと思ふ恐怖心があるために、折角目ざめかけた良心のひそやかな囁きも消えてしまつた。裁判のあまり進行してゐない今では、この恐怖心が他の何よりも強かつた。

二二二

被告たちの辯明が終つてから、陪審員の審理に移す諮問事項の形式が定められ、裁判長がその要點を説明した。

彼はなるべく早く済ましてしまひたかつた。それに、女教師が待つてゐることもわかつてゐたのだが、一旦しやべり出したが最後、停止するところを知らなかつた。そこで、陪審員たちに向つて、被告を有罪と思つたら有罪と認定し、無罪と思つたら無罪と認定し、或點は有罪、或點は無罪だと思へば、その通り一方に於いて有罪、他方に於いて無罪だと認定する権利があるといふことを、詳細を極めて説明するのであつた。

それから「事件の真相はつぎの通りである。」と、既に辯護士や副權事や證人たちによつて幾回か陳述せられたことを、そのまゝ繰返した。

裁判長が辯じ出してから、マースロワは、一言も聞き洩らすまいとしてゐるらしく、いつまでも彼を見つめてゐた。だから、ネフリュードフは彼女の視線と合ふ心配がないので、その間中、女を見てゐた。幾年も會はないであつて、久しぶりに顔を見ると、最初は別れてゐた間に變化した特徴が著しく目につくものであるが、その變化は次第に消えて、昔の姿がよみがへつて来る。そしてわれくの心の眼の前には、その人特有の精神的個性の主な表情だけが浮び上つて来るものである。

さうだ、獄衣を着てゐても、身體が大きくなり胸が張り下ぶくれの顔になつてゐても、額のあたりに小皺が寄つてゐても、眼が腫れてゐても、——いくらそんな變化があつても、これはやはり、あの復活祭の夜に、喜びに満ちた恍惚とした眼差しで、戀する男を、無邪氣にちつと見上げたカチュウシヤそのものに違ひなかつた。

「何といふ偶然だらう、十年の間、彼女に會はなかつたのに、たま／＼自分が陪審員として出頭した今日、この事件にぶつかつて被告席にある彼女を見ようとは！一體この始末はどうなるのだらうか。あゝ、早く片づいてくれたら！」

しかし、この時はまだ、内心に萌した悔悟の念に従ふ氣にはならなかつた。彼はたゞ、これは單なる偶然の出來事で、時さへたてば、自分の生活には何等の影響を及ぼさないので過ぎてしまふものだと強ひて考へた。主人が小犬の首筋をつかんで、その鼻を何か粗相したところへ擦りつけようとするが、小犬の方では悲しさに鳴いて、自分のしでかした粗相の結果から出来るだけ遠ざからうとして後退りする。ところが主人はなかく手を弛めない。ネフリュードフは、その場合の小犬の狀態が丁度今の自分であることを感じた。

彼も自分のしたことゝの悪いのを知り、「主人」の強い手をも感じてゐたのであるが、その行ひの意義がよくわからず、且つ「主人」の手を認めてゐなかつた。眼前にあるものは、自分の行ひの結果であるとは信じたくなかつたが、容赦しない「主人」の手は、しつかりと首筋をつかんでゐて放さうとしないので、彼はどうしても遁れられないといふ豫感がした。けれども彼は勇氣を出して、足を組み合し鼻眼鏡をいじりながら、いつもの自信ある態度を崩さずに坐つてゐた。たゞし心の底では、あの夜の行ひばかりでなく、すべて自分のわがまゝな、だらしない怠け放題の生活の見苦しさ、卑しさを感じた。また、十年の久しい間、その罪をも、その後の生活をも、不思議に彼の眼から蔽ひかくし

てゐた恐しい幕が、こゝで漸く捲れ出して、その裏にあるものがちらちらと見えるやうになつたことを感じた。

二三

裁判長は説明を終ると、審問の項目書を取り上げて、それを受け取りに來た陪審員長に渡した。陪審員たちは退廷の出來るのを喜びながら會議室に這入つて行つた。

會議室では、前例によつて第一に巻煙草を出して吹かしはじめた。法廷にゐる時の、どこか不自然な、わざとらしい感じは消えて、皆のびくとした氣持ちになつた。そこで、さつそく賑やかな話が始まつた。

「あの女の罪ぢやありませんな。まき添へを食つたんですね。」と、まづ商人が同情して言つた。「酌量してやる必要がありますよ。」

「いや、それが考へものです。われ々は私情にとらはれてはなりませんぞ。」と陪審員長が口を入れた。

「裁判長の説明はなか／＼よかつたぢやありませんか。」大佐が言つた。

「よかつた？ 私ほ少しで寝こんでしまふところでしたよ。」

「もしマースロワといふ女が共犯でないとすると、旅館の雇人たちはどうして金のことを知つたでせ

う。知る筈がないぢやありませんか。」と、ユダヤ系の店員が言つた。

「なるほど、ではマースロワが盗つたといふ御意見ですな。」

「私にはそれは信じられない。」商人が大きな聲で言つた。「みんな、あの赤眼の婆のやつたことですよ。」

「でも、婆さんは部屋へ這入らなかつたと言つてるぢやありませんか。」

「おや、あの婆の言ふことを眞に受けてゐなさんですか。」

「私は信じませんよ。」

「信じようが信じまいが、それで問題がきまるんぢやありませんか。」

「あの女は何しろ鍵を持つてゐましたからね。」

「持つてゐたのがどうしたといふんです？」

とまた商人がやつきになつて言ひ返した。

「では指輪は？」

「女がちゃんと陳述してゐるぢやありませんか。何しろ男といふのがしつこい奴で、おまけに酒の勢ひで殴つたんですからな、女が可哀さうになつたのも無理はありませんよ。よし／＼これをやらうツてことになつたのです。」

「要するに問題は、あの女が發意してこの事件を起したか、それとも旅館の雇人たちか、その一點に

あるのです。」

「雇人だけでは出来ない仕事ですよ。鍵を持つてるのはあの女ですもの。」

こんな風な話が、かなり長くつづいた。末に、陪審員長は「失禮ですが、皆さん、テーブルに着いて討議することにしたませう。さ、どうぞ。」と言つて、まづ席に就いた。

ユダヤ系の店員は主犯はマースロワだと信じてゐるらしく、曾て友人が或遊園地で、かうした女に時計を盗まれたといふ話をはじめた。

「皆さん、この諮問事項について御討議を願ひます。」陪審員長がテーブルの上をとんと突いたので、やつと皆が黙つた。

諮問事項といふのは以下のやうなものである。

一、シモン・カルティンキン(三十三歳)が、千八百八十七年一月十七日、窃盗の目的をもつて他のものと共謀し、商人スメリコフに毒酒を與へて死に至らしめ、その所持金二千五百ルーブリとダイヤモンド入り指輪とを盗取したといふ犯罪を認めて有罪にするか否か？

二、エウフィミヤ・ポーチコフ(四十三歳)が、第一項に述べたと同じ罪を犯したと認めるか否か？

三、エカテリーナ・マースロワ(二十七歳)が、第一項に述べたと同じ罪を犯したと認めるか否か？

四、エウフィミヤ・ポーチコフは第一項に擧げたる犯罪に於いては無罪であるとするも、一月十七日、旅館「マウリタニヤ」に奉公中、旅客スメリコフ所有にかゝる鞆を開き、マースロワの持参した

る鍵を用ひて、二千五百ルーブリを盗取したる犯罪を認めるか否か？

そこで、員長はまづ第一を読み上げて問うた。

「皆さんの御意見はいかゞですか？」

これは容易に解決した。

何故かならば、全員が、カルティンキンの毒殺にも窃盗にも關係ある事を認めたからである。たゞ一人だけ年寄りの職工組合長がこれに反対しただけである。

員長は、この老人がわからないのだと思つて、すべてカルティンキンの罪であるといふことの説服にかゝつた。しかし、職工組合長は、それはよくわかつてゐるが、酌量してやるのがいゝのだと答へた。

「われ々はお互ひに盗人ぢやありませんからな。」と言つて自説を曲げようとはしなかつた。

第二項、即ちポーチコフに關する諮問に就いては、いろんな議論が百出したが、辯護士が力説した事實の通り、毒殺共犯の證據不十分との理由で、「無罪」といふことに決定した。例の商人は、マースロワを無罪にしたいばかりに、ポーチコフが主犯であることを、しきりに主張して止まなかつた。多くの陪審員も同意見であつたが、員長は法の厳正といふことを説き、彼女を毒殺共犯者と認むべき何等の根據がないと宣した。議論の末に、この員長の説が勝ちを占めたのである。

同じくポーチコフに關する第四項は「有罪」と決定した。しかし職工組合長の主張によつて、寛大

な處置をとることゝなつた。

第三項、即ち、マースロワに關する項に就いては烈しい論争があつた。陪審員長は彼女が毒殺並に窃盜の共犯者であることを主張したけれども、例の商人は大いにこれに反對した。大佐や店員などが員長の意見に同意したし、他の連中が、どつちつかすの態度であつたため、次第に員長説が優勢になつて來た。といふのは、陪審員たちが全部疲れてしまつて、なるべく早く決定し、なるべく早く自由になるやうな意見に賛成するのがいゝと思つたからである。

この事件の顛末から見ても、昔のマースロワの性質から見ても、ネフリユードフは、彼女が毒殺にも窃盜にも關係のないことがよくわかつてゐた。他の陪審員たちも同じやうに認めてくれるだらうと思つてゐた。ところが、例の商人のすこぶる拙い辯護（それは彼自身も明らかに言つてゐる通り、マースロワの肉體讚美に立脚した辯護であつたが）と、陪審員長の反對説と、全員の倦怠のため、だん／＼マースロワが有罪になりさうな形勢になつて來たので、彼は、こゝで自分の意見を述べて見ようかと思つた。しかし、もしマースロワとの關係が暴露してはと思ふと恐ろしかった。とはいへ、このまゝで事件を見過すことも出來ないので、赤くなつたり青くなつたりしながら、マースロワ無罪論をいよ／＼唱へようとする恰度その時、今まで黙つてゐたビョートル・ゲラシモウイチが、陪審員長の專横な態度に反感を持つて、ネフリユードフの言はうと思つてゐることを、そのまゝに言つてくれた。

「ちよつと待つて下さい。あなたの御意見では、マースロワが鍵を持つてゐた、だから金を盗んだといふことになりさうですが、そんな馬鹿なことはありません。マースロワの歸つた後で、旅館の雇人たちが合鍵で靴を開けることは雜作ないぢやありませんか。」

「ひやく／＼。」と商人がさつそく應じた。

「それにマースロワは金を盗むわけがないのです。あの場合、盗んだ金をどう始末していゝかわからないんですからね。」

「そこ／＼、私が言はうと思つてゐたところですよ。」とまた商人が口を入れた。

「恐らく、彼女がやつて來たので、雇人たちがそんな悪企みを考へたに違ひありません。そして、うまく機會をつかんで罪の一切をマースロワに負はしたのです。」

この意見には大多數のものが賛成したので、結局、彼女は所持金と金子の窃取には無關係であり、指輪はスメリコフから貰つたものであると承認された。

たゞし、毒殺したか否かの問題になると、商人の辯護によれば、何等毒殺する理由がなかつたのだから、當然彼女は無罪でなければならぬといふのであるが、陪審員長の方では、彼女自身が散薬を酒に入れて飲ましたと自白してゐる以上、決して無罪にすることは出來ないといふのであつた。

「でもそれは催眠藥だと思つて飲ましたんですよ。」と商人は言つた。

「催眠薬だつて生命を奪ふことはありますよ。」

とかく本題をはなれて枝葉に走りたがる大佐は、かう言つたのをきつかけにして、盛んに阿片の話を持ち出して、ながくとしやべりはじめた。

「もう五時近くなりましたよ。」と誰かが言つた。

「よろしい。では、マースロワは有罪と認めるが窃盗の意志もなく、また何一つ盗まなかつた、といふことにしてはいかゞでせうか。」

ガラシモウイチは自説が容れられたので、大喜びで賛成した。

「酌量してやる必要がありますよ。」

皆が同意した。たゞ一人、職工組合長だけは「無罪」を主張して止まなかつた。

「同じことですよ、窃盗の意志もなく、また窃盗もしなかつたとすれば、つまり、無罪です。——明

らかにさうぢやありませんか。」

「結構、酌量してやりませう。」と、商人はうれしさうであつた。

彼等は皆疲れきつてゐたし、それに論争のために頭が混乱してゐたので、誰も、「散薬を與へたのは事實であるが、殺害の意志なし」といふ項目を加へることに思ひ及ばなかつた。ネフリユードも興奮してゐたので、それに氣がつかなかつた。そして、答申書はそのまゝ、法廷に提出されることになつた。

ラベレー（十六世紀のフランスの諷刺作家）がこんな法律家のことを書いてゐる。その法律家といふのは、事件の審理をする時、あらゆる法文を引用し、意味もないラテン文の二十頁も読み盡してから、さて、訴訟者に向つて、散子をころがすやうにとすゝめた。そして、偶數が出たら原告の勝、奇數が出たら被告の勝だと言ひ渡したといふことである。

この場合はまさしくそれである。判決は必ずしも各員の意見が一致した結果ではない。まづ第一は裁判長が、かうした事件の時に常に注意する言葉、即ち「有罪ではあるが、殺人の意志はなかつた」と陪審員たちが答へなければならぬことを言ひ忘れたためである。第二は、大佐が、この問題とは全然關係のない阿片の話を持ち出して、ながくとしやべつて皆を退屈させてしまつたからである。第三は、ネフリユード自身、あまりに興奮してゐて、「殺人の意志なし」といふことが洩れてゐるのに氣付かず、たゞ單に、「意志なく」といふところだけを見て、これで無罪になるだらうと思つたからである。第四に、この諮問書と答申書とが陪審員長によつて読み上げられた時、マースロワの辯護に努めたガラシモウイチが、たまく法廷にゐなかつたからである。更に肝心なのは、陪審員たちが皆疲れてしまつて、もう直ぐにも自由になつてのんびりした氣持を味はひたい、そのためには早く片のつく判決に賛成してしまへと思つたからであつた。

陪審員長は、いかにももつたいぶつた容子で答申書を裁判長に渡した。裁判長はびつくりしたやうに両手をひろげて隣りの同僚に何か相談した。彼がびつくりしたのは無論、陪審員たちが「窃盗の意

「志なく」といふ但書をしながら、「殺人の意志なし」といふ第二の但書をしなかつた點である。だから、陪審員の決定によれば、マースロワは泥坊こそしなかつたが、何等の理由なしに人間を毒殺したことになるのであつた。

「何て馬鹿々々しい答申書を作つたらう。これではシベリヤ行きの徒刑になるぢやないか。實際は無罪なんだがね。」と、裁判長は左側の同僚に向つて小聲で言つた。

「無罪だつて？ 本當にさう思ひますか。」

「さうだ、明らかに無罪だよ。だから、これは第八百十七條を適用すべき場合だらうね。」（その八百十七條には、法廷が陪審員の決議を不當とみとめた時は、これを破棄することが出来る規定されてゐる。）

「君の御意見は？」 裁判長は、今一人の同僚に訊いたが、彼は直ぐには答へないで、心の中でいつもの占ひをやつて見た。自分の前にある書類の番號に或數字を加へて三で割つたが割りきれなかつた。割りきれたら賛成するつもりであつたのである。ところが氣が弱いので、割りきれなかつたのに、やはり賛成してしまつた。

「私もさうすべきものと思ひます。」

「では君は？」と、今度は眞面目くさつた同僚の方を振り向いた。

「私は不賛成です。見給へ、新聞は陪審員が犯人を無罪にするといつて非難してゐるぢやありませんか。われ／＼裁判官がそんなことをすれば何といつて非難するでせう。斷じて賛成出来ません。」

彼はきつぱり言つた。裁判長は時計を見た。

「可哀さうだが仕方がない。」と言ひながら彼は諮問事項とその答申書とを陪審員長に朗讀させた。

被告たちは答申書の意味がよくわからないので平氣で坐つてゐた。朗讀が終るのを待つて、裁判長は検事の求刑を促した。副検事はマースロワを有罪にすることが出来たといふ意外の成功を喜んで、これも要するに自分の雄辯の結果であると考へた。そこで起立して述べた。

「シモン・カルティンキンは第千四百五十二條並びに第千四百五十三條第四項により、エウフィミヤ・ポーチコフは第千六百五十九條により、エカテリーナ・マースロワは第千四百五十四條によつて、判決を下すべきものと思ひます。」

「では判決を議するため、しばらく休憩いたします。」と裁判長は起立して言つた。「仕事終つたといふ、ほつとした軽い氣持を覺えて、皆はあちこちと歩きまはつた。

「どうです、われ／＼は飛んだ恥曝しをしたもんぢやありませんか。」

ゲラシモウイチは、何か陪審員長の話を聞いてゐるネフリーウドフの傍に来てかう言つた。「あの女を懲役にやることにしてしまつたんですからね。」

「何ですつて？」

「だつてさうでせう、あの答申書には『有罪を認めるが殺意なし』といふ但書が抜けてゐますよ。今書記から聞いた話だけれど、副検事は十五年の徒刑にすると云つてゐるさうです。」

ゲラシモウイチは、金を盗まなかつた彼女に殺意のあつたはずがないといつて、さかんに論じ出した。

「でも、出廷前に私がああ答申書を読み上げた時には、誰からも異議が生まれませんでしたよ。」と、横にゐた陪審員長は辯解するやうに口を出した。

「僕はちよつと部屋を出てゐたんです。」と言つて、ゲラシモウイチはネフリユードフの方へ、「あなたはどうしてゐました？」と訊いた。

「気がつかなかつた。」

「え、気がつかなかつた？」

「でも、これは訂正することが出来ます。」

「いや、駄目です。濟んでしまひましたよ。」

ネフリユードフは被告たちを眺めた。運命のきまつた彼等三人は、憲兵に守られて、相變らずぢつと柵の中に坐つてゐた。マースロフは微笑を浮べてゐた。ネフリユードフは不吉な感じがして、胸がわくわくした。今までは、彼女が放免になつて、この町に居残ることになるだらうと思ひ、さうなつたら彼女に對してどういふ態度をとつたらよからうかと思案してゐた。ところが、シベリヤ送りとき

まつては、何も彼も縁がぶつたりと切れてしまふ。獲物袋の中の傷ついた鳥が動かなくなつてしまへば、その存在を彼は忘れてしまふであらう。

二四

ゲラシモウイチの豫想通りであつた。

裁判長は會議室から法廷に歸つて、つぎの意味の宣告を言ひ渡した。

「刑法第二十五條によりて、カルテインキン、マースロフ兩名の公民権並びに財産權を剝奪し、前者はシベリヤ徒刑八年、後者は同じく四年に處す。ポーチコフは刑法第四十九條によりて公私の特權を剝奪し禁錮三年に處す。」

カルテインキンは唇をびく／＼ふるはして聞いてゐた。ポーチコフはまつたく平氣であるらしかつた。ところが、マースロフだけは、眞赤になつて、「私は無罪です、無罪です！」と、急に、法廷中にひゞき渡るやうな聲を立てた。「それはあんまりです。私は何もいたしません。そんなこと、思つたこともございませぬ、考へたこともございませぬ。本當にさうなんです！」

彼女はベンチに崩れかゝつて、あたりかまはず、嘔り泣きはじめた。カルテインキンとポーチコフとが退廷しても、まだそのまゝ泣きつゞけてゐるので、遂には憲兵に袖を引かれて連れ出されることになつた。

「いや、これはうつちやつて置けない。」

ネフリユードフは呟いて、彼女の後を追つて廊下に急いだ。何故といふこともなく、も一度彼女の姿が見たかつた。混雑してゐる扉口を漸く通り抜け、廊下に出て、大急ぎで彼女を追ひ越してから立ちどまつた。マースロワはもう泣きやんでゐた。が、まだ時々啜り上げながら、顔をハンカチの端で拭き、彼の前を通り過ぎた。

ネフリユードフは裁判長に面會しようと思つて引き返した。

裁判長は白っぽい外套を着て、給仕の差出した銀の頭のついたステッキを取らうとしてゐるところであつた。

「只今判決になりました事件について少し申し上げたいことがございますが。」ネフリユードフは丁寧に言つた。「私は陪審員の一人です。」

「やあ、あなたはネフリユードフ公爵でしたね。以前お目にかゝつたことがありますよ。」

裁判長は握手しながら、はじめてネフリユードフと舞踏會で會つたときのことを思ひ出した。

「ところで、どんなお話でせうか。」

「あのマースロワといふ女に就いての答申書に間違ひがあるのです。毒殺の罪がないのに徒刑の判決を受けました。」ネフリユードフは暗い顔をして言つた。

「法廷はあなた方から渡された答申書にしたがつて判決を下したんですよ。」裁判長は出口の方へ歩

きながら言つた。「もつとも、あの答申は少し矛盾してゐるやうに思はれましたね。」

彼は、自分が陪審員たちに説明する時に、「有罪」といふ答申は、「殺意なし」といふ但書がなかつたならば、謀殺の意味になるといふことを注意しようと思ひながら、急いだためにそれをしなかつたことを思ひ出した。

「さうです。でも間違ひの訂正は出来ないものでせうか。」

「どんな場合でも上訴の理由はあります。辯護士に相談なすつたらいいでせう。」

裁判長は帽子を横冠りにして出口の方へ進んだ。仕方なく、ネフリユードフも外套を着て一緒に外へ出た。明るい日向を二人は並んで歩いた。

「まったく殺意なしといふ但書さへおつけになつたら、マースロワは放免になつてゐたのです。」

「それを落したのは手ぬかりでした。」と、ネフリユードフは言つた。

「肝心な點はそこですよ。」

裁判長は軽く笑つて時計を見た。女と約束した時間までに四十分くらゐしかなかつた。

「何でしたら辯護士に話してごらん下さい。上訴の理由を作らなきやなりません、それはわけなく出来ます。」

通りがりの辻馬車を呼びとめて裁判長は飛び乗つた。「ドウウオリヤンスカヤまで。三十コペイカそれ以上はやらないよ。」と馭者に言つた。

裁判長と話したり爽やかな外氣にふれたりしたので、いくらかネフリュードフはおちついて来た。さつきまでの氣持ちは朝からいろ／＼思ひがけないことにぶつかつたので、そのために誇張されてゐたのだと思つた。

「何といふ意外なめぐり合ひだらう。それにしても、彼女の運命を軽くするためには全力を盡してやらなければならぬ。而も出来るだけ早くだ。さうだ、今直ぐに！ これから裁判所へ行つて、ファナーリンか、ミキーンシに會つて來よう。」

彼は名高い辯護士を二人思ひ出した。そして裁判所に引返して階段を上つた。都合よく廊下でファナーリンに出會つたので、さつそく引きとめて、依頼したいことがあると言つた。

ファナーリンは知り合ひの間柄なので、喜んで何でもいたしませうといふことであつた。

「今ちよつと疲れてゐますが、あんまり手間のかゝらないお話なら承はつてもよろしうございませう。どうか、こちらへ。」

彼はネフリュードフを、判事の部屋らしい一室へ案内した。

「御用件は？」

「その前に、ちよつとお願ひして置きたいことがあります。といふのは、これを秘密にしていたゞきたい、つまり私がこの事件に關係してゐることを内密に願ひたいのです。」

「なるほど。かしこまりました。で……」

「實は今日、私たち陪審員は、誤つて罪のない女を徒刑に處してしまいました。それが氣にかゝつてならないのです。」

ネフリュードフは思はず顔を赧くして、どきまぎした。ファナーリンは、ちよつとその容子を見たが、直ぐ伏目になつて耳を傾けた。

「無罪のものに處刑したんですから、私は上訴したいと思ふのです。」

「元老院へとおつしやるんですね。」

「え、で、この事件をあなたにお引き受け願ひたいのですが。費用はいくらかゝつてもかまひません、私が全部支拂ひますから。」

「よろしい、お引き受けいたしませう。」辯護士はネフリュードフがかうしたことに無經驗なのを見て、軽く笑ひながら言つた。「一體どんな事件ですか。」

ネフリュードフは詳しく話した。

「よろしうございます。明日から調べにかゝりませう。明後日——いや木曜日の方がいゝでせう、晩の六時過ぎに私の宅まで御足勞下さいませんか。はつきりした御返事をいたしますから。ではこれで失禮いたします。少し調べものがたまつてゐますので。」

ネフリユードフは暇を告げてそこを出た。

マースロワのために何かしてやつたといふことが、一層彼をおちつかせた。彼はうらゝかな日の照つてゐる街を歩きながら、いゝ氣持になつて春の空気を胸一杯に吸ひこんだ。辻馬車がしつこく乗ることをすゝめたが、それを振りきつて、どこまでも歩いて行つた。カチユウシヤにまつはるゐるんな思ひ出が頭の中で渦をまきはじめた。彼は寂しくなつた。あらゆるものが暗く見えた。

「いけない。そんなことは後で考へればいゝのだ。今はこの重くるしい氣持ちからのがれなきやいけ
ない。」

彼はコルチャーギン家の晩餐會を思ひ出して時計を見た。まだそんなに遅くはない。そこで、鈴を鳴らして走つて來る鐵道馬車に、ひらりと飛び乗つた。

二六

「ようこそ、御前様。」

でつぶりした、コルチャーギン家の女關番が、音のしない扉を、すうと開きながら、愛想よくかう言つて彼を迎へた。

「皆さま、お待ちかねでございます。お食事中でございますが、お通し申すやう言ひつけられてをります。」

女關番は階段の端に行つてベルを押した。

「誰か知らない人はあませんか。」ネフリユードフは外套をぬきながら訊いた。

「いゝえ、御家族の他には、コロソフ様とミハイル・セルゲーエウイチ様だけでございます。」
燕尾服に白手袋の、美男の召使が、階段から下をのぞいてゐた。

「どうぞ、お上り下さいまし、御前様。」

ネフリユードフは、階段を上り、すばらしく立派な廣々とした舞踏室を通りぬけて食堂へ這入つた。テーブルをかこんで一家族が揃つてゐた。(自分の部屋から出たことのない侯爵夫人のソフィヤ・ワシリーエウナだけは別である。) 上座には、老コルチャーギン、その左側には醫者、右側には銀行の重役をしてゐるイワン・コロソフといふ客、左側の端には、令嬢ミッシイの妹の四つになる子と、その保姆のレーデル嬢、その向ひ側には、ミッシイの弟で、この家の一人息子たる中學六年生のペーチャ、その家庭教師の大學生、今年四十になる老嬢のカテリーナ・アレクセエウナ、ミッシイの従兄弟でミッシイと呼ばれてゐるミハイル・テレエウナなどの顔ぶれであつた。末席には、令嬢ミッシイ自身が座を占めてゐたが、その隣りは空けてあつた。

「おゝ、丁度いゝところだつた。さあ、お掛けなさい。まだお魚ですよ。」と、老コルチャーギンは、眼瞼のはつきりしない血走つた眼をあげ、念入りに魚を噛みしめながら、ネフリユードフに言つた。
ネフリユードフはコルチャーギンをよく知つてゐるばかりか、一緒に食事をしたことも度々ある

が、今日はどうしたものか、むしろ頬張つてゐるその緒ら顔や、ふとつた頸筋や、全體としての軍人らしい風采を見ると、非常に不快になつた。同時に、ネフリユードフは、この人が地方長官をしてゐた頃、何等の理由なしに、人民を笞刑にしたり絞刑にしたりしたといふ、その残忍性を思ひ出したのであつた。

ネフリユードフはミッシイの隣りの席へ案内せられた。

「いかゞでした。社會の根柢をくつがへすことに成功なさいましたか。」と、コロソフは、陪審制度を攻撃する或保守新聞の文句を引用してネフリユードフに皮肉を言つた。「罪あるものを放免し、罪なきものを處刑なすつたでせうね。」

禮儀を知らないと思はれたつていゝことにして、ネフリユードフは、コロソフの言葉には返事をしなかつた。そして、出されたばかりの温いスープを吸ひにかゝつた。

「この人には食べさせて置きませう。」と、につこりして、ミッシイは言つた。

コロソフは陪審制度反對論の内容を、滔々と述べ立てた。

「さぞお疲れで、お腹もおすきになつたでせうね。」ミッシイはネフリユードフに言つた。

「いや、そんなでもありません。あなたは？ 展覽會へはいらつしやいましたか。」

「いゝえ、延ばしましたの。サラマートフさんのところでテニスをしましたわ。」

ネフリユードフがこゝへ来たのは氣持ちを變へるためであつた。ところが、今まではいつ來ても樂

しかつたのに、今日は不思議に、この家にあるあらゆるものが彼の反感をそゝり立てた。——ガ關帝、廣い階段、花、召使、食卓の飾り、などのやうなものから、ミッシイ自身に至るまで、すべて氣に入らなかつた。彼女はちつとも魅力のない、うきうきした女のやうに見えた。コロソフの變に氣どつた調子も不愉快だつたし、老コルチャーギンの逞ましい、牛のやうな顔も、老嬢カチリーナのフランス語も、保母や家庭教師のいやにしかつめらしい顔つきなども、やはりさうだつた。

ネフリユードフは、これまで長い間、ミッシイに對しては二つの道を、あちこちと動いてゐた。つまり、時としては、月光の中でのやうに、彼女の美しいところばかりを見たが、また時には、そこへ不意に太陽があらはれて彼女を曝しものにしたかのやうに、その醜いところばかりが眼に映つた。今日は恰度その後のやうに見える目であつた。だから、彼は彼女の顔の皺を見、髪の亂れを見、肘の上げとげしてゐるのを見、そして殊に、親指の爪がいかにも大きくつて父親に似てゐるのを見た。

「テニスは退屈な遊戯ですよ。」と、コロソフは言つた。「われわれの子供の時はラブラ（一種の打球戲）をやつたもんですね。」

「いゝえ、あなたはおやりにならないからですわ。それや面白いものですよ。」と、ミッシイは反對した。

「あなたはさうお思ひにならない？」

これは遊戯ほど人間の性格のあらはれるものはないといふ彼女の説に賛成して貰ひたいだつた

が、ネフリュードフの顔には恐ろしいほどの、何かに氣をとられてゐるらしい、不満さうな色が漂つてゐた。一體、どうしたことだらう？ と彼女は思つた。

「まづたく僕にはわかりません。そんなことを考へたことがありませんから。一と、ネフリュードフは答へた。」

「お母さまの部屋へいらつしやいますか。」ミッシイは訊いた。

「え、え。」と、いかにも行きたくないさうな調子で言つて、巻煙草を取り出した。

ミッシイが探るやうな眼つきで彼を見つめてゐるので、彼も何だか恥づかしくなつた。

「これでは他人の氣持ちを悪くさせに來たやうなものだ。」と彼は考へた。そこで、公爵夫人さへよろしければ、是非お目にかゝりたいと愛想よく言つた。

「あら、さうですか、お母さまはさぞ喜ぶでございませうよ。煙草もあちらで召し上つてよろしいのですよ。イワン・イリーノウイチさんも參つてゐますの。」

この屋敷の主婦、ソフィヤ夫人は過去八年間、寢床につきつきの病人であつた。彼女は決してその部屋を出ないで、特別の友だち、つまり平民よりも優れた人たちのみを引見してゐた。ネフリュードフもその一人だつたが、それは彼が利口な人間だと思はれてゐたからでもあり、彼の母親がこの一族と親しかつたからでもあり、また彼がミッシイと結婚してくれ、はい、と思つてゐたからでもある。

ミッシイは非常に結婚したがつてゐた。ネフリュードフは恰度似合ひの相手だつたし、好きでもあつた。而も、ずつと前から、彼が自分のもの（自分が彼のものではない）になると思つてゐた。その目的を達するためには彼女は、精神病者に見かけるやうな、自分では氣づかない、實にいつこい狡猾な方法を弄するのであつた。で、今、彼女はネフリュードフの本心を聞かうと思つて、まづこんな風に話した。

「お見受けするところ、何かおありになつたらしいのね。どんなことなの、話して下さいませんか？」
彼は裁判所での奇遇を思ひ出して顔を染めて眉を寄せた。

「え、ありました。實に意外な、而も重大な事件です。」彼は正直に言ひたいと思つてかう言つた。
「どんなことですか、それは？ お話し下さるわけに參りませんか？」

「今は話せません。どうか聞かないで下さい。私にしても、もつと考へなきやならないんですから。」
言ひながら彼はますます根くなつた。

「では、お話し下さいませぬのね。」

ミッシイは顔の筋肉をびく／＼させて、つかまつてゐた椅子をちよつと後に引いた。

「え、話せないのです。」

この言葉は、實際に重大事件の起つたことを承認した自分自身への答へのやうでもあつた。
「よろしうございます。では參りませう。」

彼女は愚にもつかぬ考は拂ひのけるといつた風に首を振つて、いつもより足早に、男の先に立つて、さつさと歩き出した。

彼女が口をわざとらしく結んでゐるのは涙をかくすためだらうとネフリユードフは思つた。彼女の氣持ちを傷つけたことは、内心はづかしかつた。しかし、同時に、彼は自分の氣弱さが自分の身を破滅させる、つまり彼女と結びつかねばならなくなる、といふことを知つてゐた。そして今日は、そのことを何よりも恐れてゐた。で、彼は黙つて、彼女について公爵夫人のところに行つた。

二七

ソフィヤ公爵夫人は、ひどく念入りに作つた滋養食をすましたところであつた。(彼女はいつも一人で食事をするので、誰もその不作法なさまを見たものはない。)寢椅子の傍に、コーヒーの載つた小さなテーブルがあつて、彼女は寝たまゝ、巻煙草を吹かしてゐた。

髪は黒い、眼は黒い、ひよる長い女で、自分では、まだ若いつもりでゐた。彼女が醫者と親しくしてゐることに就いては兎角の噂があつた。ネフリユードフは、頭をてかくさせて、それを真中から分けてゐるその醫者が、寢椅子の傍に腰かけてゐるのを見ると、そのいやな噂を思ひ出したばかりでなく、たまたまなく不快な氣がした。

コロソフも来てゐて、テーブルの上のコーヒーを掻きまはしてゐた。そこには、リキユール酒のグラスも置いてあつた。ミッシイはネフリユードフを案内して來たけれども、自分は直ぐに引き上げてしまつた。

「お母さまが疲れて、あなたを追ひ出したら、私のところへいらつしやいね。」と、ミッシイは、コロソフとネフリユードフとに、何事もなかつたかのやうな、ごく自然な調子で言つてから、陽氣に笑つて、厚い絨毯の上を音もなく迂り去つた。

「御機嫌よう、さあ、どうぞ。」

ソフィヤは、いかにももつともらしい作り笑ひをして、本物同様に見える入齒を光らしながら言つた。

「裁判所から大層ふさぎこんでいらしたといふぢやございませんか。愛情のある人間には、あんなところにはたまりませんわね。」と、これは、フランス語で言つた。

「え、まつたくさうです。時には自分の罪……を感じますからね。人は人を裁く権利のないことを感じますよ。」

「まつたくですわ。」

夫人は、いかにもその言葉の眞實に動かされたらしく言つた。いつもの癖で、相手にお世辭をいふのだつた。

「それはさうと、繪の方はどうなさいました。私、楽しみにしてゐましたのですよ。こんな不自由な

體でなかつたら、とつくに拜見に上つたんでございますが。」

「繪なんか、すっかりやめてしまひました。」ネフリユードフはそつけなく答へた。今日の彼には、彼女の年がいくらかくしてもわかると同じく、お世辭のいかにも空々しいのが、はつきりわかつた。

「まあ、それは惜しいぢやございせんか……この方には、ほんとの才分がおありなんですから、レーピンさんが申してゐましたのよ。」と彼女はコロソフに話しかけた。

「あんな謔をいつてもはづかしくないものかしら。」

ネフリユードフはかう考へて眉をひそめた。いよく彼が話相手にならないと見て、公爵夫人は、さかんにコロソフと議論をはじめた。戯曲のこと、藝術のこと、作家のこと、詩のこと、散文のこと、二人は熱心にしゃべり合つた。ネフリユードフは黙つて聞いてゐるうちに、彼等はたゞ食後に舌や咽喉の筋肉を動かしたい生理的要求を充たしつゝ、あるに過ぎないといふことに気がついた。それから、コロソフが、ウォツカヤリキール酒を飲んで少し酔つてゐることに気がついた。夫人は話の途中で、時々不安らしく窓の方に眼をやつたが、そこからは明るい日射しが洩れて、彼女のしなびた顔を斜めに照らしてゐるのだつた。

「フィリップや、そのカーテンをおろしておくれ。」と、彼女は下男を呼んで言つた。下男は絨毯の上をそつと這るやうにして、彼女の方をうかがひながら、ちよつとの光りも射さないやうに、幾度も念入りに、カーテンをおろし直した。

夫人はネフリユードフの容子をしばらく見てゐたが、

「さうく、ミッシイがお待ちしちやみせんか。行つてやつて下さい、グリーグの新曲をお聞かせしたいんですから……それや面白いものですよ。」

「お聞かせしたいなんて思つてるものか。この女は何とか彼とか諷ばかり言つてるのだ。」

彼は立ち上つて、ソフィヤ夫人の透きとほつた白い、骨ばつた手を握つた。

客間にはエカテリーナ・アレクセーエウナがゐて直ぐにいつものフランス語で話しかけた。

「陪審員のおつとめがおありになるんで、ひどく気がふさいでいらつしやるやうでございますね。」

「え、今日はどうも気分がすぐれませんが、皆さんに失禮ばかりして、御免なさい。」

「どうかなさいましたの？」

「それはどうか聞かないで下さい。」

「でも、あなたは、本當のことを打ち明けて話すものだ、しよつちう、おつしやつてるぢやございせんか。そして随分ひどい打ち明け話をなすつたこともございますわね。それに何故今日は黙つていらつしやいますの？……ね、ミッシイ、あなたも覺えてるでせう。」

と、ちやうどそこへあらはれたミッシイを振り向いた。

「あの時は遊戯をしてたんですよ。」ネフリユードフは眞面目くさつて、「遊戯の時は本當のことと言へるものですが、現實にぶつかる、僕たちは……いや、僕は、本當のことが言へないんです。」

「言ひわけなんかよろしうございますわ、それよりか何故本當のことが言へないのか伺ひたうござい
ますわ。」

エカテリーナは、相手が眞剣で言つてゐることには全然氣のつかぬ風をしてゐた。

「氣分が悪いといふことをおつしやるのが一番いけないと思ひますわ。」と、そこへ、ミッシイが口
を出した。私なんか、そんなことは申しません。だからいつだつて、かうしてにくくしてゐられま
すわ。さあ、あちらへ行つて、ふさぎの蟲でも取つてさし上げませう。」

馬がくつわをはめられ馬具を背負はされよとする前に、ちよつと主人に愛撫される、その時に感
じるやうな氣持ち、——それが、ネフリユードフの氣持ちであつた。今日は殊に荷車を曳きたくなか
つたので、家に用事があるからといふ口實を設けてそのまゝ、歸ることにした。ミッシイの握手はいつ
もより長かつた。

「あなたに大事な事は、あなたの友だちにも大事なことだつてことをお忘れ遊ばさぬやうにね……」
彼女は言つた。「明日はいらつしやいます？」

「多分七れません。」と言ひながら、ネフリユードフは彼女に對してか自分自身に對してかわからな
い羞恥を感じて赧くなつた。

彼が去ると同時に、エカテリーナは言つた。

「どうしたんでせう、何かあるんぢやないかしら。ほんとに突きとめて見たいわ。ひよつとしたら、

色つほいことかも知れませんよ。ねえ、ミッシイ。」

「きたないいろごとかも知れないわ。」と、ミッシイは言はうと思つたが、それは止めて、ネフリユ
ードフを見る時とはまるで變つた暗い顔つきになつて眼を伏せた。そして、たゞ「人にはい、日もあれ
ばわるい日もあるものよ。」とだけ言つた。

「あの方も、やはり、私を欺すのだらうか。こんな風になつてしまつたのに、もしさうだつたら随分
ひどいわ。」と彼女はこゝろに思つた。

「こんな風になつてしまつたのに」といふ言葉の意味を説明しろと言はれたら、恐らく、彼女にも、
はつきりしたことは言ひ得ないにちがひない。しかし、彼は今まで彼女に明るい希望を持たせたばか
りでなく、殆んど約束しないばかりといふところまで来てゐたのだ、それをミッシイはよく知つてゐ
た。それは、むろん、はつきりした言葉によつてではなく、たゞ眼差とか微笑とか暗示とかによるに
過ぎなかつたが、それにしても彼女の方では、もう男を自分のものと考へてゐたので、今更逃げ出さ
れるのは非常に辛いことだつた。

二八

「何といふ恥づかしい、愚かな、恐しいことだらうー」

ネフリユードフは家へ歸る途中で考へつゞけた。ミッシイと話してゐる間に感じた變な重苦しさが

頭を離れなかつた。形式的に言へば、彼は彼女に對して何等疚しいところはないと感じた。何故といふに、結婚の申込みはむろん、それらしい言葉を口にしたことは一度もないからである。しかし、實際、心の中で、自分は既に約束すみのもの、自分は彼女のものと思つてゐた。

ところが、急に今日になつて、全然結婚することは出来ないと思つてゐた。

「何といふはづかしい恐しい、恐しいはづかしいことだらう！」

彼は單にミッシイとのことばかりでなく、あらゆることに就いてさう考へた。家の立關を上りながら、それを繰り返してゐた。

「晩飯はいらぬから、あちらに行つてゐていよ。」彼は食堂について来た下男のコルネイに言つた。

「はい。」とコルネイは言つたが、直ぐには立ち去らないで、卓上の支度を片づけはじめた。ネフリユードフは、いま／＼しさうに下男を眺めた。誰からも離れてひとりであたいのに、皆が意地わるく自分を憐れまさうとしてゐるやうな気がした。

コルネイが去つてから、彼は茶を入れようと思つて、サモワルのそばに寄つたが、ちやうどその時、アグラフェーナ・ペトローウナの來るらしい氣配がしたので、急いで客間の方に行つて、うしろの扉をしめてしまつた。

三月前、彼の母は、この部屋で亡くなつた。反射鏡のついたランプが二つ、一つは父の肖像のところに、

一つは母の肖像のところについてゐたが、こゝに這入ると、彼は直ぐに母が臨終の少し前に、自分はどうな氣持ちを抱いてゐたかを思ひ起した。それも、はづかしく恐しかつた。危篤に陥つてからは、どんなに早く死んでくれ、ばい、と願つたことか。母のためにさう願つたのだ、母の苦しみを無くするためさう願つたのだ、と、彼は強ひて思はうとした。しかし、實際は、自分自身のため、自分が母の苦しみを見るに堪へないために願つたのではなかつたか。

彼は母のことを氣持よく追憶しようと思つて、或有名な畫家が五千ルーブリの報酬で描いた肖像の前に行き、ぢつと見入つた。黒天鵞絨の服をまとつた、胸もあらはな母の姿、——その乳房のふくらみや、肩や頸のあたりの美しさに畫家が特別の注意を拂つて描いたことは明らかである。

ネフリユードフには、これも、はづかしく恐しいもの、一つだつた。この半裸體美人として描かれた母の姿の中には、何となく胸の悪くなるやうな不眞面目な或ものが潜んでゐる。それに、三月前に、この同じ部屋にこの同じ母が、木乃伊のやうに干からびて家中にたまらない臭氣を放ちながら横たはつてゐたことを思ひ出すと、ます／＼氣持が悪くなつた。今でもその臭氣が漂つてゐるやうに思はれるのだつた。母は愈々亡くなる少し前に、骨ばつた血の氣のない指で固く彼の手を握りしめ、眼をぢつと見つめながら「お母さんの行き届かなかつたことをどうか咎めないでくれ」と言つて、ぼろ／＼涙をこぼした。

誇らかな微笑を唇に浮べた胸のあらはな母の肖像を眺めてゐるうちに、彼は、ふとミッシイの半

裸體姿を聯想した。いつか見た彼女の、舞踏服姿のあでやかな肩や腕の印象——それも今思ひ出すと胸がむか／＼した。

「それに彼女の父はどうだ。あの怪しい過去とあの残忍性を持つた動物じみた野卑な男ではないか。母は母で、いかゞはしい噂の種子ばかり蒔いてゐる。」彼はすべてが厭はしくなつた。「あゝ、何といふ恐ろしくはづかしいことだ！」

彼は考へつづけた。「いや／＼、僕は自由にならなければならぬ、あらゆる虚偽の關係を脱しなければならぬ。コルチャーギン家との關係、貴族長夫人との關係、その他一切の不義の關係を斷つてしまはなければならぬ。さうだ、そして自由な空氣を吸はう、——外國へ行かう、ローマへ行かう、そして繪をやらう。」こゝで、彼は自分の繪についての天分の怪しいことを思ひ出した。いや、そんなことはどうでもいゝ。たゞ自由な空氣を吸ひさへすればいゝのだ。まづ、コンスタンチノーブルへ行き、それからローマへ。——しかし、それには裁判の一件を片づける必要がある。第一に辯護士と相談することだ。」

と、不意に、カチュウシヤの女囚としての姿が、まぎ／＼とこゝろに浮んだ。最後の言ひ渡しを受けた時にどんなに彼女は泣き叫んだか……彼はあわて、巻煙草を灰皿に突っこみ、新しいのに火をつけてから、あちこちと部屋中を歩き出した。彼女にまつはるいろんな光景が、つき／＼に腦裏を掠めた。彼女と最後に會つた時のこと、どうすることも出来なかつた烈しい情熱、それを充たした後の幻滅などを回想した。かと思ふと、青い帯をしめ、赤いリボンをつけた白衣姿の彼女があらはれたり、早課の祈りの場面があらはれたりした。

「僕は彼女を戀してゐたのだ。あの夜は、眞に清純な愛をもつて戀してゐたのだ。いや、あの夜ばかりではない、最初に叔母たちを訪ねて論文を書いてゐた大學生の頃から既に戀してゐたのだ。」彼はその頃の自分を振りかへつて見た。その青春の呼吸、その生の若々しさと充實、それが胸に迫つて、たまらなく悲しくなつて來た。

その當時の彼と、現在の彼との相違は非常なものである。それは、その夜の會堂に於けるカチュウシヤと、商人とふざけちらしたあげく、今朝、刑の宣告を受けたマースロワとの差以上ではないにしても、まづそれに似たものであつた。當時は前途に明るい希望の輝いた、自由な、何もかも恐れぬ青年だつたが、今は愚かな空虚な生活の網に引つかつて抜け出すすべを見出さない、いや、見出さうともしない男になりきつてゐた。當時は自分の眞情を誇り、常に信實を語ることを主義とし、實際に於いても眞實そのもの、青年だつたが、今は最も恐るべき虚偽——周圍の人々からは眞實と認められる虚偽の底深く没してゐた。而も、彼は、その虚偽を脱する道を知らなかつたから、没したまゝ、それに慣れ甘んじてゐるより他なかつた。

貴族長夫人マリヤとの關係を斷つて、その夫や子供たちと平氣で會へるやうになるには一體どうすればいゝのだらうか。ミッシイと別れるにはどうすればいゝのだらうか。土地私行を不正とする信念

と母親から譲られた所有地との間に横たはる矛盾をどう解決すればいいのだらうか。カチュウシャに對する罪はどうして償つたらいいのだらうか。——さしあたり、この最後のものだけは、どうしても、うつちやつて置けなかつた。愛してゐた女を見棄てることは出来ない。徒刑から救ひ出すために辯護士に金を拂ふだけで満足することは出来ない。單なる金銭をもつて罪を償へるものだらうか。あの時は百ルーブリを與へて罪の償ひをしたと思つてゐたのではなからうか？

そこで彼は、彼女を廊下に引きとめて紙幣入りの封筒をエブロンに押しこんで逃げ出した時のありさまを、まぎ／＼と思ひ浮べた。

「あ、あの金！」彼はあの時と同じ不快を感じながら考へた。「あんなことは悪漢でなくて誰が出来るやう。だから、僕は、この僕は悪漢なのだ、恥知らずなのだ。」と彼は高く叫んだ。

「しかし、僕は本當に悪漢、本當に恥知らずだらうか？——さうだ、僕が悪漢でなくて誰が悪漢なのだ？」と彼は自問自答した。そして更に自分を責めつゞけた。そのことはかりではない。貴族長夫人に對する態度は、何といふ卑しき醜くさだ？ 金錢に對する態度はどうだ？ 母から譲られたといふのを口實にして不正だと思ひながらその財産をつかつてゐるのはどうだ？ 怠け放題の日々の生活はどうだ？ カチュウシャに對するあの振舞はどうだ？——確かに僕は悪漢だ！ 恥知らずだ！ 世間の人たちは何とでも僕を批判するが、彼等を欺くことは出来ても、僕自身を欺くことは出来ない。」

そこで初めて彼にはわかつた。——彼が最近、殊に今日、あらゆる人々、例へばコルチャーギン公爵、同夫人、コルネイ、ミッシイなどに對して感じた嫌厭は、實は、彼自身に對する嫌厭であつたことがわかつた。ところが不思議なことに、彼は、自分に對する非常な嫌厭を感じ、自分の卑しさを認めながら、何だか苦しいと同時にうれしい、安らかな或氣持ちを覺えた。

ネフリユードフの生活には、これまでも度々、彼の所謂「魂の淨化」があつた。魂の淨化とは、内生活が久しい昏睡状態から覺めて全然休止してゐた活動を新たに始め、それまで魂の底に溜つて眞の生活の邪魔をしてゐた滓を一掃してしまはうとする或精神状態を意味してゐた。さうした目覺めのあつた後には、彼はいつも永久に守らうと思ふ或法則を作り、日記をした、め、そして、再び變らないつもりの新らしい生活を始めるのだつた。しかし、その度に、世間的誘惑に捕へられて、自分では氣づかないうちに、また前よりもひどい下等の生活に陥つてしまふのが常だつた。

「お前自身を完成しよう、お前自身をよりよくしよう」と試みたことは既に幾回もあるが、何等の結果も得られなかつたではないか。」と、内心に潛む彼の誘惑者がさ、やいた。「今更試みたところで何の役に立つものか。お前ひとりぢやない、誰でもがさうなのだ。それが人生なのだ。」

しかし今、ネフリユードフのうちには、そののみが眞實であり、そののみが權力であり、そののみが永久であるところの、眞に自由な精神的存在が、既に目を覺ましてゐた。そして彼はそれを信ぜざるを得なかつた。かうありたいと希望するところと今までの状態との差がいかに甚だしくても、新し

く目覚めた精神的存在にとつては、どんなことでも出来ないことはないと思はれた。

「いかなる犠牲を拂つても現在自分を束縛してゐる虚偽を打破しよう。あらゆるものに眞實を語らう。そして眞實を行はう。」と彼はかたく決心した。「だから、ミッシイにも眞實を語らう、僕は放蕩もので、結婚する資格などはない、今までいたづらに彼女の氣を亂してゐたに過ぎないのだとうち明けよう。それから、貴族長夫人には……いや、彼女には別に話すことはない、寧ろ彼女の夫に向つて、僕は惡漢である、今まで欺いてゐたのだと白状しよう。遺産は眞實の命じる通りに處分しよう。カチュウシヤに對しては、自分が惡漢であること、罪を犯したことを話して、彼女の運命の重荷を軽くするために出来るだけの力を盡さう。さうだ、まづ、彼女に會つて、許しを乞ふことにしよう……子供のやうに謝らう……必要ならば結婚してもいい。」

彼は子供のころによくしたやうに、胸に兩腕を組んで立ちどまり、眼をあげ、何ものにか呼びかけるやうに言つた。

「主よ、私をお救ひ下さい。私をお救へ下さい。私のこゝろの中に這入つて、一切を淨めて下さい。」彼は祈つた。神に救ひを求め、神に淨化を求めた。すると、さうしてゐるうちに、彼の求めてゐるものは、いつのまにか與へられてゐた。つまり、彼の心のうちにある「神」が、意識のうちに目覺めた。彼は自分が神とともにあることを感じた。したがつて、自由を、生の充實と歡喜とを感じたばかりではなく、あらゆる正義の力を感じた。人間の爲し得る最善のことを、今、彼は悉く爲し得ると

感じた。

彼の眼には涙が一杯たまつた。善い涙でもあり、悪い涙でもあつた。すなはち、久しい間眠つてゐた精神的存在が目覺めたといふ喜びの涙だつたから、一方では善い涙であつたが、自分の善事に對する女々しい涙でもあつたから、他方では悪い涙だつた。

暑かつたので、彼は窓を開けた。窓は庭に面してゐた。靜かな、すがくしい月夜であつた。すぐ向うには高いポブラの樹が影を落し、掃き清められた砂利の上に、その枝の入り亂れたさまを、くつきりと描いてゐた。左手には納屋の屋根が月に白く照らされ、前方には樹々の枝のもつれ合つてゐるのを透して、そのさきに庭圍ひの黒い影が見えてゐた。ネフリユードフは、屋根を見つめ、月に照らされた庭を見つめ、ポブラの影を見つめながら、爽やかな空氣を食るやうに吸ひこんだ。

「何といふうれしさだらう！ あゝ神さま、何といふうれしさでせう！」

ネフリユードフは、今心内に起つたことに就いてかう言つた。

二カ

マースロワは、その日、歩き慣れないのに、石ころの多い道を十マイルも歩かされたため、すつかり疲れ足を痛めて、やつと夕方の六時、自分の監房に歸つて來た。意外に重い刑を宣告されたので、がっかり氣落ちした上に、お腹もたまらなく空いてゐた。

裁判所での最初の休憩中、護衛の兵卒たちが自分のそばで、パンや茹卵を食べてゐるのを見た時には、自然に口に唾氣がたまつて空腹を感じたが、それでも食物をねだるのは、さすがにさもしく思はれた。ところが、それから三時間もたつと、全然何も食たたくなくなつて、たゞ疲ればかりを烈しく覺えた。意外の宣告を言ひ渡されたのは、ちやうど、その時であつた。最初、彼女は聞きがちでひではないかと思つた。自分がシベリヤへ送られる、——そんなことがあるだらうか、彼女には、耳に聞いたことをそのまゝ、信じてゐることが出来なかつたのだ。しかし、この宣告を至極當然のこととして聞いてゐるらしい裁判官や陪審員たちの、いやにおちつき拂つた事務的な顔を見ると、彼女は急に腹立たしくなつて、自分の冤罪であることを法廷中に叫び立てたのである。ところが、その叫びもまた至極當然のこと、誰にも思はれた。而も判決を變へることが出来ないと、はつきりわかつたので、彼女は絶望のあまり遂に泣き出した。自分に加へられたこの残酷きはまる不法にどうしても従はねばならないのかと思ふと泣かすにはあられなかつたのだ。殊に彼女を驚かしたのは、彼等若い男たち（少くとも老人ではない男たち）——いつも彼女をにや／＼と色目でながめてゐた、その同じ男たち（たゞし、例の副検事だけは別だと彼女も思つてゐた）が、この刑を課したことである。

彼女が囚人室に腰を下して裁判を待つてゐる間に、また休憩の間に、その男たちは、何かの用事で来たやうな風をしては、扉口のところから覗いたり、部屋に這入つて来て、しげ／＼と彼女を眺めたりした。而も、その彼等が、罪もない彼女に、何等の理由もなく徒刑を課してしまつたのだ。

裁判が終つて囚人室に歸つてからも、彼女はまだ泣きつゞけてゐたが、そのうち、泣きやんで、しつかに出發の時刻を待つた。かうなつては食べるものは何も欲しくない、たゞ一つ、煙草が吸ひたいと思つた。すると、そこへ、ポーチコフとカルティンキンとが連れて來られた。ポーチコフは來る早、惡態をつきはじめた。

「ふん、どうなつたね。潔白が立ちやしたかね。賣女め。自業自得といふものさ。シベリヤへ行つたら、おしやれをしようたつて、出來ツこないよ。」

マースロワは、両手をポケットに入れ、うつ向いて、きたない床板にぢつと眼を据ゑてゐた。そして、たゞこれだけ言つた。

「私はお前さんのうるさがることをちつともしやしない。だから、お前さんも私のうるさがることはよしておくれよ。」

これを幾度もくり返してから後は黙つてしまつた。

ポーチコフとカルティンキンとが去つて、入れ替りに衛兵の一人が三ループリの金を届けて來た。彼女の氣持ちは、やゝ明るくなつた。

「お前がマースロワか？ さうか、これを受けとれ、どこかの婦人が寄越したんだ。」

「婦人ですつて、どんな？」

「受けとるんだ。お前と話をしに來たんぢやないよ。」

それはマースロワの抱へ主、キタエワが届けたのだつた。彼女は法廷を立ち去る時、廷吏に向つて、マースロワに金をやる事が出来るかと訊いた。そして許可を得て、二ルーブリ五十コペイカの札一枚に、二十コペイカの貨幣二つ、十コペイカの貨幣一つを添へて廷吏に渡した。廷吏は衛兵を呼んで、キタエワの眼の前で、その金を渡した。

「まぢがひなく渡して下さいよ。」と、その時キタエワの言つたのが癪にさはつたので、衛兵はマースロワに當りちらしたわけである。

マースロワは金を受けとつて喜んだ。煙草さへ一服吸へたらと思つてあるところだつたから、金は何よりも有難かつた。

やうやく四時過ぎになつて、彼女は同じく二人の兵卒に護られながら裁判所の裏門を出た。出る間に、彼女は二十コペイカを兵卒に渡して、巻パンを二つと煙草を買つて來てもらつた。しかし、途中では吸へないので、我慢して監獄まで歩かなければならなかつた。

三〇

マースロワの監房は、長さ二十一呎、幅十六呎の細長い部屋だつたが、そこには、十五名（うち三人は子供であつた）のものが收容されてゐた。

まだ明るかつたので、床に寝てゐるのは、二人——窃盗罪で這入つてゐる肺病の女と、旅券がなく

て拘留された白痴の女とだけだつた。他の女たちは、ぼんやり窓に立つて庭を引かれて行く男囚をながめたり、坐つて縫物をしたりしてゐた。縫物をしてゐるのは三人で、その一人は今朝マースロワが連れ出される時に呼びとめて聲をかけた、コラブリヨワといふ皺だらけの婆さんだつた。この婆さんは夫を斧で打ち殺したといふのでシベリヤ行きの重刑を宣告されてゐたが、殺害の原因は、夫が彼女の連子である娘に手を出して仕方がないからだつた。婆さんは監房内の女囚頭をしてゐて、どうして手に入れるのか、囚人たちに酒の密賣をしてゐた。

彼女と並んで、やはり縫物をしてゐるのは、脊の低い眼の小さい、ごくお人よしのおしやべりで、こゝに來るまでは鐵道の踏切番をしてゐたのだが、汽車の通過する時に旗を出さなかつたため椿事が起つたといふ科で三ヶ月の禁錮に處せられてゐた。今一人は、フョードシャといふ、色の白い、ぼつちりした腫の、まだごく若い女で、夫を毒殺しようとして捕へられたのだつた。

その他、赤ん坊を抱いて乳房をあてがつてゐる四十がらみの女。四つくらゐの男の子を連れだした放火犯の老婆。窓から嘔れ聲を張り上げて何か淫らなことを喚いてゐる髪の赤茶けた雀斑だらけの女。それと並んで立つてゐる胸ばかり長くて足の短い不具のやうな女。痩せ細つてゐながら大きなお腹を抱へた孕み女。ルバーシユカ一枚着ただけで、男囚と女囚との取り變ず淫らな言葉におつと聞き入つて、いかにもそれを覺えようとしてゐるらしく、念入りに復習してゐる七歳くらゐの少女。自分の赤ん坊を井戸へはふりこんだといふ、脊のすらりとした、眼の腫れつばい教育の執事の娘。——そんな

風に、種々雑多の囚人が、ごちやくくと詰めこまれてゐた。

三一

錠の音がし、扉が開いて、マースロワが監房内に入れられると、皆がそちらを振り返つた。はだしでぐる／＼歩きまはつてゐた、一切のことに無頓着な、教會の執事の娘までが、ちよつと立ちどまり、肩を釣り上げて、彼女の方を見つめた。

コラブリヨワ婆さんは茶色の袋に針を刺しながら、何か聞きたげに、彼女を眼鏡越しに眺めた。

「おや、歸つて来たのけえ。お前はきつと放免になると思つてゐたに。ぢや、さうでなかつたかね？」婆さんは男のやうな變に噎れた聲で言つて、眼鏡をはずし、縫物を寢床の横に置いた。それを受けて、踏切番をしてゐた女が唄ふやうな陽氣な調子でつづけた。——「今もお婆さんと噂してたことだよ。直ぐに放免になるだらうツてさ。そんなこともよくあるさうだし、間がよきや、どつさりお金を貰ふこともあるツて話だからね。だが、どうやら當てがはづれて、さうは間屋がおろさなかつたらしいね。」

「さうなのかい？ 刑罰ときまつたのかい？」と、今度はフォードシヤが、例のぼつちりした子供のやうな瞳を輝かしながらやさしく訊いた。そのはれ／＼とした若々しい顔は、今にも泣き出しさうになつた。

マースロワは何も答へないで、端から二番目の自分の場所に通つて、コラブリヨワのそばに腰を下した。

「何か食べたかい？」フォードシヤは立つて彼女に近寄つた。

マースロワは、やはり何も答へないで、巻パンを枕許に置き、埃まみれの上衣を脱ぎ、頭にまいた頸巻を取つた。男の子の遊び相手をしてゐた老婆もマースロワの前にやつて来て、ちツ、ちツと舌うちしながら、いかにも可哀さうといふ風に首を振つた。男の子も後から来て上唇を尖らしながらマースロワの持ち歸つた巻パンを、さも欲しさうに見つめてゐた。マースロワは、今日のいろんな出來事の後で、かうした思ひやりのある皆の顔を見て、唇が顫へ、今にも泣き出しさうになつた。でも、老婆と子供とが寄つて来るまでは、ぢつとそれをこらへてゐた。ところが、老婆のさも可哀さうにといふやうな優しい舌打ちを聞き、また子供が巻パンから眼を離して自分に注いだのをみると、彼女はとう／＼たまらなくなつて、ぶる／＼顔を震はして泣き出した。

「い、辯護士をお頼みよつて、わしが言つたぢやねえか。」と、コラブリヨワが言つた。「で、どうなんだい？ やつぱり流刑かい？」

マースロワは返事が出来なかつた。で、黙つて巻パンの中から巻煙草の箱を取り出してコラブリヨワに渡した。コラブリヨワはそれを見て、こんなものに無駄費ひしたのが氣に入らないらしかつたが、それでも一本抜き出し、ランプの火を移して、ふうと一服ためしてからマースロワに渡した。マ

マースロワは泣きつづけながら、食べるやうに吸ひはじめた。

「徒刑なのさ。」と、彼女は煙を吐きながら、啜り泣きながら、呟いた。

「神さまが恐くはねえのかな、ひでえ鬼どもぢやねえか、何もしねえこんな子を罪に落すなんて。」と、コラブリヨワは言った。

「で、何年だい？」

「四年だよ。」

マースロワの頬を涙がつたつて吸ひかけの煙草の上に落ちた。彼女はそれをくちやくくにしてまた新しいのを一本取り出した。

その時、庭を通り過ぎる男囚達と何か深らなことをしやべり合つてゐた女達も、窓から離れてマースロワの方へやつて来た。そして、がやくくと、同情の籠つた言葉を八方から彼女に浴せかけた。

「お酒を少し。」と、マースロワは、袖で涙を拭きながら、でも、しやくり上げながら、コラブリヨワに言った。酒を密賣した科で收監されてゐる女の話を聞いてゐるうちに、少し飲みたくなつたのだ。

「あゝ、いゝとも。」コラブリヨワは言った。

三三三

マースロワは巻パンの中に入れて置いた紙幣を出してコラブリヨワに渡した。

コラブリヨワが小さな酒瓶を隠してある通風口のところへ登つて行くのを見ると、女囚たちは、めいめいの場所に引きとつてしまつた。マースロワは、その間に上衣や頸巻の埃をはらつて寢床の上で巻パンを食べはじめた。

「お前さんにお茶をとつて置いたんだよ。」と、フォードシヤは、ぼろにくるんだブリキの薬罐と茶碗とを棚から下して言った。「でも冷たくなつちやつたねえ。」

なるほど、すっかり冷たくなりきつてゐた上に、お茶といふよりもブリキの味がした。でも、マースロワはパンと一緒に飲みほした。

「フィナーシカ、これ、上げよう。」マースロワはパンを一片裂いて、彼女の口許ばかり見つめてゐる男の子にやつた。

コラブリヨワが酒瓶と盃とを持つて来た。マースロワは酒を飲むと、たちまち元氣になつて、コラブリヨワと、洒落女といふ籍名のある女とを相手に、検事や判事などの身ぶりを真似ながら裁判の模様をくはしく話して聞かせた。男たちが皆自分を見にやつて来たことなどを得意になつて話したりした。

やがて、コラブリヨワは注意した。「ただけど、上訴するだかしねえだか、辯護士は何と言つてたかね。するなら今のうちでねえといけねえだよ。」

マースロワはそんなことはちつとも知らないと言へた。

そのとき、髪の赤茶けた雀斑だらけの女が、爪の先で頭をぼりく搔きながら、近づいて来て言った。

「そのことなら、わしがよく知ってるよ。まづ第一に、宣告に不服だといふことを書くのさ。それから検事にわけを話すんだよ。」

すると、コラブリヨワは腹立たしげに、この女を嗚りつけた。「何しにお前来たよ？ 酒の匂ひを嗅きつけたよ。おしやべりするでねえよ。お前に聞かねえだつて、こちとらで、ちやんとわかつとるだよ。」

「誰もお前に話しちやめねえ、引つこんでゐて貰はうよ。」

「何を。お前、酒がほしいんぢやねえか、のこくやつて来てさ。」

「ぢや、少しやらうよ。」と、持つてゐるものは、誰にでも分けてやることの好きなマースロワが言った。

「拳固でもくれてやらうよ。」と、コラブリヨワは言った。

「よウし、くれるならくれて見ろ！ お前なんか、ちつとも恐かアねえよ。」

「牢屋の化物め！」

「手前のこつたよ。」

「くされ女郎め！」

「何だと？ 人殺しめー」と、赤毛の女は喚き立てた。

そこで掴み合ひがはじまつた。赤毛がまずく詰め寄つて来るので、コラブリヨワはいきなり彼女の胸を突き飛ばした。赤毛は、待つてましたとばかりに、素早く片手で相手の髪を掴み、片手で顔を殴らうとしたが、その手をコラブリヨワに掴まれてしまつた。マースロワと洒落女とは赤毛の腕にすがつて引き離さうとした。しかし、赤毛はちよつと手を弛めたかと思ふと、今度はいよく烈しく引きずりまはした。コラブリヨワは引かれるまゝに頭を傾げながら、相手のからだを殴りつけると同時に、その手に噛みついてしまつた。

やがて看守たちが騒ぎを聞いて駆けつけて来た。引き分けられた二人は、どちらも負けずに大聲をあげて苦情を言ひ出した。

看守たちが去つてからも、しばらくは毒舌のやりとりがつゞいてゐたが、そのうち、次第に静かになつた。寢床からは軒が聞えて来た。長いお祈りをする婆さんだけが、いつまでも聖像の前に膝まづいてゐた。

マースロワは、自分が徒刑囚であることを考へてゐた。しかし、どうもそんな気がしなかつた。何だか謎のやうな気がするのだつた。となりに寝てゐるコラブリヨワがこちらに寝返りをうつた。

「まさか、こんなことにならうとは思はなかつた。」マースロワは小聲で言つた。「悪いことをしながらどうもならない人もあるのに……」

「なあに、心配するでねえよ、シベリヤだつて結構人は仕めるだよ。あちらで死ぬやうなこたア、まああるめえよ。」と、コラブリヨワは氣を引き立てた。

「死にやしないと思ふけれど、でも辛いわ。そんな目に會ひたくないよ、私はこれで氣樂に暮して来たんだからね。」

「神さまの思召しには逆らへねえよ。」コラブリヨワは溜息まじりに、「誰だつて逆らへねえよ。」

「あゝ、わかつてるよ。でも辛いね。」

ちよつと沈黙がついた。

「あばずれ女が泣いてるぢやねえか。」コラブリヨワは、向うの端の寢床から洩れて来る變な物音に耳を傾けて言つた。

それはたしかに赤毛の女の噀り泣きだつた。——あれほど罵られ、而もほしくてたまらない酒が貰へなかつたために彼女は泣いた。また、これまでの生涯が罵詈雑言と嘲弄と打擲とを浴せかけられたけであることを思ひ出して彼女は泣いた。フーイチカ・モロデンコフといふ職工との初戀の楽しい思ひ出に耽つて自ら慰めようとしたが、すぐにその戀の結末を心に浮べて彼女は泣いた。戀人は或日酔つて歸つて来て、面白半分に彼女の或皮膚のやはらかいところへ硫酸を塗り、痛さに彼女が身悶えするのを友だちと一緒に眺めて腹をかへて笑つたのである。その戀の結局を思ひ出すと、彼女は自分といふものが可哀さうになつた。そして、誰も聞いてゐるものがないと安心して、子供のやうに鼻を鳴

らし鹽つばい涙をのんで泣きつゞけてゐたのだつた。

「可哀さうだわね。」マースロワは言つた。

「可哀さうだけんど、うつちやつときやえ、だよ。」コラブリヨワは答へた。

三三三

ネフリュードフは、あくる朝、眼をさまして、自分の身に何事か起つたことを意識した。而も、何であるかを思ひ出さないうちに、それが自分にとつて重大な、そして善いことであることがわかつてゐた。

「カチエウシヤ——裁判。」さうだ、虚偽を止めて眞實を語ることにしなければならぬ。

「この朝、偶然にも、久しく待ち侘てゐた貴族長夫人マリヤ・ワシーリエウナからの返事が来た。それはこの際、特に必要にせまられてゐたものだつた。彼女はネフリュードフの絶對自由を許して、ミッシイとの結婚の幸福を祈つて寄越した。

「結婚！ 現在の自分の氣持とは、どんなに縁遠いことか。」

彼は昨日決心したことを思ひ浮べた。——夫に一切を自白して、先方が満足するやうにどんなことでもしようといふ決心だつたが、今日になつて見ると、それは容易に出来ることではなかつた。それに、何も知らないである男を、こんなことを打ち明けることによつて不幸にするのはどうしたものだ

らう？ さうだ、先方から来て訊いたなら一切を話してしまはう。だが、こちらから、わざ／＼出かけて話すのは、——いや、そんな必要はない。」

ミッシイに一切を打ち明けるのも、やはり容易ではない。話せば先方を怒らせるにきまつてゐる、だから、これも、世の中の多くの出来事と同じく、或點は秘密にして置かねばならないのだと彼は思った。しかし、今後彼女の家を訪問しないこと、そして訊かれたなら必ず眞實を話すことの二つを彼は心に誓つた。

次に、カチュウシヤとの關係、これに就いては秘密があつてはならない。「僕は監獄を訪ねよう。一切を打ち明けて許しを乞はう。そして、必要によつては……さうだ、必要によつては彼女と結婚しよう。」と彼は考へた。

この考へ、つまり、道德的見地から、一切を犠牲にして女と結婚しようといふ考へが、また彼の氣持ちをやほらげた。

それから財産の件に就いては、土地私有は不正であるといふ自分の信念によつて處分しよう。たとひ一度に全部を處分することは不可能でも、自己と他人とを欺かないで出来るだけのことをしようと思つた。

かうした氣力を持つて朝を迎へたことは、彼には随分久しぶりだつた。そこで、アグラフェーナ・ベトローウナが部屋に這入つて來た時には、彼は自分でも豫想外だと思ふほどの、きつぱりとした調

子で、この家も、彼女の世話も、最早要らなくなつたといふことを話した。こんな大きな、贅澤な邸宅を構へてゐるのは、こゝで結婚するためといふことが、暗黙のうちにかつてゐた。だから、邸宅が要らなくなつたといふことは、特別の意味をもつて、アグラフェーナには響いた。彼女は、びつくりしてネフリュードフを見上げた。

「いろ／＼ありがたう、アグラフェーナ、いろ／＼お世話になつたね。だが、僕にはもう、こんな大きな家や、澤山の召使はいらなくなつたんだよ。だから、僕の手助けをしてくれるんだつたら、お母さんの時代と同じやうに家財道具を片づけてくれないか。いづれ、ナターシヤが來て整理はしてくれらうと思ふけれど。」と、ネフリュードフは言つた。ナターシヤといふのは彼の姉だつた。

アグラフェーナは首を振つた。

「片づけるんでございますか。だつて直ぐにまた要るぢやございせんか。」

「いや、要らないよ。必ず要らないんだ。」ネフリュードフは彼女が首を振つた意味に答へて言つた。

「ところで、コルネイにも、二ヶ月分の手當をするから暇を出すと云つておくれ。」

「まあ、そんなことをお考へになるなんてあんまりでございませう。外國にでもお行き遊ばすつもりか知れませんが、それにしたつてお屋敷はやはり必要でございませうよ。」

「いや、さうぢやない、外國なんかへ行くんぢやない。行くとなれば方角ちがひだよ。」と言つて彼はさつと顔を赧めた。——「さうだ、これは眞實を話さなきやならん。かくしちやいけない。誰にで

も眞實を話さなきやいけない。」

そこで彼は改めてかう言つた。――

「僕には、彼日、實に不思議な、而も大變な事件があつたんだよ。君はおぼえてるでせう、マリヤ叔母さんのところにゐたカチュウシヤといふ娘を？」

「おぼえてゐますとも、だつて、お針を教へてやりましたもの。」

「さうか、そのカチュウシヤが昨日は法廷で調べられたんだよ。僕は陪審員として出頭してゐた。」

「まあ、可哀さうに！ 何だつて調べられたんでございませう？」

「人殺しだ。――而もみんな僕の仕業なんだよ。」

「あら、何故でございませうか。變なお言葉でございませうわ。」と言つて、アグラフェーナは老いの眼を光らした。

彼女はカチュウシヤ事件を知つてゐた。「いや、何も彼も僕のしたことが原因なんだ。だから、こんな風に僕の計畫がすっかり變つてしまつた。」

「どんな風にお變りになりましたんでせう？」と、微笑をおさへてアグラフェーナは言つた。

「つまり、あの女があゝした道に這入つたのは僕が原因なんだから、その僕は出来るだけのことをして、あの女を救つてやらなきやならないと思ふんだよ。」

「でも、私の聞きましたところでは、あの女はとつくに墮落してしまつてゐたといふぢやございませ

んか。それは誰の罪でせう？」

「むろん、僕の罪さ。だから眞人間にしてやりたいのだ。」

「そんなことは、とても大變でございませうよ。」

「大變でも、それが僕の仕事なんだ。――ところで、あなたは今後どうするか、お母さんの遺言通りに……」

「私のことなど、どうでもよろしうございます。お亡くなりになつた奥様から、それは――御恩を受けてをりますから、今更何もお願ひすることはございません。リーザンカ（縁づいてゐる彼女の姪）がかね／＼来るやうにと申してゐますので、いよくお暇ができましたら、そちらに參るつもりでをります。けれども、あなた様が、こんなことでよく遊ばすのはつまらないぢやございませうか。どなたにもあることなんですよ。」

「でも僕はさう思はない。だからまあ、屋敷を人手に讓つて家財道具を片づけるお手傳ひをしておくれ。僕を叱らないでおくれ。僕は、何彼につけて、あなたには心から感謝してゐるんだから。」

不思議なことは、憎むべきもの、厭ふべきものが自分自身であることを、はつきり認めた瞬間からネフリエードフは、他の人々を嫌ふ心が全然なくなつた。アグラフェーナやコルネイにも尊敬したい氣持を感じた。

裁判所へ出かける連中、同じ街を、同じ辻馬車で通りながら、昨日と今日との自分の變りかたのは

げしいのに我ながら彼は驚いた。つい昨日まで實現されさうに思つてゐたミッシイとの結婚が、今は全然不可能のものになつた。昨日は、自分と結婚することが、彼女にとつても幸福であるとはかり思つてゐたが、今日は、自分は結婚どころではない、單に親しく交はるだけの資格さへもないのだと感じた。

「もし彼女が、自分の本體を知つたなら決して寄せつけることはないだらう。それなのに、自分は昨日も彼女が他の男といちやつくのを見て咎め立てようとしたのだ。またたとへ結婚したところで、一方の女が監獄につながれてゐて今日明日にもシベリヤへ送られるのだとわかつてゐては、どうして幸福どころか、安心することも出来ないだらう。自分のために身をあやまつた女が流されて行かうとしてゐるのに、こちらで若い妻と一緒に祝ひを受けたり披露の訪問をしたり——そんなことがどうして出来るやう……」

彼は自分の心の一變したことを喜びながら最後に考へた。「とにかく第一にしなければならぬことは辯護士に會つて意見を聞くことだ。それから……それから、監獄へ行き、彼女に會ひ、一切を打ち明けることだ。」

カチュウシヤに會つてすべてを話し、その許しを乞ひ、そして、罪の償ひのためには出来るだけのことをする、よければ結婚してもよい、といふことを話す時の光景を、彼は描いて見た。と、一種崇高な氣持になつて、涙がひとりでにじみ出して來た。

三四

ネフリユードフは、裁判所の廊下で昨日の廷吏に出會つたので、宣告済みの囚人はどこに收容されるのか、面會するには誰の許可を受けるのかと訊いた。廷吏の説明によると、方々に收容されるのでこと一定してゐない。面會は検事の許可を得ればいゝといふことである。

「裁判が済んだら私が御案内いたします。検事さんは今こゝにはあません。裁判が済んでからです。さあどうぞ法廷の方へ。直ぐに始まりますから。」廷吏は親切に言つてくれた。

ネフリユードフは禮を述べて陪審員室の方へ行つた。例の商人は今日もいゝ御機嫌で、まるで舊友にめぐり會つたやうな挨拶をした。ゲラシモウイチの慣れくしさや高笑ひも今日のネフリユードフには、ちつとも不快ではなかつた。

今日の裁判は侵入窃盜罪に關するもので、被告は血の氣のない、瘦せて肩のほつそりした二十歳ぐらゐの若者だつた。相棒と一緒にその物置小屋の錠前を毀して時價三ルーブリ六十七コペイカの高額を盗んだ科によつて告發されたといふことである。

證人の一人は、この古席の持ち主で、いかにも癩癩持ちらしい年寄りだつたが、この席はお前の所有のものかと訊かれると、どうしたのか、苦りきつて、しぶくさうですと答へた。ところが、副檢事が、この席を何にするつもりだつたかと改まつて訊くと、彼は、むつとして、「ちえツ、いまく

しい席だ。こんなものは要りもしねえんです。あんなもの、ために、こんな面倒臭えことが起るんだと初めッから知つてゐたら、けして探すんぢやなかつた。それどころか、引つ張り出されないうで済むんなら、十ループリ札の一枚や二枚は附けてやるんだつた。辻馬車には五ループリも取られるし、脱腸とリ・ウマチで、體は弱りきつてゐるんだ。やりきれたもんぢやアねえ。」と不平をならべ立てた。

三五

休憩時間になるのを待つて、ネフリユードフは、再び法廷へ引き返さぬつもりで廊下に出た。

検事室を聞いて彼は直ぐに訪ねた。小使は検事が忙がしいといつて取次がうともしないので、彼は構はず、扉口へつかくくと進んで行つた。すると、そこに役人がゐたので、自分は陪審員であることと非常に重大な用件があることを話して、取次いでくれるやうに頼みこんだ。公爵といふ肩書と、立派な服装とのお蔭で、ネフリユードフは面會を許されることになつた。

検事は迷惑らしく立つたまゝで接した。

「どういふ御用件ですか。」

「私は陪審員、名前はネフリユードフと申しますが、ぜひ被告のマースロワに面會させていたゞきたいのです。」

ネフリユードフは、急いできつぱりと言つた。そして、自分の生涯を一變してしまふ道程に一步踏み出したことを感じた。顔がほてつた。

「マースロワ？ あ、なるほど、毒殺の件でしたね。」検事は落ちついてゐた。「何のために御面會なさるんですか。それがはつきりしなければ許可するわけには参りません。」

「私一身上の重大な用件がありました。」

「さうですか。」検事は眼をあげて改めてネフリユードフを仔細らしく見た。「この事件はもう宣告があつたんでせうね。」

「え、昨日四年間徒刑といふ不當な宣告を受けました。實は無罪なのです。」

「さうですか、昨日宣告を受けたとすると、正式の宣告が發表されるまでは未決監にゐる筈です。一定の面會日がありますから、そちらに行つておたづねになつたら宜しいでせう。」検事は、ネフリユードフのマースロワ無罪説なんかには何の注意も拂はないで言つた。

「しかし、私は今直ぐにでも面會したいのです。」ネフリユードフは言つた。いよく來るところまで來たといふ感じがして顎がたたくと震へた。

「どうしてです。」検事は眉をあげて辛抱しきれぬといふ風を示した。

「罪もないのに不當な宣告を受けたからです。而もその責任は私にあるのです。」ネフリユードフは言はでものこと、思ひながら言つた。

「それはまたどうして、す？」

「實は私があの女を誘惑して、今のやうな境遇におとしましたのです。私が誘惑さへしなかつたら、あの女もこんな目には會はなかつたらうと思ひます。」

「でも私には、それがために面會なさるといふわけがわかりません。」

「それは、——つまり私は、あの女の後を追つて行きたいのです。……そして結婚したいのです。」
ネフリュードフの眼にはまた涙がにじんで來た。

「え！ どうもこれは！ 實に突飛なお考へですね。え、と、たしか、あなたはクラスノベルスク地方の自治會の議員をおつとめの筈でしたね。」

「検事は噂に聞いてゐたネフリュードフと、この突飛なことを言ひ出したネフリュードフとを、思ひ比べながら訊いた。

「失禮ですが、そんなことは私のお願ひと全然無關係ぢやありませんか。」ネフリュードフはかつとして答へた。

「むろん關係はありません。しかし、あなたの御希望はあんまり意外で、とても常識では考へられませんか。」

「よろしい。とにかく面會は許していただけるでせうか。」

「面會ですか。今、許可證を差上げませう。お掛け下さい。」

検事はテーブルに寄つて腰を下しペンを執つた。ネフリュードフは立つたまゝであた。

「どうぞ、お掛け下さい。」

認可證を渡しながら検事は好奇心に充ちた眼で、しげくとネフリュードフを見た。

「もう一つ申上げて置きますが、私は今後出廷することが出来なくなりました。」

「それでは、御存知でせうが、その理由書を法廷へお出しにならなければいけません。」

「理由といふのは、——私は裁判そのものを無益、且つ不道德であると認めるからです。」

「なるほど。」検事はかすかな微笑を浮べて言つた。そんな風なことは、わかりきつた單なるお笑ひ草に過ぎないといふことを、その微笑によつて示したつもりらしかつた。「なるほど、しかし、私は検事ですから、あなたの御説に賛成することは出来ません、お察し下さい。で、それは法廷の方へ申されると宜しいのです。法廷ではあなたの御説を正當か正當でないかを決し、もし後者ならば罰金を請求するでせう。とにかく、法廷の方へ……」

「私はもうこゝで申上げましたから、どこへも持つて行きません。」ネフリュードフはむつとして言つた。

「さうですか、ではさやうなら。」検事は、こんな變な訪問客からは一刻も早く遁れたらしい容子で、こくりと頭を下げた。

ネフリュードフが立ち去ると、入れ代りに這入つて來た同僚が訊いた。

「今話してたのは誰だい？」

「知つてるだらう、ネフリュードフだよ。クラスノベルスクの地方自治會で、いろく珍説ばかりも
ち出してた男さ。ふッ、あれで陪審員なんだよ。何でも、昔だまして棄てた女が徒刑の宣告を受けた
ので、今からその女の後を追つて結婚しようツてんだ。」

「そんなことがあるもんか。」

「だつてさう言つてたよ、而も實に突飛な興奮のしかたでね。」

「へえ、——現代の青年には、どこか非常識なところがあるよ。」

「だつて、あの男はそんなに若くもないぢやないか。」

三六

ネフリュードフは検事のところから直ぐ未決監へ行つた。しかし、そこにはマースロワはあなかつ
た。古い移送監の方だらうと典獄は言つた。

道がかなり遠いので、移送監に着いた時はもう夕方近かつた。門を這入らうとすると門衛が呼びと
めてベルを鳴らした。それに應じて看守が出て來たので、検事の面會許可證を出して見せると、典獄
の許可がなくては通すことが出来ないといふことだつた。

ネフリュードフは典獄のところへ行つた。階段を上つてあるうちに、向うから、何だか複雑なピア
ノの曲が聞えて來た。片眼に繻帯をした女中があらはれて、典獄は留守だと言つた。扉の向うのピア
ノは、誰でも聞き飽きてあるリストの狂躁曲で、なか／＼上手ではあつたが、同じ一節ばかりを弾き
つゞけてゐた。或ところまで來るとまた根氣よく初めから繰返すのだつた。

「直ぐお歸りになりますか。」

「伺つて參りませう。」と言つて女中は姿を消した。

盛んにあばれてゐた狂躁曲が不意に止んだかと思ふと人聲がはつきり聞えて來た。

「お留守で今日は歸りませんと言つておやりよ。入り代り立ち代り、うるさいツちやない。」

それは女の聲だつた。狂躁曲がまた始まつたが今度は忽ち止んで椅子をすらす音がした。くさく
したピアノリストが飛んでもない時刻にやつて來たうるさい訪問客を自ら吐りつけようと思つたに違ひ
なかつた。

「お父様はお留守よ。」

奥からあらはれてかう言つたのは、病身らしい蒼ざめた娘だつた。でも、立派な服装をした青年を
眼の前に見ると、急に調子をかへて、「どうぞ、お這入り下さいませ……。どんな御用でございま
せうか。」

「實は或囚人に面會したいのです。」

「國事犯でございませうか。」

「いえ、さうぢやありません。検事の認可證を持つて参りました。」

「さうですか。でも私にはわかりませんし、お父様は留守ですし……何でしたら典獄補にお話しなすつて御覧なさい。まだ事務所にある筈ですから。あなた様のお名前は何？」

「ありがたう。」ネフリユードフは問ひに答へずに出て行つた。

庭に出ると、短い口髭の若い役人がゐたので、典獄補の居どころをたしかめたところ、幸、その役人が典獄補だつた。しかし、彼は未決監への認可證では駄目だし、それに時刻もおそいから明日来た方がいゝと言つた。

「明日の十時には一般の面會が許されます。普通面會所であり、典獄が許せば事務室であり、御自由に面會が出来ます。」

とうとうネフリユードフは、その日は會ふことが出来ないで家に歸つた。歸ると直ぐに、久しく手に取らなかつた日記を出して、或二三行を拾ひ讀みしてから、新しくつぎのやうにペンを走らした。「自分は二年間日記を書かなかつた。そんな子供らしいことは再びしまいと思つてゐた。しかし、これは子供らしいことではない、自分自身との對話である。誰の内心にも生きてゐる眞に神聖な自我との對話である。過去二年間、この自我は眠つてゐたから自分には對話の相手がなかつた。しかるに、四月二十八日、自分が陪審員として出廷した際の意外な事件は自分の自我を覺ましてくれた。自分が誘惑して棄てたカチュウシヤが囚人服を着てゐるのを自分は見た。奇妙な過失と自分の不注意とのた

めに彼女は徒刑を宣告された。自分は検事のところへ行き、更に監獄に行つたが、面會は許されなかつた。しかし、自分は、彼女に會ひ、彼女に懺悔し、彼女に犯した自分の罪を償ふためには出来るだけの努力をするつもりである。神よ救ひたまへ！ 今、心は安らかであり、全身は喜びに波うつてゐる……。」

三七

その夜、マースロワは、眼をぼつちり開いて、扉を見つめながら、いつまでも考へてゐた。——向うに行つても囚人なんかとは一緒にならないで、何とかして役人が書記か看守かと馴れ合ふやうにしよう。そのためには瘦せないやうにしなければ。瘦せちまつたらもうおしまひだから……。

彼女は辯護士が自分を惚れろと眺めてゐたこと、裁判長やその他の男たちもやはりさうだつたことを思ひ出した。それをきつかけに彼女はいろいろのことを記憶に浮べたが、ネフリユードフのことだけは、ちつとも思ひ出さなかつた。

彼女は今まで、子供のころのこと、少女のころのこと、ネフリユードフとの戀のこと、などを少しも追憶したことがなかつた。それはあまりに悲しかつたからだ。それ等の記憶は、魂の奥底のどこかに、そつと觸れずに秘められてゐたのだ。ネフリユードフのことはすつかり忘れて夢にも見たことがなかつた。法廷に於いて彼に氣づかなかつたのは、一つには、最後に會つた時の彼が軍服を着て、

ほんのちよつぱり口髭があつたけだつたのに、今は頭もや、禿げて顎鬚まで生やしてゐたからでもあるが、またでんで彼のことが念頭になかつたからでもあつた。

彼が戦地からの歸途、叔母たちの家へ寄らずに、汽車で素通りしてしまつた夜に、カチュウシヤはネフリユードフにまつはる楽しい記憶を、すつかり葬つてしまつたのである。彼女は、その時自分の妊娠したことを知つてゐた。ネフリユードフが歸つて来てくれるだらうと、あてにしてゐたので、胎内の子供はちつとも苦にならなかつた。そして時々、身内に感じる柔かい不意の胎動にぎくりとするのだつた。しかし、その夜を境としてすべてが一變してしまつた。胎兒は單なる重荷になつてしまつた。

叔母たちもネフリユードフをあてにしてゐたので、ぜひ寄つて行くやうに言つてやつた。しかし彼は電報でことわつて來た。期日までにベテルブルグに着かねばならないからといふのだつた。カチュウシヤはそれを聞いて、停車場に行つて會はうと決心した。汽車は夜の二時にそこを通ることになつてゐた。カチュウシヤは主人たちの寝る手傳ひをすましてから、コックの娘のマーシユカを無理に誘つて、古靴をはき、ショールを頭からかぶり、裾をはしよつて停車場へ急いで行つた。

風にまじつて雨の降る、なま暖かい秋の夜だつた。ざざアと、大粒のが一しきり降つたかと思ふと直ぐに止み、止んだかと思ふとまた降り出した。野道さへ暗くて、はつきりわからないくらゐだつたから、森の中に這入ると、てんで見當もつかなかつた。で、よく知つた道ではあつたが、彼女は道に

迷つてしまつた。そしてやうやく小さな停車場に辿りついた時には、残念ながら三分間の停車時間が過ぎて、第二のベルが鳴り止んだところだつた。

カチュウシヤはプラットフォームに駆けこんだ。直ぐに一等車の窓に、ネフリユードフの姿を見つけた。煌々と輝いたその車室には、二人の若い士官が天鵞絨張りの席に向ひ合ひに坐つてカルタをしてゐた。その真中のテーブルには、ふとい蠟燭が二本立つてゐた。

彼はきちんとした乗馬服を着て、席の背當に凭れながら何か笑つてゐた。それを見るなり、彼女は凍えた手で窓を叩いた。とたんに、最後のベルが鳴り、汽車は後に一揺れして、次第に一輛づつ動き出した。相手の士官が、カルタを手にしたまゝ立ち上つて外を見た。

彼女はまた窓を叩いて顔を押しつけた。車室の窓が前に進んで行く、そして、彼女はその中を覗きこみながら、それにつれて歩き出した。士官は窓を下さうとしたが出来なかつた。ネフリユードフがその士官を押しやつて自分で下しはじめた。

汽車が速くなるにつれて、カチュウシヤも急がないと間に合はなくなつた。ますます速くなつて窓がびつたり閉つた。と、その時、車掌が、彼女を突きつけて車に飛び乗つた。カチュウシヤは、雨に濡れたプラットフォームの板敷の上を汽車と並んで駆けつゞけてゐたが、フォームが盡きると、今にも轉びさうになりながら地面にひらりと下りた。

彼女は駆けつゞけた。——一等車はとつくに過ぎ去り、つぎに二等車が行き、また、くまに三等車

が傍を走り去つた。あゝ、それでも彼女は駆けつづけた。信號燈のついた最後の車輛が過ぎ去つてしまつた時、彼女はもう給水タンクのところまで来てゐた。びゅう／＼風が吹きつけてシヨールを煽り上げ、濡れた裾が足にからみついた。

とろ／＼シヨールは吹き飛ばされてしまつたが、それでも彼女は駆けつづけた。

「をばさん、シヨールが飛んだわよ。」やつと後からついて来た小娘が叫んだ。

カチュウシヤは立ちどまり、振り返つて両手で頭を抱へて泣き出した。

「行つちまつた！」

あの方はあんな眩しい一等車の中で、天鵞絨の椅子に凭れて、面白をかしくカルタをしたりお酒を飲んだりしてゐる。私はかうして暗闇の中で、泥にまみれ、風に吹かれ、雨にさらされて泣いてゐる、と思ひながら、彼女はべたりと地べたに坐つてしまつた。小娘はびつくりして濡れた着物の上から彼女を抱きしめた。

「お家へ歸らうよ。」と彼女は言つた。

「汽車の通り過ぎる時に、——さうだ、車の下へ。それでおしまひなんだ。」

カチュウシヤは小娘には構はないで、こんなことを考へてゐた。しかし、さうしようと決心した時に、非常に昂奮した後のおちついた瞬間に常にあることだが、胎兒がびくりと動き、しづかに伸びをし、何かしなやかな尖つたもので、ちく／＼と押した。と、さつきまではとても生きてはゐられない

と思ふほどに辛かつたことも、男に對する悲しい氣持ちも、死んでなりとも復讐したいといふはかない望みも、——すべてがどこかへ消えてしまつた。彼女は次第におちつき、しづかに立ち上つて、頭からシヨールをかぶつて歩き出した。

雨に濡れ、泥にまみれ、へと／＼に疲れて家に歸つたが、その日以後、彼女を今日の運命に落してしまふやうな變化が生じたのである。この恐しい夜を境にして彼女は神をも善をも信じなくなつた。それまで、彼女は、自分でも神を信じ、また人々も神を信じてゐるものと思つてゐた。ところがその夜以來、誰一人神を信じてゐる者はない、神及び神の掟に就いて言はれてゐることは悉く、ごまかしてあり、でたらめであると思ふやうになつた。彼女が愛し、また彼女を愛してゐたネフリードフは、一旦弄んでからは全然見棄て、しまつた。彼女の戀を裏切つてしまつた。而もその彼が彼女の知る限りに於いては最も立派な人間である。他のものは尙々劣つてゐた。その後につたさま／＼の事實によつて、一歩々々この信念は強められた。ネフリードフの叔母たち、あの敬虔な人たちでさへ彼女が今まで通りに奉公が出来なくなると暇を出してしまつたではないか。その他の人々に至つては、女はすべて彼女を金儲けの道具にしようと企み、男はすべて彼女を享樂の目的物としか考へなかつた。老署長をはじめ、監獄の看守に至るまで悉くさうだつた。「世の中に快樂以外のことを考へてゐるものは一人もゐない。」と彼女は確信してしまつた。

人は自分のため、自分の快樂のためにのみに生きてゐるので、神や正義に就いての言葉は皆ごまか

しであるに過ぎない。時に疑問が起つて、何故皆が互ひに傷つけ合つて共に苦しまなければならぬのだらうか、何故そんな風に世の中は悪く出来てゐるのだらうか、と考へることもあつたが、そんな問題には深入りしないのが一番だと彼女は思つた。味気なさを感じて、悲しくなつたら煙草を吹かすか酒を飲むか、それともい、男でもつくつて楽しむか、さうすれば過ぎ去つてしまふのだ、と彼女は考へた。

三八

翌日曜の朝五時、女囚監房の廊下に笛が鳴りひびくと、とつくに眼を覺ましてゐたコラブリヨワがマースロワを起した。

「あゝ、徒刑囚か！」と思ふと、マースロワはぞつとした。空気が恐しく臭かつた。もう一度眠つて忘却の世界に這入りたかつたけれど、怖氣がついてゐるので、どうしても眠れなかつた。で、起きて足を揃へて坐り、あたりを見まはした。子供が寝てゐるきりで、大人は皆起きてゐた。

マースロワが髪を始末をやつとすました頃、典獄が部下をつれてやつて來た。

「點呼に出るんだ。」と看守が叫んだ。

方々の監房から女囚たちが、ぞろ／＼と出て、二列に廊下に並んだ。後列のものは前列のもの、肩に手をかけてゐた。そして點呼を受けた。

點呼がをはると、一同は女看守に連れられて教會堂へ行つた。マースロワとフォードシヤとは百人あまりの列の中ほどにあつた。誰も白いスカート、白いジャケツ、白い頸巻をしてゐる中に、四五人だけ色物を着けた女がまじつてゐたが、これはシベリヤへ送られた亭主に會ひに行く子持ちの女房連だつた。

階段の曲り角で、マースロワは敵のボーチコフが前の方にあるのを見つけたので、その憎々しい顔を指してフォードシヤに教へた。階段を下りきると、皆しやべるのを止めて、十字を切つたり禮拜したりしながら、びか／＼眩しい、がらんとした會堂に這入つて行つた。そして、どや／＼と右側に寄り集まつた。ついでに男囚が這入つて來た。大きな咳拂ひをして左側と中ほどに陣取つた。

しばらくの間、會堂内は静かで、時々、咳拂ひしたり涙をすゝつたりする音と赤兒の泣聲と鎖の音とが聞えるくらゐのものであつた。が、やがて、申ほどの囚人が動き出し、互ひに押し合つて會堂の真中に一筋の道をつくつた。典獄がその道をとほつて皆の前に立つた。

三九

ネフリユードフは朝早く家を出た。近在から來たらしい百姓が、車を曳いて「牛乳、牛乳、牛乳」と、一種特別の聲を張り上げて横町を歩いてゐた。

昨日、春の暖かい雨がはじめて降つたので、敷石のないところには、雑草が青々と光つてゐた。庭

の樺の木は緑の綿をばらまいたやうに見え、野櫻や白楊はい、匂ひのする長い葉をひろげてゐた。日曜で工場は休みなので、男はさつぱりした服にびかくした靴をはき、女は派手な絹布を頭にまき、硝子玉で飾つた服を着て、早くから酒場の戸口に群れてがやくしてゐた。巡査たちは眠氣がましになるやうな事件が起ればい、と思ひながら立番をしてゐた。子供は犬とふざけて駆けまはり、附添ひの保母たちはベンチに掛けて面白さうに何かしやべつてゐた。

ネフリユードフの辻馬車は監獄の前までは行かずに、少し手前の曲り角でとまつた。

その曲り角は、監獄から百歩ばかりのところだつたが、そこには數人の男女が手に小さな包みを持つて立つてゐた。右側には低い木造の家が幾棟か並び、左側には看板を吊るした二階家があつた。監獄獨特の煉瓦造りの大きな建物は正面に聳えてゐたが、うっかり近寄ることは出来なかつた。衛兵が始終前を行つたり來たりしてゐて、通り抜けようとするものがあれば吐り飛ばすからだつた。

今言つた右側の家の門のところのベンチに、恰度衛兵と向ひ合つて、金筋入りの制服をつけた手に帳簿を持つた看守が腰を下してゐた。會ひたいもの、名を面會人が述べるのを控へるのがその仕事だつた。ネフリユードフも傍に行つて、カテリーナ・マースロワの名を言つた。

「何故まだ這入れないんですか。」と、ネフリユードフは訊いた。

「今祈禱です。すみ次第這入れますよ。」

ネフリユードフはそこを離れて待つてゐる人たちの仲間入りをした。その時、ぼろ／＼の着物に皺

くちやな帽子をかぶつた素足の男が飛び出したかと思ふと、いきなり監獄目がけて駆け出した。

「待て！ どこへ行くんだ。」と、衛兵は剣突をくはせた。

「何言つてやがるんでえ。」その男はちつとも驚かずに言ひ返した。「いけねえと言ふんなら、待つてやらうよ。だが、大將面をして吠えなくつたつてい、だらう。」

皆が共鳴したらしくどつと笑つた。面會人は大抵見すばらしい風をしてゐたが、一二上品な人もゐないではなかつた。ネフリユードフのとなりゐたのは、でつぶり肥つた緒ら顔の、きれいに鬚を剃つた人で、見たところ下着でも這入つてゐるらしい包みを提げてゐた。こゝへは初めて來たのかと訊くと、いや日曜毎に來ると答へたのをきつかけにして、ネフリユードフは、その人といろ／＼話し合つた。

やがて面會が許されることになつた。門を這入つたつつきは、小さな窓々に鐵格子のはまつた大きな圓天井の部屋で、集合室と呼ばれてゐた。ネフリユードフはこの部屋に大きなキリスト磔刑の聖像があるのを見てびつくりした。

「これは何のためだらう？」彼は無意識に、聖像と釋放とを結びつけて考へたが、聖像と監禁とを結びつけて考へることは出来なかつた。

彼は急ぐ面會人を先にやつて、自分はやつくり歩きながら、こゝに收容されてゐる人々に對する恐怖のまじつた複雑な感情を味はつてゐた。集合室の出端で看守が何か言つたやうだつたが、彼は自

分の物思ひに氣をとられてゐたので、別に注意もしないで、人のなだれにつれて進んでゐるうちに、いつのまにか男囚監の方へ来てしまつた。

ネフリユードフは皆をやり過して置いて最後に面會室に這入つた。まづ驚いたのは、數百の聲が耳を聳するばかりの大きな響きとなつてゐることだつた。初めは何が何だか譯がわからなかつたが、近づいて見ると、彼等面會人は、砂糖にたかる蠅そのまゝに、部屋を兩斷してゐる金網にびたりと身體をすり寄せるのだつた。彼はなるほどと思つた。つまり、この面會室は床から天井に達する、そして或間隔のある二枚の（一枚ではない）金網によつて二つに區切られてゐた。そして、七呎ばかりある金網と金網との間には、數人の看守、金網の向う側には囚人、こちら側には面會人があるといふ風になつてゐた。兩者の間には、二枚の金網と七尺ばかりの距離とがあるもので、物を渡すことはむろん、眼の悪いものは顔をはつきり見ることも出来ない。話をするにしても聞きとつて貰ふためには大聲で呶鳴らなければならなかつた。

金網の兩側にゐるんな顔がびたりとくつついてゐる。——妻の顔、夫の顔、父の顔、母の顔、子供の顔。それが互ひに見合はうと話しさうとあせつてゐた。

しかし、誰しも自分の相手によく聞きとつて貰ひたいので、いきほひ聲を張り上げて他人の聲を消さうとした。その結果、ネフリユードフが驚いたやうな、物すごい響きになるのだつた。實際、相手の言葉を聞き分けることは不可能で、たゞその顔つきによつて判断するほかなかつた。

ネフリユードフはそれをしばらく見てゐて、自分もかういふ状態のもとに話をするのかと思ふと、かういふ状態を作り且つそれを強ひる人々に對する反感がむらくと起つた。而も、かうした恐しい状態に置かれながら、誰一人、この人間の感情に加へられた暴虐に對して憤りを感じてゐるものはないらしかつた。これは驚くべきことである。看守も典獄も面會人も囚徒自身も、それが當然であると認めてゐるにちがひなかつた。

ネフリユードフは五分間ばかりこの部屋にゐた。そして、いかに自分が無力であり、いかに世の中のすべてと相容れないかを考へて妙に憂鬱になつて來た。

四〇

「しかし、こゝへ來た目的は果さなければならぬ。」彼は勇氣をふるひ起して言つた。「まづ何をしようか。」

彼はあたりを見廻した。役人の制服をつけた小柄な男が群集のうしろを行つたり來たりしてゐたので彼は傍に寄つた。

「少々お伺ひいたしますが、女囚はどちらにゐるのでございませうか。面會はどこでしたら宜しいのでせう？」彼は思ひきつて丁寧に訊いた。

「女囚の方へいらつしやりたいんですね。」

「さうです。女囚の一人に會ひたいのです。」

「集合室でおつしやるとよかつたんですが。——で、面會なきものは何といふ女ですか。」

「カテリーナ・マースロワと申します。」

「國事犯でせうか。」

「いゝえ、そのたゞ……」

「わかりました。宣告済みですか。」

「一昨日宣告がありました。」

ネフリュードフは自分に好意を持つてゐるらしいこの男の機嫌を害ねてはならないと思ふので、あくまでもやさしく丁寧な調子でつづけた。

「女囚の方なら、どうぞこちらへ。シードロフ君、この方を女囚の方へ案内してくれたまへ。」

役人はネフリュードフの風采から見えて立派な人にちがひないと心にきめたらしかつた。

ネフリュードフには、一切が不思議なものに思はれた。が、特に不思議なのは、この建物の中で残酷なことを平氣でしてゐる多くの人々——例へば典獄だの看守長だのに感謝しなければならぬこと恩を感じなければならぬことだつた。

看守はネフリュードフを案内して廊下に出て、真直に向う側の扉を開けた。そこが女囚の面會所だつた。

この部屋も同じく二枚の金網で二つに區切られてゐたが、遙かに狭くて、囚人の數も面會人の數もすつと少なかつた。しかし、皆の叫び騒ぎ立てる聲も金網と金網との間に看守が見張りをしてゐるところも、男囚の面會所とちつとも變らなかつた。たゞ看守は女で、袖に金筋と青い縁のついたジャケツを着、青い帯をしめてゐた。

こゝでも、やはり金網の兩側に面會人と囚人とが、びつたり顔をくつつけてゐた。言ふまでもなく、こちら側はいろんな服装をしたこの町の人々、向う側は白い獄衣の囚人だつた。

ネフリュードフは向うの女囚たちの背後の窓際に別に一人の女が立つてゐるのを見た。彼女、——ちらと見、彼はそれを知つた。心臓がどきどきすると同時に、呼吸がとまつてしまふやうな氣がした。最後の時がちがづいたのだ。彼は金網に顔を寄せて、はつきりと彼女の顔を見た。彼女は青眼のフードシヤが會ひに來た夫と話してゐるのを、そのうしろに立つて、にこくと聞いてゐた。彼女は腰を引き絞り胸を高くふくらました白い服を着て、頭にまつた頸卷の下から、眞黒いちぢれ毛をはみ出してゐた。

「もうすぐだ。どう言つて呼んだらいゝかしら？ それとも向うからやつて來るかな？」と彼は思つた。

「あなた、御面會は？」金網の間をあちこちしてゐた女看守が寄つて來て訊いた。

「カテリーナ・マースロワです。」ネフリュードフは口ごもりながら答へた。

「マースロワ、どなたか面會だよ。」看守は叫んだ。彼女はあたりをぐるりと見て、顔をうしろにそらし、胸を突き出し、例のおちついた容子を見せながら、二人の女囚の間を分けて金網近くに來た。そして、げんさうにネフリュードフを見つめた。しかし服装から推して、金持だと思ふと、につこりして言った。

「あなたですの？」

「僕は……僕は、會ひたかつた……君に會ひたかつた……僕は……」彼は聲を張り上げないで言った。

マースロワには、ネフリュードフの言葉が聞えなかつた。が、物を言ふ時の彼の表情が、彼女に思ひ出したくないことを思ひ出させた。と、たちまち、微笑が消えて、彼女の顔には深い惱ましげな皺が寄つた。

「ちつとも聞えませんが。」彼女は眉をしかめて言った。

「僕が來たのは……」ネフリュードフは言ひかけて咽喉がつかまつてしまつた。

「さうだ、自分は義務を果しつゝあるのだ、——懺悔してあるのだ。」と思ふと涙が溢れて來た。彼は両手でしつかりと金網につかまりながら込み上げて來る嗚咽をおさへようとした。

横の方では誰か、「あいつが達者なら、わつしは來やしねえよ。」と呶鳴つてゐた。向うからは、「ほんとに、私は何も知らないんだよ。」と女囚の一人が金切聲をあげてゐた。

マースロワは男が興奮してゐるのに氣がついて、それがネフリュードフであることを知つた。

「あッ、あなたは……いえ、見覚えがありません。」彼女はネフリュードフを見ないで言った。一旦赤味を帯びた顔がさつと曇つて來た。

「僕は君にあやまらうと思つて來たんだ。」

彼はどぎまぎして、あたりを見まはした。しかし直ぐに、はづかしくなるのが當然だ、それがいいのだ、それに堪へなければいけないのだ、と考へて、更に大きな聲を張り上げた。——

「許してくれ。僕が悪かつた。」

マースロワは、その心持ち斜視の眼差しをちつと彼の顔に注いだまゝ、身じろぎもしないで立つてゐた。

彼は咽喉がつかまつてそれ以上話しつづけることが出來なかつたので、そつと金網の傍を離れた。

さつき、彼をこちらに廻してくれた例の役人が、興味をそゝられたものと見えて、この面會所へ這入つて來た。そして、ネフリュードフが金網から離れてゐるのを見て、何故話をしないのかと訊いた。ネフリュードフは鼻をしくしく鳴らしてゐたが、つとめて平氣を装ひながら、「この金網が邪魔になりますので……」と言つた。

役人はちよつと考へてゐた。

「では、しばらくこゝへ出して上げませう。……マリヤ・カルロウナ」と彼は女看守を呼んだ。「マー

スロワを外へ出してくれ。」

四一

マースロワは横の戸口から出て来た。しづかな足どりでネフリユードフの前にびたりととまると、ちつと顔を見上げた。

「ここでお話しなさい。」と役人は言つて立ち去つた。ネフリユードフは壁際のベンチのところに行つた。

マースロワは何か訊きたさうに役人を見たが、直ぐにネフリユードフについでベンチの方へ進み、竝んで腰を下した。

「君としては僕は許せない人間だらう、それは僕もよく知つてゐる。」と言ひかけて彼はまた涙がこみ上げて来た。「しかし過去のことはどうにも出来ないから、現在自分の力の及ぶかぎりのことをして上げたいと思つてゐる。だから……」

「ここにあることがどうしてわかりましたの？」彼女は問ひには答へないで言つた。男の方を見てゐるやうでもあり、見てゐないやうでもあつた。

「神よ、お助け下さい。どうすればいいのかお教へ下さい！」ネフリユードフは彼女の變りはてた寂しい顔を見つめながら考へた。

「僕は一昨日陪審員として出廷してたんだよ。ちつとも気がつかなくつたかね。」

「え、気がつきませんでしたわ。そんな間はありませんでしたもの。」

「子供が生れたつてことだね。」ネフリユードフは顔の赧くなるのを感じた。

「ありがたいことに、直ぐに死んでしまひました。」

マースロワは視線を變へて、ぶつきらぼうに答へた。

「ありがたいことに？ 何故？」

「だつて私も死ぬか生きるかの境でしたもの。」

彼女は眼を伏せたまゝで言つた。

「どうして叔母さんたちは暇を出したんだらう？」

「身持ち女を置いとく方はあませんわ。感づかれると直ぐに出されました。だけど、そんな話、したつて話らないぢやありませんか、私、何もおぼえてやしないし、それに皆すんでしまつたことでものね。」

「いや、まだ濟んではゐないよ、僕は罪の償ひをしたいのだ。」

「償ふものはございませぬわ。皆過ぎ去つてしまひました。」

彼女は意外にも顔をあげて、彼を見つめ、不気味な、誘ふやうな、而も悲しうな微笑を浮べた。マースロワは彼と再び會ふことがあらうとは思つてゐなかつた。殊に今、こんなところで會はうと

は夢にも思はないことだった。だから、初めてネフリユードフだとわかった時、彼女は、その思ひ出しとくなく記憶が再び直ぐには浮ばなかつた。まづ最初、彼女は、愛し愛された美しい大學生によつて眼前に開かれた世界——あの感情と思想との新しい不思議な世界を、漠然と思ひ出した。つぎに、あの夢のやうな楽しさを思ひ、さらに、どうしてもわからない男の冷酷無情、その後の屈辱苦惱のすべてを思ひ出すと、彼女は胸が疼くのを感じた。

彼女はこゝに竝んで腰かけてゐる人間を、はじめは嘗て自分の戀した青年と結びつけて考へた。けれどもそれは苦しかつたので、切り離してしまふことにした。だから今の彼女にとつては、この立派な風采をした紳士は、もはや、むかし戀したネフリユードフではなく、必要に應じて彼女のやうな人間を利用し、また彼女のやうな人間に利用される人々の中の單なる一人たるに過ぎなかつた。

彼女は黙つて、この男を最もよく利用する方法を考へてゐた。

「皆済んでしまつたことです。」彼女は言つた。「今度私はシベリヤへ送られることになりました。」

「知つてるよ。無罪のこともわかつてゐる。」

「え、私、泥坊でも人殺しでもありませんもの。これもみんな辯護士がよくなかつたからだといふ話ですわ。でも上訴の手續きをしたいと思ひますの。随分お金はかゝるつてことだけれど……」

「さうだ、それがいい。辯護士にはもう話してあるよ。」

「お金を惜しまないで下さいね。い、辯護士がほしいと思ひますわ。」

「出来るだけのことをして上げるよ。」

ちよつと話がとぎれた。彼女はまたさつきのやうな微笑を洩らした。

「あの、お願ひがあるんですが……よかつたら、お金を少し……どつさりでなくつても……十ループリくらゐ。」と彼女は不意に言つた。

「よし。」ネフリユードフの方がまごついて紙入れを探した。

彼女は部屋を行つたり來たりしてゐる役人をちらと見て、「あの人の前では出さないで下さい。取り上げられてしまひますから。」

ネフリユードフは役人があちら向きになつたのを見すまして紙入れを出したが、紙幣を渡さうとする

るとたんに、くるりとこちらに振り返つた。あわて、彼は紙幣を握りつぶした。

「この女は死んでしまつた。」

嘗ては美しかつたが今は汚れて腫れつばいその顔を見ながらネフリユードフは考へた。その腫は紙幣を握りつぶした手と、役人の容子とを窺つてゐるに過ぎないのだつた。彼はどうしていゝかわからなかつた。

「こんな女をどうすることも出来やしないよ。」と或聲が彼に私語いた。「それはお前の首に石を吊るすのと同じことだ。お前は濡れてしまふにきまつてゐる。だから、そこに持つてる金を全部やつて、きれいさつぱりと、お別れにしる。それが一番いゝのだ。」

しかし、それと同時に、或重大な變化が内心に起りつゝあることを彼は感じた。言はゞ内面生活が今一步のところでも左にでも轉がり落ちるやうな状態にあることを感じた。そこで彼は、昨日魂の奥底に感得した神に再び呼びかけて、その助けを求めた。と、神は即座に答へてくれた。そこで彼は今直ぐに一切を打ち明けようと決心した。

「ねえ、カチュウシヤ、僕はお前に許してもらはうと思つて來たんだよ。それにお前は何とも返事をしてくれない。許してくれたんだらうか。」

彼女は聞いてゐなかつた。そして役人が向うに行つた際に、素早く手を伸ばして紙幣を引つたくり帯の下に隠してしまつた。

「何だか變なことをおつしやつてゐますわね。」彼女は馬鹿にしたやうに軽く笑つて言つた。

「彼女の内心には自分に敵意を抱く何ものかが潜んでゐて、それが現在のまゝの彼女を護らうとし、自分が彼女の内心に觸れるのを妨げようとしてゐるのだ。」と、その時、ネフリュードフは感じた。しかし不思議なことに、この感じは決して不快ではなかつた。そして、彼は或新しい特殊な力によつて一層彼女に引き寄せられた。マースロワを精神的に目覺ますことは非常に困難である。けれども、その困難であることが彼の氣に入つた。

彼は今、これまで誰に對しても感じなかつたものを彼女に對して感じてゐるのだつた。この感情の中には全然利己的なものを含んでゐない、自分のためには何物をも求めてゐない、たゞ彼女が早く目覺めて昔のやうな女になつてくれ、ばい、と願つてゐるばかりだつた。

「カチュウシヤ、何故そんな風に言ふの？ 僕はお前を知つてるよ、お前をおぼえてるよ。昔の叔母さんの家の……」

「昔のことなんか思ひ出したつて始まりませんわ。」彼女は素氣なく言つた。

「僕は自分の罪を償ふために思ひ出してゐるんだよ。」ネフリュードフは彼女と結婚しようと思つてゐることを話さうとしたが、視線がぶつかつてからは、どうしても後をつゞけることが出来なかつた。彼女の瞳には、恐ろしい、粗野な、敵意のこもつた光りが漂つてゐた。

面會人はもうそろ／＼歸りかけてゐた。役人が來て時間の切れたことを告げた。

「さやうなら。まだ話すことが澤山あるが、今日はもう駄目だ。またやつて來るよ。」彼は手を差し伸べた。

マースロワは放免されるのを待つてゐたらしい容子で立ち上つた。

「すつかりお話しになつたんでせう。」

手を出したけれども彼女は握りしめなかつた。

「いや、またどこか、話の出來るところで會ふことにしよう。その時、どうしても聞いてもらはなきやならんことを話したい。——非常に重大なことなんだ。」

「さう、ではまたいらつしやい。」彼女は媚びるやうに、につこり笑つて言つた。

「お前は僕にとつては、妹以上なんだよ。」
「變ですわね。」彼女は首を振つて言つた。そして金網の向うへ立ち去つた。

四二

ネフリュードフは、面會するまでは、彼女が自分の氣持ちを知つたならば感激して、再び以前のカチュウシヤになるだらうと思つてゐた。ところが、殘念ながら、カチュウシヤは、もはや存在しなくてそのあとにマースロワのみが幅をきかしてゐた。これは彼女にとつて實に恐いことだつた。

マースロワは彼女自身の境遇——囚徒としての境遇ではなく（これは彼女も恥ぢてゐた）、娼婦としての境遇に満足してゐるばかりか、寧ろ、それを誇りにしてゐるらしかつた。彼はそれに何よりも驚いたが、考へて見れば他に仕方のないことだつた。人間は誰でも、自分の仕事を結構なものと思へなければ働けるものではない。だから、どんな境遇のものでも、大體、自分の仕事が結構と思へるやうな人生觀を持つてゐる。常識的に考へると泥坊だの泥坊だの人間だの娼婦だのは、自分の職業を惡いと認めてゐさうなものであるが、事實は全く反對である。運命のため、または自己の過失のために或境遇に落ちた人々は、その境遇がいかに不正なものであらうとも、やはりそれを結構なもの、許さるべきものと思ふやうな人生觀を作るのである。そして、その人生觀を保持するためには彼等は本能的に、人生觀または境遇觀を同じうする人々と結合する。泥坊がその機敏を誇り、娼婦がその墮落

を鼻にかけ、人殺しがその慘虐を自慢すると聞いてわれ／＼は驚くけれども、それは彼等の範圍が限られてゐる上に、われ／＼がその圈外にあるからに過ぎない。富豪がその富——即ち強權を誇り、將軍がその勝利——即ち殺人に酔ひ、政治家がその權力——即ち壓制を吹聴するのも、これと同じ現象と見ることは出来ないであらうか。彼等の人生觀の矛盾にわれ／＼が氣づかないのは、彼等によつて作られる範圍が非常に廣く、且つわれ／＼自身、その圈内にあるからである。

マースロワの人生觀、境遇觀もまたこの通りにして作り上げられた。彼女はシベリヤ徒刑の宣告を受けた娼婦だつたにもか、はらず、自分自身に満足し、その境遇を誇り得るやうな人生觀を持つてゐた。その内容はどうかといふに、總ての男性が最高の幸福とするところのものは好きな女との性的交渉にある。故に、彼等がいかに他の用事に夢中になつてゐるやうな顔をしてゐても、實際に於いて、それ以外の何物を頼つてゐるのでもない。「自分は誰にも好まれる女だから、この慾望を満たしてやることも出来るし、満たしてやらないことも出来る。だから、自分は彼等にとつて重大な、そして必要な人間である。」事實に於いて彼女の生活は、昔も今も、この概念がいかに正確であるかを裏書きするもののみであつた。

過去十年の間に、彼女は至るところに於いて、あらゆる男性が彼女を必要とする事實を見た。ネフリュードフを初め、老署長、監獄の看守までが、悉くさうである。まだ彼女に無關心である男を見たこともなく氣がついたこともなかつた。だから、この世界は、あらゆる方法——虚偽、暴行、金錢、

手管などの方法によつて女をわがものにしよとする色鬼の集まりだと思はれた。マースロワの考へによれば人生とはこんなものである。そして、この人生観から見れば、彼女も決して最下等の人間でないばかりか、たしかに非常な人物だつた。

マースロワは何よりもかういふ見解を面白いと考へてゐた。いや、面白いと考へざるを得なかつた。といふのは、この見解が變つては自分の持つてゐる價値を失つてしまふからである。したがつて彼女は、その人生観を保持するために、本能的に自分と同じ考へを持つ人々の仲間にかじりついてゐた。そこへあらはれたネフリュードフは彼女を全然異なる世界に連れ去らうとしたので、彼女は折角得た自分の人生に於ける位置をうしなはねばならぬことを豫想して、さつきのやうに反抗したわけだつた。

かうした理由によつて彼女は處女時代のことやネフリュードフとの初戀のことなどをすべて記憶から葬り去つてゐた。それ等の追憶は現在の人生観と一致しないものである。だから記憶から抹殺してしまつた。と言ふよりも、うっかり飛び出して來られては困るので、どこかにそつと隠し埋め、上から蓋をして塗りかためてしまつたのである。それ故、今のネフリュードフは、昔、純真な愛を捧げたことのある男ではなく、彼女の利用し得る、また利用しなければならぬ金持紳士の一人たるに過ぎなかつた。言はゞ一般の男との關係以上のものではなかつた。

一方、ネフリュードフは出口を急ぐ人々の後を歩きながら考へてゐた。

「いや、とうとう大切なことが言へなかつた。結婚するつもりだといふことが言へなかつた。言へなかつたけれども結婚しよう。」

四三

ネフリュードフは外面生活の全部を一變しようと思つた。——まづ召使には暇を出し、邸宅は人手に渡し、自分は下宿住ひをするつもりだつた。しかし、アグラフェーナは、冬が來なければ、そんなことは、しようとしたつて出來ないことだ。夏の間はこんな町中の邸宅を借りるものはゐない、またどこにゐたつて道具類は持つてゐなければならぬといふことを一々詳しく説明して反對した。そこで生活様式を一變しようとする彼の努力は水泡に歸して、すべてが以前通りだつた許りでなく、突然、家中に活氣づいた仕事が始まることになつた。毛織、毛皮の類は風に當て、埃を拂ふために取り出され、門番も給仕もコックもコルネイも皆その手傳ひをした。どの部屋にもナフタリンの匂ひが一杯に立ちこめた。

ネフリュードフはそのありさまを庭に出たり、窓から覗いたりして全く何の役にも立たない品物ばかりが多いのに呆氣にとられてしまつた。これはたゞ、アグラフェーナやコルネイや門番や給仕などを運動させるための道具に過ぎないと彼は考へた。

「しかし、今、生活様式を變へたところで仕方があるまい。すべてはマースロワの事件が決定してか

らのことだ。それに、あまりに厄介だ。今後、彼女が放免になるか追放になるか、いづれにしても自分が彼女の行くところへ一緒に行きさへすれば、自然に生活は一變してしまふのだ。」

約束の日に、ネフリユードフは辯護士ファナーリンの立派な邸宅に汗馬車を走らせた。庭には大きな棕櫚をはじめ、澤山の樹が鬱々と茂り、窓にはすばらしく高價なカーテンが掛かつてゐて、その贅澤さは一見して、遊金(働かずして得た金である)のある證據であり、また成金趣味のものであつた。應接間には、丁度病院の控室のやうに、多勢の依頼人が順番を待ちながら繪入り雑誌の載つてゐるテイブルのまはりを圍んでゐた。助手はネフリユードフの姿を見ると、近寄つて直ぐに取次ぐから少々お待ち下さいと言つた。と殆んど同時に、向うの事務室の扉が開いて、緒ら顔の、鬚の濃い、づんぐりした商人らしい中年の男と、ファナーリンとの、陽気な話聲が聞えて來た。どちらの顔にも、質のよくない金儲け仕事を済ましたばかりといふやうな表情があつた。

「罪な男だね、こいつ。」ファナーリンは笑つて相手に言つた。

「ちよつとした罪さへなきや皆天國へ行けるんだがなあ。」

「もつともく。皆承知の上のことさ。」

そしていかにもわざとらしく二人は笑つた。

「やあ、ネフリユードフ公爵、どうぞこちらへ。」

ファナーリンは彼を見てかう言つた。そしてもう一度商人と會釋して送り出してから、ネフリユードフを事務室へ案内した。きちんと、よく整つた部屋だつた。

「お煙草は？」と言ひながら、彼はにこくしてネフリユードフと向ひ合つて座を占めた。金儲けの仕事が成功したばかりなので、そのうれしさが包みきれぬ風だつた。

「ありがたう、實は、マースロワの件で参りました。」

「は、なるほど、直ぐにかゝりませう。しかしどうです、今のふとつちよは。ごらんになつたでせう。千二百萬からの財産を持ちながら、口のきゝ方も知らない男ですからな。何しろ、あなたからでも紙幣の一枚もちよるまかすことが出来れば、どんな眞似でもしようつて代物でしてね。」

この男だつて同じことではないかと、ネフリユードフは思つた。あまりに打ち解けた風をして、自分とネフリユードフとは同じ地位にある、他の依頼人たちより一段高い地位にあることを示さうとしてゐるのが、たまたまなく彼の反感をそゝつた。

「さて、あなたの事件はと——あれは念入りに調べましたが、残念ながら辯護士が青二才だつたため上訴すべき立派な理由を悉く無くしてしまひました。」

「ではどうしたらいいでせう？」

「下手なことをしちまつたもんです。しかし、上訴を試みて宣告を無効にすることは出来るかも知れません。で、この通り書いて置きました。」

彼は紙片を取り上げて、いかにも面白さうに自分の文章を朗讀しはじめた。

それは本文が四ヶ條、附記が一ヶ條あつて相當に長かつた。朗讀がをはつてからフ、ナーリンは言つた。

「ぶちまけて言ふと、これは成功の見込みは乏しいのです。むろん、元老院の方の係りの一存にあることですから、その方にくらかお知合ひがあつたら運動なさるがい、と思ひます。」

「一二知つた人もゐます。」

「それは好都合です。一刻も早く手續きをなさい。でないと先生方は湯治に行つちまひますからね。而も行つたが最後、三月くらゐは歸つて来やしません。それからもし元老院で駄目だつたら最後の手段として皇帝陛下に請願することも出来ます。これもやはり、内幕の運動次第でどうにでもなるんです。その時にはまたお力添へいたしませ……」

「いろ／＼ありがたう。で、お手数料は？」

「助手がこの上告書の淨書を差し上げる時に申し上げるでせう。」

「もう一つお訊きます。實は私は、検事の囚徒面會認可證を持つてゐるんですが、人の話によると、縣知事の許可證があれば普通面會日以外の日に、普通面會所以外の場所で面會することが出来るといふことですね、本當でせうか。」

「え、さうだと思ひます。しかし今知事はゐませんよ。副知事が代理をしてゐますが、こいつときたら名代のわからず屋だから、あなたにはとてもお話が出来ないでせう。」

「マースレンニコフのことですか。」

「さうです。」

「そんなら知つてゐます。」と言つて、ネフリユードフは立ち上つた。

受付室に行くに助手から出来上つた上告書を渡された。手数料は一千ルーブリといふことだつた。大體こんな事件は引き受けないのであるが、他ならぬ公爵のことだから面倒を見たのだと助手は特に説明を加へた。

「で、この上告書には誰が署名するのですか。」ネフリユードフは訊いた。

「被告自身がするので。」

「では被告のところへ持つていつて署名させませう。」

ネフリユードフはつぎの面會日以前に會ふ口實が出来たのを喜んだ。

四四

朝、いつもの時間に、看守の笛が監獄の廊下に響き渡ると、監房の扉がぱた／＼と鳴り出して、素足の音、靴の音が、にぎやかに入り交つて聞えて来た。

コラプリヨワと洒落女と、フードシャとマースロワとは隅の方に陣取つてお茶を飲んでゐたが、さつき、マースロワの振舞ひ酒をひつかけた後なので、皆赤い、いき／＼した顔をしてゐた。近頃で

は金があるので、マースロワは酒を切らしたことがなかった。話は、今日管刑に處せられる二人の男囚のことで持ちきつてゐた。

「何も亂暴したつてわけでもねえのに。」コラブリヨワは砂糖の塊をがり／＼やりながら、ワシリーフといふその男囚の一人のことを言つた。「たゞ仲間に味方しただけのことぢやねえか。いくら囚人だつて、今の時世に、やたらばかり／＼毆られてたまるもんか。」

「それにいゝ男だつてことだよ。」フョードシヤが丸太の上に腰かけて言つた。

「あの人に話してごらんよ。」踏切番の娘がマースロワに言つた。あの人といふのは、ネフリュードフのことを意味してゐた。

「話して見るわ。あの人は私のことなら何でもしてくれるんだから。」マースロワは、につこりして言つた。

「でもいつ来て下さるだらうね？　ワシリーフなんか、もう連れて行かれるよ。本當に可哀さうに。」フョードシヤは溜息をついた。

「わしは村にあるころ、百姓が笞でやられるのを見たことがあるよ。」と言つて踏切番の女は長い物語をはじめた。

やがて、フョードシヤはお茶の道具を片づけ、コラブリヨワと踏切番の女とは縫物にかかり、マースロワは膝を両手に拘へたまゝ、ぐつたりとしてふさぎこんだ。彼女が横になつて眠らうとしてゐる

ところへ、女看守がやつて来て面會人が事務室に来てゐることを知らしてくれた。

「わし等のことをよく話しておくれよ。」メニシヨワ婆さんは、水銀の剥けた鏡を覗きこんであるマースロワに聲をかけた。「わし等が火つけたではねえぞ。あれが自分でつけたよ。奉公人もそのこととは見てよく知つてゐるだ。まさか知らねえなんてこたア言はねえだらうよ。だから、お前さん、あの日に、倅のミトリイを呼んで聞いてくれるやうに言つてくれねえか。さうすれやア、ミトリイが何も彼も詳しく話すからね。身におぼえもねえわし等が、こんな牢屋にぶちこまれてゐてさ、あの野郎が人のかゝあとかつついて酒場なんかで浮かれてるかと思ふと、わしやほんたうに膽が煮えかへるやうだよ。」

「そんな法はねえだよ。」とコラブリヨワが同感した。

「話して見るわ、えゝ、話して見るわ。」マースロワは答へた。「では氣つけに一杯やつていかうか。」と目くばせして附け加へた。

コラブリヨワが盃に半分ばかりウオッカを注いでやると、それをぐつと飲みほし、口のまはりを拭いて、「氣つけだよ。」と繰り返しながら陽氣な足どりで出て行つた。

四五

ネフリュードフは長い間、待つてゐた。

彼は監獄に着くと、ベルを鳴らして、出て来た看守に検事の認可證を渡した。

「誰に御面會ですか。」

「マースロワです。」

「直ぐといふわけに参りませんよ。典獄が手の離せない御用中ですから。」

「事務室に居られるんでせうか。」

「いや、この面會室にいらつしやるのですが……。」と看守は答へたが、何だかあわてゝあるやうだつた。

「ぢや今日は面會日なんですか。」

「いや、特別の用事がありましたね。」

「ぜひお目にかゝりたいんですが、どういふ手続きをしたらいいでせう。」

「今に出て来ますから、その時、お話しなさい。——それまで少しお待ちなすつて。」

そこへ金筋入りの制服を着て顔をしてかく光らした曹長が横の戸口からあらはれて、嚴然とした調子で看守を叱りつけた。

「こんなところへ人を通しちやいかんぢやないか。」

「典獄がこゝに居られると聞きましたので参りました。」ネフリュードフが代つて答へた。曹長の容子が、どきまきしてゐるのを不思議に思つてゐると、内側の戸が開いて、汗塗ろになつた仲間の一人

が出て来て、「今度こそ、あの野郎も思ひ知つたでせうな。」と曹長に話しかけた。

曹長が目くばせしてネフリュードフのゐることを知らせたので、仲間は眉をひそめて後の戸口から出てしまつた。

「誰が思ひ知つたのだらう？ 何故今日は皆がそわ／＼してゐるんだらう？ 何故目くばせなんかしたんだらう？」

ネフリュードフは考へたが、今日、男囚二人の笞刑が面會所で行はれたといふことを知らない彼には、それがわかる筈もなかつた。

「とにかく、こゝでは面會出来ません。どうか事務室の方へいらして下さい。」

ネフリュードフがそちらへ行かうとすると、後の戸口から狼狽しきつた典獄の姿があらはれた。そして、ネフリュードフを見ると、

「フェドトフ、女囚監第五號室のマースロワを事務室へ。——さあ、どうぞ、こちらへ。」

案内されて、急な階段を昇り、窓が一つ、テーブルが一つ、その周圍に五六の椅子を配した小さな部屋に這入つた。

「私の役目も大抵ぢやない、辛／＼仕事がありましたね。」典獄は煙草をさぐりながら、溜息まじりに言つた。

「お見受けするところ、大層お疲れのやうでございますね。」

「え、役目疲れです、——何しろ骨の折れる仕事ですから。實はやめたい〜と思つてゐるんです、辛くつてたまりませんからね。」

ネフリードフには何が特別に辛いのかわからなかつたが、たしかに今日は、典獄の容子が、いつもとちがつて、氣の毒なほど憎氣てゐた。そして同情に訴へるやうな風が見えた。

なるほど、お役目は大變でせうね。でも、止めたいとおもひながら何故つとめていらつしやるんです？」ネフリードフは訊いた。

「何しろ、家族がありますのでね、他に仕方ありません。」

「でもそんなにお辛いのなら……」

そんな話をしてゐるところへ、マースロワが看守に連れられて這入つて來た。

はじめ、マースロワは、そこに典獄のあるのを氣づかなかつた。酒氣があるので赧い顔をして、ここにこと元氣よく歩いて來た。ふと典獄の姿を見て、はつとしたらしく、そちらを見したが、直ぐ平靜に返つて、つかくとネフリードフの前に進み寄つた。

「ごきげん宜しう。」ゆつくり言つて、微笑を浮べ、きゆつと強く握手した。前の時とはすつかり容子がちがつてゐた。

「今日は上告書を持つて來たよ。」ネフリードフは彼女の應接ぶりのてきばきしてゐるのにいさゝか驚いた。「辯護士が作つてくれたんだ。これに署名しておくれ、さつそくベテルブルグの方へ送る

ことにするから。」

「承知しました。何でもいたしますわ。」

ネフリードフはポケットから書類を出してテーブルの傍に寄つた。

「こゝで署名させて宜しいんですか。」と典獄に訊いた。

「よろしい。こゝにペンもある。字は書けるんだね。」

「書けたこともありましたけど。」

彼女は裾と上衣の袖を、きちんと直してテーブルに就いた。そして、にゆつと笑つて無器用な手つきでペンを執り上げた。ネフリードフは署名する場所を教へた。

ほつと吐息をついて、インキをたつぶりつけ、ペンを振つて一二滴落してから、彼女は念入りに名前を書いた。

「これで宜しうございますか。」彼女はネフリードフから典獄の方へ視線を移しながら、ペンをインキ壺の上へ置いたり書類の上に置いたりした。

「お前に話したいことが少しあるんだが。」ネフリードフは彼女からペンを受取りながら言つた。

「え、うけたまはりますわ。」

彼女は何か思ひ出したのか、それとも眠くなつたのか、急に、眞面目な顔つきになつた。典獄は二人を残して部屋を出て行つた。

マースロワを連れて来た看守は彼等から少し離れた窓際に腰かけてゐた。

ネフリユードフにとつては、いよくといふ時が来た。彼は最初の面會の際に、最も肝要なことを話さなかつたことに絶えず心を責められてゐたが、今日こそ、結婚の意志を打ち明けようと固く決心してゐた。

二人はテーブルをへだて、向ひ合ひに坐つてゐた。室内が明るかつたので、ネフリユードフは初めて、はつきりマースロワの顔を見ることが出来た。眼のほとりや口のまはりの小皺や、腫れつばい目、鼻などをまじく見ながら、以前よりも一層彼女を哀れに思つた。窓際の看守に聞えないやうに、半身をテーブルの上に乗せ出して彼は小聲で話した。

「この上告がもし駄目だったら、直接陛下に請願するつもりだよ。出来るだけのことは皆やつて見よう。」

「初めからい、辯護士だったら、こんなことにはならなかつたでせうね。前のと来たたら、ほんとに間抜けでしたわ。私にお世辭を言ふことしか知らないんですもの。」と言つて彼女は笑つた。「あの時、あなたと御懇意たつてことがわかつてたら、どうなつてゐたかわかりませんわね。あの人たちは誰をでも泥坊だと思つてるんだからたまらないわ。」

「この女は今日はどうかしてゐるんだ。」と、ネフリユードフは思つた。そして、いよく打ち明けようとする、また彼女の方から話し出した。

「少しお話したいことがありますの。私たちのところに、お婆さんが一人ゐますが、それやい、人なんで、みんなびつくりする位ですわ。放火の嫌疑で、息子も一緒に入れられてるんだけれど、實際は何の罪もないんですの。それは誰にもわかつてゐますわ。それで實は、私があなたと御懇意なことを聞いて、詳しいことを倅に聞いていたゞきたいと言つてますの。名前はメニシーフといひますが、どうでせう、聞いていたゞけないでせうか。それやい、お婆さんだから一目ごらんになれば、何の科もないつてことがおわかりになりますわ。ねえ、お願いしますわ。」

彼女はにつこりして一旦男を見上げてから伏眼になつた。

「よし、よく調べて見よう。」と、ネフリユードフは答へたが、彼女の打ち解けた容子に、内心ますます驚いた。「だが、今は僕自身のこと話したいことがあるんだ。この前會つた時の話をおぼえてるかね。」

「いろ／＼お話しになりましたわね。一體何をお話しになりましたの？」彼女は、やはり微笑を浮かべたまゝ、あちこち脇見をしながら言つた。

「あやまりに來た。お前に許してもらひに來た。と言つたんだよ……」

「そんなこと、何にもならないぢやありませんか。許すだの許さないだの、そんなことよりも……」

「いや、僕は言葉だけで罪の償ひをするんぢやない、實際の行ひでするんだ。だから、お前と結婚するつもりであるんだよ……」

彼女の顔には、さつと恐怖の色があらはれた。眼はちつと彼に注がれてゐたが、見てはゐないらしかった。

「何のためにですか。」腹立たしさうに、彼女は言った。

「さうするのが神様にはづかしくない僕の義務だと思ふんだ。」

「まあ、今時分になつて、一體どんな神様をお見つけになりましたの？ そんなこと、おつしやるものぢやありませんわ。神様だなんて……神様を思ひ出すのは、あの時でなきゃならなかつたんです。」彼女は口を開いたまゝで言葉を切つた。呼吸が酒くさいのを初めてネフリユードフは感じて、さつきから彼女が興奮してゐる理由がやつとわかつた。

「まあ落ちつかなくちや。」

「何故落ちつくんです？ 私が酔つてると思つてゐるんでせう？ それや酔つてますとも。酔つて、も言つてゐることは確かですよ。」彼女は眞赤になつて一氣にしゃべり立てた。「私は徒刑囚です、淫賣です。あなたは立派な公爵さまです。……何も物好きに、私なんかに觸つて身體をお汚しになるには及ばないぢやありませんか、さつさと、お姫さまのところへいらつしやい。私の相場は十ループリー一枚なんですよ。」

「どんなひどいことでもお言ひ。お前には、僕の氣持ちがわからないんだよ。」ネフリユードフは全身を震はして言つた。「お前に對して、現在の僕がどんなに罪を感じてるか、お前には想像もつかないんだ。」

「何ですつて、罪を感じる！ あの時は感じなかつたぢやありませんか。百ループリー一枚を投げ出したきりでき、あれが……あなたの相場なんだわ。」

「わかつてる、わかつてる。でも今更どうすることも出来ないぢやないか。」と、ネフリユードフは言つた。「だから今後お前を見棄てないことにしたんだ。同時に、一旦口にしたことは必ず實行することにしたんだ。」

「ほ、ほ、出来るもんですか。」と、彼女は聲を立て、笑つた。

「カチュウシャ！」彼は女の手に觸つて言ひかけた。

「歸つて下さい、私は徒刑囚、あなたは公爵さま。こんなところに御用はない筈です。」彼女は手を振りはなして物すごい形相になつた。「あなたは私をだしに使つて救はれようといふんです。この世で私をなぐさんで置きながら、あの世でも私を使つて自分だけ救はれようなんて、あんまり蟲がよすぎるわ。あ、いや、いや、その眼鏡も、その汚らしい、ぶくぶくした面も。さつさと行つとくれ！」彼女は嗚り立て、立ち上つた。

看守がやつて來た。

「こら、何を騒ぐんだ。そんな……」

「いえ、どうか、うつちやつて置いて下さい。」ネフリュードフは言った。

「身のほどを知らなきやいかん……」

「まあ、ちよつと待つてくれませんか。」

ネフリュードフが丁寧(ていねい)に頼(たの)んだので、看守(かんしゆ)はまた窓際(まきぎは)に歸(かへ)つた。

マースロワは伏眼(ふしめ)になつて、両手(りやうて)をしつかり握(にぎ)りしめ、腰(こし)を下(さ)した。ネフリュードフはどうしていかわからないので、彼女(かのぢよ)の上(うへ)から覗(のぞ)きこむやうにした。

「お前は僕(ぼく)を信(しん)じてくれないのかい？」

「結婚(けっこん)のお話(わたり)なんですか。私(わたし)、いやです、首(くび)でもくつた方がましです。」

「さうか。しかし今後(こんご)もお前(まへ)のため(ため)に出来る(出来る)だけのことをするつもりだよ。」

「それや御勝手(ごかつて)ですわ。私(わたし)は別(べつ)にしていたゞきたくはないんだから……」彼女(かのぢよ)は言(い)つたが、不意(ふい)に、

「あゝ、何故(なぜ)あの時(とき)、死(し)んでしまはなかつたらう。」と言(い)つて、悲(かな)しさうに泣(な)き出した。ネフリュードフは口(くち)が利(き)けなかつた。涙(なみだ)が自分(じぶん)にも傳(つた)はつて、ぼろ／＼とこぼれた。

彼女は眼(め)を上げて、はつとしたやうに彼(かれ)を見た。そして急(いそ)いで頸卷(くびまき)で涙(なみだ)を拭(ぬ)きはじめた。

看守(かんしゆ)が再び(また)やつて來(き)て時間(じかん)の切(き)れたことを注意(ちゆうい)した。マースロワは立ち上(あ)つた。

「お前は興奮(こうふん)してよ。都合(つがひ)によつて明日(あす)も來(き)るから、よく考(かんが)へて見(み)ておくれ。」と、ネフリュードフは言(い)つた。

マースロワは返事(へんじ)もせず見上(みあ)げもせず、そのまゝ、看守(かんしゆ)に送(おく)られて出(で)て行(い)つた。

監房(かんぱう)に歸(かへ)ると、コラブリヨワは待(まち)かねてゐたやうに聲(こゑ)をかけた。「どうだつたね。あの人(ひと)はお前(まへ)さんに惚(ほ)れこんでるやうだから、うまく持ちかけるがえゝだよ。うまくやれや放免(はつめん)になるか知(し)れねえものな。金持(かねもち)はどんなことでも出(で)來(き)るだよ。」

「ほんとにさうだよ。」踏切番(ふみきりばん)の女(おんな)が例(れい)の唄(うた)ふやうな調子(てうし)で相槌(あひづち)をうつた。「貧乏人(びんぱんにん)は婚禮(こんらい)しようたつて大變(たいへん)だけれど、お金持(かねもち)は氣(き)の向(む)きやう次第(だい)で、どうにでもなるんだからね。わしにも、昔(むかし)は、さういふ男(おとこ)があつてね、それがさ……」

「わしの話(わがし)をしてくれたかね？」と、話(わがし)の腰(こし)を折(を)つてメニシヨフ婆(ば)さんが訊(き)いた。

しかし、マースロワは、仲間(なかま)のものには何(なに)も返事(へんじ)をしないで、寢床(ねどこ)に横(よこ)になつた。そして眼(め)を部屋(へや)の隅(すみ)に据(す)ゑたまゝ、日の暮(くれ)れるまで、ぢつとしてゐた。

彼女の内心(ないしん)には苦(くる)しい争鬭(さうとう)があつた。ネフリュードフの言葉(ことば)を聞(き)いて、彼女(かのぢよ)は、嘗(かつ)て自分(じぶん)が苦(くる)しみ悩(なや)んだ世界(せかい)、一切(いっけい)わからなくなり憎(にく)くなつて見棄(みす)て、しまつた世界(せかい)のことを思(おも)ひ出(だ)した。これまでの嗜眠状態(しみんじょうたい)から目(め)は覺(さ)めたけれども、昔(むかし)のまざ／＼とした記憶(きおく)を抱(いだ)いて生(い)きて行(い)くことは出(で)來(き)なかつた。それはあまりに苦(くる)しいことだつた。

そこで、日(ひ)が暮(くれ)れると、また彼女(かのぢよ)はウオッカを買(か)つて仲間(なかま)と一緒に飲(の)んだ。

「この通りになるのが本當なんだ、——かうなるべきなんだ。」ネフリユードフは監獄を出る時に思つた。たゞし今は以前とちがつて自分の罪を充分に理解することが出来た。もし、彼が自分の罪を償はうとしなかつたならば、その罪がいかに大きいかは遂に気がつかなくなつたであらう。のみならず、彼女にしても、また、彼が彼女に嘗てした振舞ひに對する恐怖を感じることはなかつたであらう。今にして、やうやく、彼はこの女の魂に自分が何をしたかを見、彼女もまた自分の上に何がなされたかを見、且つそれを解した。今日まで、ネフリユードフは、自尊心にはかり驅られて、自己の悔恨を讚美してゐたが、今はたゞ恐怖に満たされるだけだつた。彼女を見棄てることは出来ない、而もお互ひの關係がどうなつて行くのか、それは全然、彼には想像も出来ないのだつた。

監獄を出ようとする時だつた。胸に十字架とメダルとをつけた不愉快な顔つきのおべつからしい看守がそつと近づいて、

「ある者があなた様に差し上げてくれと申しました。」と言ひながら一通の封筒を渡した。

「どんな方ですか。」

「お読みになればおわかりでせうが、國事犯で收容されてる女です。私はその監房の係りです。元來反則なんです、何しろ、人情といたしまして……」と、看守は不自然な調子で言つた。

ネフリユードフは、國事犯係りの看守が、殆んど衆人環視といつてもいい、中で手紙の取次ぎをするのには驚いてしまつた。實はその時には、まだ、これが看守であると同時に間諜であることは知らなかつた。が、手紙は受取つて監獄を出てから歩きながら讀んで見た。それには走り書きで、大體かういふ意味のことが記してあつた。

「あなたがこの監獄を訪問され、或刑事犯人の事件に興味を持たれてゐることを聞きまして、私もあなたにお目にかゝりたくなりました。許可を得て私のところへもいらして下さいまし。あなたの保護される方についても、私どもの仲間についても、いろ／＼申し上げることがございます。——ウエーラ・ボゴドウホースカヤ」

そのウエーラ・ボゴドウホースカヤといふのは、ノヴゴロド縣の片田舎の女教師をしてゐた娘で、昔、ネフリユードフは、その土地へ友だちを引き連れて熊狩りに行つて泊つたことがあつた。その時、もつと勉強したいからといふ彼女の學費の無心を聞き容れて、彼はいくらかの金を出してやつたが、それきり彼女のことは忘れてしまつてゐた。ところが、この手紙によると、彼女が國事犯の科で入監してゐて、(恐らくネフリユードフの噂を聞きこんだのだらう) 何か役に立つ御恩返しでもしたいといふのらしかつた。

あの頃はあらゆることが、いかに單純容易だつたことだらう。そしてまた今はいかに複雑困難なことだらう！

ネフリユードフは、當時のこと、ウェーラと會つた頃のことをまぎ／＼と腦裏に浮べて、楽しい回想に耽つた。それは、ちやうど四旬祭の前で、ところは鐵道線路から四十マイルもはなれた山奥だつた。二頭の熊を射止め、獵は大成功だつたので、一行は、いよく引き上げることになつた。

中食をしてゐるところへ、宿の主人が出て来て、輔祭(僧侶の階級で、司祭の次位)の娘がネフリユードフ公爵にお目にかゝりたいと言つてゐると傳へた。

「美人かね？」と、誰か訊いた。

「よしたまへ、そんなこと。」ネフリユードフは眞面目くさつた顔をして立ち上つた。輔祭の娘が何の用だらうと怪しみながら主人の部屋へ行つて見た。

そこには、フルトの帽子をかぶり厚い外套を着た、がつしりした體格の、ごく醜い娘が待ち受けてゐた。眼と眉とにやゝ取柄があるくらゐのものだつた。

「さあ、お話しなさい、この方が公爵様ですよ。私はちよつくら出て來ますでな。」老主婦が言つた。

「どんな御用でせうか。」ネフリユードフは言つた。

「あの……あの……あなた様はお金持で、あんなことに、——あんな熊狩りなんかは無駄なお金をつかつてらつしやいますか……」娘は、ひどくあわて、しきりに口ごもつた。「私は……私は、たゞ一つ望みがございます。……人様のお役に立ちたいといふ望みなんです。……私には、何も知らないものですから何も出來ません。」

眞實に満ち柔和な色をたへた彼女の瞳、毅然とした中に羞恥をふくんだ彼女の表情、それはネフリユードフの胸に一種の感動を與へ、とつさに自分が彼女の立場にある氣持ちを感じさせた。——彼は理解し同情した。

「僕でもお役に立てば、何なりとおつしやつて下さい。」

「私は今教師をしますけれど、これから大學へ這入りたいと思つてゐます。でも事情が許さないのでございます。と申しましたが、家で許さないのではありません。たゞ學費がないものでございませうから。」彼女は言ひつづけた。「それで學費を出していただくわけには參りませんでせうか。卒業いたしましたしたら、きつとお返しいたします。私、お金持の方が熊を殺したり百姓にお酒を飲ませたりなさるのは、皆悪いことだとぞんじます。何故あの方々は、ことをなさらないのでせう？ 私にはわづか八十ルーブリだけあれば宜しいのでございます……でも、お厭でしたら、無理にお願ひはいたしません。」

「いや、厭ぢやありません。寧ろこんな機會を與へて下さつたことを感謝いたしますよ。さつそく持つて來て差上げませう。」ネフリユードフは言つた。

廊下に出ると、そこには話を立ち聞きた悪友がゐて、さかんにひやかしたけれど、ネフリユードフは相手にならず金財布から出してウェーラに渡した。

「いや／＼、どうか、お禮はこつちからはなきやならんのですから。」

今にしてこんなことを追憶するのは實に楽しいことだつた。これが原因で、しつこい冗談を言つた仲間の將校と危く喧嘩しさうになつたり、その時自分に味方してくれた仲間の一人と急に仲よくなつたりしたこともあつた。あゝ、あの熊狩りのすばらしい成功はどうだつたらう、その夜停車場へ歸つた時の愉快な氣持はどうだつたらう……

馬をつけた櫓の行列が、森の中の細道を、矢のやうに這つた。樹々の枝に雪が眞白くつもつてゐた。闇の中に赤い火がきらめいて、誰か香のいゝ煙草をくゆらした。案内人は膝まで雪に没して櫓から櫓へと乗りかへながら、大鹿が今深い雪の中を歩きまはつて白楊の皮を嚙んでゐたとか、熊が穴の中に隠れてゐたとかいふやうな話をして聞かした。

ネフリユードフは、わけても當時の健康と體力と何物にも煩はされない自由との樂しさを思ひ出した。肺は毛皮の外套が胸のところまでびんと突つ張るくらゐに深く凍つた空氣を呼吸するし、顔には低い枝々から雪がばさ／＼と落ちかゝるし、體は温く、顔は若々しく、心には何等の拘束も自責も恐怖も慾望もなかつたのだ……。それは何といふ美しさだつたらう！ 而も今は、あゝ、何といふ苦しきだらう、何といふ煩はしさだらう！

明らかに、ウェーラ・ボゴドウホースカヤは革命家であり、そのために入獄してゐるのだつた。會ふ必要があるとネフリユードフは思つた。殊にマースロワのことに就いて何か話があるといふのだから、と彼は考へた。

四八

あくる朝、早く眼を覺まして昨日のことを思ひ出すと、ネフリユードフは恐しくなつた。しかし、いかに恐しくても、やりかけたことを續行しようといふ更に固い決心をした。

彼は家を出て、副知事マースレンニコフを訪問した。マースロワと、マースロワから頼まれたメニシヨーフ母子とに面會する許可證を得るためだつたが、他に、マースロワのためになりさうなウェーラに面會する件も話して見るつもりだつた。

ネフリユードフは、軍隊と一緒にゐた關係上、古くからマースレンニコフを知つてゐた。當時、マースレンニコフは主計をしてゐたが、親切な一本調子な氣質で、軍隊と皇室との外には何も知らない、また知らうともしない男だつた。ところが金持ちで氣の強い女と結婚したため、その女に強ひられて、いつのまにか軍職を退き、今では縣の行政官になりすましてゐるのだつた。

彼はネフリユードフを見ると、うれしさうに顔全體で笑つた。昔と同様、肥つた赭ら顔の、立派な風采をしてゐた。年齢は多少ちがつてゐても（マースレンニコフは四十歳だつた）ごく親しい調子で話し合ふことの出来る間柄だつた。

「やあ、よく來てくれたな。さあ、家内のところへ行かう、僕は會議があるんで、もう十分くらゐしか暇がないんだ。何しろ今知事があないので、何も彼も僕がやる始末さ。」彼は得意の色を浮べて言

つた。

「實は用事があつて来たんだよ。」

「用事？」マースレンニコフは、俄かに警戒するやうな調子になつた。

「この監獄に、非常に僕の興味をそゝる人間が這入つてゐるので、一般面會所ではなく事務室で、而も規定の面會時間以外にも面會したいと思ふんだが、どうだらう、許してもらへないだらうか。君の力でどうにでもなるといふ話ぢやないか。」

「それはむろんさ。君のためなら何でもしてやるよ。しかし、いゝかね、僕は一時の間しか權利はないんだよ。」

「ぢや、その女に會へる許可證をくれないか。」ネフリュードフは直ぐに言つた。

「女かい？」

「さうだよ。」

「何をしたんだい？」

「毒殺さ。しかし不當の宣告を受けたんだ。」

「なるほど、君の持ち上げる陪審制度なるものはさうしたもののさ。せいゝくそんなところだよ。」彼は過去一ヶ年間、保守主義新聞の論文の拾ひ讀みによつて作られた意見を滔々と述べ立てはじめた。そのあげく、「とにかく君は自由主義者だよ。」と、ネフリュードフを批評した。

「僕は自由主義者だかどうだか知らない。しかし、たゞ一つ、今の陪審制度がいかに悪くても、昔の裁判に比べたらずつといゝといふことだけは知つてるよ。」ネフリュードフは微笑しながら答へた。

「ところで辯護士は誰にした？」

「ファナーリンに相談した。」

「や、ファナーリン！」マースレンニコフは去年、ある事件の證人として召喚された時に、このファナーリンから半時間にわたつて、からかひ半分の諷刺を受けたことがあるので、眉をひそめた。「あんな男にかゝり合ふのはよした方がいゝよ。碌なやつぢやない。」

「も一つお願ひがあるんだがね——」ネフリュードフはそれには答へないで別のことを言ひ出した。

「昔知り合ひだつた若い女が、これは教員をしてたんだが、やはり收監されてゐて僕に會ひたがつてるんだ。これにも面會認可證がもらへないだらうか。」

マースレンニコフは首をひねつて考へた。

「國事犯だらう？」

「さうだつてことだ。」

「ぢや、知つてもあるだらうが、親戚のもの以外は面會出来ない規定になつてゐる。しかし、君のことだ、濫用もしないだらうから許してあげよう。名前は？ ウニール・ボゴドウホースカヤ？ 美人かい？」

「醜婦だよ。」

マースレンニコフは氣乗りのしない容子でテーブルに就いて認可證を書いた。そして達者に署名した。

「どうもいろくありがたう。」

「家内に會つてくれないかね。」

「いや、よろしく言つてくれたまへ、今日は時間がないから。」

マースレンニコフは階段の降り口まで送つて来たが、これは彼の家では二等客の場合にする習慣だった。つまり、ネフリユードフは二等客並に扱はれた譯である。

「ちよつとでも會つて行かないかなあ。」と彼は上から聲をかけた。

しかし、ネフリユードフは實際今日は忙がしいのだからと言つて無理に暇を告げた。

「では木曜日にぜひ來たまへ。家内の招待日なんだから。僕から話して置くよ。」マースレンニコフは大聲をあげた。

四九

ネフリユードフは、それから真直に監獄へ行つて、きづ例の典獄の家を訪れた。相變らず安ピアノの音がしてゐたが、今日は狂躁曲ではなかつた。しかし、強くはつきりした急調子は前と同じだつ

た。眼に繻帶をした女中が、典獄は在宅だと言つて小さな應接間に案内してくれた。そこには長椅子とテーブルとがあり、テーブルの上には、毛糸編みの敷物の上に、片側の焦げた桃色の紙笠をかけたランプが置いてあつた。

典獄は疲れきつた顔つきをしてあらはれた。

「どうぞ、おかけなすつて。どういふ御用でせうか。」

「只今、副知事のところに参りまして、認可證を買ひましたので、女囚のマースロワに面會させていたゞきたいのです。」

「マールコワ？」典獄は勇ましい音楽に妨げられて、よく聞きとれないらしかつた。

「いえ、マースロワ。」

「あゝ、なるほど。」と言つて、典獄は立ち上つて扉口に寄つた。

「おい、少しやめてくれないか。ちつとも聞えやしない。」

その聲の調子から見ると、音楽は彼の生命を脅かすものらしかつた。

ピアノはやんだ。しかし、當てつけるやうな足踏みの音がし、つゞいて誰かゞ扉の鍵穴から、こちらを覗いた。

典獄はほつとして、太巻きの弱い煙草に火をつけ、ネフリユードフにもすゝめた。

「マースロワに面會させていたゞきたいものです。」

「マースロワには、今日は困りますね。」典獄は意外なことを言った。
「どうしてです？」

「どうしてって、あなたがいけないんですよ。」典獄は軽く笑つて、「金は本人にやらないで下さい。やりたかつたら私に渡して下されば保管して置きます。昨日、あなたは直接おやりになったので、さつそく酒を手に入れましたね、今日は酔つぱらつちまつて、亂暴までするといふ騒ぎなんです。」
「本當ですか。」

「本當ですとも。仕方がないので、懲らしめのために制裁を加へて一時獨房の方へ移しました。ふだんはおとなしい女なんですがね。だから、どうか金はやらないで下さい。あの連中と來たら……」
昨日のことが、あり／＼と思ひ出された。そしてまた彼は恐しくなつた。

「では國事犯のウエーラ・ボゴドウホースカヤには面會出來ないでせうか。」
「それは出來ますよ。」

典獄は立ち上つて案内してくれることになつた。女中の差し出した外套を着て玄關へ一足踏み出さないうちに、鮮やかな亂調子のピアノはもう始まつてゐた。

「娘は音樂學校へ行つてゐるんですが、あそこは風紀が亂れてるといふことですね。」典獄は階段を降りる途中で話した。「でも天分はあるやうです。」

監獄に着くと、たちまち門が開いて、看守たちが擧手の禮をして典獄を迎へた。ネフリュードフは彼にしたがつて集合室へ通つた。

「御面會は誰でしたかね。」

「ウエーラ・ボゴドウホースカヤです。」

「あ、それや塔にある女です。ちよつとお待ち下さい。」

「ぢやその間に、放火犯のメニシヨーフ母子に面會させていたゞけないでせうか。」

「よろしい、二十一號室です。呼び出しても構ひません。」

「いや、監房へ行つて會つちやいけませんか。」

「さうですね、集合室の方が氣持ちがい、ですよ。」

「でも私には監房の方が興味があります。」
横の扉口から典獄補が出て來た。

「君、この方を二十一號室のメニシヨーフの監房へ案内してくれたまへ。それから事務室にお連れしてくれ。その間に、その女を呼んで置ませう。」典獄は言った。

「どうぞこちらへ。」香水の匂ひをあたりにぶん／＼させた、おしやれの典獄補は、かう言つて先立つた。「こんな場所に興味をお持ちなんですか。」

「え、興味もあります。それに、罪がなくつて入れられてゐる人間を救つてやる義務があると思ひましてね。」

典獄補は肩を揺すぶつた。

「なるほど、さういふこともありませんね。しかし彼等が嘘を言つてゐることも時々ありましてね。

— さあ、こちらです。」

典獄補は臭い廊下に這入ると、ネフリユードフを先に立たせた。

五〇

ネフリユードフは、メニシヨーフ(婆さんの方でなく倅の方である。)の收容されてゐる二十一號室に近づいた。看守は錠をはづして扉を開いた。そこには、首のほつそりした、頭の小さい、筋肉の逞ましい若い男が、まるい眼をきよとんとさせて寢床の傍に立つてゐたが、彼等が這入つて行くと、あわて、上衣を着て、おびえたやうな風をした。ネフリユードフや典獄補や看守を、おどくした、いぶかし氣な眼つきで、しばらくつき／＼に見廻してゐた。いかにも人のよささうな、そのまるい眼つきに、ネフリユードフは心をうたれた。

「おい、この方がお前のことに就いて何か聞きたいとおつしやるんだよ。」

「ありがとうございます。」メニシヨーフは言つた。

「僕はよそから聞いたんだがね、ちかに君から詳しい話を聞きたいと思つてね。」ネフリユードフは監房の中を横切つて向うの格子のはまつた汚い窓際に行つた。

メニシヨーフは直ぐに話しはじめた。初めは典獄補の方を氣にしてゐたが、だん／＼威勢がよくなつて平氣でしゃべり出した。話の大體の筋はかういふのだつた。——彼は女房を貰ふと問もなく、その女房を村の酒場の亭主に横取りされてしまつた。彼はあつちこつちに訴へて見たが、どこでも亭主が役人に賄賂をつかつてゐるので物にならなかつた。ある時は、無理に女房を連れ戻したが、あくる日直ぐに逃げられてしまつた。そこで、彼は酒場へ談判に出かけた。たしかに這入る時に女房の姿を見たにもか、はらず、亭主は、そんな女はゐない、まご／＼しないで、さつさと歸れと嘖鳴りつけた。それでも歸らなかつたので、亭主は雇人と一緒になつて、彼を血まみれになるほど打つたり蹴つたりした。ところが、そのあくる日、酒場が火事になつて、彼と母親とは放火の嫌疑者として起訴された。けれども、それは彼の仕業ではない、彼はその時友達の家にあたといふのである。

「たしかに君は火をつけなかつたんだね。」

「それこそ思ひもよらねえことでござえますよ。あの野郎は保険金を取りてえばつかりに、自分で放火しやがつて、わつち等に罪を塗りつけやがつたんです。」

「たしかにさうなんだね。」

「神様が證人でござえます。旦那、どうぞ、お助け下せえまし……」メニシヨーフはぼろ／＼こぼれる涙を汚い上衣の袖で拭いた。

「もう宜しいのですか。」典獄補が聲をかけた。

「え、……まあよくしらないであるが、出来るだけのことをして上げるよ。」ネフリユードフは慰めて外に出た。メニシーフは入口に立つてゐたので、看守は彼にぶつかるやうに、扉をばたんと強く閉めた。

五一

広い廊下を引き返して行くと、淡黄色の上衣に短いだぶだぶのズボンをつけた囚人たちが、まじまじと彼を見つめた。(書食時だったので、監房が開かれてゐた。)ネフリユードフは、彼等に對する同情と、彼等を收監するもの、行爲に對する恐怖疑惑との入りまじつた一種不思議な感じを味はふと同時に、それを冷然として見て歩く自分自身を、何故だか、はづかしく感じた。

或廊下を通りかゝると、誰かが監房の中に駆けこんだかと思ふと、そこから數人のものが飛び出して来て、ネフリユードフの前に立ちふさがつて丁寧な頭を下げた。

「どうか旦那様、何とお呼びしてい、か存じませんが、何とかわし等の裁きをつけていたゞきてえものでございます。」

「僕は役人ぢやないから、何もわからないよ。」

「旦那様は外からいらした方でせうが、誰かお上の方に話して下さいませんか。」その聲はいかにもくやしさうだつた。「少しは人間扱ひをしていたゞきてえのです。何の科もねえのに、かうして二月

もぶちこまれてるんです。」

「え？ それや何故だ？」ネフリユードフは立ちどまつて訊いた。

「何故だつて？ わし等にも何故だかわからねえんです。たゞ、かうして二月も、うつちやつてあるまゝで、何の調べもしてくれねえんです。」

「實際さうなんで、それも偶然、都合のわるいことが起りましてね。」と、横から典獄補が説明してくれた。「實は、この連中は、旅行券を持つてゐないために入れられたんで、元來は直ぐに本籍地へ移送すべきなんです。偶然向うの監獄が焼けまして、縣廳から移送猶豫を乞うて來たのです。だから、同じ科でも他地方のものはみんな、とつくに移送済みになりましたが、この連中だけがそのままになつてゐるのです。(ロシヤでは内地の旅行にも旅行券が必要である。)

「えー たゞそれだけです。他に理由はないんですか。」ネフリユードフは、驚いて訊いた。

四十人ばかりの仲間が周圍に集まつて、一齊にがや／＼騒ぎ立てた。

「誰か一人で言へ。」典獄補は呟鳴つた。

大勢の中から、脊の高い五十恰好の上品な男が進み出て説明した。彼等がつかまつたのは旅行券がわづか二週間ばかり期限を過ぎてゐたからだつた。而もそんなことは度々あることで、今までは誰からも咎められなかつたのに、今年に限つて、こんなところに叩きこまれ、罪人扱ひを受けてゐるといふのだつた。

「わし等はみんな同じ組合の石屋なんです。田舎の監獄が焼けたつてことは聞きましたが、それやわし等のせぬぢやねえんですから、どうかお助け下せえまし。」

ネフリュードフは耳を澄ましてはゐたが、その言ふことははつきり呑みこめなかつた。彼は、この男の頬を、どす黒い、脚のうよくした風が一匹這つてゐるのばかりに氣をとられてゐた。

「どうしたつてゐるのだらう？ そんな理由だけで監獄にぶちこむなんてことがあるんでせうか。」ネフリュードフは典獄補の方に向いて言つた。

「さうなんです。早く送り歸してやらなきやならんのですが。」典獄補はしづかに言つた。「ひよつとしたら縣廳の方で忘れちまつてるんかも知れません。」

するとそこへ、やはり囚人服を着た、小柄の、神経質らしい男が大勢の中から進み出て變な風に口を歪めながら、何の科もないのにひどい目に會ふといふ愚癡を並べ立てた。

「犬の方が、よつほどましでさあ……」

「おい／＼、口が過ぎるぞ。注意しないと……」典獄補は吐りつけた。

「何が注意しねえとだい？」小男は向う見ずに言ひ放つた。「わし等に何の罪があるんだ？」

「だまれ！」

典獄補に一喝されて小男はやつとおとなしくなつた。

「一體これはどうした譯なんだらう。」ネフリュードフは自問した。監房の入口から覗いてゐる眼、

途中ですれちがつて、ちつと彼の顔に注がれてゐる眼、——それを見てゐると、彼は何か自分が答でびし／＼打たれてゐるやうな氣がした。

「全然罪のないものをこんなところに收監して置くことが實際出来るんですかね。」ネフリュードフは廊下の端で言つた。

「だつて他に仕方がないでせう。囚徒は大抵諛つきですからね、言ひ分だけ聞いてれば、みんな無罪といふことになりますよ。」典獄は辯解した。「それや、たまには何の科もなくて收監されるものもなぢやありませんかね。」

「さうでせう、今の石屋の連中だつて無罪です。」

「え、まあさういふことになります。しかし、恐しく手に負へない連中ばかりでしてね、嚴重に見張つてゐないと何をするか知れたものぢやありません。昨日も、そんなのを二人罰しました。」

「どんな罰しかたをするんです？」

「答刑です。」

「だつて、體刑は廢止されてるぢやありませんか。」

「でも、あんな權利を剝奪された連中は例外ですよ。今でも適用されてゐます。」

ネフリュードフは、昨日見たことを思ひ浮べた。典獄を初め、みんなが彼を見て狼狽した理由がやうやくわかつた。あの時、恐しい答刑が加へられてゐたのだと思ふと、好奇心、憂鬱、困惑、精神的

嘔吐（これは次第に肉體的嘔吐になりさうだった）そんなもの、錯綜した氣持を今までのいかなる場合よりも烈しく感じた。

彼は典獄補の言ふことには、もう耳を傾けないで、さつさと廊下から事務室に行つた。典獄はそこにあつたけれども、他の雑用にかまけて、ボゴドウホースカヤを呼びにやるのを忘れてゐた。ネフリユードフの顔を見て、やつと約束を思ひ出して、

「どうぞ、お掛けなすつて。今直ぐ呼びにやります。」と言つた。

五二

事務室は二間になつてゐた。一つの部屋には、大きな、毀れかゝつたストロブが一つ、汚い窓が二つ。一隅には囚人の身長を計る眞黒い機械。他の一隅には、人間虐待の場所にはどこにでも見受けられる、大きなキリスト像が吊るしてあつた。そして、数名の看守が立つてゐた。次の部屋には、男女二十人ばかりが立つてゐて、或ひは五六人でかたまつたり、二人きりで話したりしてゐた。窓際に机が一つ置いてあつた。

典獄はテイブルに向つて掛けてゐた。そして、ネフリユードフに傍の椅子をすゝめた。彼は腰を下して部屋中の人々を見廻した。

第一に注意を惹いたのは、短い上衣をした晴れ々とした顔をした青年だつた。これは、眉の黒い中

年の婦人の前に突つ立つて、手眞似しながら何か熱心に話してゐた。その隣りには、青眼鏡の老人が、囚人服の若い女の手を握りしめて、何か話に聞き入つてゐた。あたりをうるついてゐた小學生らしい男の子が、まじく驚いたやうな眼をして老人を眺めてゐた。

一方の隅には、愛人同志らしい一組がゐた。女の方は、つやくした髪を短くした、元氣さうな顔つきの、ごく若い綺麗な娘で、服装も上品だつた。男も立派な顔立の、髪を縮らした青年だつたが、二人とも人目の届かない片隅でこそく話してゐるのは、すつかり戀に酔つてしまつてゐる風だつた。テイブルの一番近くには、黒服の、白髪交りの母親らしい女が、肺をわづらつてゐるらしい若い男の肩に頭を載せて、何か話しかけては、涙をぼろ／＼こぼしてゐた。息子らしい男は手に一枚の紙を持つてゐたが、どうしていゝかわからないらしく、いかにも腹立たしさうに、それを折つたり疊んだりしてゐた。

そのとなりには、やはり髪を短くした、ふつくらと薔薇色の頬をした娘が、鼠色の服装の上から肩覆ひをして、しづかに掛けてゐた。かたはらにその母親らしい女が泣いてゐるのを、肩を叩いて慰めてゐた。この娘はどこからどこまで美しく、白い、のび／＼した手、短く波うつた髪、引きしまつた鼻と口、いづれにも難の打ちどころがなかつたが、わけても、優しい、眞實のこもつた、赤褐色の瞳の美しさはまた特別だつた。

ネフリユードフが這入つた瞬間、その美しい瞳は、ちらと彼の視線と合つたが、直ぐに逸らして、

母親に何か言つたやうだつた。

ネフリュードフは、典獄と並んで坐つて、好奇心を燃やしながら、あたりを眺めまはしてゐた。すると、そこへ、小さな男の子が近寄つて、黄色い聲で彼に呼びかけた。

「をぢさん、誰を待つてるの？」

ネフリュードフはこの質問に驚いたが、子供の生真面目な顔つきや、いき／＼した眼つきを見ると、自分も真面目になつて或知り合ひの婦人を待つてゐるのだと答へた。

「ぢや、その人、をぢさんの妹なの？」

「いや、妹ぢやないよ。」ネフリュードフはまた驚きながら、今度は、こちらから訊いて見た。

「君はどうしたの、誰と一緒にこゝへ來たの？」

「僕？——お母さんと一緒です。お母さんは國事犯なの。」

典獄は、ネフリュードフが子供と話してゐるのは規則違反だと考へたので、その時、横から聲をかけた。

「マリヤ・パウロウナ、コーリヤを連れて行け。」

マリヤと呼ばれたのは、さつきネフリュードフの眼にとまつた、例の美しい瞳の娘だつたが、直ぐに立ち上つて、しつかりした、男のやうな足どりで、ネフリュードフたちのところへやつて來た。

「何をこの子はお訊きしたのでせうか。——お名前をお訊きいたしましたの？」彼女は、につこりし

て、まじ／＼とネフリュードフの顔に見入つた。その容子は、彼女が誰とでも兄弟のやうに親しく接してゐるにちがひないといふことを思はした。

「この子は何でも聞きたがるんですのよ。」と言ひながら、彼女は、可愛くてたまらないといふ風にあつて子供の顔を見た。それに釣りこまれて、ネフリュードフも子供も、思はず微笑した。

「誰を待つてるのと訊かれて面くらひました。」

「マリヤ・パウロウナ、知らないものと話すのは反則だよ。わかつてるだらう。」典獄がまた聲をかけた。

「はい／＼。」

マリヤは、彼女の顔ばかりに見入つてゐる子供の手を取つて、肺病らしい青年の母親のところへ引き返して行つた。

「あの子は誰の子なんです？」後で、ネフリュードフは典獄に訊いた。

「母親が國事犯でしてね、獄内で生れた子です。」

典獄は、この監獄のやうなところは他に見られないといふことを説明するのが、いかにも愉快さうたつた。

「さうなんですか。」

「え、而も母親と一緒にシベリヤへ送られるんです。」

「では、あの若い娘さんは？」
「それは申し上げられません。——さあ、ボゴドウホースカヤが参りましたよ。」

五三

見ると、うしろの扉を開けて、ウエーラ・ボゴドウホースカヤが這入つて来た。瘦せた、黄ばんだ顔の、眼のくりくりした女だった。

「よくいらして下さいました。」彼女は握手しながら、「私をおぼえていらつしやいます？ さあ掛けませう。」

「こんなところでお目にかゝらうとは思ひませんでしたね。」

「私も、お目にかゝれて、本當に嬉しいと思ひますわ。この上何の望みもないくらいですわ。——ウエーラは、びつくりしたやうに、大きなまろい眼をかゝやかにしてネフリユードフをぢつと見つめた。

ネフリユードフは彼女の收監された顛末を尋ねた。

彼女は事件の経過をすつかり、元氣な調子で話して聞かせた。その話の中には、宣傳、組織打破、社會團體、分派、などといふ特殊な言葉が盛んに用ひられ、而も彼女はそれを誰でも知つてゐると信じてゐるらしかつたが、ネフリユードフは今までに聞いたことのない言葉ばかりだった。

彼女は、ネフリユードフが喜ぶだらうと思つて、革命運動の秘密を細大洩らさず、打ち明けた。彼

は、そのしなびて細い頸筋や、薄い、もつれた髪に眼をやりながら、何故この女はそんな突飛なことをやつたのだらう、何故また自分に話すのだらうと怪しんだ。そして、彼女を哀れに思つたが、それは、メニシヨーフが何の科もないのに臭い監房に入れられてゐるのを憐れむ氣持ちは全然ちがつてゐた。——彼女の頭は混亂してゐる、それをネフリユードフは可哀さうに思つた。彼女が、その目的の成功のためには生命をも犠牲にする覺悟をした女丈夫をもつて自ら任じてゐることは明らかだった。しかし、一體その目的とは何であるか、いかにすればそれが成功するかといふことに就いては、一向要領を得た説明をすることが出来なかつた。

彼女がネフリユードフに會ひたいと思つた用件は二つばかりあつたので、それを話した。ネフリユードフはベテルブルグに行つた時に出来るだけのことをしようとして約束した。

「私もいよく流刑になります。しかし、そんなことが何でせう。私は全く幸福を感じてますわ。」
彼女は寂しい微笑を洩らして、身の上話の結末をつけた。

ネフリユードフは、典獄が申し上げられませんかと言つた、若い眼の美しい娘のことを訊いて見た。ウエーラの説明によると、彼女は或將軍の娘で、早くから革命黨に屬し、憲兵を狙撃した罪によつて收監されてゐるのだが、當時は秘密印刷所代りの或同志の家に寄宿してゐた。一夜官憲の家宅捜査が行はれた際、居合した人々は燈火を消して、證據物件を破棄しはじめた。その時同志の一人が侵入して来た憲兵を狙撃して致命傷を負はしてしまつた。その取調べを受けた時、彼女は今までピストルを

握つたことさへないのに自ら下手人だと名乗つて出たため、遂にシベリヤ送りときまつたといふのだつた。

「愛他的な立派な人格の方ですわ。」ウエーラ・ボゴドウホースカヤはかう言つて褒めた。

最後に、ウエーラはマースロワのことに就いて話した。彼女はマースロワとネフリユードフとの關係を知つてゐたので、マースロワを國事犯の方の監房に移すか、或ひは、今附屬病院には患者が非常に多くて、看護助手が必要だから、その方へ頼んで廻してもらつたらどうかといふのだつた。ネフリユードフは禮を言つて、さうして見ようと答へた。

五四

時間が切れたので、みんな別れなければならなかつた。ネフリユードフはウエーラと別れて戸口の方に行き、しばらく、あたりの光景を眺めてゐた。

典獄は立つたり坐つたりして、いらだたしさに時間が来たことを告げた。しかし、みんなは興奮しただけで、なかく立ち去らうとはしなかつた。立ち話をしてゐるもの、まだ坐つたまゝで話つづけてゐるもの、泣きながら握手してゐるものなど、さまざまだつた。殊に肺病の息子と話してゐた母親は、その肩に頭を凭せかけて、鼻を鳴らし聲をあげて泣いてゐた。大きな優しい、眞實のこもつた瞳をした娘は（ネフリユードフは彼女がどうするか氣をつけないではゐられなかつた。）啜り上げ

る母親の前に立つて、何かしきりに慰めてゐた。若い戀人同志は、立ち上つて手を執り合つたまゝ、黙つて互ひの眼に見入つた。

「あそこだけ楽しい人たちがゐますね。」ネフリユードフと並んで別れる人々のありさまを見てゐた青年が、その戀人同志を指さして言つた。

ネフリユードフと青年との視線を感じた二人は、兩腕を伸ばし兩手をつないで、くるくるとそのまはりを踊つた。

「今夜、あの二人は監獄で結婚するんださうです。そして、女は、シベリヤへ送られる男について行くつもりなんです。」青年は言つた。

「男は何ものですか。」

「徒刑囚です。せめて少しは楽しい思ひをさせてやらなきや、あんまり可哀さうですよ。」

「さあ、皆さん、どうかお歸り下さい。でないと規則がやかましいんですから。」と、典獄は幾度もくり返した。「さあ、どうぞ、いよく最後です。」

彼は煙草に火をつけたり消したりしながら、ひどく弱りきつた調子で言つた。この部屋にあらはれてゐる悲しみを起させた罪の一半が自分にもあることを意識して、彼は心苦しさを感じてゐるらしかつた。

やがて囚人と面會人とは別れくになつて一方は内側の扉へ、一方は外側の扉へ、消えてしまつ

た。監獄で生れた子供をつれたマリヤ・パウロウナの姿も見えなくなつた。

ネフリニードフが女關まで来ると、後から典獄がよろしくした足どりで近づいて来て、いかにもネフリニードフには丁寧にしたいと思つてゐるらしい容子を見せて言つた。

「マースロワに御面會でしたら、どうぞ、明日いらして下さい。」

「ありがたう。」彼は答へて急ぎ足で監獄を去つた。

明らかに何の罪もないメニシヨーフの苦しみは、さぞたまらないだらうと思はれた。それは肉體的の苦しみであるといふよりも、彼が、何等の理由なしに自分に加へられる殘虐を見て必然的に感じるところの、神とか善とかに對する疑惑と不信との苦しみだつた。

また、單に旅行券が規定通りに書かれてゐないといふだけの理由によつて數十數百の人々を無理強ひに收監して置くとは何といふ亂暴なことだらう。更に、わが兄弟に苦惱を與へるのが職業でありながら、自分では重大な有用な義務を果しつゝあると信じてゐる殘忍な看守たちは一體何といふ存在だらう。しかしそれらにも増してネフリニードフに恐ろしいと思はれたのは、年寄りで病身の、而もお人好しの典獄が、丁度自分と、自分の子供たちとの年齢に相當する母と子、父と娘とを別れさせなければならぬことだつた。

「こんなことはすべて何のためだらう？」ネフリニードフは自問したが、彼は常にもまして、監獄を訪問する時にいつも感じる、例の精神的嘔吐の變化した肉體的の胸苦しきを感じたので、その答へを

見出すことも出来なかつた。

五五

翌日、ネフリニードフは辯護士フナナリンに會つて、メニシヨーフの件を話し辯護を依頼した。更に百三十人の石屋が收監されてゐる頭末を話して、これは誰の責任だらう、誰が悪いのだらうと訊いて見た。

フナナリンは、直ぐには答へないで、どう答へたらいいだらうかと、しばらく考へてゐたが、やがて、きつぱりと言つた。

「それや誰が悪いのでもないんです。檢事に聞けば知事が悪いと言ふでせうし、知事に聞けば檢事が悪いといふでせう。結局、悪いものはあないのです。」

「私はこれから副知事のマースレンニコフの宅に行きますから、一つ話して見ませうか。」

「なあに、何にもなりませんよ。あいつと來たら、(あれはあなたの親戚でも友人でもないでせうね) わからずやのくせに、人一倍するんですからね。」

ネフリニードフは、マースレンニコフのこの辯護士に對する批評を思ひ出したので、それには何も答へずに暇を告げた。

彼はマースレンニコフに、二つ頼まなければならぬことがあつた。一つは、マースロワを病院附の

看護助手にすること、一つは、百三十人の石屋を救ひ出すことだった。自分の尊敬しない男の恩を受けることは辛かつたけれども、目的を果すにはこの方法によるより他はなかつた。

マースレンニコフの家に乗りつけると、階段のところ、數臺の馬車が並んでいたので、彼は、今日が夫人の接待日で、自分も招かれてゐたことを思ひ出した。その馬車の中には、見おぼえのあるコルチャーギン家の幌馬車もあつて、白髪頭の、緒ら顔をした馭者は、かねて馴染のネフリュードフを見ると、丁寧ではあるが、ごくうち解けた容子で、帽子を取つてお辭儀をした。

ちやうど、マースレンニコフは、階段の下まで送らねばならぬやうな大切な客の供をして玄關にあらはれたところだつた。客といふのは軍人だつたが、今度市に建てる育兒院の寄附金募集のために催される富くじのことを歩き／＼しきりにフランス語で話してゐた。

「やあ、ネフリュードフ君、ごきげんいかがですか。近頃ちつともお目にかゝらないね。」軍人は聲をかけた。「さあ、夫人に挨拶してらっしゃい。コルチャーギン令嬢も見えてるし、町中の美人がすつかり集まつてるところだ。」

彼は召使に外套を掛けさせながら、マースレンニコフと握手して、さよならと、やはりフランス語で言つた。

「さあ上りたまへ。よく来てくれたねえ、うれしいよ。」マースレンニコフは、ネフリュードフの手を執つて、元氣よく階段を駆け上つた。彼は相手の、いやにむつつりした顔にも氣がつかず、言ふこと

もろく／＼聞かないで、無理やりに客間に連れこまうとした。仕方なく、ネフリュードフもついて行つた。

「用談は後にしよう。何でも君の思ふまゝにして上げるよ。」彼は廣間を通り抜けながら召使を呼びとめて、「おいネフリュードフ公爵がお見えになつたと奥さんに言つてくれ。」と言つた。召使は先に立つて駆け出した。

「何でも僕に言ひさへすれやい、んだ、きつとその通りして上げるよ。だが、まづ第一に、家内に會つてくれたまへ、この前はとう／＼會はずじまひだつたね。」

客間に這入ると、さつそく、マースレンニコフ夫人は、大勢のボンネットや頭越しに、につこりと愛想よく會釋した。あたりには、貴婦人、軍人、文官の主だった人々の話聲や笑聲が渦をまいてゐた。「おめづらしいこと！ すつかりお見限りでしたわね。何かお氣にさりましたことでもございませぬの？」

これまで一向親しい間柄でもないのに、こんなふつな、さも久しい馴染かなぞのやうな挨拶を夫人はして、ネフリュードフを面くらはせた。

帽子をかぶつて、黒い縞のある、びつたり體に合つた服を着たミッシイの姿は非常に綺麗に見えた。彼女はネフリュードフを見て顔を染めた。

「私、あなたはもうお立ちになつたのかと思つてましたわ。」と彼女は言つた。

「え、ところが急用が出来て立てなくなつてしまひました。こゝへ来たのも、その用件なのです。」
「お母さんにも會つていらつしやいませんか、お會ひしたがつてゐますから。」

ミッシイはかう言つたが、ついつかりして、こんな諛を言つたことが、はづかしくなり、而もネ
フリードフがその諛に感づいたことを知つて、一層顔を赧くした。

「暇がないので、お伺ひ出来ないかも知れません。」ネフリードフは彼女の顔には氣づかないふう
で、暗い顔をして答へた。

ミッシイは、眉に皺を寄せて、むつとしたらしく傍の氣取つた風采の士官の方へ振り向いた。

マースレンニコフ夫人は今日の接待日が成功したので、とてもうれしさうだつた。

「宅の話ですと、あなたは監獄の事業に大變御盡力遊ばしていらつしやるさうでございますね。御も
つともでございますわ。」夫人はネフリードフに言つた。「宅は時にはまちがひもございますでせう
けれど、御存知のとほり、人はごくい、ので、可哀さうな囚人たちを、子供同様にしてゐますんす
のよ。」

通り一遍の挨拶だけ済ましてから、ネフリードフは立ち上つて、マースレンニコフに近づいた。

「ちよつと話を聞いてもらへないかね。」

「あ、いゝとも。どんな話だね。こちらへ来たまへ。」

二人は小さな日本式の書齋に這入つて窓際に腰をおろした。

五六

「さあ、何でも聞くよ。煙草は？ あ、ちよつと待ちたまへ。」と言つて、マースレンニコフは灰皿を
持つて来た。「さあ——」

「お願ひしたいことが二件あるんだが。」
「なるほど。」

彼の顔は曇つて、さつきまでの浮きくした容子はたちまちどこにも見えなくなつてしまつた。客
間の方からは、華やかな笑聲が洩れて来た。彼はその方に氣を取られながら、同時に、ネフリード
フの話にも耳を傾けてゐた。

「二つはまた例のマースロワの件なんだが、あの女を病院の看護助手に廻してもらへないだらうか。
さういふことも出来るさうぢやないか。」

マースレンニコフは唇を引きしめて思案した。

「それはむづかしいかも知れないが、どんな様子か病院の方を調べて、とかくの返事を明日すること
にしよう。」

「僕の聞いたところでは患者が多いので看護婦の手が廻りかねるといふことだつたよ。」
「わかつたく。とにかく返事をするよ。」

「どうぞ。——それから、もう一つは」と、ネフリユードフはつづけた。「今、百三十人の石屋が旅行券の期限が切れたといふだけの理由で收監されてるんだ……」と言つて、その顛末をくはしく説明した。

「そんなことを、どこから嗅ぎ出したんだ？」マースレンニコフは、不安と不満の入り交つた顔をして訊き返した。

「或囚人に面會して歸る途中の廊下で、その連中に取りまかれて頼まれたんだよ。」

「その囚人といふのは？」

「なあに、それや放火の嫌疑で收監されてる百姓なんで、この方は辯護士に委してしまつたよ。だから君に頼みたいのはそのことぢやないんだ。一體、何もしないものを、單に旅行券の期限が切れたといふだけのことで收監するなんてことが出来るのかね？ 而も……」

「それは検事の仕事だよ。」マースレンニコフは腹立たしさうに、ネフリユードフの言葉を遮つた。「元來、副検事は監獄を巡回して、囚徒が條文通りの扱ひを受けてゐるかどうかを調査するのが義務なんだ。しかるに彼等は、明けても暮れてもカルタ遊びばかりに熱中してゐる……」

「ぢや、君の手ではどうにもならないのかね？」ネフリユードフは失望して訊いた。辯護士のフナリーリンが言つたこと——知事は検事を悪いといふにきまつてると言つたことを思ひ出した。「いや、何とかなるよ。さつそく調査して見よう。」

客間の方からは、「結構々々、これを頂戴いたしますよ。」「あら、いけませんわ、駄目でございますよよ。」といった風の、男女の陽氣な、ふざけた話聲がしてゐた。

「よろしい、きつと何とかするよ。」マースレンニコフは煙草の火を消しながら、「さあ、向うの仲間入りをしようぢやないか。」

「ちよつと、もう一つ。」ネフリユードフは戸口のところで立ちどまつて、「昨日、獄内で笞刑を加へられたものがあるといふ話だが、本當かね？」と訊いた。

マースレンニコフは顔を赧くした。

「おや、そんなことまで知つてるのかい。ぢや、君を監獄へ出入りさせることは出来ないぞ。何でも嗅ぎ出さうとするんだからね。——さあ、あつちへ行かう、家内が呼んでるぢやないか。」と言つて彼はネフリユードフの腕をつかんで客間につれ戻した。

ネフリユードフは、その腕を振り離し、誰にも暇乞ひをせず、そのまゝ、客間から廣間に出て玄関から街に飛び出した。

「一體どうなすつたの？ あなたが何かなすつたんぢやないの？」と、夫人は怪しんでマースレンニコフに言つた。

「あれはフランス流ですよ。」と誰かが説明した。

「あの方、いつもあんな風ね。」

しばらく、彼のことが話題の中心となつて、みんなのおしやべりは、なか／＼盡きなかつた。その翌日、ネフリユードフはマースレンニコフの手紙を受けとつた。それには、マースロワを病院付きにする件に就いて醫師に書面を出して置いたから、多分希望通りになるだらうと認められ、「君の親愛なる舊友より」としてあつた。

五七

最も一般的になつてゐる迷信の一つは、人間はすべて或一定の性質を持つてゐるといふ考へである。つまり、あの人は親切だとか、熱心だとか、冷淡だとかいふ風に一律にきめてしまふことである。しかし、實際に於いて、人間はそんなものではない。例へばわれ／＼はかういふことは出来る、あの人は残酷なことよりも親切なことの方が多しとか、馬鹿なところよりも利口なところの方が多しとか、冷淡な場合よりも熱心な場合の方が多しとかの類である。ところが、われ／＼は常にさう言はないで、あの人は親切で利口であるが、この人は不親切で馬鹿であるといふ風に人間を分類してしまふ。これはまちがつたことである。

人間は河のやうなものである。河には、水は同じでも、それ／＼に、細流もあれば急流もあり、清いところもあれば濁つたところもあり、冷たいところもあれば暖いところもある。人間も同じで、各人が皆、人間性のさまざまの萌芽を持つてゐる。そして、場合によつて、その中の或性質が外部にあらはれるのである。だから、時には同一の人間とは思はれぬやうなことをしたり考へたりするものである。

ネフリユードフもやはりさうだつた。彼ははじめ、裁判が終つて、カチュウシヤと第一日の面會をすました時には、新生活がはじまつたといふ、たまらない歡喜を味はつたものであるが、今では、その感情はまつたく消え去つてしまつた。殊に、最近に會つてからは恐怖と嫌悪とばかりが彼を脅かした。彼はカチュウシヤを見棄てまい、彼女が許すなら結婚もしようといふ自分の決心を變へてはならないと思つたが、それはなか／＼むづかしくて苦しかった。

マースレンニコフ訪問の翌日、彼はまた監獄に行つて彼女に會つた。彼はやはり親切にしてくれたが、以前よりも固苦しくなつてゐたのは恐らく、マースレンニコフ訪問の結果、ネフリユードフに多少警戒せよといふ命が下つてゐたに相違なかつた。

「御面會は差支へありませんが、お金のことは、どうぞ、前に申し上げた通り、直接渡さないで下さい。それから、あの女を病院付きにする件は副知事から書面が參つてゐますので、出来ることになつてゐます。醫師の方も承諾しましたが、肝心の本人がいやがりましたね、何しろ、かさツかきの乞食なんかに粥をはこんでやるなんて、ぞつとするわ、といふ言草なんですもの。あなたには、あの連中のことはおわかりになりませんよ。」と典獄は言つた。

ネフリュードフはそれには答へないで、典獄の後から、誰一人あなない婦人面會所へ這入つて行つた。そこに來てゐたマースロワは、そつと近寄つて、彼から眼をそらして、靜かに言つた。

「ネフリュードフ様、お許し下さいませね、一昨日はあんなはづかしいことを申し上げまして……」

「許してもらふのは僕のはうだよ……」ネフリュードフは言ひかけたが、それを、マースロワはさへぎつて、

「いえ、あなたは私をお見棄てなさらなければいけません。」と言つた。その眼の中には、以前の張りつめた怒りの色がまだ漂つてゐるやうにネフリュードフには思はれた。

「何故見棄てなきやならんのだ？」

「お見棄てなさらなければいけないのです。」彼女は同じことを言つた。

「何故だ？」

彼女はまた、怒りの色をと、へた眼をあげて、ネフリュードフを見た。

「事情がさうなつてゐるんですもの。」彼女は言つた。お見棄て下さい、どうぞ。私には出来ないのです。何も彼も、うつちやつてしまつて頂かなきゃ——」唇が震へて、しばらく言葉がとぎれた。「ほんたうですわ。でなきや、私、首でもく、つてしまひますわ。」

ネフリュードフは、この彼女の拒絶の中に、憎しみと、許しがたい恨みとのあることを感じたが、そればかりでなく、他に何か立派な理由もあるらしく思はれた。彼女が飽くまでも前の通りに、而も

冷靜に拒絶したといふことは、彼の心内にわだかまつてゐた疑惑を一掃して、嘗てカチュウシヤとの關係で味はつた、嚴肅な喜び勇んだ氣持を再び呼び戻して感じさせた。

「カチュウシヤ、僕は前に言つたことを、そのまゝくり返すよ。僕と結婚してくれないか。お前が厭ならば、いつまでも、どこまでも、お前が行くところへ、送られるところへ、ついて行くより他

はない。」

「それは御勝手ですわ。私、もう何も申し上げません。」

彼女の唇はまた痙攣した。ネフリュードフも口が利けなくなつて黙つてしまつた。

「僕はこれから一旦田舎の土地の方へ廻つて、それからベテルブルグへ行くつもりだよ。」少し氣がしづまつてから彼は話し出した。「ベテルブルグでは、お前の……いや、われ々の事件を調べ直してもらふために全力を盡さうと思つてゐる。多分、前判決は取消しになるだらうよ。」

「いえ、取消しにならなかつたら、それで宜しうございますわ。今度のことは別としても、いろいろのことで私はそれに相當する罪深い女なんですもの。」

マースロワはかう言つて、落ちさうになる涙をおさへた。

「それはさうと、メニシーフにお會ひ下さいませして？」彼女は突然、自分の感情を押しかくして話題を變へた。「あの母子は本當に何の科もないんでございませう？」

「さうだと思ふよ。」

「それやい、お婆さんなんですものねえ。」

メニシヨーフに會つたことを逐一話してから、彼は、何か欲しいものはないかと訊いた。彼女は何も欲しくないと云つた。二人の間に、ちよつと沈黙がついた。

「それから、病院へ参りますことは？ あなたがその方がい、とお思ひなら、私、参りますわ。そして、もうお酒は飲みませんわ。」

ネフリユードフが女の眼を見、二人が同時に微笑した。

「それは結構だ。」とだけしか彼には言へなかつた。そして別れを告げた。

「さうだ、彼女は一變したのだ。」ネフリユードフは考へた。なやましい疑惑はすつかり晴れて、今までに一度も味はつたことのない或ものを感じた、——それは、愛は打ち勝ちがたきものといふ確信である。

マースロワは監房に歸つて上衣をぬぎ、両手を膝に組んで寢臺の端に腰をおろした。部屋には、肺病の女と、赤ん坊を抱いた女と、メニシヨーフ婆さんと、踏切番の女と、あるきりだつた。例の教會執事の娘は氣ちがひと診斷されて昨日病院に送られてしまつた。他の女たちは外に出て洗濯をしてゐた。

赤ん坊を抱いた女と靴下を編んでゐた踏切番の女とがマースロワの傍に來た。

「會つて來たんだらう？」と二人は訊いた。

マースロワは黙つて、床まで届かない足を、ぶら／＼させてゐた。

「何だつて鼻をすゝつてゐるのさ？ 滅入りこむのが一番毒だよ、さ、元氣を出した！」

マースロワはそれでも返事をしなかつた。

「みんな洗濯に行つちやつたよ。今日はうんと施しものがあるつてことだよ。」

廊下にはたく／＼と聲音がしたかと思ふと、女たちが素足に牢屋靴を突っかけて這入つて來た。みんな圓パンを一つ、中には二つ持つてゐるものもあつた。

フォードシヤが直ぐに寄つて來て、「どうしたのさ、何か悪いことでもあつたのかい？」と、はればれた青い眼をかゞやかして、やさしく聲をかけた。これがおやつだよ。」と、彼女は圓パンを棚の上に置いた。

「どうしたのさ、本當に？ あの人の氣が變つたつてわけぢやあるめえし……」と、コラブリヨワが言つた。

「いや、私の方で婚禮を斷つたのさ。」はじめてマースロワは答へた。

「何て馬鹿なんだらう！」コラブリヨワは口の中で呟いた。

「一緒に暮せねえのなら、婚禮したつてつまらねえよ。」フォードシヤが言つた。

「お前さんの亭主はどうしたのさ、お前さんと一緒に來るぢやねえか。」

「それや婚禮しちやつたんだもの、當り前だよ。だけんど、その人が一緒に暮せねえのなら、式なん

かしたつて初まらねえ。」

「おやく、馬鹿なこと言ひつこなしだよ。婚禮さへすれや、お金持になれるぢやねえか。」コラブリヨワは呆れたやうな調子で言つた。

「あの人は私の行くところへは、どこへでも一緒にいて來ると言ふんだよ。」マースロワは言つた。「來れば來てよし、來なければ來なくてよし、こちらは頼まないつもりさ。向うでは、今度ベテルブルグへ行つて、私のことで、いろく骨を折つてくれるさうだけで、どちらにしたつて、私には用のない人なんだよ。」

「さうだらうとも。」不意にコラブリヨワが相槌をうつたが、頭では何か他のことを考へてゐたらしかつた。

「どうだい、一杯やらうか。」

「みんなでおやりよ。私はやりたくないから。」とマースロワは答へた。

第二篇

マースロワの再審が二週間内に元老院で開かれることにきまつたらしいので、ネフリユードフは、

その時ベテルブルグに行き、もし元老院で駄目だつたら陛下に請願しようと思つた。その場合には、(辯護士の話によると、上訴の理由が頗る薄弱だから、まづその時の準備をして置かなければならぬといふことだつた。)マースロワの編入される囚徒の連中は六月初旬にシベリヤへ送られることになるので、彼女の後を追つて行くためには、どうしても自分の所有地を一巡して、考へ通りに土地の處分をして置く必要があると思つた。そこで、彼はまづ、自分の収入の大部分を得てる、非常に面積の廣い所領のクヂミンスコエへ行くことにした。

彼はそこには、少年時代と青年時代とを過したし、その後も二回はかり行つたことがある。一度は母親に頼まれ、ドイツ人である土地管理人を連れて行つて、所領からあがつて來る利益計算を確めたので、彼はその頃から、土地の事情や、管理人に對する(つまり地主に對する)百姓の關係がどんな風になつてゐるかをよく知つてゐた。百姓は管理所に對して全く從屬的關係にあつた。ネフリユードフは、そのことを大學生時代、ヘンリー・ジョージの學說に共鳴してそれを説き廻つてゐた時代から知つてゐた。父親から譲られた土地を百姓たちに分配してしまつたのも、その學說にもとづいた爲めだつた。しかし、その後、軍隊生活をするやうになつて、年に二萬ルーブリの大金を浪費する習慣がついてからは、これ等の考へ方は、生活の邪魔になるので、いつのまにか忘れ去つてしまつた。そして、彼は、母から送られる金はどこから生れたものかといふことを自問したこともなく、いや、寧ろ考へまいと努力した。ところが、母の死について、自分が土地を相続し、それを處理しなければなら

なくなつてから、再び土地私有と自分の立場とがいかなる關係にあるかの疑問が生じて来た。一ヶ月前の彼だつたら、その疑問に答へて、「現在の生活方法を一變するだけの力もないし、それに土地を管理してゐるのは自分ではないのだ。」と言つて済ましてゐたかも知れない。そして、所領から遠く離れたところに住み、金だけ送つて貰つて、のん気に暮してゐたかも知れない。

しかし今は事情がすっかり變つてしまつた。監獄との關係も複雑になり（そのためには彼の社會的地位と金とが必要だつたが）シベリヤ行きのことでも殆んどきまつてしまつたが、いづれにしても土地の問題をこのまゝに放擲して置くことは出来ない、たとひ自分の不利益になつても改革しなければならぬと彼は決心した。そこで彼は、土地を耕作せずに安い地代で百姓たちに貸付け、彼等が地主に束縛されることなく働くことが出来るやうにしてやらうと考へた。

ネフリユードフがクヂミンスコエへ到着したのは、お午ごろだつた。萬事生活を簡單にと考へて電報もつたすに、汽車を降りると直ぐに二頭立ての馬車を雇つた。馭者は若い男で、馭者臺の上に斜めに腰をかけて、しきりに話しかけた。二人が話に夢中になつてゐると、馬も歩調を弛めて、のろ／＼と行つた。

馭者は、この土地の「主人」を乗せてゐるとは知らずに、土地管理人の噂をしたが、ネフリユードフは知らぬ顔をして聞いてゐた。「いやに見榮坊のドイツ人だしてね。」と馭者は言つた。自分の熟練ぶりを見せるつもりで、長い鞭を

先から柄へと持ちかへながら、斜めに客の方に向いた。「見榮坊だもんだから栗毛の馬を三頭も買ひこみましてね、女房と二人で乗り廻してゐる恰好と來たら、それや見物ですぜ。クリスマススの時なんざあクリスマスツリーを、大きな家の中に飾り立て、ゐたもんです。私は客を乗せて行つて見たんですがあんな立派なもの、どこを探したつて、めつたにあるもんぢやねえと思ひましたよ。それにお金もしこたま溜めこんで、土地なんかを買つたつて評判です……」

ネフリユードフは、管理人がどんな風に土地を處理しようが、また、どんな風に利用しようが自分は平氣だと思つてゐたが、馭者の話を聞いてゐるうち、だん／＼不快な氣持ちがして來た。

晴れて麗らかな日だつた。——時々太陽をさへぎる黒い雲、あちこちに百姓たちが牛を追ひながら點々としてゐる廣い野原、高く／＼雲雀のさへづつてゐる青々とした牧場、すつかり緑に包まれてしまつた森などを、彼は飽かず眺め入つた。しかも、不意に時々不愉快な氣持ちが胸を掠めるのをどうすることも出来なかつた。一體どうしたのだらう？ と彼は心に反問して見た。すると、土地管理人の振舞を馭者が話したことを思ひ出した。それが胸にこびりついて、なかく／＼離れないのだつた。けれども愈々クヂミンスコエに到着して仕事にかゝつてからは、その不愉快な氣持ちも忽ちどこにか消えてしまつた。

帳簿を調べたり管理人と話したりした後、ネフリユードフは今後しなければならぬことを考へながら、事務所を出て、ぶら／＼あたりを歩きまはつた。荒れ果てたまゝになつてゐる花園（而も管理人

の家の前には澤山の花が植ゑてあつたを、今では蒲公英が一杯に成つてゐるテニススコートのあたりから、昔はいつも煙草を吸ひながら散歩する場所にしてゐた竝木道のあたりまで行つて見た。そして、これから百姓たちに對してどんな風に話していゝかを考へながら、かねて用意された一室に這入つて行つた。そこは以前は客用の寢室として用ひられてゐた。

小綺麗なその部屋には、壁にヴェニス風景畫が吊るされ、二つの窓の間には姿見があり、彈條仕かけの寢臺の傍には水差しとマッチと消燈器とを載せた小さなテーブルが置いてあつた。別に、姿見の傍に大テーブルが据ゑてあつて、その上には、彼の持つて來たカバンが開けつばなしになつてころがつてゐた。

古風な、マホガニ材の眩掛椅子が一つ片隅に置いてあつた。その椅子は母の寢室にあつたものであるが、ネフリュードフはそれを見て突然意外な氣持を感じ出した。といふのは、やがて、この家も朽ち果て、庭も荒れ果て、森の樹々も伐り倒されてしまふのかと思ふと、また、これ等一切の田や畑や、厩舎や牧場や、牛や馬などのことを思ふと、急に後悔に似た氣持を感じたのだつた。こんなものを棄て去ることなんか何でもないと思つてゐたが、今になつて見ると、そればかりではなく、土地を手放すことも、収入が半減することも、何だか惜しいやうな氣がした。同時に、土地を百姓たちに貸したりなんかして財産を無くするのは理由のないことのやうに感じられた。彼は思ひ迷つた。「僕は土地を所有すべきではないが土地を所有しなくては家をも農場をも維持することが出来ない。

しかし、シベリヤへ行けば家も土地も不用になるではないか。」と一つの聲が言つた。「それはさうだらう、けれども……」と他の聲が言つた。「お前はシベリヤで生涯を暮すつもりではない。結婚もするだらうし、子供も出来るだらう。さうなれば、お前が父母から譲り受けたやうに、土地を子供に傳へなければならぬ。それが義務である。棄てることは容易であるが得ることは困難である。だから、お前はまづ第一に、お前の今後の生活を熟慮した上、それによつて財産の處理をすることにしなければいけない。今後お前のしやうとしてゐることは、果して良心の聲にしたがつてゐるのか？ それとも、見榮のためにしやうとしてゐるのではないか？」

ネフリュードフはこの疑問にぶつかつて、自分はやはり世間の人々に非難されたくないために動いてゐるのだとしか考へることが出来なかつた。そして考へれば考へるほど疑問が湧いて來て、どうにも解決がつかなくなつてしまつた。「今夜は寢よう、そして明朝になつて澄みきつた頭で解決することにしよう。」そこで、彼は寢床に這入つて眼をつぶつた。併し、なかく眠れなかつた。窓からは、爽やかな大氣と月光とが流れこみころころといふ蛙の聲に混つて遠く公園の方から夜鶯の鳴聲が聞えて來た。氣がつくと窓の下にある花盛りのライラックの茂みの中にも一羽鳴いてゐるやうだつた。ネフリュードフはそれにちつと耳を澄ましなが、典獄の娘のピアノのこゝろや、典獄自身のことなどを思ひ浮べた。それから、マースロワが唇を痙攣させて蛙の鳴くやうな聲で、「どうか私を見棄て、下さいまし。」と言つた時のこと

を考へた。すると、いつのまにか夢になつて、管理人が蛙の鳴聲のする方へ行かうとするので、彼はそれを呼びとめたが、相手は一向平氣で、つか／＼と歩いて行つたばかりか、急にマースロワの姿に變つて、ネフリユードフを責め出した。「あなたは公爵様です。私は徒刑囚です。」と言ふのだつた。「いや初めの考へ通りにしなきゃいけない。」と考へてネフリユードフは目が覺めた。そして自問した。——「一體僕の仕事は正しいことか正しくないことか？ 僕にはわからないが、それはどうでもいゝ、とにかく今夜は眠らなきゃ……」

二

ネフリユードフは朝九時に目をさました。身のまはりの世話をしてくれることになつてゐる若い事務員が、直ぐに、びか／＼磨き立てた靴と、冷たい水とを持って来て、百姓たちがもう集まつてゐることを告げた。ネフリユードフは飛び起きて昨夜から考へたことを思ひ出したが、今朝はもう、土地を棄て、しまふことに對する後悔に似た氣持は跡形もなくなくなつてゐたばかりか、寧ろ、昨日はどうしてそんな氣持になつたのだらうかと不思議に思ふくらゐだつた。そして、これからの仕事に大きな喜びと一種の誇りとを感じる事が出来た。

窓からは、蒲公英に蔽はれた昔のテニスコートのところに百姓たちの集まつてゐるのが見えた。前夜蛙が鳴いたが果して今日は時雨模様で、風もなく、朝早くから、しめやかな雨が降り出して、樹々の葉や草には雨粒が光つてゐた。

ネフリユードフは服を着ながら、幾度も窓から顔を出して百姓たちの容子を眺めた。彼等はつきつぎに集まつて来て、大きな輪をつくり、杖に凭れながら何か話し合つてゐた。でつぷりと肥つた管理人がネフリユードフのところへやつて来て、百姓たちは待たして置いて差支へないから、まづ、紅茶か珈琲でも召上つてはどうか、どちらも用意してあると言つた。

「いや、直ぐに行つて會ふことにしよう。」
ネフリユードフは、かう答へたが、百姓たちに話をしなければならぬことを思ふと、妙におどくした氣恥しさを覺えた。自分は彼等百姓たちが夢にも思はなかつた希望を叶へてやりに來たのだ、安い地代で土地を貸してやらうとするのだ、言はず大きな恩恵を彼等に施しに來たのだ、と思ひながらも、内心、何となしにはづかしさを感じた。

皆は彼が近づいて行くと、一齊に帽子を取つてお辭儀をした。彼は變に面くらつて、しばらくは口が利けなかつた。微かな雨がまだ降りつゞいて、髪や鬚や外套の毛のじや／＼した毛の上に、小さな水玉をつくつた。百姓たちは「主人」を見つめて口を開くの待ちかまへてゐたが、彼はすつかりどきまぎしてしまつて何も言へなかつた。氣まづい沈黙、——それをいやにおちつき拂つた自惚れの強い管理人が破つた。

「こゝにおいでになる公爵さまは、お前たちに施しをしようとおつしやるんだよ。——土地を安く貸

し下げてやらうとおつしやるんだ。碌でもないお前たちにはもつたない話ぢやないか。」
この男はドイツ人でありながら、ロシヤ農民通をもつて自任し、また巧みにロシヤ語をあやつることが出来た。

「碌でもねえとは何でござえやす？ わし等ア、お前さまのために働いてるでねえか。亡くなられた奥さまにやいろ／＼御世話になつて本望でござえやすが、若旦那さまも今更わし等アお見棄てにやなりませんめえ。ありがたこととござえやす。」赤毛の、おしやべりの百姓が、まづかう言つた。

「わし等ア別に地主さまに不服もござえませんが、たゞみんなが土地が欲しい／＼と申してゐやすだ。」肩のいかついた男が、それにつづいて言つた。「くらしが樂でござえませんでね。」

そこでやつとネフリュードフは口を利くことが出来た。

「さうだらうとも、實はそのことで、お前たちに集まつてもらつたんだがね、僕は、お前たちに全部土地を委してしまはうと思つてるんだ。」

百姓たちはなんのことだかわからないやうでもあり、信じられないやうでもあつた。だから黙つてゐた。

「まあ待つて下され。土地を委してしまはうたア一體どういふことでござえますか？」中年の男が乗り出して訊いた。

「つまり安い地代でお前たちにいつまでも貸してやらうといふことなんだよ。」

「それや結構ですが。」年寄りの一人が言つた。

「その地代がわし等で拂へるくらゐなら、こんなありがたこととはねえですが。」他のものが直ぐに應じた。

「誰でも借りるにきまつてゐやすだ。」

「わし等ア昔から土地を耕作してその日を送つてやすだからね。」

「地主さまにも、けつくその方が安心でがせう、地代せえお集めになれや、それでえ、ですがからね。今ぢや、いろんなよくねえことが起つて評判になつてゐやすよ。」

あちらこちらで、管理人にあてつけるやうなことを言ふ聲が聞えた。管理人はむつとして、

「悪いのはみんなお前たちの方ぢやないか。お前たちはたゞ働かさへすれやい、んだよ。さうすれや物事のきまりがちやんとついて……」と言つた。

「きまりをつけるなんて、それや駄目ですがよ、え、わし等にや、とても駄目ですが。お前さまア、何故馬ア麥畑におつ放した、と言はつしやるけれど、わしア、この日の長えのに、朝から晩まで鎌を振りまはしたりなんかしてゐるだもの、馬の夜番をしてゐる時に、ついうと／＼しちやつたのさ。するとさつそく馬の奴め、のこ／＼と這ひ出して、お前さまの麥畑へ這入りこんだつてわけですア。」

「だから、きまりをつけると言ふんぢやないか。」

「口ではそねえにおつしやるだが、わし等の力ぢやさうも行かねえですがよ。」と中年の毛むくじや

「らな男がつんとして言った。」

「柵をしると度々言つて聞かせたぢやないか。」

「そんなら柵をつくる材木をおくんせえよ。」と負相な、ちつぽけな男が後の方から反抗した。「わし等が柵をつくらうと思つて、昨年の夏、若木を切つたら、お前さまは三月の間、わしを牢屋の中にぶちこんだでねえか。柵をつくらうとしたつて、けつくそんなことになつてしまふだよ。」

「何の話をしてるんだね。」

ネフリユードフは管理人の方を振り返つた。管理人はドイツ語で、「いや何、あいつは村一番の泥坊でしてね、」と言つた。「毎年森林盗伐の件でつかまる男なんです。」

それから男の方に向きを變へて彼は附け足した。「これからは他人さまのものを大切にしなさいけないよ。」

「おや、何て言草だね、お前さまのものを、いつわし等が粗末にしたことがござえやす？ わし等ア、いやでも應でもお前さまを大切にしなさいやその日が送つて行けねえがすよ。何故つて、お前さまはわし等を束ねて繩になふことも出来やすだからね。生かさうと殺さうと、お前さまの言ひなり次第がすよ。」

「馬鹿なことを言ふもんぢやない。お前たちの方がこつちを困らせるんぢやないか。」

「どういたしまして。お前さまはわしの顎をぶん殴つたでねえか。それにわしや泣き寝入りで何もし

やしなかつたよ。どうも、金持と喧嘩して見たところで始まらねえだからね。」

言葉の争ひはかうして續いたが、見たところ、常人同志はその争つてゐる理由もよくわかつてゐないらしかつた。たゞ、一方は恐怖におさへられた憤怒、他方は一種の優越感、それを迸らせ合つてゐるに過ぎなかつた。ネフリユードフには、それを聞いてゐるのが苦しかつたので、自ら進んで本題に這入ることにした。

「それはそれとして、土地の問題をきめようぢやないか。みんなは僕のさつき言つたことに賛成するのかね？ 賛成なら地代を相談したいと思ふんだが。」

「お前さまの土地なもの、お前さまがきめたい、でねえか。」

そこでネフリユードフの方から價格を言ひ出した。それは近所のそれよりも比較にならぬくらゐ安かつただけけれども、百姓たちはいつもの癖で、あんまり高いと言つて値切り出した。ネフリユードフは自分の言ふことが大喜びで迎へられること、ばかり思つてゐたのに、案に相違して、すつかり氣を悪くしてしまつた。

しかし結局、管理人の骨折りで、地代だのその支拂期限だのが決定してから、百姓たちはがや／＼騒ぎながら、この丘を降りてめい／＼の村の方へ歸つていつた。ネフリユードフと管理人とは一件の書類をつくるために事務室に這入つた。

これで大體ネフリユードフが希望した通りに物ごとが決定したわけである。百姓たちは、この附近

一帯の地代よりも約三割安い地代で土地を思ふまゝに使用することが出来るやうになつたが、二三のものを除く他は、ちつともありがたさうな顔をしなかつたばかりか、大抵はもつと自分たちに都合のいゝことを豫想してゐたらしく、頗る不満な、氣のりのない容子をしてゐた。ネフリユードフにとつては収入が半減したので、かなり大きな犠牲を拂つたつもりだつたが、つまりは彼等の希望を満たしてやらない結果になつてしまつたわけである。

あくる日、ネフリユードフは、總代の百姓たち五六人に見送られて、何だか爲残したことがあるやうな意に満たない名残り惜しい氣持を味はひながら、例の馭者から噂を聞いた、すばらしく立派な管理人の三頭立ての馬車に乗つて停車場に向つた。「さよなら」と百姓たちも御座なりの、いゝ加減な返事をしたきりだつた。ネフリユードフ自身も不満だつたが、その理由ははつきりわからなかつた。しかし、何となく悲しいやうな、はづかしいやうな氣持を感じた。

三

ネフリユードフは、クヂミンスコエを引き上げると、今度は叔母たちから譲られた土地に行くことにした。つまり初めてカチュウシャに會つたところである。こゝでも土地のことはクヂミンスコエでしたと同じやうな處分をするつもりだつたが、他に、カチュウシャに就いてのこと、殊に自分との間に出来た子供のことに就いて出来るだけのことを調べて見ようといふ目的を持つてゐた。子供は死ん

だといふことであるが、事實さうだらうか、さうだとすれば死ぬ時の事情はどうであらうか？……

彼は、その村、バノウオに朝早く着いたが、最初に驚いたことは、叔母たちの住んでゐたあたりの光景がすっかり荒れ果て、しまつてゐることだつた。家は殊にひどくなつてゐた。トタン葺きの屋根は赤く錆びて、その數枚は、多分暴風雨のためであらう、上の方にめくれ上つたまゝになつてゐた。家のぐるりを張つた板は、ところ／＼剥ぎ取られて、その跡に錆びた釘が突き出てゐた。玄關は、殊に横についてゐる門は、カチュウシャとのことで忘れられない思ひ出を持つてゐたが、今ではすっかり壞れて根ただけが残つてゐるに過ぎなかつた。

あのなつかしいライラックの茂みは、どうなつたであらうか？ 十一年前、十六の時の無邪氣なカチュウシャと鬼ごつこをして一緒に隠れたことのある、その同じ茂みが、今も盛りと白い花を咲き誇つてゐた。あの夜、彼の耳を悩ました下の河からは、やはり、さわ／＼といふ流れが聞えて來た。その河の向うには、青々とした牧場が見えてゐた。

神學校を途中で止した、まだ學生風の管理人が、愛想よく中庭に出て來てネフリユードフを迎へた。

「幾時ごろにお食事をなさいますか。」管理人は、にこ／＼して訊いた。

「君の方のいゝ時でいゝよ。お腹は空いてゐないから。その前に、村を一めぐりして來ようか。」

「それよりも、お部屋で一休みなさいませんか。ちゃんと片づいてをりますから、ごらんになつてい

たゞきたいと存じます。もつとも外側の方はどうも……」

「いや、ありがたう、後にしよう。時にちよつと訊きたいことがあるんだが、この村に、マトリヨナ・ハリーナといふ婆さんがある筈だが、君は知らないだらうか。」

これはカチュウシヤの叔母にあたる女だった。

「あゝ、あますよ。酒の密賣なんかしてあますよ。私がいつも吐るんですけれど、なか／＼止めないの
で困つてゐるところです。といつて訴へたりなんかすれば可哀さうですからね。何しろ御存知の通り
いゝ年なのに、孫を幾人も抱へてあますので……」

「今はどのへんに住んでるだらうね。」

ネフリユードフが事情を知つてゐるものと思ひこんで話すので、彼もこんな風に訊いた。「僕はち
よつと行つて會つて見たいんだが。」

「村はづれの、一番おしまひから三番目に、煉瓦づくりの建物があつて、その裏に婆さんの小屋があ
ります。でも、いらつしやる時は、私が案内いたしましたせう。」と、相變らず微笑を浮べて管理人は答
へた。

「いや、ありがたう。ひとりでもわかるだらう。ところで、君は御面倒ながら百姓たちを集める手配
をしてくれないか。土地のことで、少し話したいことがあるから。」

今夜にでも、もし出来れば話をつけてしまひたいとネフリユードフは思つた。

四

ネフリユードフは門を出て村の方へ歩いて行つた。まだ朝の十時だといふのに、きら／＼として眩
しい、蒸し暑い日だった。時々雲が重り合つて太陽を隠した。道には、むつとする悪臭があたり一杯
に立ちこめてゐるが、殊に、或開けつばなしになつてゐる屋敷からは肥料を積みかさねた臭氣が洩れ
て、とてもたまらなかつた。

兄知らぬ老人が不意に、或見すばらしい家の前に立つてゐて彼に聲をかけた。

「お前さまは前の奥さまの甥御さまぢやござえやせんか。」

「さうですよ。」ネフリユードフは簡單に答へた。

「ぢやわし等の容子を見にござらつしやつたんだね。」おしやべりの老人ははじめた。

「さうなんだよ。ところで暮し向きは樂かね？」何と言つていゝかわからないので、ネフリユードフ
は口から出まかせに言つた。

「どういたしまして。大變でござえますよ。お話にやならねえ位でがす。」

「何でそんなにひどいんだらう。」ネフリユードフは思はずその門から一歩足を踏み入れて訊いた。

「わし等のくらしは、まあ地獄のくらしでござえますよ、ほんとでがす。」

老人はネフリユードフにしたがつて軒下の方へ歩きながら言つた。ネフリユードフは、その軒下の

ところで立ちどまつた。

「あそこにあやす餓鬼をもらん下せえ。わし等ア十二人家内でござえやすよ。麥をしこたま買ひこんだところで、直ぐになくなつちまひますだよ。次は買ふにしたつて、その金を誰がくれやすか……」

「お前の畑で出来るだけでは足りないのかね。」

「わしの畑だつて？」老人は、ふんと馬鹿にしたやうなせ、ら笑ひを浮べて、「わし等の畑からは三人分がやつとのことでき。去年なんかクリスマスまで保たねえでがしたよ。」

「ぢや、どうしてくらしを立てゝあるんだね。」

「どうするもかうするも、俵は日備取りに出てあやすし、わしはお前さまのところから金を借りやしたよ。ところが、その金も大齋期までにつかつちやいました上に、税がまだ納めてねえといふ始末でござえやすからね。」

「税はいくらだね？」

「わしのところぢや十七ルーブリでさあ。——まあ、お前さま、こんなひでえくらしがあるもんでせうか。わしにや、どうしていゝだかわからねえでがす。」

「家へはひつて見てもいゝかね？」

ネフリユードフはかう言つて、中庭の方へ進んだ。

「さあ、どうぞ。」

小屋の中には、日にやけた兩腕をまる出した老婆がストーブの傍に立つてゐた。

「旦那がおいでやしたぞ。」と老人は言つた。

「まあよくござらつしやいました。」老婆は袖をおろしながら丁寧に迎へた。

「お前たちの暮し向きを見たいと思つてね。」

ネフリユードフは彼等の慘憺たる生活を見たり聞いたりして今更の如く驚いた。家の入口には人が一杯たかつて、彼の姿を珍らしさうに眺めてゐた。老婆は彼の相手をするのが得意らしく、しきりにしやべり立てた。

「わし等のくらしははじめなもんでさ。お話にも何にもなるもんぢやござえません。」

ネフリユードフは自分でも何故かは知らず羞恥と不安とを感じて來た。

「では、さやうなら。」

彼は暇を告げて家を出た。戸口に群れた男女がざわめいて道を開けた。

「をぢさん、今度はどこへ行くの？」

白いルバーシユカを着た、はだしの子供が後をつけて來て訊いた。

「マトリヨナ・ハリナ（カチュウシヤの叔母）のところへ行くんだよ。お前たち、家を知らないかね。」

「知つてるよ、一緒に行つて上げよう。」

子供に案内されて、ネフリユードフは村の街道を上つて行つた。

五

マトリヨーナの小舎に着くと、ネフリユードフは子供を歸して中へ這入つた。小舎は十四フキート
くらの長さで、隅に小さな寢臺が置いてあつた。それを見て彼は考へた。

「この寢臺の上でカチュウシヤはお産をしたのだ。そして肥立ちが悪くて苦しんだのだ。」

マトリヨーナは酒の密賣をしてゐるので、常々から見知らぬ人が這入つて來るのを恐れてゐた。

「何の御用だね？」と、彼女は不機嫌な聲で、つ、けんどんに訊いた。

「僕はこの地主だが、少しお前に聞きたいことがあつて來たんだよ。」

老婆は黙つて、ちつと彼の顔を見つめてゐたが、不意に思ひ出したらしく、がらりと調子を變
へて、

「まあ、旦那様でございましたか。わしは又よその通りがりの方だとばかり思つて、何て馬鹿なや
つなでござえませう。どうぞ、どうぞ勘辨なすつて下せえまし。」と、わざとらしい愛想のいゝ調
子で言つた。

「實は内緒で話したいことがあるんだが……」

彼は戸口に集まつて來た群衆の方を氣にしながら言つた。

「見世物ぢやねえぞ。まご／＼してゐると、棒をぶつくらはせるから。」老婆は戸口に向つて呶鳴つ
た。「戸を閉めろよ、こら！」

そこにゐた赤ん坊をかへた瘦せこけた女が、直ぐに外から戸を閉めた。

「わしは誰だらうと思ひやしたよ。それが旦那さまでございました。まあ／＼、どうぞ、こちらへお
掛けなすつて……」老婆はエプロンで椅子を拭きながら、「どこのやつが、のこ／＼這入つて來るだ
と思ひやしたが、お慈悲深え、生命の親の旦那さまでございました。勘辨なすつて下せえ、この老い
ぼれめは盲目になりやしただ……」

彼女はいつまでも同じことをくり返した。ネフリユードフが腰を下すと、その前に突つ立つて、し
げしげと顔に見入つた。

「旦那さまもお年を召しましただね。いつも雛菊のやうな若々しさでござえやしたが、變らつしやつ
たもんだね。やつぱり御心配ごとがおありだつたと見えますわい。」

「お前はカチュウシヤをおぼえてるだらうね。」と、ネフリユードフは用件にかつた。

「おぼえてるどころか、あれはわしの姪でござえますもの、忘れることが出来るもんぢやねえ。あれ
のためには涙をこぼしたもんでござえます。わしは何でも知つてあやすが、ねえ、旦那さま、神さま
の前に罪のねえものがありやすだらうか？ 若い時のことだもの、紅茶や珈琲が好きなのは當りめえ
のことです。そこで旦那さまにも魔がさしただ。魔のやつ、なか／＼強いでどうすることも出來ね

えでがす。旦那さまがあれを見棄てたちうても、百ルーブリおやんなすつただから、それでい、わけ
でござえますよ。ところがあれは、それから無分別なことをしでかして、とうとう一生を棒に振つて
しまつたでがす。わしの言ふことを初めからよく聞いてさへあれや當りめえのくらしが出来たのに、
馬鹿な真似をしたもんでござえます。わしの姪だけれど、正直に言ふと、あんまりい、娘ぢやなかつ
たでがす。わしはい、奉公口を見つけてやりやしたのに、その旦那を、阿呆だの、色きちがひだの
と悪態をつきやして、とうとう追ひ出されちまひやしただ。それから方々に口はあつても、みんなつ
とまらねえで、飛び出したでござえます。」

こんな風に、マトリヨナは長々と語りつづけた。ネフリユードフは本題に這入つた。

「生れた赤ん坊のことを聞きたいんだが、カチュウシヤはお前のところでお産をしたんだらうね？」

「さうでござえますよ。」

「赤ん坊はどこへやつただらう？」

「それはわしがい、ことを考へやして、洗禮も済ましてから直ぐに育兒院へ送ることにしたでござえ
ます。産後の肥立ちが悪くて、ちよつくら起き上れさうもねえでがしたからね。世間にや、乳もやら
ねえで赤ん坊をうちやりばなしにして見殺しにする親があやすだが、わしは、そんなことするのは
いけねえと思つて育兒院にやりやしただ。お金もありやしたのでね……」

「育兒院から番號を貰つたかね？」

「貰ひやしたが、赤ん坊は死にやした。育兒院に連れて行くと直ぐに死んだといふ話でござえます。」
「連れて行つたのは誰だね？」

「今は死んでしまひやしたが、マラニヤといふ名前の、そんなことを商賣にしてる女でござえます。
その家に二週間程置いて、それから育兒院へ連れて行つたでがす。」

「どんな子だつた？ 可愛かつたかね？」と、ネフリユードフは訊いた。

「それやもう可愛い子で、旦那さまに生き寫しでござえました。あんな子は、ちよつくら探したつて
あるもんぢやござえません。」

「どうして病氣になつたんだらう？ 食物でも悪かつたのかな？」

「食物といふ程のものを食べさせてはくれねえでがすよ、どうせ、自分の子ぢやねえだから。」
自分の子のことについて、ネフリユードフはこれだけのことを知ることが出来た。

六

外に出ると、血の氣のない赤ん坊を兩手に抱いた瘦せた女が大勢の子供たちに交つて立つてゐた。
萎びた小さな顔をした赤ん坊は、變ににこく笑つて、曲りくねつた指をびくく動かしてゐた。

その微笑は苦痛の微笑であることがネフリユードフにはわかつた。彼は女の素性を子供たちにそつ
と訊いた。

「アニーシャといふ女を食だよ。」

ネフリュードフは女に近寄つた。そして、どうしてくらしを立て、あるか訊いて見た。

「どうしてツたつて——お貰ひをしてゐるだけでござえます。」

アニーシャはかう言つて泣き出した。

ネフリュードフは紙入れを出して彼女に十ルーブリ與へた。そして歩き出したが、二三歩も行かないうちに、やはり子供を抱いた別の女が追つかけて来て、彼に取りすがつた。と思ふと續いて老婆、中年の女と、數人のものが集まつて、しきりに貧しいことをうつつたへて憐れみを乞うた。ネフリュードフは紙入れの中の全部の六十ルーブリを分けてやつた。そして憂鬱な氣持ちで管理人の家へ引き返した。

管理人は相變らず愛想よく迎へて、百姓たちは夕方集まることになつてゐると告げた。

ネフリュードフは部屋には這入らないで、庭に出て、林檎の花の散り敷いた小徑を歩きながら、今日自分が見聞したことを考へて見た。——農民の生活問題と土地所有の問題とを改めて考へて見た。

しばらく経つて家に歸ると、管理人は食事の支度が出来たといつて、しきりにちやほやした。妻や娘が一生懸命になつて作つた料理の加減はどうであらうかと、いかに心配さうな容子だつた。品數は澤山あつたが、どれも大して旨いものはなかつた。しかし、ネフリュードフは、そんなことに頓着なく、出されるものを何でも手當り次第に食べた。自分の考へごとこゝろを奪はれてゐたため、

味覺はどこにか行つてしまつた。

管理人の細君は、おどろ／＼した娘が皿を運んで行くのを扉のところ立つて覗いてゐた。管理人は妻の手際を褒めてもらふつもりで、益々うれしさうなにく／＼顔をしてゐた。

食後、ネフリュードフは土地を百姓たちに貸與しようといふ自分の意見を管理人に話したが、「總ての人間は他人に損害を與へてもおのれの利益のみを計るものである。」と考へてゐる管理人には、話がよくわからないらしかつた。そこでネフリュードフは彼を退けて、傷だらけの小机に凭れ、自分の計畫を紙に認めはじめた。

夕陽は青々と茂つた菩提樹の向うに沈み、蚊の群が唸りながらネフリュードフを襲つて來た。認め終つた頃には村の方から牛の鳴聲や戸を開ける音や、集まつて來る百姓たちの話聲などが聞えて來た。彼は管理人に、百姓たちをこゝへ呼ぶには及ばない、こちらから彼等の集まつてゐるところへ出向くからと言つた。そして急いで茶を飲み干して村の方へ出かけて行つた。

七

百姓たちは村長の家の前に集まつてゐた。ネフリュードフの姿を見ると、がやく／＼話すのを止めて、一齊に帽子を取つた。この地方の百姓は、前にネフリュードフの行つたクヂミンスコエ村のものよりも餘程貧乏らしく、男は大抵樹皮でつくつた靴に、手織の服を着てゐた。中には、野良歸りの、

シャツ一枚、はだしのまゝといふものもあつた。

ネフリユードフは勇氣を鼓して、土地を全部分配してしまふといふ意見を述べはじめた。百姓たちは無表情な顔をして、黙つて聞いてゐた。

「何故といふに、人間は土地を使用する権利を持つてゐると私は信じるからである。」と、ネフリユードフは根くなりながら言つた。

「それやさうでがす。たしかにさうでがす。」

と、四五人のものが相槌を打つた。

ネフリユードフは續けて話した。——土地からの収入は皆で分配すべきこと、そのために自分は土地を提供しようと思ふこと、地代は彼等が協定して、それを彼等自身の共同財産にすること、などであつた。なるほどといふやうな呟きが、あちこちに聞えたが、彼等の顔は益々生真面目になり、遂には今までネフリユードフを見つめてゐた瞳を伏せてしまつた。それは、地主の瞞着手段を見破つて、うっかりその手には乗らないぞといふことを露骨にあらはしては悪いと思つてゐるらしい風だつた。

ネフリユードフの話は明瞭だつたし、百姓たちにも理解力はあつたが、彼の言つてゐることの本當の意味は、管理人同様わからなかつた。彼等もまた、人間は誰しも自己の利益を考へるのが當然であると固く信じてゐた。親代々からの経験によつて、地主が常に百姓たちの不利になり自己の利益になるやうな策のみを採ることを知つてゐた。だから、ネフリユードフが皆を集めて何か目新しいことを

話すのも要するに、今までよりも更に狡猾な方法で自分たちを欺さうとするのだと頭から極めこんでゐた。

「ところで、地代はいくらにきめたらいい、だらう？」ネフリユードフは訊いた。

「わし等できめることは出来ねえでがす。土地は旦那のもんでがすから、どうでも勝手になさればいいでがす。」

「いや、さうぢやない。その金は共同財産になつて、お前たちが利用することが出来るんだよ。」ネフリユードフについて来た管理人がわかり易く説明しようとして進み出た。

「公爵さまのおつしやることがお前たちにはわからないのかね。つまり地代を取つて土地をお前たちに貸し下げようとおつしやるんだよ。而もその地代はお前たちの共同財産に繰り入れられるんだ。」
「そねえなことは駄目でがす。わし等は前どほりのはうがえ、でがす。」と、不満らしく言ふものがあつた。

ネフリユードフが契約書を作り、雙方で記名調印しようと言ひ出すと、彼等は非常に反對して、がやがや騒ぎ立てた。

「判を捺くんでがすか？ わし等は今まで通りに働きやすだよ。そねえなことしたつて何になりやすだ？ わし等は學問も何もねえだもの。」

「ぢや、お前たちは土地を欲しくないといふんだね？」とネフリユードフは訊いた。

こんな風な調子で、結局、この會談では豫期した結果を擧げることが出来なかつた。

八

百姓たちに提案を拒絶されたことは、ネフリユードフにとって少しも苦痛ではなかつた。前のクヂ
ミンスコエでは直ぐに受け容れられ、多少感謝もされたが、それよりも、こゝで疑惑と敵意をもつ
て迎へられた方が、満足であり愉快でもあつた。

事務所は狭くて不潔だつた。ネフリユードフは庭を散歩しようと思つたが、ふと、カチュウシヤを
誘惑した夜のことを、さまざまの庭の光景を、思ひ出して不快になり、罪の記憶に汚された場所を歩
く氣にはなれなかつた。で、玄關先に腰を下して、白樺の若葉の芳香に満ちた暖い空気を深く吸ひ
こんだ。そして、いつまでも、暗い庭を見つめながら、水車の音や、夜、鶯の聲や、近くの灌木の
茂みから聞える名も知らぬ小鳥の單調な鳴聲などに聞き入つてゐた。

村の方からと、管理人の中庭からと、一番鶏がいつもより早く鳴きはじめた。鶏が早く鳴くとそ
の夜は楽しいものだといふ諺があるが、ネフリユードフにとつては、この夜は楽しいといふより
も、より以上の氣持ちだつた。幸福な、喜ばしい夜だつた。彼は無邪氣な青年時代にこゝで過した幸
福な夏の日のことを回想して、當時の自分自身を感じ、また生涯を通じて最もよい瞬間にある自分自
身を感じた。神様に眞理をお示し下さるやうにとお祈りを捧げた十四歳頃の自分を現在の自分自身の

中に感じた。善良な人間となつて母に心配をかけるやうなことは決してしないと誓つた當時の自分自
身が今再び甦つたのを感じた。

クヂミンスコエでは、家や畑や森や土地などを手放すのが惜しくなつたが、今でもその氣持が少し
はあるだらうかと彼は自問して見た。否、と心が答へた。何故惜しんだのだらう、と、今は寧ろそれ
が不思議なくらゐだつた。

明るい月が納屋の上に昇つた。黒い影が中庭に落ち、朽ちたトタン屋根が光り、この良夜を惜しむ
かのやうに、また夜、鶯が高く囀りはじめた。

ネフリユードフは、前日クヂミンスコエで、今後どうすればいゝかの問題を考へて、どうしても解
決のつかなかつたことを思ひ出した。どの問題にも多くの困難が伴つてゐるやうに、その時は思つた
が、今それを考へて見ると、何も彼もが驚くばかり單純明瞭だつた。何故かといふに、彼は自分に影
響して來る結果のことを全然思はず、たゞ、自分のしななければならぬことのみを思つたからである。
而も不思議なのは、自分自身のためには何をなすべきかゞわからないにも拘はらず、他人のためには
何をなすべきかゞ、はつきりわかつたことである。即ち、彼は今、土地を見棄てなければならぬこと
がわかつた。——彼女を救つて、自分の彼女に對する罪を償はねばならぬことがわかつた。自分が他
の人々と意見を異にしてゐるらしい裁判だの刑罰だの、事柄に就いて、研究して充分に理解しなけれ
ばならぬことがわかつた。その結果、どんな影響が自分の身に及んで來るかかわからない。しかし、そ

れはしなければならぬことであると彼は思った。

黒い雲が空一面にむく／＼とひろがり、電光と雷鳴とが鳴り止み、代りに、木葉がざわ／＼と揺れはじめ、風が立關に吹きつけてネフリユードフの髪を弄つた。雨がぼつ／＼降り出した。

ネフリユードフは内に這入つた。そして服をぬいで寢臺に横になつた。ぼろ／＼に剥げた汚い壁紙は南京蟲のあさうな不安を感じさせたが、果してさうで、蠟燭を消すと同時に、どこからか這ひ出して、ちく／＼と螫しはじめた。

「土地を見棄て、それからシベリヤへ行く——蚤や虱や南京蟲がうよく／＼とあることだらう。しかし、それが何だ？ 堪へ忍んで行くのだ。」

九

夜明け近くまでネフリユードフは眠ることが出来なかつたので、目をさました時は、かなりおそかつた。

正午、百姓たちの中から改めて選ばれた七人の總代が、果樹園の林檎の木の下にやつて来た。そこには、簡単なテーブルとベンチとが用意されて、みんなを待つてゐた。ミケランジェロの描いたモーゼの肖像のやうな、半白の髪を波打させた、威嚴のある、がつしりした老人が、まづ眞先にすゝんでベンチに腰をかけると、他の連中もそれに習つた。ネフリユードフは彼等に向ひ合つて坐り、計畫

の大意を認めた紙片をテーブルにひろげて、その説明をはじめた。

今日は相手の数が少なかつたためか、それとも自分自身のことを念頭に置かず計畫のことを考へてゐたためか、彼は少しもどきまぎしなかつた。彼は最初、自分の土地私有論を述べることにした。

「土地といふものは賣買してはいけない性質のものだ。賣買を許して置くと、金持はあらゆる土地を買ひ占め、それを、貧乏人に貸しつけてどんな不當な使用料をも搾り取ることが出来るからだ。」

「それやさうだ。」「さうに違えねえ。」などといふ聲があちこちに聞えた。

「僕は土地を私有することは罪惡だと考へてゐる。で、お前たちに分配してしまひたい。」と、ネフリユードフはつづけた。

「なるほど、それや宜しいことでございます。」モーゼの肖像のやうな長髯の老人は言つたが、實は、ネフリユードフが土地を貸しつけるつもりであるのだと早合點してゐるのだつた。

「では分配するには、どういふ方法が一番いゝか、それを相談することにしよう。」

「百姓にくれてしまつたら、それで宜しいぢやござせんか。」と、氣むづかしやの齒の抜けた老人が言つた。この言葉には明らかに誠意を疑ふやうな調子を含んでゐたので、彼はちよつと侮辱を感じたが、直ぐに心を取り直した。

彼は、ヘンリー・ジョージの思想を彼等に話して聞かせた。

「土地は誰のものでもない。みんな神様のものなのだ。」と、彼は始めた。

「さうですが。それに違えねえ。」と數人が應じた。

「土地は全人類共有のものだ。だから土地に對しては誰でも平等の権利を持つてゐる。しかし、肥えた土地もあれば瘦せた土地もある以上、肥えた土地を求めめるのは誰しも當然である。そこで、公平に分配するにはどうすればいいだらうか。それには、肥えた土地を使用するものが、その使用料を他のものに支拂ふべきである。誰に支拂ふかといふに、共同費用としての金が必要であるから、共同財産の方へ拂ひこむべきである。つまり土地を使用するものがその地代を共同資本の中へ支拂ふことになるのだ。瘦せた土地を使用するものは、それ相當に安い地代で濟むわけだし、土地を使用したくないものは一文も拂はなくていいわけだ。」

「それやもつともだ。いゝ土地を持つたものが餘計に拂ふのは當り前ですがすよ。」と誰か言つた。

「なるほど、そのジョージつて男、えれい頭ぢやねえか。」

「もつともわし等に拂へるくらゐの金高でなくちや何にもならねえだよ。」

ネフリユードフは、結局、そんなことで、百姓たち全部によく相談した上、その結果を知らせてくれるやうにと言つた。では明日にでも返答すると答へて、總代たちは非常に興奮しながら歸つて行つた。

翌日、百姓たちは仕事を休んで協議した。ネフリユードフの提案を有利なものとして賛成するものもあつたが、また、常識では考へられないと言つて危険視するものもあつた。そのために意見がなか

なかまとまらなかつたが漸く三日目になつて、地主の提案を容れることに一決した。その一決した動因となつたのは、或老婆が、「地主は靈魂のことを考へ、その救ひを求めようとしてこんな提案をしたので、決して百姓を欺さうとしてゐるのではない。」といふことを説明したからだつた。そして、これはネフリユードフがバノーヴ村に滞在中慈善のために費消した金額によつて證明された。

ネフリユードフが今まで農民の慘苦を赤裸々に見聞したことがないといふ事實、及び、その生活を初めて知つて驚いたといふ事實、——これが慈善を行はずにはゐられなかつた動機なので、彼自身は慈悲の無意味なことを百も承知してゐた。

彼が多額の施しをするといふ噂がつかはると、一時に大勢の百姓が（その大部分は女だつた）押し寄せて來たが、どういふ風に施していか、いくら施していか、見當がつかなかつた。彼は貧しいものから救ひを求められると、金がある以上、それを拒むことは出来ない氣がした。しかし、求められるまゝに幾らでも與へるのは無意義であると考へて、早くこの村を引き上げることにした。

バノーヴ村での最後の日に、ネフリユードフは、叔母の家に残つてゐる品物を調べて見た。ふとマホガニー材の衣裳戸棚の底の抽出しを開けると、澤山の手紙に交つて、一枚の寫眞があつた。——叔母二人と、大學生時代のネフリユードフと、カチュウシヤと四人の撮したものだつた。生のよろこびに充ちあふれた、純眞無垢、美しく可憐なカチュウシヤの姿が、昔のまゝそこに浮び上つてゐた。彼は、この寫眞と手紙の束とだけを持つて歸ることにした。

クヂミンスコエで財産を失ふことに對して感じた悔恨の氣持を、今思ひ出すと、彼はどうしてそんな氣持になつたのだらうかと、驚くばかりだつた。そして、彼はたゞ土地解放の喜びと、新大陸を發見した際の探險家にも似る或非常に新奇な氣持とを感じるのだつた。

田舎から歸つて來ると、町は、見慣れない、新しい光景を呈してネフリユードフの心を打つた。夕暮、灯のつくころ、彼は停車場から辻馬車に乗つて家に歸つた。どの部屋にも、ナフタリンの匂ひの残つてゐる家だつた。アグラフェーナ・ペトロウナとコルネイとは、どちらもぐつたり疲れたらしい容子で、而も何の役にも立たない品物のことで何か言ひ争ひまでしたらしかつた。ネフリユードフの部屋は空いてはゐたが、亂雑に行李などが取り散らかされてゐたので、通り抜けるのに骨が折れるくらゐだつた。だから、彼が歸宅したといふことは、たしかに、一種のだらけ氣分で行はれてゐた家中の仕事の妨害をすることになつた。

農民たちの生活の慘憺たる有様を目のあたりに見聞して來たばかりのネフリユードフにとつては、嘗ては自分も同じ仲間ではあつたが、いかにもこんな事をしてゐるのが馬鹿げきつたことのやうに思はれ、同時に、たまらなく不快に感じられた。そこで、彼は、アグラフェーナにだけ話して、さつそく下宿に移ることに決心した。

ネフリユードフは朝早く家を出て、監獄の近くにある、ごく粗末な部屋を二間選んだ。そして、そこへ自分の荷物を運んで置くやうに言ひつけてから、辯護士に會ひに行つた。

戸外は寒かつた。春にはありがちの、烈しい風雨の後にやつて來る特別の寒さだつた。風も身を切るやうだつたので、ネフリユードフは、薄い外套の襟を掻き立てながら、早く温まらうと思つて、ぐんぐん足を早めて歩いた。彼は今、農村のことばかりを考へてゐた。女、子供、老人、生れて初めて見た彼等の貧困と慘苦、——それを思ひ出して、この町の人々の様子と比較しないではゐられなかつた。肉屋や魚屋や呉服屋などの前を通り過ぎながら、農村では一人も見受けなかつたやうな、よく肥つた小綺麗な風をした商人が實に多いのに驚いた。言はば、さうした事實に彼は初めて氣がついたのだつた。彼等は、商品に就いて知識を持ち合せない客を欺くといふ努力を、無用どころか非常に重大な仕事であると確信してゐるらしいのである。途中で出會ふ馭者や門番や女中たちも、氣がついて見ると、みんなよく肥つてゐた。ネフリユードフは、彼等の多くは田舎で土地を失つて都會に追ひやられた農民であることを今は知つた。彼等——農村から都會へと走つたもの、中には、都會生活の條件に適應し、いはゆる成功してその境遇を享樂してゐるものもあつたが、また、農村時代よりも一層慘めな、どん底生活に陥つてしまつてゐるものもあつた。

地下室の窓際で見た靴直しなどは、その後者の一人ではないかと、ネフリユードフには思はれた。ノ、ポンの湯氣がもうくと立ちこめた開けつぱなしの窓のところ立つてアイロンを當て、ある、

瘦せこけた腕の、青ざめた洗濯女も、それから、頭から爪先までベンキだらけになり、袖を肘までまくり上げて、その日にやけた青筋だらけの腕を伸ばしながら何か罵り合つてゐるベンキ屋の仲間も、やはりさうした連中にちがひなかつた。

或通りを、そんなことを考へながら歩いてゐると、ふいに彼は自分の名を呼ばれた。ネフリュードフは立ちどまつた。

眼の前の辻馬車の中に、舊友のシェンボークが、にこ／＼笑つてゐた。口髭にチックを塗つてびんと尖らしてゐた。

「ネフリュードフぢやないか。」てかく／＼した顔を輝かして両手を振り／＼元氣よく聲をかけた。

シェンボークは、昔、叔母の家へ来て一泊したことがある。カチュウシヤを手籠め同様にしたあの時のことだつた。

「やあ、シェンボーク。」

ネフリュードフははしめ愉快だつたので、うれしさに叫んだが、直ぐに、ちつともうれしいことではないと思つた。

二人は久しく會はなかつた。しかし、ネフリュードフは相手の噂だけは聞いて知つてゐた。相變らず借金を背負つてゐるにも拘はらず、どうにかかうにか軍務にも就いてをり、金持の仲間入りをしてゐるといふことだつた。いかにも明るい快活な調子は、その噂が嘘でないことを頷くに充分だつた。

「や、うまくぶつかつた。町には誰もゐなくなつちやつたよ。」

シェンボークは馬車を下りて背伸びをしながら、「君も大分老けたね。だが、僕は歩きつぷりで君だつてことがわかつたよ。さあ、どこかで飯でも食べようぢやないか。い、家はないかね。」と、つづけて言つた。

「今日は忙がしいので、さうしちやゐられないんだよ。」ネフリュードフは、どう言つたら相手の感情を害しないでこの場を遁れることが出来ようかと考へながら、「どうしてまた君はこんなところへ来たんだね？」と、話題を變へた。

「用事があつて来たんだよ。僕は實は後見人なんぞでね、君も知つてゐるだらうが百萬長者サマノフ家の財産を管理してゐるのさ。サマノフの奴さん、すつかり耄碌しちやつたんだが、何しろ、五萬四千デシヤチナといふ土地を持つてゐるんだよ。ところが、事務の方が、うつちやりつばなしなんで、正直に地代を拂ふ百姓なんか一人だつてゐやしない。驚くなかれ、八萬ルーブリ以上の滞納になつてゐたといふ始末だからね。そこで僕が乗り出して、一年間にすつかり改革し、七十パーセント以上の増收を計つてやつたのさ。どうだい。すばらしいだらう。」

彼は大得意でしゃべり立てた。何とかしてうまく遁れる工夫はないかしらとばかり考へながら、ネフリュードフはうはの空で聞いてゐた。

「それはそれとして、どこにしよう？」シェンボークは話を打ち切つた。

「本當に今日は暇がないんだよ。」時計を出して見てネフリユードフは言つた。

「それではと、かうしよう。今夜競馬があるんだが、その方へ一緒に行かう。」

「いや、とても行けさうもない。」

「さう言はないで行きたまへよ。僕は自分の馬は持つてないから、グリーンシャの馬に賭けるんだ。あいつの馬、君も知つてゐるだらう？　そして、一緒に晩飯をやらうぢやないか。」

「いや、晩飯もやつてゐられないんだよ。」ネフリユードフは微笑を浮べて同じ答をした。

「おやく、それも駄目かい。一體これからどこへ行くんだ？　馬車で送らうか。」

「實は辯護士のところへ行くんだ。ついその角だから、それには及ばないよ。」

「なるほどさうか。監獄のことで何か奔走してゐるッて噂を聞いたよ。コルチャーギン家の誰かゞそんなことを言つてゐた。」と、シエンポークは笑つた。「さう言へば、コルチャーギン家では田舎に引越して行つたよ。一體どんな事件なんだい？　聞かせたまへよ。」

「だつて、往來でそんな話も出来ないぢやないか。」

「それもさうだな。ぢや又聞くことにしよう。競馬には來るだらうね。」

「いや行けないし、また行く氣がしないんだ。と言つて怒らないでくれたまへ。」

「誰が怒るもんか。」

シエンポークは急に眞面目な顔つきになつて、目を据る眉を釣り上げた。

「ばかに寒いぢやないか。」

「まつたくだね。」

「買ひものは持つて来てくれたね？」と、シエンポークは馭者を振り返つて訊いてから、「ぢや、失敬。久しぶりに會へてうれしかつたよ。」

ネフリユードフの手をゆつくり握りしめながら、かう言つて、彼は馬車に飛び乗つた。

「自分もきつとあんな風だつたらう。さうだ、あの通りでなかつたにしても、あんな風にならうと思つてゐたんだ。そして、あの調子で人生を送る考へだつたんだ。」ネフリユードフは考へた。

— 11 —

ネフリユードフは、顧番を待たずに通された。辯護士は例のメニショーフ事件の調書を読んで、判決の理由がないのを憤慨してゐたので、直ぐに話し出した。

「これは實に不都合です。家主が保険金欲しさに放火したにきまつてゐますが、問題はメニショーフの無罪を證明するに足る何等の證據が擧つてゐない點にあります。これは判事や検事が不注意だつたり、無理に有罪にしようとしたりした結果です。若し郡の裁判所でなく、この裁判所で審理されることになれば無罪放免になるに違ひありません。保證します。しかし私は報酬は頂きませんよ。それから次は——え、と、フォードシャ・ピリユーコフの事件でした。皇帝への請願書は書き上げて置

きましたよ。ペテルブルグへお出でになつたら、御自分の請願のつもりになつて御自分でお渡しになる方が宜しいでせう。でないと葬られてしまふかも知れませんから。同時に、請願委員會中の有力な人々に渡りをつける必要もあります。ええつと、御依頼の件はこれだけでしたね。」

「いや、も一つ——こゝに書面を持つてゐるんですが……」

「は、は、あなたはいびになつちまひましたね。監獄内の不平が、あなたといふバイブを通つて外に流れ出すんです。しかし、あまり多過ぎると、しまひには動きがとれなくなつてしまひますよ。」

「ところが、これは驚くべき事件です。まあお聞き下さい。」

ネフリュードフは事件の真相なるものを語つた。村の或百姓が友達を集めて聖書を読んだり論じたりしたところ、僧侶はそれを犯罪であるを認めて官憲に訴へた。すると副検事が起訴して豫審を請求し、遂に有罪の判決を與へたといふのである。

「あんまり亂暴ぢやありませんか。そんなことが有り得べきでせうか。」ネフリュードフは興奮して言つた。

「何だつてまたそんなに驚かれるんです？」辯護士は意外らしく反問した。

「驚くぢやありませんか。單に命令によつて動く巡査なら知らぬこと、副検事ともあるものが起訴するなんて！ 教養ある人間が……」

「まあ、お待ちなさい、そこに誤解があるんです。われ／＼は副検事だの裁判官だのといふと、何だか自由思想でも持つた人間のやうに思ふ癖がついてゐます。それやさういふ時代も以前にはあつたでせうが、今では全くさうぢやありません。やはり普通の役人で、月給日のことばかり心配してゐるんです。たゞ月給を餘計に貰ひたい、それ以外に主義なんてものを持つてゐるもんですか……」

「なるほど。しかし友達を集めて聖書を読んだといふ理由でシベリヤへ送るといふ法律が實際あるんでせうか。」

「ありますよ。聖書を読んで、或きまつた解釋以外の解釋をして他人に聞かしたり、教會の説明に非難を加へたりしたことがわかれば、流刑に處せられることになつてゐます。公衆の面前に於いて正教を誹謗したるものは流刑に處すと、第九十條に規定してあります。」

「そんな馬鹿な！」

「ところが實際さうなんです。私はいつも裁判官たちに言ふんです。——あなた方には感謝の他ありませんとね。何故つて、あなたにしろ、私にしろ、こゝにかうして監獄に入れられないのであるのは、みんな裁判官のお蔭なんです。シベリヤへ送らうと思へば、どんな人をでも、雑作なく送ることが出来るんです。」

「そんなら一體何のために裁判なんかするんです？」

「は、は、大變な御質問ですね……」辯護士は聲を立て、笑ひながら、「それは、ネフリュードフさん、哲學といふものです。その問題に就いては話すこともありませんから、いかゞです、土曜日に

いらつしやいませんか。私の宅に學者や文學者や美術家などが澤山集まることになつてあます。その時、さういふ抽象的な問題に就いて論じることにはませう……」

辯護士はその「抽象的な問題」といふ言葉に皮肉な力點を置いて言つた。

「ありがたう、何とかいたしませう。」と、ネフリユードフは心にもない返事をした。その晩の會合に加はらないやうに何とか工夫しようといふのが、本當の氣持だつた。

辯護士の笑聲や、「哲學」とか「抽象的な問題」とかを發音する時の口調などによつて、自分と彼（及びその仲間）との間には、事物の見方に非常な相違があると、ネフリユードフは思つた。シンンボークに會つて、自分が舊友たちと遠く離れてしまつたことを知つたが、辯護士仲間とは更に距離のあることを、彼はしみじみ感した。

一一一

監獄までは遠くもあつたし、時間も遅かつたので、ネフリユードフは辻馬車で行くことにした。利口で親切ものらしい中年輩の馭者は、或通りにさしかると、そこに建築中の大きな邸を指した。

「どうです、素晴らしい普請ぢやありませんか。」と、自慢らしく言つた。

たしかに、その邸は宏壯であり、様式も複雑で而も獨創に富んだものだつた。大勢の土工が蟻の群のやうにあちこちに動いてゐる。煉瓦を積んであるもの、それを切つてあるもの、重さうな桶や籠を

上の方へ運ぶもの、その空になつたのを下すものなど、さまざまだつた。建築技師らしい風采のいゝ紳士が、足場のところに立つて、上を眺めながら請負師らしい男に何か説明してゐる、その傍を、荷馬車が引つきりなしに行つたり來たりした。

「彼等の家庭に這入つて見る。お腹の大きい女房が力にあまる勞働をしてゐるし、ぼろを縫ぎ合した帽子をかぶつた、今にも餓死しさうな子供たちが年寄りのやうな不氣味な笑聲を立てゝゐるのだ。而も彼等は、彼等から搾取し遂には彼等を破滅に導きつゝある資本家側の一人たる、馬鹿々々しい無用な人間のために殿堂を建てなければならぬのだ。」ネフリユードフは建物を見ながら考へた。

「さうだ、馬鹿々々しい建物だ。」

彼はそれを聲に出してしまつた。

「どうしてです？」馭者は氣にさはつたらしく聞き返した。「みんなが仕事にありつけてありがたいぢやありませんか。馬鹿々々しかありませんよ。」

「だつて無駄な仕事ぢやないか。」

「そんなことはありませんよ。無駄でなければこそ建てられるんです。それに、職人たちが大勢そのお蔭でバンに有りつきますからね。」

ネフリユードフは答へなかつた。と言ふのは、主として、車輪の軋む音が高くて話が出来さうもないからだつた。

監獄近くなると、馬車は石だたみから砂利まじりの道に這入つたので、話も聞きとれるやうになり、同時に馭者の方から、またネフリュードフに話しかけた。

「今年、田舎から、こちらに向つて来る出稼ぎ人の多いことつたらどうでせう！ どうなるのかと思ふくらあですよ。」と、馭者は鋸や斧を手に持ち、袋を背負つて、のこく歩いて来る農民労働者の群を指しながら言ふのだつた。

「例年より多いだらうか。」ネフリュードフは訊いて見た。

「多いどころか、今年はどこも一杯で、それや困りきつてますよ。何しろ雇ひ主の方ちや木片かなんかのやうに職人をほつぱり出すんですもの、仕事なんか見つかかりつこありませんよ。」

「どうしてだらう？」

「どうしてつたつて、出稼ぎ人が殖え過ぎるからでさあ。部屋は満員つてわけですよ。」

「なるほど。何故田舎に居つかないんだらうな？ 田舎は暮しい、ぢやないか。」

「田舎にあつて、する仕事はありません。第一、土地がありませんもの。」

ネフリュードフは痛いところへ觸られた感じがした。——痛いところは常に觸られるやうな感じのするものであるが、それはつまり、そこが觸られると痛いからに他ならない。

どこでも同じことだらうかと、ネフリュードフは考へて、馭者の故郷の土地の模様などを訊きたがした上、どうして田舎を棄て、こんなところに来たのかなど、詳しいことを、いろく聞いて見

た。馭者は乗り氣になつてしやべり出した。

「わし等のところでは、一人あたり一デシャチナの土地ときまつてゐます。親父と弟が一人残つてゐて百姓をしてるんですが、碌々仕事もないし、弟の奴、しきりにモスクワへ出たがつてるやうですよ。」

「土地を借りるわけには行かないのかね？」

「今時分、土地を貸してくれるものなんかあるもんですか。地主が財産を湯水のやうに使つたもんだから、土地はみんな商人の手に這入つちまひました。商人は自分たちで耕作してるんですから、借りようつたつて借りることは出来ないんです。……さあ、監獄へ参りました。正門のはうへ着けませうか、もつとも通してくれないと困りますが……」

一一三

正門のベルを鳴らした時、ネフリュードフの心は暗くなつた。今日のマースロワの様子はどうなだらうと考へた。

扉を開けてあらはれた看守に、彼はマースロワのことを訊いた。看守はちよつと調べた上で病院の方にあると答へた。

病院の受付をしてゐる優しき老人は、直ぐ彼を中に通し、誰に面會したいのかと聞いた上、小

兒科病室の方へ案内した。

そこには石炭酸の臭氣のしみこんだ若い醫師がゐて、廊下に立つてゐるネフリュードフに何の用件で来たのかと、固苦しい口調で訊きたゞした。この醫師は常々囚人側の味方をするので、典獄や醫師長などと絶えず衝突してゐたが、今は、ネフリュードフから何か不法な要求でも持ちこまれたのではないかと懸念したので、何人に對しても例外は許さぬといふことを示すために、わざと、しかつめらしい風を装つたのだつた。

「こゝは小兒科の病室です。女はゐません。」と彼は言つた。

「えゝ、それは知つてゐますが、看護助手をしてゐる女囚があるでせう。」

「なるほど、それは二人ゐます。どちらかに御用がおありなんですか。」

「マースロワといふ女に會ひたいのです。その女の件を元老院に上訴するため、近々ベテルブルグに参りますので、その前にちよつと會つてこれを渡したいのです。たゞ寫眞一枚です。」と言ひながら、ネフリュードフはポケットから封筒を取り出した。

「よろしい、呼んで参りませう。」

若い醫師はやさしく言つて、自エブロンのお老女にマースロワを呼びにやつた。

「こゝでお待ちになりますか。それとも應接間へいらつしやいますか。」

「ありがたい。」とだけ答へて、醫師の態度が變つて来たのを喜びながら、病院内でのマースロワの評

判を聞いた。

「評判はいゝです。以前の生活から考へて見ると、今は随分よく働いてゐるわけです。」

そこへ、マースロワが老看護婦につれられて出て来た。彼女は青い縞の服に白いエブロンをかけ、髪を布片で包んでゐたが、ネフリュードフを見ると、赧くなつて立ちどまつた。が、直ぐに眉に皺を寄せ、伏眼になり、つかつかと廊下の真中を急ぎ足にネフリュードフの方へ向つて来た。彼女は握手したいとは思つてゐなかつたが、やはり自然に手が出た。

ネフリュードフは、彼女が激情に驅られて暴言を吐いたことを詫びたことがある、あの日以来マースロワに會はなかつたので、今日もあの時と同じやうな態度だらうと豫期してゐた。

しかし、今日の彼女はすつかり變つてゐた。その顔には、一種の新しい表情があつた。どこか控へ目で、おどくしてゐると同時に、ネフリュードフに對して悪意でも持つてゐるやうに見えた。彼はさつき醫師に言つたと同じこと、つまりベテルブルグに行くことを話して、バノーヴォ村から探し出した例の寫眞の這入つてゐる封筒を渡した。

「古い寫眞だよ。お前が喜ぶだらうと思つて持つて来た。」

「何だつてこんなものを持つていらしたの？」とでも訊くやうな眼つきをして彼女は男を見たが、口では何も言はずに寫眞を受けとり、エブロンのポケットにしまひこんだ。

「お前の叔母さんに會つて来たよ。」ネフリュードフは言つた。

「さう？」氣のない返事だつた。

「この具合はどう？ 居心地は？」

「え、結構ですわ。」

「つらくはない？」

「いゝえ。でもまだ慣れないけれど。」

「それや結構だ。とにかく、あそこよりはいいわけだね。」

「あそこつて？」

「監房のことさ。」

「どうして？」

「周囲の人がいゝだらう。あそこに這入つてるやうな連中はあないんだから。」

「あそこにだつて澤山いゝ人があますわ。」と彼女は反對した。

「メニショーフの一件も調べて見たよ。多分放免になるだらうと思ふ。」

「神様が救つて下さるわね。あんないゝお婆さんなんですもの。」マースロワはまた老婆のことを褒めて、かすかな微笑を浮べた。

「僕は今日ペテルブルグへ行くつもりだ。お前の再審も近々始まるが、どうかして判決を取消しにしたものだね。」

「取消しになつてもならなくても、今では同じことですわ。」

「何故？ 今ではとは？」

「さうなのよ。」とだけ言つてマースロワは、何か訊きたげな視線を彼に向けた。

その言葉と眼差しとを見てネフリュードフは女の氣持を知つた。——彼女は、自分が結婚の意志を棄てないであるか、それとも彼女の拒絶を容れて諦めてしまつたか、それを知りたいと思つてゐるのだ……。

「どちらにしても同じだといふのはわからないね。僕にとつてこそ、お前が放免になつてもならなくても同じことなんだ。前にも話した通り、お前がどうならうと僕は實行するつもりなんだからね。」彼はきつぱりと言つた。

彼女は顔を上げた。喜びに輝いた顔だつたが、口では全然ちがつたことを言つた。

「そのことなら、おつしやらない方がいいわ。」

「お前に知つてもらひたいから言ふんだよ。」

「残らず伺ひましたもの、この上、お聞きすることはございません。」

微笑を抑へよう／＼としながら、彼女はかう言つた。

突然、病室の方が騒がしくなつて、子供の泣聲が聞えて來た。

「私を呼んでるのでせう。」彼女は、そは／＼してあたりを見廻した。

「さうか、ぢやこれで失禮しよう。」

ネフリュードフが差し述べた手を、彼女はわざと気づかぬ風をして、くるりと向きを變へ、ばたばたと行つてしまつた。

「どんな變化があつたんだらう？ 何を考へてるんだらう？ 何を感じてるんだらう？ 僕を試す氣であるのか、それとも本當に拒絶するののか？ 感じたり考へたりしてあることを言はないのは、言ひ得ないのか、言ひたくないのか？ 氣持は幾らかやはらいだのか、餘計にこぢれたのか？」

こんな風に自問しても、一つとして、はつきりした解答を與へることは出来なかつた。しかし、彼女の變つたこと、彼女の精神内に或非常に大きい變化が起りつゝあることだけはよくわかつた。この變化が、彼を彼女と結びつけたばかりでなく、彼女に變化をもたらしたとこの神とも結びつけたのである。そして、この結合が彼に、感動と喜ばしい興奮とを與へたのである。

八つの小さな寢臺が並んである病室に引き返してから、マースロワは、看護婦の言ひつけ通りに、寢臺を整理しはじめた。敷布を持つて體をあまり前に伸ばし過ぎたので、這つて危くころぶところだつた。

彼女を見てゐた頭に繃帯した子供が笑つたので、マースロワも釣りこまれて、大きな聲を立て、笑ひ出した。他の子供たちも一緒になつて笑つた。

「何だつてげら〜笑ふの？ 今までのところとはちがひますよ。さつさと行つて食物を持つておいで。」看護婦はマースロワに嘸鳴りつけた。

マースロワは黙つて食器を持ち、出て行かうとしたが、とたんに繃帯の子供と眼を見合して、また、くす〜と笑つた。

その日以後、マースロワは、自分ひとりになると、幾度も〜寫眞を封筒から半ば引き出しては、うつとりと眺め入つた。日が暮れて、仕事を終り、もう一人の看護婦と一緒に寢臺に、ひとりで引き取ると、寫眞をすつかり抜き出し、ちつと身動きもせず、なつかしうな眼をして、ネフリュードフや自分やネフリュードフの叔母たちの顔、着物、ヴェランダ、背景になつてある茂みなどを、こまごまと、いつまでも飽かず見つめるのだつた。寫眞は、ぼやけて黄色くなつてゐたが、見つめれば見つめるほど、當時のことを、殊に、可憐な自分自身の姿を、なつかしく思はないではゐられなかつた。あまり氣をとられてゐて、朋輩の女が這入つて來たのもわからないくらゐだつた。

「何をもらったの？」と、お人よしの看護婦は、覗きこみながら訊いた。「これは誰？ あんた？」

「きまつてるぢやないの。」マースロワは、にゆつと笑つて、朋輩の顔を見た。

「ぢや、これはあの人ね？ こちらはあの人のお母さん？」

「いゝえ叔母さん。私だつてことが、あんだ、わからなかつた？」

「わからぬわ。すつかり變つてるんですもの。きつと、十年も前の寫眞だわね。」

「一生涯も前のことだわ。」マースロワは答へた。と、急に寂しさうな顔になつて眉と眉の間に深い皺が刻まれた。

「どうしたの？ あんたは随分氣樂なぐらしをして來たんでせう。」

「氣樂な——さうだわ。」マースロワは眼を瞑り頭をふらくさせて、「地獄よりもひどかつたわ。」

「まあ、どうして？」

「さうなのよ。夜の八時から朝の四時まで。それが毎晩なんだもの。」

「止めようたつて止められやしないわ。あゝ、こんな話、したつて何にもなりやしない。」

マースロワは叫んで、寫眞をテーブルの抽出しにはふりこみ、くやし涙を抑へかねて廊下に駈けだした。そして扉をばたんと閉めてしまつた。

彼女は寫眞を見ながら、當時の自分に返つたやうな氣がして、當時の幸福と、現在ネフリユードフと一緒になれば或ひは再び來るかも知れない幸福とを夢見てゐたのだ。ところが、朋輩の言葉によつて、彼女は現實に返つた。妓樓にゐたころの生活——その時は漠然としか感じなかつたし、また強ひて考へないやうにしてゐた生活の恐ろしさ、今更のやうに、まぎ／＼と思ひ出されたのだつた。

漸く今、彼女は慄然とする毎夜の生活を、殊に或る謝肉祭の夜のことを、鮮やかに胸に浮べることが出來た。——その夜、マースロワは、彼女に身受けの約束をした學生の來るのを待つてゐた。酒臭

い、赤い絹の、肌のはらはな服をだらしなく纏ひ、亂れた髪に赤いリボンを結び、酔つて、すつかり疲れ切つてゐた。夜明けの二時頃だつたが、彼女はダンスの間の休みに、ピアノの伴奏をする女の傍に腰を下して、長い間の辛い身の上話をしながら愚癡をこぼしはじめた。相手の女も何とかしてこの惨めな境遇を抜きたいと言つてゐるところへ、ベルタといふ女もやつて來て、今度は三人相談の上、こんな商賣は止めてしまはうといふことになつた。もう夜明けに間もないから直ぐに逃げ出さうと支度をはじめた。丁度その時、酔つぱらひ客が、ガヤ／＼と騒ぎ出した。ヴァイオリン弾きが弾き出したので、ピアノ伴奏の女も、逃げ出す方は後廻しにして、まづ調子を合さなければならなかつた。

燕尾服、白ネクタイの小男が、汗染ろになつて、酒臭い呼吸を吹きかけ、しやくりをしながら、マースロワに突貫して來て抱きついた。と、も一人の肥つた鬚の大男がベルタを抱へ上げた。そして、皆がいつまでも、ぐる／＼廻つたり踊つたり喚いたり飲んだりした……。さうして翌る年も、また翌る年も、また三年目も、つき／＼に過ぎてしまつた。その間にどうして生活を變へなかつたのだらうか？ 皆、これもあの人のために起つたことだ！

と不意に、彼に對する昔の恨みが甦つて來た。思ひきり罵り責めたくなつた。今日の機會を逸したのが残念だつた。——ちやんとわかつてゐますよ、その手には乗りませんよ、體は自由になつても心は自由になりませんよ。と言つてやればよかつた。かう思ふと、彼女は苦しくてたまらなくなり、それをまぎらすために酒でも飲みたくなつた。監房にゐるのだつたら禁酒の誓を破つたかも知れない

が、こゝでは、助手にでも頼まなければ酒を手に入れることは出来ない。助手は前からうるさく彼女に言ひ寄つて来るので、そんな男に頼む氣にはなれなかつた。男と親しくすることは今の彼女には嘔氣を催すほど厭なことだつた。

しばらく廊下に腰を下してゐたマースロワは、部屋に歸ると、明輩が何を言つても返事もせず、顔廢してしまつた自分の生涯を悲しみ嘆いた。

一四

ネフリユードフはベテルブルグで四つの用件があつた。元老院へマースロワの件を上訴すること。請願委員會へフョードシヤ・ビリューコフの請願書を提出すること。それからウエーラ・ボゴドワホースカヤに依頼された件で、彼女の友シユーストワを放免する運動と、要塞に監禁されてゐる子にその母を面會させる運動。第四は聖書を読み議論したといふ科で流刑に處せられた百姓の事件だつた。

ネフリユードフは、マースレンニコフを最近訪問して以來、殊に田舎へ行つてからは、自分がこれまで屬してゐた社會に對して全身的嫌惡を感じるやうになつた。——この社會は少數者の安易と享樂とを保證するために、數百萬の人々の受けてゐる苦惱を隠してゐる。その隠しかたが念入りなので、彼等はその苦惱を見ようともしないし、また見ることも出来ない。また、彼等の生活がいかに殘忍邪惡なものであるかをも知ることが出来ないのである。今のネフリユードフには、不快と自責の念を抱

かずに彼等と交ることは出来なかつたが、やはり親戚關係とか交友關係とか従來の情性とかのため、相變らずこの社會に引きずりこまれてゐた。それに、マースロワやその他の人々を救ふためには、どうしても、この社會の、——尊敬しないどころか時には憤慨と侮蔑とをのみ感じる人々の助力を仰がなければならなかつた。

ベテルブルグに着くと、彼は母方の叔母に當るカテリーナ・イワーノウナ伯爵夫人の家に逗留することにした。(彼女の夫は前國務大臣である)ネフリユードフは、たちまち、今では縁の遠い貴族社會の中心に飛びこんだわけで、非常に不愉快だつた。しかし、それも止むを得ない。黙つてホテルに泊らうものなら叔母の感情を害するにきまつてゐたし、また、彼は今度の用件で種々叔母の助力を乞はなければならぬ立場にあつた。

「一體どうしたの? 随分變つたぢやないか。」カテリーナ夫人は彼が到着すると直ぐに珈琲を自ら運んで来て、かう言つた。「ホワード(監獄改革者の名前)を氣どつてるんだね。罪人を救つたり、監獄めぐりをしたりしてさうぢやないか。」

「いゝえ、そんなわけぢやないんです。」

「さうだつて噂だよ。悪いことぢやないね。何でもそれにはロマンチックな話があるつてことだが、それを聞かしておくれ。」

ネフリユードフはマースロワとの關係を、全部正直に打ち明けた。

「さうかい。さう言へば、お前のお母さんが心配して私に話したことがあつたよ。お前が田舎の叔母さんの家へ行つた時分のことだつた。みんなはお前と一緒にするつもりだつたにちがひない。(この夫人はいつもネフリュードフの父方の叔母を軽蔑してゐた) ちや、その娘なんだね。今でも綺麗なかかい?」

夫人は六十の婆さんだつたけれど、元気で快活で話好きだつた。ネフリュードフはこの叔母が好きで、話してゐると、その陽気なのに釣りこまれるのが子供の時から癖だつた。

「いゝえ、たゞ、あの女を救つてやりたいと思ふだけなんです。だつて何の科もないんだから可哀さですよ。さうなつたのも元は私のためですから、自分の出来るだけのことをしてやるのが私の義務だと思ひます。」

「その女と結婚する氣があるつてことを聞いたが本當かい?」

「えゝ、その氣でしたが向うが不承知なんです。」

叔母は啞然として眉を上げ眼をまるくして、ネフリュードフを見つめたが、やがて表情が一變して安心したらしい顔つきになつた。

「さうかい。その女の方がお前よりよつほど利口だよ。なんてお前は馬鹿だらう。ほんとに結婚する氣だつたんかね?」

「むろんですよ。」

「あんな商賣をして来た女とね?」

「だからこそ、しようと思つたんです。それも私が元なんだから。」

「馬鹿だね、お前は。」叔母は笑つた。「呆れかへつたお馬鹿さんだよ。だけど、お馬鹿さんだから私は好きなのさ。」

叔母はお馬鹿さんといふ言葉が好きと見えて、幾度もくり返した。しかし、ネフリュードフの道德的な立場は心に通じてゐるらしくあつた。彼女はつゞけて言つた。

「恰度いゝことがあるよ。お前も聞いたことがあるか知れないが、アーリンが、すばらしく立派なマダレナの家(廢業した娼婦の保護所)をつくつてゐるんだよ。私も一度行つて見たが、そこにある女の不氣味なことつたら、私は後でごしく體を洗つたくらぬだよ。でも、アーリンはその仕事に一身を捧げてるのさ。ところでどうだらう、その女を、つまり、お前のいふ女をそこに預けたら……」

「でも、シペリヤへ送られることになつてゐますから。實は私は一件を上訴するつもりでこちらへ來たんです。叔母さんにお願ひしたい用件の一つはこれです。」

「上訴つてどこへ?」

「元老院です。」

「元老院なら、從兄弟のレオがあるけれど、あれは紋章局のはうだし、他には誰も知らないね。でも良人に話して見よう、よく知つてゐるだらうから。もつとも詳しいことはお前から話す方がいゝよ。あ

の人は私の言ふことは何でもわからないことになってしまうのだからね。誰にでもわかることが、良人にだけはわからないのさ。」

その時、召使が銀盆に手紙を載せて持つて来た。

「ほら恰度い、アーリンからだよ。お前も都合よくキゼウツテルさんのお話が聞けるよ。」

「キゼウツテルつて誰です？」

「今晚お見えになるから、どんな方だかわかるよ。あの方の説教を聞くと、どんな悪者でも泣いて懺悔するほどだよ。だから、お前のマグダレナ（娼婦の意）に聞かせたら、きつと改心するだらうよ。お前も今夜は家にゐて、お話を聞き。それやえらい方だから。」

「面白くなささうですね。」

「面白いよ。だから是非歸つておいで。他に頼むことは？」

「要塞監獄に用があるんです。」

「要塞監獄に？ クリグスマート男爵に紹介して上げようか。なかくの勢力家だし……さうくお前は御存知だったね、お前のお父さんの友だちだったから。い、方だよ。ところで、どんな御用なの？」

「そこに這入つてくる男に母親を會はしてやりたいんです。これはクリグスマート男爵よりも、チェルヴィヤンスキイの手でどうにでもなるといふ話でしたが。」

「チェルヴィヤンスキイは嫌ひだけれど、マリエットの配偶だから、マリエットに話せばいい、だらう、何とかしてくれるよ、親切な女だからね。」

「それから、なんの科かわけもわからずに入れられてる女があるので、それを放免にしてやりたいのです。」

「そんな心配しなくても、科は本人が百も承知してるのよ。斷髮女（虚無主義者の意）なんか、それが當然の報いさ。」

「當然かどうか知りませんが苦しんでゐますよ。叔母さんはキリスト信者でありながら人を憐れまないですね。」

「信仰は信仰、厭なものも厭なもの、どうにもなるものぢやない。私が虚無主義の連中が好きだといふやうな風をしてたら尙悪いぢやないか。殊に斷髮女と來たら、もうくたまらないよ。」

「何故たまらないんですか。」

「三月一日（アレキサンドル二世の暗殺された千八百八十一年の三月一日の意）が過ぎてから、そんなことを訊くものはあやしない。」

「皆が皆、三月一日事件に關係したわけぢやないでせう。」

「どちらにしたつて自分の仕事をうちやつて他のことに手を出すのはいけないよ。女の出る幕ぢやない。入を教へようなんてのが第一まちがつてる……」

「教へるんぢやない。たゞ救はうといふんでせう。」

「あの連中に聞かなくつたつて、救へるものと救へないものとの區別くらゐ誰だつて知つてるさ。」

「しかし、農民の状態はひどいものですよ。私は田舎から歸つたばかりですが、農民はどんなに死にもの狂ひで働いても腹一杯食べることが出来ない、而も私たちはかうして贅澤三昧に暮してゐる、それは不合理ぢやないでせうか？」

ネフリユードフはつひ叔母の話に釣りこまれて自分の考を口に出してしまつた。

「ぢやどうしろといふの？ 私も働いて何も食べないでゐなきやいけないと言ふのかい？」

「いゝえ、叔母さんに食べないでゐると言ふんぢやありません。」ネフリユードフは軽く笑つて、「働きたへすれば充分食べられるやうにならなきやいけないと思ふのです。」

叔母はまた眉を上げ眼を圓くして、何か珍らしいものでも見るやうに、まじくと彼を見つめた。

「お前、おしまひには碌なくらしは出来なくなるよ。」彼女は言つた。

「何故です。」

その時、脊の高い、胸の廣い、彼女の夫が這入つて來た。將軍で、前國務大臣だつた。

「やあ、どうだね？ いつ着いた？」

叔母は夫にさつそく報告した。

「まあ、あなた、この人はどうかしてるんですよ。私に洗濯でもして馬鈴薯ばかり食べてると言ふん

です。呆れ返つたお馬鹿さんぢやありませんか。だけど、何かお願ひがあるさうですから聞いてやつて下さい。あ、それから、お聞きになりましたか、カーメンスカヤのお母さん、愈々わるいさうです。いらつしやらなければいけないでせう。」

「それや大變だ。」

「直ぐにいらつしやい。私はちよつと手紙を書かせていただきます。」

ネフリユードフは隣りの部屋へ行かうとして立ち上つた。

「ぢや、マリエットに手紙を書きよ。」と、叔母は呼び止めて言つた。

「どうぞ。」

「斷髮女のごことはお前自身でお書き。餘白を残して置くから。私を悪く思はないでくれ。蟲が好かないだけで別にあの連中を苛めようと言ふんぢやないから。ぢや行つておいで。そして晩は必ず歸つて來て、キゼウエッテルさんのお話を聞くんですよ。みんなでお祈りをしませう。逆らひさへしなきや、きつと爲になります。こんなことでは、お前のお母さんもさうだつたが、お前も世間並より遅れてるからね。」

一五

イワン・ミハイロウイテ伯爵（叔母の夫）は自信家であつた。小鳥が蟲を啄んだり空中を飛びまは

つたりするのが自然であるやうに、彼には高給で抱へたコックのつくつた素晴らしい料理を食べたり、法外に贅澤な服を着たり、駿馬を馭して遠乗りをしたりするのが自然であると信じ、したがつて、これ等のものは自分のために用意されておなければならぬと自信してゐるのだつた。のみならず、伯爵は、あらゆる手段を弄して國庫から金を引き出したり、ダイヤモンド入りか何かの徽章や勳章をもらつたり、高位高官の人と話す機会が多かつたりすればするほど、それがいゝことだと考へてゐた。

この信條以外の事物は、一切無意味、無價値であると彼は考へた。そして、この主義を守つて四十年間、ホテルブルグで生活し活動して來た末、遂に國務大臣の椅子に就くことが出來た。

伯爵が大臣になり得た資格はどんなものか、まづ第一、種々の文書や法律の意味を理解し、下手ながらも、とにかく自分の手で誤字もなく公文書を起草することが出來たこと、第二に、必要に応じては、傲慢な態度はもちろん、近づき難い威嚴を示すことも出來たし、反對にどんな野卑な振舞をすることも出來たこと、第三に、公私共に節操といふものが全然なく、都合によつていかなる人物とでも妥協し、また離反したことである。かく行動しながらも、教養ある人物としての體面を保つと同時に矛盾した風を見せないことに努力してゐた。そして、自分の行動が道徳的であるかないか、ロシヤ全體に好影響を與へるかどうか、といふことなどは全然考へても見なかつた。

大臣になつた時には、部下や知人はいふまでもなく、彼を知らぬ人も、彼自身も、彼を非常に賢明

な政治家であると信じた。しかし、相當時日が経つても何等仕事らしい仕事もしないので、當然、生存競争の法則に依つて、彼同様の人物、即ち公文書を起草したり解釋したりすることを習ひ覺えたといふだけの、無定見きはまる俗吏が、彼の椅子を奪つてしまつた。そのため彼は賢明な人物でないどころか、寧ろ淺薄無學な自惚屋に過ぎないといふことが、すべての人々にわかつた。彼を退けた俗吏と何等異つたところはないといふことが彼自身にもわかつた。しかし、年々國庫から莫大な金を受取つたり新しい勳章で胸を飾つたりすることは相變らずで、恩給だの手當だのといふ名目で受取る金額も數萬ループリに達してゐた。

伯爵は官廳で秘書から報告でも聞くやうな風でネフリユードフの話すことを聞いた。そして、二通の紹介狀を書かうと言つた。一通は元老院上訴部の議員ウォーリフ宛のものだつた。

「いろんな噂をするものもあるが、とにかく人物は出來てゐるよ。それに私には恩があるから、出來るだけの盡力はしてくれらう。」と伯爵は言つた。

他の一通は請願委員會の有力者宛のものだつた。ネフリユードフがフォードシャの一件を話すと伯爵は非常に興味を唆られたらしかつた。

二通の紹介狀と、マリエット宛の叔母の手紙とを持つて、ネフリユードフは直ぐに、それらの訪問に出かけた。

最初マリエットを訪ねた。彼女は落ちぶれた貴族の娘で、その少女時代をネフリユードフは知つて

あつた。後にあまり評判のよくない、しかし世渡り上手な男と結婚した。ネフリユードフは例に依つて、自分の尊敬しない人物に物を頼むのが厭だつた。いつもさういふ時、どうしようかと躊躇した末に、結局頼むことにするのだつた。それに、彼自身は仲間ではないと考へてゐるのに向うではやはり仲間だと思つてゐる。さうした社會に這入つてゐると、いかにも自分が虚偽の座に立つてゐるといふ氣がして苦しかつた。同時に彼等を支配してゐる無思慮、無節操な調子になるのをどうすることも出来なかつた。これは今朝叔母の家でも感じたことで、非常な眞面目な問題を話してゐながら、つい冗談半分の調子になるのだつた。

久しぶりのペテルブルグは、相變らず、すべてが綺麗で便利だつた。人間が道徳的方面のことを考へないので生活がいかにものんきさうに見えた。

マリエットの家の女關には、イギリス風の二頭立の馬車がとまつてゐて、頬の半分を髻で埋めた馭者が、手に鞭を持ち、威張り臭つて馭者臺に掛けてゐた。不似合なくらゐに立派な服をつけた門番が扉を開けると、そこには、それ以上に立派な、金筋入りの制服をつけた家僕が立つてゐた。

「將軍はどなたにもお目にかゝれません。奥様も同様でございます。これからお出かけのところでは、ネフリユードフは叔母の手紙を出して、訪問帳の載せてあるテーブルに寄り、お目にかゝれなくて残念だといふ意味を書きはじめた。と、そこへマリエットが階段から下りて來た。彼女は羽毛飾りのついた大きな帽子をかぶり、黒の服に黒の手袋をはめ、顔にはヴェールをかけて

みた。が、ネフリユードフの姿を見ると、そのヴェールをあげ、美しい顔を見せながら、おやといふやうに眼を輝かした。

「あら、ネフリユードフ公爵ぢやございませんか。」と、彼女は、ほがらかな聲で呼びかけた。

「おや、よくおぼえてゐて下さいましたね。」

「おぼえてゐますとも。妹と二人であなただを思ひ合つたことさへあるんですもの……」と彼女はフランス語で言つた。「ただ、あなたも随分お變りになりましたわね。今日はこれから出懸けなきやならないので、本當に残念ですが、また是非いらして下さいませんか。」

彼女は立ちどまつてもじくしてゐたが、掛時計を見上げながら、「では失禮いたします、カーメンスカヤさんの家へ告別式に參らなきやなりませんから。お母さんが可哀さうですわ。」

「カーメンスカヤといふ方は？」

「お聞きになりますませんでしたか。息子さんが血闘で亡くなられましたの。一人息子だつたのに、恐ろしいことですよ。それを聞いて今度はお母さんがお悪いのです。」

「さうですか。ちよつと耳にしました。」

「ではまた。今夜か明日でも、お待ちしてゐますわ。」

彼女は軽い足どりで歩き出した。一緒に歩きながら、ネフリユードフは言つた。

「今夜はお伺ひ出来ませんが、實は、あなたにお願ひがあつて參つたのです。」

「どんなことでせう？」

「叔母からの手紙を持参しました。これに詳しく書いてあります。」と言ひながら、ネフリユードフは紋章入りの小形の封筒を渡した。

「カテリーナさんは私が良人の仕事にまで口を出してゐるやうに思つていらつしやるけれど、それは大ちがひですの。私には何の力もありませんし、口を出したりすることが嫌ひなものですもの。けれども、あの方やあなたのためなら、いつでも例を破りますわ。どんな御用なものでせう？」

「實は或娘が何の科もないのに要塞監獄に入れられましたして病氣になつてゐるんです。」

「名前は何と申しますの？」

「シユーストワと言ひます。その手紙に書いてあります。」

「宜しうございます。出来るだけのことをして見ませう。」

マリエットはそこに待つてゐる馬車にひらりと乗つてバラソルをひろげた。家僕が馭者臺に飛び乗つて出發の合圖をした。馬車は進み出したが、その時、彼女がバラソルの先で、ちよつと馭者の背を突くと、毛竝のつやくした栗毛の二頭の馬は、急に手綱を絞られて、見事な首を反らし、脚をばたはたさせて踏み止つた。

「是非いらして下さいました。御用なんかお持ちにならないでね。」彼女はかう言つて、魅力のあることを自分でも知つてゐる獨特の微笑を浮べてネフリユードフを見た。そして、一芝居すんで幕をお

ろすといふ調子でヴェールを下げた。

「もういゝよ。」と言つて、また馭者の背中をバラソルの先で突いた。

ネフリユードフは帽子を脱いだ。馬はかすかに鼻を鳴らしながら、石だゝみの上に蹄の音を立て、走り、車は時々道の曲に揺れながら、新しいゴム輪の音も軽く迂つて行つた。

一六

ネフリユードフはマリエットと交した微笑を思ひ出して首を振つた。

「せつかく目覺めたと思つたのに、またこんな生活に引きずり込まれさうだ。」

尊敬しない人物の機嫌を取らなければならぬ時、常に襲はれる矛盾と疑惑とを感じながら、彼はかう思つた。

つきはどこにしようかと考へて、元老院へ廻ることにした。

元老院では事務室に通されたが、そこには、身なりのいゝ大勢の役人があて、その話に依ると、マースロワの上訴状は既に受理され、元老院議員ウォーリフの方へ廻つてるといふことだつた。(そのウォーリフへの紹介状を叔父は書いてくれたわけである。)

「元老會議は今週開かれますが、マースロワの件は今度の會議には間に合はないでせう。もつとも特別の依頼でもあれば何とかなるかも知れません。」と役人は説明してくれた。

ネフリュードフは次は請願委員會中の巨頭ウォロイヨフ男爵の官舎を訪問した。門番は頗る不愛想に、面會日以外には絶對にお目にかゝれない、今日は陛下のお召しで参内、明日も参内される筈であると言つた。ネフリュードフは叔父の紹介状を渡してから、今度はウォーリフの家に向つた。

ウォーリフは食事を終つたばかりのところ、いつもの通り、腹ごなしに煙草を吹かしながら部屋の中をぐる／＼歩いてゐた。この男は自分を非常に偉いものと一人きめにして、他人をすべて見下してゐた。結婚に依つて年一萬八千ルーブリの収入ある財産を手に入れたり、獨力で元老院議員になつたりしたので、自分を偉いと思はざるを得なかつたのであらう。而も單に自分を完全な人間であると思つてゐたばかりでなく、古武士の風格があると考へてゐた。そのため、個人の賄賂をこつそり受取つたりするやうなことは一切しなかつたが、その代り、報酬とか手當とか出張費とかの名目を設けて莫大な金額を國庫に請求することは平氣だつた。

ウォーリフは部屋を歩きまはるのを止めて、親しみを寄せた、しかしやゝ皮肉な微笑（これは彼の癖で、つまり自分の優越感をあらはしてゐるのだつた）を浮べて、ネフリュードフを迎へた。そして手紙を讀んだ。

「どうぞお掛け下さい。甚だ失禮ですが歩きながらお話しさせていたゞきます。」彼は兩手を上着のポケットに入れて、また、あちこち歩き出した。「何分お心易くお願ひします。伯爵の御依頼の件は、打ろん喜んでお引き受けいたします。」

彼は香氣の高い青い煙を口から吐きながら言つた。

「なるべく早く早くしていたゞくわけに参りませんか。愈々シベリヤへ行かねばならないのでしたら、早目にやりたいと思ひますので。」と、ネフリュードフは言つた。

「なるほど、ニージュニイ出帆の一番の間に合ふやうにするんですね。わかりました。」相手の言はうとすることを察したウォーリフは一流の微笑を浮べて言つた。「ところで被告の名前は何と申しますか？」

「マースロワ……」

ウォーリフはテイブルのところへ行つて、綴込みになつてゐる書類をめぐつて見た。

「なるほど、マースロワ。よろしい、同僚にも頼んで見ませう。多分、水曜日には審理することになるでせう。」

「では辯護士に電報を打つてもいいでせうか？」

「辯護士ですつて！ 何のためですか？ もつとも御随意ですが。」

「上訴の理由が不十分ではないかと思はれますので。しかし、判決が誤解に基づいてゐることは明らかになると思ひます。」

「なるほど、さうかも知れませんが。しかし元老院はたゞ法の適用が正しいか、法の解釋が正しいかといふことを見るだけなんですよ。」

「でもこの事件は例外だと思ひます。」

「わかつてゐます、わかつてゐます。みんな例外です。とにかく義務を盡すことにしませう。それでいゝのです。」彼が見つめてゐる葉巻の灰は、まだ落ちないであつたが、もう裂目が出来てふらくしてゐた。

「ベテルブルグへは、ちよいといらつしやいますか。」彼は葉巻をそつと灰皿の上に運びながら話題を變へた。ネフリエードフの返事を待たないで續けて言つた。「どうです、カーメンスキイ事件は大變ぢやありませんか。好青年でしたがね。それに一人息子と來てる……母親としてはたまらないでせうよ。」

彼はベルを鳴らした。ネフリエードフは別れを告げた。

「宜しかつたら、水曜の晩餐にいらつしやいませんか。その時はつきりした御返事をいたしませう。」握手をしてウォーリフは言つた。

大分おそくなつたので、ネフリエードフは叔母の家へ歸つた。

一七

叔母の家の晩餐は七時半にはじまつた。

料理は凝つたものづくめ、酒も飛びきりのものばかりだつた。食卓に就いてゐるのは六人、すなは

ち伯爵夫妻と、その息子の近衛士官（これは不法な男で始終食卓に眩を突いてゐた）と、ネフリエードフと、家庭教師のフランス婦人と、田舎からやつて來た土地管理人とであつた。

こゝでも皆はカーメンスキイ事件を話題の中心にした。この事件に就いての陛下の思召がどうかうだと盛んに言ひ合つた。殺された方の母親に同情されたこと、しかし殺した方にも寛大な處置を執るやうにと仰せられたことなどを誰か話した。そこで、皆も同じく母親に同情すると同時に、殺した方のボーゼンといふ士官に對しても寛大な氣持になつた。しかし、伯爵夫人だけは頑固だつた。

「だつてお酒に酔つばらつて人殺しをしたんぢやありませんか。どうしても許すことは出来ませんよ。」と彼女は言つた。

「さあ、私にはわからないね。」と伯爵は言つた。

「宜しうございます。あなたはいつだつて、私の申すことが、おわかりにならないんです。」と言つてから、今度はネフリエードフの方を向いて、「誰でもわかる話が、良人だけわからないんですのよ。私は、その母親が可哀さうだと言ふんです。人殺しをしといて濟ましこんでるなんて、厭ぢやありませんか。」

その時まで黙つてゐた息子の近衛士官が口を出し、ボーゼンの味方をして露骨に母親に反抗した。彼の言分に依れば、士官としては、そんな場合、他に執る手段がない、何故といふに同僚から侮辱され、聯隊を追ひ出されるにきまつてゐるからだといふのだつた。

ネフリユードフは雙方をたゞ黙つて聞いてゐたが、自分が軍隊生活をしただけに、賛成こそしなかつたが、この男の議論を了解することが出来た。と同時に、彼は、激昂のあまりに殺人の罪を犯した若い美しい囚徒を監獄内で見たことがある、それとポーゼンとの運命を比較して考へないではゐられなかつた。どちらにしても酔つての上の殺人である。而も一方は百姓であるが、妻や家族と離別されて足枷をはめられ、頭を剃られて、シベリヤ送りの勞役に服さうとしてゐる。ところが、一方の士官は、營内の立派な一室に這入り、美酒佳肴に飽き、讀書することも出来、一兩日中には放免されるといふことである。むろん、今まで通りの生活が出来るところか、同僚からは持てはやされるにきまつてゐるのだ……。

かう考へたので、ネフリユードフはそのことを皆に話した。初めは叔母も彼の説に賛成したらしく調子を合してゐたが、終りには、他の人たち同様、黙りこくつてしまつた。場はづれの話を自分はそののだなと、ネフリユードフは思つた。

晚餐がはると、大廣間には、例のキゼウエッテルの説教を聞かうとして、大勢の人があつまつて来た。

女關には立派な馬車が来た。きらびやかに飾り立てた大廣間、絹や天鵞絨の、けばくしい衣裳に身をくるんだ貴婦人、軍服もしくは夜會服の紳士、——さうした中に、平民が五人、つまり、庭番が二人、商人と給仕と取者とが一人づゝ、端のがに交つてゐた。

キゼウエッテルは、がつしりした體の、白髪交りの男で、言葉は英語だつた。それを鼻眼鏡をかけた若い娘が、流暢に通譯した。

彼は、われ／＼人間の罪は非常に大きいもの、その罪に對する刑罰も同じく大きく避けることの出

來ないものであることを説いた。

「皆さん、こゝにしばらく、われ／＼は何をしつゝあるかを考へて見ませう。いかに生活してゐるか

いかに神様に罪を犯してゐるか、いかに主キリストを苦しめてゐるかを考へて見ませう。實にわれ／＼には許され得る道も、遁れる道も、救はれる道も、悉く塞がつてゐるのであります。われ／＼はすべ

て滅亡の運命を背負つてゐるのであります。あゝ、恐ろしい運命——永遠の苦惱が、われ／＼を待つてゐるのであります。」彼は聲を震はし涙をこぼして言つた。「おゝ、どうしたら、われ／＼は救はれるで

せうか。どうしたら、この恐ろしい劫火を遁れることが出来るでせうか。猛火は既に家を包んでゐる、出口はどこにもないのです。」

彼は暫く口を噤んだ。と、本當の涙が頬を傳はりはじめた。この八年間、彼はいつもこの大好きな文句のところにかゝると、咽喉がつまり鼻がむづ／＼して、自然に涙がたまつて來るのだつた。そして涙が出ると一層感激してしまふのだつた。

啜り泣く聲が部屋中に聞えた。伯爵夫人はテーブルに肘を突き、兩手で頭を抑へ、盛り上つた肩を震はしてゐた。他のものも大抵こんな風な姿勢をしてゐた。

キゼウニテルは突然顔を上げ、俳優が喜びの表情の時に見せるのとすつかり同じ微笑を湛へて、再び優しい聲で話し出した。

「けれども救ひの道はあります。こゝにあります。——喜ばしい安らかな救ひの道です。神様の子がわれ／＼のために十字架の苦しみを嘗められた、その血の中に、救ひの道があるのです。キリストの苦しみと血とが、われ／＼を救つて下さるのです。兄弟よ、姉妹よ……」と、また彼は涙聲になつて「主に感謝を捧げませう。われ／＼人類の罪を贖ふために、その一人子を遣はし給うた主に感謝いたませう。その聖なる血は……」

ネフリュードフは、嘔吐を催しさうになつて黙つて立ち上り、眉をひそめ恥づかしさを包みながら爪先立て、自分の部屋へ引き下つた。

一八

あくる日、ネフリュードフが朝の着替へを済まして階下へ降りようとする時、家僕がモスクワから来た辯護士の名刺を持つて来た。

辯護士は自分の用事でベテルブルグに來たのだが、マースロワ事件の再審が早く元老院で開かれるやうなら、それにも出席しようと思つてゐた。ネフリュードフの打つた電報は彼と行きがちになつたわけである。それで、ネフリュードフから日取りのことや出席議員の顔ぶれのことなどを聞くと、にっこりして言つた。

「ウォーリフが出るんですか。あれはベテルブルグ式の役人ですよ。それからスコワロードニコフといふのは理論家、ベーといふのは實際家で、一番しつかりしてゐます。ところで、請願委員の方はどうなりましたか？」

「いや、そのことで實は今日、ウォロビヨフのところへ出懸けようと思ふんです。昨日は會へませんでした。」

「あの男、なか／＼喰へない代物ですよ。」

「さうですか、とにかく會つて來ることにさせう。」と、ネフリュードフは言つて立ち上つた。

「それがいゝ、御一緒に参りませう。」

女關のところに、家僕が、マリエットから來た書面を持つて立つてゐた。それにはフランス語でかう書いてあつた。

「あなた様の御希望に副ふやう、私の主義をまげて、すべてお取り計ひいたしました。遠からぬ内、釋放されるでございませう。良人から要塞監獄の長官のところへ言つてやりましたから。御用がなくても、是非お遊びにいらして下さいまし、お待ちいたしてをります。」

「どうです、たまらないぢやありませんか。」ネフリュードフは辯護士に言つた。「七ヶ月も獨房に監禁されてゐた女が、無罪ときまつたんですよ。而もたつた一言で放免になるんです。」

「いつだつてさうなんです。でもまあ、あなたの御希望は叶つたわけですね。」
「その叶つたのがかへつて悲しい。そんなことは有り得べきぢやないでせう。何だつてあの女を監禁して置いたのです？」

「そんなことはあまり深く考へない方がいゝのです。さあ、お伴しませう。」
表には、辯護士の乗つて来た綺麗な辻馬車が待つてゐた。

ウォロビヨフ男爵は都合よく在宅だつた。最初通された部屋には、制服の若い祕書と二人の婦人とがゐた。

「どなた様でございますか。」若い祕書が気軽に立ち上つて訊いた。ネフリユードフが名乗ると、「男爵はあなたのお噂をしてゐられました。少々お待ち下さい。」と言つて、向うの部屋へ、這入つて行つた。そして、間もなく眼を泣き脹らした喪服の婦人を連れて出て来た。婦人は涙を隠さうとして、しきりにヴェールを下に引つ張つてゐた。

「どうぞこちらへ。」

祕書は書齋の方の扉を開けて、ネフリユードフに言つた。

男爵は愛想よくネフリユードフを迎へた。

「よくいらつしやつた。あなたのお母さんとは昔馴染でしたが、あなたにも、お小さい時と、士官をしておいでの時と、お目にかゝつたことがありますね。さあ、お掛けください。どんな御用でせうか……なるほど、なるほど。」

彼はネフリユードフから、フォードシャの事件を聞きながら、短く刈りこんだ半白の頭を振りく相槌を打つた。

「よくわかりました。同情に堪へません。ところで、請願書はもうお出しになりましたか。」

「出来てはゐるのです。」ネフリユードフは請願書をポケットから取り出して言つた。「それで實はあなたに願ひしたいのですが、この事件に特別の注意を拂つて頂くわけには参りませうか。」

「なか／＼よく出来てゐます。御盡力いたしませう。」男爵はその明るい顔にいかにも可哀さうだといふ表情を見せようとしながら言つた。「全く氣の毒ですね。その女は子供だつたにちがひないが、亭主もひどいことをしたもんですね。それで女はたまらなくなつたんだ。でも時が経つにしたがつて愛し合ふやうになつた……。宜しい、よく計ふことにいたしませう。」

「伯父のイワン・ミハイロウイチ伯も、よく計つてやると申してをりました。」

ネフリユードフが皆まで言はない内に、男爵の顔は一變してしまつた。

「さうだ、この請願書はあなたが直接係りへお出しになる方がいゝでせう。私も出来るだけの盡力をしますから。」

その時、祕書が這入つて来て言つた。

「さつきの婦人がもう少し申し上げたいことがあると言つてをりますか。」

「さうか、ぢや通すがい、……。よくもあんなに涙が出たもんだな。」

一九

ペテルブルグの囚徒の運命を握つてゐる男は世間から耄碌したと言はれてゐるドイツ系男爵の老將軍だつた。彼は澤山の勳章を持つてゐたが、平生は白十字章だけを胸に吊るしてゐた。これは、コウカサス地方に勤務中、軍服を着、銃剣を擔いだ大勢の農民を指揮して、自由と家族とを防禦しようとした數千の人間を殺戮したといふ恐ろしい功勞に依つて頂いた勳章である。ポトランド地方勤務中にも、農民を唆かして種々殘忍なことをしたお蔭で、大小さまざまの勳章を頂いた。

年を取つてからは現在の職に就き、立派な家と収入と尊敬とを得てゐた。彼は上からの命令を重んじて、世の中のことは何でも變更することが出来るが、この上からの命令だけはどうすることも出来ないと思へてゐた。その職務といふのは國事犯を要塞の奥にある獨房に監禁して、その半數を十年間に殺してしまふことだつた。——つまり、彼等は、狂氣になるか、肺病になるか、種々の方法で自殺するか(餓死を選ぶもの、硝子の破片で動脈を切るもの、縊死するもの、焼死するものなど、さまざまである)にきまつてゐた。

この事實を、老將軍は知らないのではなかつた。すべて眼のあたりに見たからである。しかし、今日では、さうした事實も、雷雨や洪水その他の天災同様、いさゝかも彼の良心を刺戟しなかつた。

彼は悉く皇帝陛下の命令を履行するために生じた結果である。而も命令を履行しなければならぬ以上、その結果に就いて考へることは全然無用である。そこで將軍は頭からそんなことを考へないことにした。否、考へることを自分にも許さなかつた。一週に一度、將軍は獨房全部を巡回して、囚徒の希望要求を聞くのを義務としてゐた。囚徒たちの種々の訴へをだまつて冷靜に聞いてゐたが、また會つてそれを、實行してやつたことがなかつた。何故といふに、彼等の訴へは悉く規則違反だからである。

ネフリュードフが將軍の家に着いた時、塔の上の大時計が「神の偉大を讚美する曲」を奏してゐたが、それが終つて二時を打つた。永久に幽閉されてゐる人々の胸には、毎時間ごとに繰り返されるこの樂曲がどんなに響くであらうかと、ネフリュードフは思った。その時、將軍は暗い客間で、若い畫家と對座して皿占ひの遊戯をしてゐた。畫家のほつそりした、しなやかな指と老將軍の筋くれだつた指とが組合されてゐた。

家僕の役をしてゐる從卒がそこへネフリュードフの名刺を持つて這入つて來た。將軍は邪魔が這入つたので、ちよつと厭な顔をしたが、一二分経つて、黙つて名刺を取り上げ、鼻眼鏡をかけた。そして咳拂ひをし、背伸びをして立ち上つた。

「書齋へお通ししてくれ。」

「後は私が一人でやつてしまひませう。」畫家も立ち上りながら言つた。

「あゝ、やつておしまひ。」將軍は謹嚴な調子で言つてから、足早に書齋の方へ行つた。

「よくお出でだつた。」彼はテイブルの傍の肘掛椅子を示しながら親しみを言つた。「こちらには長く御滞在ですか。」

「いえ、来たばかりです。」と、ネフリユーードフは答へた。

「お母さんはいかゞです？ お達者ですか。」

「母は亡くなりました。」

「おやさうでしたか。お氣の毒でしたね。さうく倅が、あなたにお目にかゝつたとまをしてゐましたよ。」

將軍の子は陸軍大學を卒業して諜報局に勤務してゐた。間諜の監督をする役目だつたが、彼はその仕事を自慢してゐた。

「私はあなたのお父さんとは御一緒に勤務してゐたこともある。ごく仲よしでしたよ。ところで、あなたは何？ どこにお勤めですか。」

「今は勤めてゐません。」

將軍は厭な顔をしてうなづいた。

「今日はあなたにお願ひがあつて参つたのですが、お聞き下さいませんか。」

「お願ひがお氣に觸りましたらお許し下さい。實は要塞監獄にグルケーウイチとかいふ者が入れられてゐますが、その母親が面會したがつてゐます。どうしても面會出来ないなら、せめて書物の差入れだけでも許可していただきたいと申してゐます。」

將軍の表情には満足も不満足もなかつた。小首を捻り眼を瞑つて何か思案でもしてゐる風だつたが實際は何も考へてゐなかつたし、第一ネフリユーードフの言ふことに全然興味を持つてゐなかつた。何

故といふに、彼は規則通りに答へればいゝといふことしか知らなかつたからである。

「御承知の通り、それは私にはどうにも出来ません。面會の件は、陛下の名に依つて定められた規則がありますし、差入れの件は、こちらに圖書室の設備があつて選定されたものだけを隨意に讀ませることになつてゐますから。」と將軍は冷淡に答へた。

「さうですか。でも、その男は科學の本を欲しがつてゐるんです。科學研究を志望してゐるもんですから。」

「そんなことを眞に受けちやいけません。」將軍は不機嫌らしく言つて、しばらく黙つてゐた。別に研究を志望してゐるんぢやありませんよ。いつもそんなことを言ふだけなんです。」

「彼等も苦痛なんだから何とかして時間をごまかしたいでせう。」

「あいつ等と來たら年中愚癡をこぼしてゐます。始末の悪い奴等です。」

將軍は彼等はすべて特殊な不良人種であるといふ口吻だつた。

「而もこゝでは、他の監獄では到底見られないやうな種々の便宜が與へられてゐます。」と言つて、將軍は辯解口調で、その便宜を詳細に互つて説明し出した。監獄制度の目的は囚徒に對して氣持のいい家庭を與へることであると彼は考へてゐるらしかつた。

「昔は別として、現在では非常に取扱ひがよくになりました。食事も三度だし、そのうち一度はカツレツとかピフテキとかの肉類がつく。日曜には別に御馳走がある。普通の人間だつて、さらにそんな御馳走を食べてはあませんよ。」

更に將軍は囚徒たちの要求がいかに無法なものであるか、いかに彼等が恩を知らないかを縷々として述べ立てた。老人の共通癖で、將軍も、しやべり慣れた文句をしやべるのが得意だつた。

「書物にしても、宗教書もあれば、古雑誌もある。ところが、彼等は殆んど讀まないのです。初めは興味もあつたらしいが、後には、新本のページが半分も切つてありません。私は時々ためして見ました。例へば、わざと、本の間へ紙片をはさんで置く、すると、いつまで経つても、ちやんと同じところにその紙片がある。てんで、彼等は讀書なんかしないんですよ。」將軍は軽い苦笑を洩らしてつけた。「書くことだつて禁じてはありませぬ。石盤も石筆も備へてあるんだが、それをしようとはしない。」

ネフリユードフは、老人の言葉を一々反駁したり、その言葉の持つ恐しい意味を説明したりするこの無益であるのを悟つた。しかし勇氣を出して、今朝釋放命令が出たと聞いたシユーストワのこと

を訊いて見た。

「シユーストワ? ……大勢あるので一々名前をおぼえることも出来ないが。」と、彼は囚徒の多いのを非難するやうに言つた。そしてベルを鳴らして書記を呼ぶやうにと命じた。

書記を待つ間に彼はネフリユードフに就職することを勧めて、「陛下にとつても國家にとつても高潔な人物(彼自身その一人である)と自任してゐた)が必要ですからね。」と言つた。「私はこんなに年を取りましたが、まだ、力のつゞく限り御奉公するつもりであります。」

そこへ書記が這入つて來た。きよろくした、こざかしい眼付の、瘦せこけた男だつた。そして、シユーストワの釋放命令は來てゐないと言つた。

「命令があれば即日出してやりますよ。われは引き留めて置きたくはないんだから。またあまりやつて來られても困るんです。」

將軍は無理に笑はうとして顔に皺を寄せた。ネフリユードフはこの老人に對して感じた不快と同情との入り交つた氣持をあらはすまいとして席を立つた。老人の方では、昔の同僚の倅である、この無分別な青年に對して、あまり嚴格でもいけなさと考へてゐた。

「ではさよなら。これは、あなたを愛するあまり言ふので、悪く思はれては困るが、こんなところに收容されてる人間と交際つてはいけませんよ。いゝ人間は決してゐない、破廉恥なものばかりです。私にはそれがよくわかつてゐる。」

眞理そのものを語るといふ調子だった。そして實際彼はそのことを疑つてゐなかつた。事實さうだつたからといふわけではなく、若しさうでなかつたならば、自分は永年善良な生活をして來た高潔な人物ではなくて、單に良心を賣つてその日を暮して來た不徳漢に過ぎないといふことを自ら承認しなければならなかつたからである。

「それから就職なさることが第一です。陛下も國家も高潔な人物を欲してゐます。」と彼はさつきの言葉をくりかへして、「一體私たちがあなたのやうに就職を嫌つたら、國家はどうなると思ひますか……」と將軍は言ひ出した。

ほつと溜息をついて、ネフリユードフは頭を下げ、丁寧^{ていねい}に差し出された骨ばつた頑丈な手を握つて部屋を出た。

將軍はうしろ姿を見送つて困りものだといふ風に首を振つた。そして腰をさすりながら、畫家の待つてゐる客間の方へ行つた。

ネフリユードフの馬車が門を出ると、馭者は振り返つて言つた。

「陰氣なところですね、旦那。私は待ちきれねえで歸つちまはうと思ひましたよ。」

「さうだ、陰氣なところだ。」

ネフリユードフは吐息まじりに答へた。そして、ほつと安心した氣持で、大空に漂つてゐる黒い雲や、小舟や小蒸氣の過ぎた後に残るネバ河のきら／＼するさゞ波に見入つた。

翌日、マースロワの審理が元老院で開かれる筈だったので、ネフリユードフと辯護士とはその壯麗な門前で落ち合つた。あたりには既に數臺の馬車が來てとまつてゐた。辯護士ファナーリンは様子を知つてゐるので、二階に上ると直ぐに左側の、裁判法開始の年號を記した扉を開けた。

狭い部屋で外套を脱ぎながら、彼等は廷吏から議員が全部揃つたことを聞いた。燕尾服、白ネクタイのファナーリンは自信のある微笑を浮べて、次の部屋に這入つた。

ファナーリンはそこで同じく燕尾服、白ネクタイの仲間を見つけて、さつそく賑やかに話しはじめた。ネフリユードフは手持ち無沙汰に室内にゐる人たちを仔細に眺めまはした。十五名の傍聽人のうち、二人の女が交つてゐた。

綺麗な制服姿の廷吏が、紙片を手にしてファナーリンのところへやつて來た。マースロワ事件だと聞くと何やら記して立ち去つた。その時、扉が開いて、胸にびか／＼する金屬板を當てた、派手な服装の老人があらはれて直ぐ急ぎ足に反對側の扉から消えた。

「あれがベーです、一番の腕利きです。」ファナーリンはネフリユードフに説明した。

やがてネフリユードフは他の傍聽人と一緒に法廷に這入つて、格子のうしろに設けられた席に就いた。ベテルブルグの辯護士だけは格子の前のテーブルのところに行つた。

元老院の法廷は地方裁判所の法廷に比して遙かに狭く、裝飾も簡素だつた。しかし、どこの裁判所にも附屬する二つのもの、即ち偽善を象徴する聖像と、壓制を象徴する皇帝の肖像とはやはりこゝにもあつた。

「開廷いたします。」と廷吏が叫ぶと、一同が起立し、制服の議員連が入場して背當の高い肘掛椅子に就いた。議員は四人で、まづ議長のニキーティンといふのは、顔を綺麗に剃つた、面長の、鋭い眼をした男だつた。ウォーリフは意味あり氣に唇を結んで、小さな白い手で書類をひねくつてゐた。スコウオロードニコフはよく肥つたあばた面の法律學者。もう一人はさつきちよつと姿をあらはしたベ

ーである。
議員たちと一緒に書記官兼検事次長が這入つて來た。中肉中脊の、色の淺黒い、陰氣な黒腫の男だつた。ネフリーウドフには、服装が變つてゐるばかりか六年も會はなかつたに拘はらず、大學生時代の親友だつたセレーニンにちがひないことがわかつた。

「セレーニンぢやありませんか。」と、ネフリーウドフは小聲で辯護士に訊いた。

「さうです、御存知ですか。」

「よく知つてゐます。いゝ人物ですよ。」

「検事次長としてもしつかりした男です。」

「いかなる場合にでも良心の聲にしたがつて行動する男です。」ネフリーウドフは、彼と自分との友情

や、彼の美點たる清廉潔白な愛すべき性質を記憶に浮かべながら言つた。

「そんなわけならセレーニンに頼むんだつたが、もう時間がありませんね。」ファナーリンは言つて、その時はじまつた報告に耳を傾けた。

最初に審議された事件は、某株式會社の支配人の詐欺を摘發した新聞記事に關するものであつたが、こゝでも地方裁判所に於けると同様、枝葉の辯論ばかり多かつたので、ネフリーウドフは要點を擷むことがなかく、出来なかつた。ウォーリフが控訴院の判決を廢棄すべきだといふやうな議論をしたに對して、セレーニンは驚くばかり熱心に反對意見を述べ立てた。それはセレーニンが、問題になつてゐる支配人の金銭上の詐欺をよく知つてゐたからでもあるが、一つには、ウォーリフが、昨日、その支配人のところで贅澤な饗應を受けたといふことを聞いたからである。彼は忿然として熱辯をふるつた。

やがて議員たちは會議室へ引き上げて行つた。と、そこへ廷吏が來て、ファナーリンに訊いた。

「あなたの事件は何でしたかね。」

「さつき言つたぢやないか。マースロワの一件だよ。」と、ファナーリンは答へた。

「さうでしたね。その事件は今日審理されることにはなつてゐますが……」

「何だつて？」

「いえ、議員の方々は、今の事件の決定をお済ましになつたら、もうこちらへは出廷なさらないかも

知れません。あんな風な議論になりましたのでね。しかし、私から申して見ませう。一
「一體どうしたんだ？」
「いえ、私から申して見ませう、申して見ませう。」と、言ひながら廷吏は何か紙片に書きこんだ。
實際、議員連は、この事件の決定を済ましたら、他の事件全部（マースロワ事件もむろん含んであ
る）を、會議室で、煙草や茶をのみながら、のんきに片づけるつもりであつたのである。

一一一

廷吏は會議室に這入つて行つて、マースロワ事件の審理を願ひたいといふファナーリンとネフリ
ードフとの希望を議員連に傳へた。

「マースロワ事件か。こいつは非常にロマンティックなんですよ。」と言つて、ウォーリフは、ネフ
リュードフとマースロワとの關係を詳しく話して聞かせた。

議員連はしばらく経つて法廷に出て、マースロワの上訴を審議しはじめた。ウォーリフが一流の甲
高い聲で上訴の理由と、大體、前判決を取消したいといふ希望とを述べた。

「何か他に辯護することがありますか。」と議長はファナーリンに言つた。ファナーリンは即座に起
立して、白いチョッキの廣い胸を突き出しながら、前判決がいかに法を曲解した結果生じたものである
かを、六個條に分けて説明した。その明確な調子は驚くばかりだつた。

ファナーリンの辯論が終つた時、原判決は取消されるに相違ないと思はれた。ファナーリン自身が
勝ち誇つたやうな微笑を洩らしてあたりを見廻してある、その容子を見て、ネフリュードフも勝利疑
ひなしと思つた。ところが議員席を見るに及んで、初めて得々としてゐるのはファナーリン一人だとい
ふことがわかつた。彼等はいかにも退屈さうで、「お前の言ふやうなことは飽き／＼するほど聞いた。
下らない屁理窟なんかい、加減にしろよ。」とでも言ひたさうだつた。だからファナーリンの長
廣舌が終ると、ほつとしたらしかつた。

セレーニンは起立して、極めて簡單明瞭に、上訴の理由が薄弱である。したがつて前判決を相當と
すといふ、ファナーリンに對する反對論を主張した。ウォーリフは取消しに賛成だつたし、大立物べ
ーも事實の真相を知つて、恰も自分がその法廷に列席したかのやうに、鮮やかに當時の光景を説明し
て取消しに賛成した。然し、嚴格主義、形式主義のニキータンが例によつて反對論を唱へたため、
結局、最後のスコウオロドニコフの賛否如何に依つて、どちらかに決定することになつた。ところが
が彼は、主として、ネフリュードフが道徳的意味に於いてマースロワと結婚しようといふ意志が面白
くないといふだけの理由によつて上訴棄却、前判決通りといふ方へ賛成してしまつた。

彼、スコウオロドニコフは、唯物論者であり、ダーウィン主義者であつたため、すべての抽象的
道徳の表示を、否、時には宗教をさへも、馬鹿々々しいものと考へてゐた。したがつて、名譽ある辯
護士や公爵ネフリュードフなどが、一娼婦のために元老院までを煩はすとは、何といふ不快極まるこ

とだらうと彼は思った。そこで彼は、この事件は何も知らないといふ風を装つて、たゞ上訴の理由不
充分とのみ主張して議長ニキーティンの説に賛成した。

かくしてマースロワの事件は原判決の通りときまつてしまつた。上訴棄却となつたわけである。

二三

「何てことだらう。こんな明白な事件を單なる形式に囚はれて棄却しようとするんだ。全く何てこと
だらう！」ネフリュードフは待合室にしりぞきながら言つた。ファナーリンは鞆の中の書類を整理し
ながら、

「この事件は、もう最初の裁判所でぶちこはされてゐるんです。」と言つた。

「それに、セレーニンまでが棄却説を唱へようとは思はなかつた。全く何てことだらう！」ネフリ
ードフはいつまでも同じことをくり返して、

「さてこれからどうしませう？」と相談した。

「陛下に請願しませう。こちらに滞在中、御自身で請願書をお出しになるがいゝでせう。私が作つて
上げますから。」

その時、ウォーリフが待合室に這入つて來た。

「どうにもなりませんでした。上訴の理由が薄弱だつたもんですから。残念です。」

ウォーリフはネフリュードフにかう言つて、そこへ扉から消えた。

セレーニンも、他の議員連から、舊友ネフリュードフがこゝにゐることを聞いてやつて來た。

「やあ、こんなところで會はうとは思はなかつたね。」ネフリュードフの前に立つと、口もとにだけ
微笑を浮べ、いつもの悲しげな眼をしばたゝいて言つた。「ベテルブルグに來てることも知らなかつ
たよ。」

「僕も君がそんな役に就いてるとは思はなかつた。」

「どうしてこんなところ、元老院なんかへ來たんだい？ 實はベテルブルグへ來てるつてことは、ち
らと耳にしたんだが、こんなところに用件があるんだとは思はなかつた。」

「或女の件で來たんだ。公平な裁判を仰いで、冤罪に憫んである女を救つてやらうと思つてね。」

「何といふ女だ？」

「今棄却になつた事件の女だよ。」

「あゝ、マースロワか。」セレーニンは、やつと氣がついた。「あの上訴には何等の根據がなかつたと
思ふ。」

「女は何の科もないのに徒刑の宣告を受けてるんだよ……」

「さうかも知れんが……」セレーニンは溜息をした。

「かも知れんぢやない、確實に……」

「どうしてそんなことを知ってるんだ？」

「僕がその時の陪審員だったからさ。われ〜が事件を誤まった、それがよくわかつてるんだ。」

セレーニンは、ちつと考へこんだ。

「その時異議を申し立てればよかつたぢやないか。」

「むろん申し立てたさ。」

「そんなら公判録に載つてる筈だ。そのことが上訴狀に書き添へてあるとよかつたんだがね……」

「なるほど。しかし途方もない判決だといふことは明瞭ぢやないか。」

「元老院にはそれを言ふ権利はないんだ。もし元老院が、自分だけの意見で勝手に原判決を取消したり修正したりすれば、陪審員の決議も全然意味のないものになつてしまふ。そして、元老院は正しい裁判を擁護するのではなく、寧ろ、それを破壊するといふ結果になるぢやないか。」と、セレーニンは言つた。

「そんなことは僕にはわからない。たゞあの女が無罪だといふことだけがわかつてるんだ。而も最後の希望も、それで殆んど駄目になつた。言はゞ最大の不正が最高の法廷に於いて議決されたんだ。」

「さうぢやない。元老院は事件そのもの、審議をしたのでもなし、またすることも出来ないのだ。」

と、セレーニンは瞬きしながら言つた。彼は常に多忙でもあつたし、滅多に社交界に顔を出さないので、ネフリュードフのローマンスに就いては、今までちつとも知らなかつた。ネフリュードフもそ

れに氣がついたので、マースロワとの關係は話さない方がいゝと思つた。

「君は叔母さんの家にあるんだらう。」セレーニンは話題を變へようとして言つた。「實は、伯爵夫人は昨日ちよつとお目に……つて、君の來てゐることを聞き、何とかいふ説教師の話聞きに來ないかとすゝめられたよ。」

「さうか。僕は聞いたが氣持が悪くなつて出てしまつた。」ネフリュードフは相手が話題を變へたのを氣にして不愛想な調子で言つた。

「何故だい？」

「一種の讒言に過ぎないからさ。」

「そんなことはない……」

そこで、セレーニンは自己の宗教觀をネフリュードフに向つて披瀝しはじめた。ネフリュードフは黙つてゐた。

「ではまた話すことにしよう。」

セレーニンはその時廷吏が近づいて來たので、かう言つた。そして思ひ出したやうに附け加へた。

「僕は七時の食事時間にはいつでも家にあるよ。ナデジュデンスカヤ街だ、是非やつて來たまへ。随分久しく會はなかつたから、ゆつくり話さうよ。」

「御邪魔するかも知れない……」ネフリュードフは、嘗ては親しかつた男が、この簡単な立ち話に

よつて、互に、敵ではないまでも、非常に縁の遠い、氣持のわからないものになつてしまつたのを感じた。

二三

ネフリユードフとフナーリンとは、元老院を一緒に出た。フナーリンは馬車に後からついて来るやうに命じて、歩きながら、今日元老院議員が噂をしてゐた某局長事件を話しはじめた。どうして罪状が暴露したか、どうして苦役に服さなければならぬ身が縣知事に任命されたかなどといふ詳しい顛末。それから銅像の寄附金が高官連に横領された話。某名士の情婦が相場に手を出して百萬から儲けた話。某名士が夫人を金で賣買したこと。某高官連があらゆる罪惡を犯しながら平然として官廳の椅子に納まつてゐること。——辯護士はそんな風な事實を得意になつてしゃべり立てた。

ネフリユードフは彼の話を聞き残して辻馬車に飛び乗り、失禮とだけ挨拶して、そこへ別れてしまつた。

ネフリユードフは悲しい氣持だつた。元老院が上訴を棄却したため、罪のないマースロワが無意味な苦しみを今後久しく續けなければならぬこと、そのため、マースロワと運命を共にするのが困難になつて来たこと、それが彼を悲しませた。今フナーリンから聞いたばかりの、信じ得ないやうな罪惡の數々、曾ては清廉潔白だつたセレーニンから送られた冷やかな眼差しなどを思ひ出すと、一層悲

しみが胸に迫つて来るのだつた。

家に歸ると、門番が二通の手紙を渡して、これは或婦人の方が門番の部屋で書き残して行つたものだと言つた。見ると、シューストワの母親の手紙だつた。娘の大恩人たるネフリユードフにお禮を言ひに来たこと、ウェーラ・ボゴドウホースカヤのことでは非お話したいことがあるから、ワシイリエフスキイ五丁目の家まで入らしていただけまいかといふこと、くどくど言つて御迷惑をかけるやうなことはしない、お目にかゝれさへすればうれしい、宜しかつたら明朝お願ひ出来なだらうかといふこと、が書いてあつた。

後の一通は、舊友で今は侍従武官をしてゐるボガツイリヨフからだつた。先日彼に、異宗徒事件に就いての請願書を直接捧呈して貰ひたいと依頼して置いた、その返事で、御希望通りにするが、その前に、ネフリユードフがこの事件の擔當者に面會した方がよくはなからうか、ちよつと思ひついたので申し上げるといふ意味のことだつた。

最近數日間の印象を綜合するに、ネフリユードフは何一つ望みを達したものはな氣がした。モスクワでの計畫は、今や、現實に直面すれば必ず幻滅の憂目を見る青年時代の夢のやうなものに思はれた。しかし、ペテルブルグ滞在中は、計畫のすべてを實行するのが義務である。そこで彼は明日ボガツイリヨフを訪問し、その助言にしたがつて事件の擔當者に面會しようと決心した。

靴の中から請願書を引き出し読み返してゐるところへ扉をノックして下僕があらはれ、叔母の部屋

へお茶を飲みに来いといふことを傳へた。

二階に行く途中、窓から戸外を見おろすと、マリエットの二頭立の馬車が玄關に控へてゐた。ネフリードフは俄かに活氣づき、思はずにつこり笑つた。

マリエットは、今日は黒でなく、いろんな色の交つた明るい服装をして、帽子をかぶつたまゝ、片手に茶碗を持ち、伯爵夫人の傍に腰を下してゐた。そして、何かしやべりながら、美しい眼を輝やかにして笑つてゐるところだつた。その話は何か非常にをかしなことからしく、(而もそれが下品な話であることは、笑ひ方でよくわかつた) お人よしの叔母は、肥つた體を揺すぶつて笑ひこけてゐたし、マリエットは、ほころびた唇を一方に少し曲げ、首を傾げ、はれ々とした顔に彼女獨特の意地悪さうな表情を浮べ、黙つて叔母の容子を眺めてゐた。

ネフリードフは二言三言聞いてゐるうちに、それがシベリヤの新任知事のエピソードであることがわかつた。叔母はいつまでも笑ひこけてゐた。

「そんなに笑はせると、死んでしまひますよ。」と彼女は咳きこんで苦しうに言つた。

簡単な挨拶だけ済ましてネフリードフは椅子にかけた。内心、マリエットの浮薄なのを咎めようとするとなん、彼女の方で早くも、男の眼にあらはれてゐる生真面目な、而も不満さうな色を看破して、急に、氣に入るやうに、顔の表情ばかりでなく氣持までを變へてしまつた。實は彼女はネフリードフの姿を見た瞬間から氣に入らなれたいと思つてゐたのだつた。

マリエットは俄かに眞面目くさつて、自分の生活に不満を感じ、何物かを求めて焦燥してゐるかのやうな容子をした。これは單にそんな風をして見せたゞけではなく、實際、彼女の心の奥底には、その時ネフリードフの抱いてゐたと同じやうな氣持が動いてゐた。たゞそれを言葉にあらはすことが出来なかつたゞけである。

彼女はいろいろのことを訊いた。ネフリードフは元老院での失敗と、セレーニンに會つたことを話した。

「あゝ、あの方、純潔な方ですわね。ほんとに申し分のない騎士ですわ。」

ペテルブルグの社交界では、セレーニンが申し分のない騎士として通つてゐる、マリエットも叔母も口を揃へてかう言つた。

「奥さんはどんな人ですか。」ネフリードフは訊いて見た。

「奥さん？ さうだね、かう言つちやいけないだらうけれど、あの方を理解してゐないよ。」と、叔母は説明した。

「あの方までが上訴棄却に賛成なさるなんて、一體どうしたんでせう。」マリエットは、同情のこもつた調子だつた。「たまりませんわ。マースロワさん、何て可哀さうな方でせう。」と、彼女は吐息をついた。

ネフリードフは話を逸らしたかつたので、マリエットの盡力で要塞監獄から放免になつたシユー

ストワのことを持ち出し、彼女の一家が今非常に苦境に落ちて苦しんであるさまを話さうとした。すると、マリエットは途中で遮つて彼女自身の義憤を洩らした。

「良人がその女を放免してもよいと申しました時には、私ほんとに驚きましたわ。罪のないものをどうして收監するんでせう？」彼女は、ネフリユードフの思つてゐることを代辯した。「たまりませんわ。見るに忍びませんわ。」

叔母はマリエットがネフリユードフの御機嫌取りをしてゐるのに気がついた。そして面白がつた。

「あの……」と、彼女は二人の話がちよつと途絶えるのを待つて口を入れた。「明日の晩、アーリンの家へ行つてごらん、キゼウエッテルさんがお見えになる筈だから。あなたもいらつしやい。」とマリエットの方に言つた。それからまたネフリユードフに向き直つて、

「あの方はお前に注意してらしたよ。お前が私に言つたことは——私がみんなお話ししたもんだから、ごくい、兆なんだつて。きつとキリスト様の手へ歸つて来るだらうとおつしやつてゐた。だから明日はどうしても行くんだよ。マリエットさんもすゝめて下さい。そしてあなたもいらつしやい。」

「私には公爵に何一つおすゝめする資格もございせんわ。」と言ひながら、マリエットはネフリユードフに意味ありげな視線を投げた。それには、伯爵夫人の言葉に對しても、また一般の説教に對しても、私の意見は、あなたと同じですといふことを示してゐた。「それに私、あまり気が向きませんので……」

「あなたはいつも變つてるのね。御自分だけの考でなさるんだから。」

「自分だけの考でございますつて？ 私だつて百姓女程度の信仰は持つてゐますわ。」マリエットは微笑して、「それに明日の晩は芝居を見に行くつもりなんですの。」

「あらさう。もう御覽でしたか、あれを……え、と、何とかいふ名優……」叔母は浮きくして言つた。マリエットは有名なフランスの女優の名前を擧げて、

「あなたも是非御覽なさるといゝわ。それや宜しうございますよ。」

「どちらを先にしませう、叔母さん、女優と説教師と？」と言つて、ネフリユードフは笑つた。

「揚足を取るもんぢやないよ。」

「説教師が先、女優が後がいゝでせう。女優を先にすると説教なんか聞きたくなくなりますよ。」と、またネフリユードフが言つた。

「いゝえ、まづお芝居を見て、それから懺悔するのが本當ですわ。」と、マリエットが言つた。

「およし。二人がかりで人を茶化すもんぢやないよ。説教は説教、芝居は芝居。人間は救はれるためだからつて、顔を長くして泣いてばかりある必要はありません。でも信心はしなきやいけない。信心さへすれば自然に楽しくなるものです。」

「叔母さん、あなたの説教の方がよつぽどうまい……」

「どうでせう、明日私の機敷にいらつしやいませんか。」マリエットは言つた。

「さあ、行けないかも知れませんが……」ネフリユードフは答へた。

二四

下僕が来て訪問客のあることを告げたので、話はそれきりになった。カテリーナ夫人を會長とする或慈善團體の祕書だった。

「あ、詰らない人が来た。いつそあちらで會つて來ませう。マリエットさん、お茶でも入れてやつて下さい。」叔母は二人を残して部屋を出て行った。

マリエットは手袋を取った。引きしまつた、やゝ平つたい白い手。無名指には幾つかの指輪が光つてゐた。

「召上りますか。」彼女は、ちろく／＼燃えるアルコールランプの上にかゝつた銀製の急須を取り上げて言った。

彼女の顔は悲しさうで、また眞面目さうだった。

「私、自分の尊敬してる方々が、私自身と私の境遇とを混同してらつしやるのを見ると、つく／＼情なくありますわ。」

彼女は泣き出しさうだった。解剖して見たところで、何等の意味もないこの言葉、あつたにしても極めて漠然とした意味しかないこの言葉が、ネフリユードフには、深刻な、眞面目なものであるやう

に思はれた。それほどに、この若くて美しい彼女の投げた輝かしい眼差しが、彼を囚へてしまつたのだつた。

ネフリユードフは、ぢつと黙つて彼女を眺めてゐた。眼を離すことが出来なかつた。彼女はつゞけて言った。

「あなたは、私などにあなたのお考が判るものかと思つていらつしやいますでせう。でも、あなたのなすつてゐることは誰でも存じてゐますわ。公然の祕密ですわ。で、私も、あなたのお仕事を喜んでるのでございますよ。」

「さうですか。だつて、別に喜んでいたゞくほどのことはないのです。まだ碌に進んでゐないのですから。」

「いゝえ。私にはあなたのお感じになつてゐることや、またマースロワといふ方のことがよくわかります。でも、このことはもう申し上げますまい。」と、彼女はネフリユードフの顔に不快さうな色があるはれたのを早くも見てとつて言った。「けれども、監獄内の苦しさ、恐しさを實際に見たものですから、私にもそのことはよくわかりますわ。」

マリエットの望みは、たゞネフリユードフを惹きつけるにあつた。だから、女性の本能によつて、この際何が男にとつて一番切實であり重大であるかを推測しながら、つき／＼に言ふのだつた。

「あなたは苦しみ惱んでる人々を救ひたいと思つてらつしやるんでせう。冷酷無情な獄吏の中に虐げ

られてる人々を助けようとしてらつしやるんでせう。喜んで生命をも投げ出したい氣持がよくわかりますし、私だつて、そのためなら生命を棄てるどころですわ。でも、私たちには、めい／＼の運命がございましてね……」

「ではあなたは御自分の運命に満足していらつしやらないんですか。」

「私……」彼女は、こんな質問をされやうとは豫期しなかつたので、びつくりしたらしく訊き返した。「私は満足してゐなきやありませんの。だから満足してますわ。けれど、お腹の蟲がをさまらないで……」

「その蟲は眠らして置いてはいけません。それは従はねばならない良心の聲ですよ。」

ネフリユードフは彼女の毘にかゝつて遂にかう言つた。

その後、ネフリユードフは度々この時の話を思ひ出して恥づかしくなつた。彼自身の口眞似にしか過ぎない女の言葉、彼が監獄内の恐しさや田舎での見聞を話した時の、いかにも同感したらしい女の顔などを思ひ出して恥づかしくなつた。

しばらくして、伯爵夫人が引き歸して来た時には、二人は昔からの知り合ひどころか、大勢の他人の中でお互ひだけが氣心を知り合つてゐる無二の親友のやうな調子で話してゐた。

彼等は官憲の不法や、不運な人々の苦しみや、農民の貧窮などに就いて、しきりに話し合つてゐたが、實は、その裏で、互ひに瞳を見交しながら、「愛して下さる？」「愛しますよ」の問答をしてゐるの

だつた。そして、戀が、思ひもかけぬ明るい形をとつて、彼と彼女とを引き寄せた。

歸りがけに彼女は、今後どんなことでもお役に立ちたい、それに是非お話ししたいこともあるから明晩は、ちよつとでもい、から芝居の方へ来てほしいと言つた。

「今度はいつお目にかゝれるでせう？」と、彼女は悲しさに、寶石の輝いてゐる手に、ゆる／＼と玉袋をはめながら、「明日は行くとお約束して下さいませ。」

ネフリユードフは約束してしまつた。

その夜、ネフリユードフは一人自分の部屋に歸つて蠟燭を消したが、なかく寝つくことが出来なかつた。マースロワのこと、元老院の決議のこと、いかなる場合にもマースロワと運命を共にしようと思つたこと、土地を放棄すること、——そんなことを思ひ浮べてゐると、それに答へるかのやうに、忽然としてマリエットの顔があらはれた。「今度はいつお目にかゝれるでせう？」と言つた時の悲し／＼な溜息、眼差し、微笑、それがあまりに鮮かなので、彼は眼のあたり、彼女に會つたやうに思はずにつこりした。

「シベリヤへ行くのは果して、ことだらうか。財産を放棄するのはい、ことだらうか。」

この疑問に對する解答は、はつきり得られなかつた。すべてが混亂した。以前の心持、以前の考へ方を記憶に浮べたが、それは最早力のないものだつた。

「計畫だけをし、實行することが出来ない自分だ。善事をして後悔する自分だ。」と彼は考へた。答

へられないまゝ、久しく感じなかつた苦惱と絶望とのうちに、重苦しい眠りに落ちていつた。

二五

ネフリユードフは翌朝眼をさまして、前日何か罪を犯したやうな気がした。考へて見ても別に悪いことをした記憶もなく、また實際しもしなかつたが、悪い考へだけは、たしかに起した。即ち彼は、カチュウシヤとの結婚、土地の放棄などの計畫を一種の夢想ではないかと考へ、到底それに堪へられないと考へ、わざとらしい不自然な計畫であると考へ、今まで通りの生活を續けて行かうと考へた。

つまり彼は悪事をしたのではないが、悪事以上のことをしたのである。何故といふに、悪事の根源たる悪念を起したからだつた。悪事はくり返さなければいゝ、悔い改めることも出来る。しかし悪念はつきつゝに悪事を生み出すものである。悪事はたゞ他の悪事の道を滑らかにするだけであるが、悪念はこの道にどしどし人を引きずりこむのである。

昨日考へたことを思ひ出してみると、そんなことを瞬間に信じたのが不思議なくらゐだつた。彼の計畫がいかにか新奇な、いかに困難なことであらうとも、現在の彼にとつては、それを實行するのが唯一の生活法である。それを彼はよく知つてゐた。反對に、いかに容易でいかに自然であらうとも、以前の生活に戻ることは死に等しいのである。昨日の誘惑は、例へば、熟睡からさめてもう眠くはないのであるが、もう少し寢床に這入つてゐたい(而も起きねばならぬ時間であることも大切な仕事がつてゐることも承知しながら)といふ氣持のやうなものだつた。

ベテルブルグ滞在の最後の日の朝早く、ネフリユードフはワシイリエフスキ島に、シューストワを訪ねた。

シューストワは二階借りをしてゐた。裏口の階段を昇つて、食物の臭ひの立ちこめた蒸し暑い臺所に這入ると、そこには、袖をまくり上げ、エプロンを掛けた、かなりの年の女が、七輪の傍に立つて、湯氣の立ち昇る鍋をしきりに掻きまはしてゐた。

「誰に御用でございますか。」彼女は眼鏡越しに、ネフリユードフを眺めて、かう訊いた。きつい調子だつた。

ネフリユードフが名乗ると、彼女の顔には、驚きと喜びとが同時にあらはれた。

「まあ、公爵でいらつしやいますか。」彼女はエプロンで両手を拭きながら、「どうして裏口からいらつしやいましたんです？ 私はおれの母でございませう。あんな小娘をみんな殺さうとしてたんでございませう。お蔭さまで、私どもは助かりました。」と言ひながら、彼女はネフリユードフの手を取つて接吻しようとした。

「昨日お伺ひいたしました。妹が上れと申しますので。妹もここにゐるんでございませうよ。さあどうぞ、こちらでございませう。」

彼女は狭い扉から暗い廊下を案内した。途中で、亂れた髪をなほしたり、端折つた裾をおろしたりした。

「妹はコルニーロワと申します。お聞きになつたことがございませう、政治運動の仲間入りをいたしてをります。」

つぎの扉の前で立ちどまつて彼女は小聲で言つた。そして、ネフリュードフを小さな部屋に案内した。長椅子とテーブルとが置かれ、そこに仕事着の、脊の低い、母親に似て蒼白い圓顔の、よく肥つた娘が坐つてゐた。それと向ひ合つて、ロシア風の刺繍をしたシャツを着た、口髭と顎鬚のある青年が、肘掛椅子にかけてゐた。二人は話に夢中になつてゐたらしく、ネフリュードフが這入つてから、やつと振り返つた。

「ネフリュードフ公爵だよ。ほら……」母親は言つた。

蒼白い顔の娘は飛び上つて、耳のうしろに垂れた捲毛を直しながら、おびえたやうな眼をしてネフリュードフを見つめた。

「ではあなたが、ウェーラから救つてくれと頼まれた、いはゆる危険人物なんですね。」ネフリュードフは笑つて言つた。

「はい。」リディア・シューストワは美しい齒立を見せながら、子供のやうに笑つて、「叔母が非常にお目にかゝりたがつてゐました。叔母さん！」と扉の向うへ、元氣な優しい聲をかけた。

「あなたが收監されたといふので、ウェーラは大層心配してゐましたよ。」

「どうぞお掛け下さい、こちらが宜しいでせう。」シューストワは青年が立ち上つたばかりの毀れ椅子をすゝめた。

「従兄弟のザハーフと申します。」

彼女はネフリュードフが青年を見てゐるのに氣づいて紹介した。青年は優しく微笑して客に挨拶し、窓際から別の椅子を持つて來て腰をおろした。十六歳くらの中学生が、その時そつと這入つて、黙つて窓際にかけた。

「ウェーラは叔母のお友だちなんです。私はあまりよくは存じません。」と、シューストワは言つた。隣室から、白い仕事着に革帶をしめた、晴れやかな顔の女が這入つて來た。

「よく入らして下さいました。」シューストワの傍にかけて彼女は挨拶した。「ウェーラはどうしてでせう？ お會ひになりましたんでせう？ 辛抱してゐますかしら？」

「え、愚癡もこぼさないでゐます。」

「全くウェーラは立派な人格の持主ですわ。自分のことはちつとも考へないで人のために盡してゐるんですからね。」シューストワの叔母は言つた。

「さうです、自分のことは考へないで、シューストワのことはばかり心配してゐました。何の科もないのに收監されるのはたまらないといふのです。」

「まつたくでございます。恐しいことですよ。實際、シューストワは私のためにあんな目に會つたので、本人に罪はないのでございます。」

「さうぢやないわ、叔母さん。」シューストワが口を出した。「私、あなたがあなくなつたつて書類を預つてゐたわ。」

「私がお話しするから黙つていらつしやい。——實はかうなんでございますよ。」と、叔母はネフリュードフに説明をはじめた。「ある人から秘密書類を預つてくれと頼まれましたの。ところが當時私は家を持つてゐなかつたものですから、シューストワのところへ持ちこんだのです。すると、運わるくその晩家宅搜索がありまして、書類は押収され彼女は拘引されてしまひました。書類を誰から預つたか白状しろといふので、今まで收監されてゐたんです。」

「でも私、白状しませんでした。」シューストワは髪を捲毛を神經的に引つ張つて早口に言つた。

「お前が白状したと言つてるんぢやありません。」

「ミーチンがつかまつたのも私のためぢやありませんわ。」シューストワは顔を赧らめて、おどくあたりを見廻した。

「そのことは話さない方がいゝよ。」母親が、たしなめるやうに言つた。

「何故？ 私、話したいのよ。」シューストワは一層赧くなつて、髪を指に捲付けながら言つた。

「だつて、昨日、そのことを話し出して、お前はあんなに取り亂したぢやありませんか。また興奮す

るといけないから今日は止ませう。」

「かまはないわ……。うつちやつといて頂戴よ、お母さん……。私、白状しないで黙つてゐました。

ミーチンや叔母さんのことを根掘り葉掘り訊いたけれど、私、きつぱり言つてやつたわ、御返事いたしませんと。さうしたら、ペトロフが……」

「ペトロフといふのは間諜で憲兵で而も悪黨なんです。」叔母が説明した。

「すると、ペトロフの奴がしつこいつたらならないんですの。」シューストワは興奮して、ひどく早口になつた。「僕にすつかり話しておしまひ、誰にも迷惑はかゝらないよ、いや、かへつて何の科もなく收監されてる人たちを助けることになるかも知れない。——と、こんな風にうまく申しましたが、私はやはり御返事しないとやつてやりました。ところが、ペトロフは、よろしい、返事をするな、その代り俺の言ふことも、違ひますとは言はせないぞと言つて、ミーチンを名指し、それにきめてしまひました……」

「その話は止さうよ。」

「叔母さん、口を出さないであつてよ……。それから、翌る日、ミーチンがつかまつたことを知りまして、——みんなが監房の壁を叩いて知らしてくれましたの。私、ミーチンを裏切つたと思ひまして、どんなに苦しみましたか。——苦しくつて、おしまひには、氣ちがひになりさうでしたわ。」

「お前のせゐでないことが直ぐにわかつたぢやありませんか。」と叔母は言つた。

「え、でも私知らなかつたんですもの。裏切つたと思ふとたまらなくなつて、ぐる／＼監房の中を歩きまはりました。寝ても起きてても、裏切つたんだ、ミーチンを裏切つたんだ！と何ものか嘔きます。幻覺だといふことはわかかつてゐたけれど、どうしても／＼聞えるんです。寝つかうとしても寝つけない、考へまいとしても考へる、——それや恐しかつたわ。」

シューストワは益々興奮し、髪を指に捲いたり解いたりして、ぐるりを見廻した。

「リディヤや、おちつかなくちや。」母親は肩に手をかけた。

「もつと恐しいことがあつたわ……」シューストワは何か話しかけたが、急に、わつと泣き出して部屋を駆け出した。

母親は後を追つて行つた。

二六

「獨房の生活は若いものには、たまりませんわ。」シューストワの叔母は言つた。

誰だつてたまらないでせう。」ネフリユードフは應じた。

「い、え、さうでもありません。本當の革命家は安心して落ちつくといふことです。警察から尾けまはされてる人たちは、いつも不安と貧乏とに生きてゐます。自分一身のことばかりでなく、同志のこと、主義のことを、絶えず心配して暮してゐます。ところが收監されると、そんな不安や恐怖が無く

なつてしまふので、却つてぢつと安心してゐられるといふのです。つかまつた時は嬉しいといふことを、私、實際に聞きましたわ。けれども、若いものや罪のないものは——シューストワのやうな何でもないものが、眞先につかまるのがおきまりですが、はじめは本當に恐しくなつてしまひます。それも不自由だとか、食物が悪いとか、空気が悪いとか、そんなことぢやありません。つまり、精神上の苦しみが堪へられないのです。その苦しみさへなかつたら、物質上の不自由は三倍になつたところで辛抱出来るかも知れません。」

「では御経験がおありなんですね。」

「二度ばかりあります。」彼女は寂しさうに笑つて、「はじめてつかまつた時は、やはり何の罪もなかつたのです。二十二の時、子供が一人ある上に妊娠してゐました。むろん、自由を奪はれて子供や夫と引き離されたことは辛いことでしたけれど、それよりも、自分はもう人間ではないのだ、品物になつてしまつたのだと思つた時の感じの方がたまりませんでした。私は娘に、さやうならをしたかつたが、それよりも早く馬車に乗れといふのです。どこへ連れて行くのかと訊けば、行つて見ればわかるといふのです。何の科ですと訊けば黙つたき返事もしてくれないのです。」

「それから向うへ着きました。一通り調べられてから、番號つきの獄衣を着せられ、監房の中にはふりこまれました。番兵が一人、銃を擔いで、扉の前を行つたり來たり、時々隙間から覗いたりするきりです、——その心細さつたらありませんでしたわ。その時、私の胸に一番こたへたのは、取調べの

憲兵士官が煙草をやらうと言つたことです。して見ると、この士官は人間が煙草を好むことを知つてゐる、だから、同時に人間が自由と光明を愛し、母が子を愛し、子が母を愛することをも知つてゐる筈です。それにどうして、私を一人ぼつち、あらゆる大事なものから引き離して、まるで野獸か何かのやうに監房にはふりこんだりすることが出来るのでせう？ そんなことをするから、惡事が生れて來るのです。神を信じ人を信じ、人は互ひに愛し合ふものと信じてゐたものでも、こんな目に會はされたら、もう決して信じなくなりませう。私にしても、それからといふもの、人道なんてことを信じなくなりました。」彼女は微笑して話を結んだ。

シユーストワの母親が、その時引き返して來て、娘は非常に取り亂してゐるので、遠慮いたしますと言つた。

「若い生命が臺なしになつた。一體何のためだらう？」叔母は言つた。「無意識ではあつても私がその原因になつてゐるのかと思ふと實に苦しい氣持ですわ。」

「田舎へ轉地でもさせたら直るだらう。」母親が言つた。「父親のところへやることにしようね。」

「さうだ、あなたがいらつしやらなかつたら、あれは死んでゐたかも知れませんか。」叔母はネフリュードフに言つた。「ほんとにありがたうございました。それから、お目にかゝりたいと思ひましたのは、これをウェーラに渡していたゞきたいと存じまして。」

彼女はポケットから手紙を取り出した。

「封はしてございません。お讀みになつてお破りになつてもかまみませんが、宜しかつたら、どうかお渡し下さいまし。」

ネフリュードフはそのまま渡さうと思つて、讀まないで封をした。

二七

ネフリュードフは、そこから侍從武官ボガツイリヨフの家にはつた。ボガツイリヨフは、まだ朝の食卓に就いてゐた。彼は脊は高くないが、がつしりした體格で、力が非常に強く（蹄鐵を曲げるこゝとが出來た）性質は善良、率直、思想は新しい方だつた。皇室には關係が深いので、上流階級の仲間入りをしてゐたが、不思議に彼は、その善い方面だけを見て、悪い腐敗した方面に觸れることをしなかつた。他人の惡口も決して言はなかつた。しかし、聲が破鐘のやうに大きかつたので、その話しぶりはまるで嘯鳴つてゐるやうだつた。笑ひ方も無遠慮だつたが、それには別に社交的の意味があるのではなく、たゞ生れつき性質なのだつた。

「やあ、よくやつて來たね。お腹はどうだい？ まあ掛けたまへ、ピフテキがすてきなんだよ。僕は常に實質的なものからはじめ、そして終りは、——やはり實質本位さ、はつはつは。それぢや葡萄酒でもやりたまへ。」彼は壺を指して嘯鳴つた。「ところで、君の一件は承知した。たしかにお手許に差し出すよ。だが、手紙でも言つて置いた通り、その前に、トボロフに會ふのが一番だと思ふ。かう

いふ事件はあの男の手でどうにでもなるんだからね。陛下に直奏したところで、やはりトボロフに御下問なさるんだから、結局、あの男と君が交渉することになるわけだ。」

「君がさう言ふなら行つて見よう。」

「それがいゝよ。ところで、ベテルブルグの印象はどうだね。」

「催眠術にかつたやうだよ。」ネフリユードフは答へた。

「催眠術に？ はつはつは……」ボガツイリヨフは大聲を立て、笑ひ出した。そしてナブキンで口髭を拭きながら、「ぢや君は行くだらうな。トボロフが不承知だったら僕のところへ持つて来たまへ、明日捧呈するから。」

彼は立ち上り、口髭を拭くと同じやうな無意識さで十字を切つて、劍を吊りはじめた。

「失敬するよ。出懸けなきやならんのでね。」

「一緒に出よう。」

ネフリユードフは相手の逞ましい手を握つた。何となしに健康と新鮮との印象を受けたので、彼は愉快だった。

どうせい、結果は得られまいと豫想しながら、ネフリユードフは、事件の運命を握つてゐるといふトボロフに會ひに行つた。

ネフリユードフが應接室に案内せられた時、トボロフは書齋で元氣のいゝ貴族出の尼僧と話してゐるといふところであつた。

應接室に控へた取次は、來意を尋ねた後、まづその請願書を拜見することは出来ないかと言つた。

ネフリユードフが渡すと、それを持つて主人の書齋に這入つた。ヴェールの垂れた聖帽をかぶり、黒い裾長の法衣をつけた尼僧が入りちがひに出て來た。

ネフリユードフは、なか／＼面會出來なかつた。トボロフは請願書を読んで首を振つてゐた。といふのは、その明確な力の強い言葉づかひに不快な驚きを感じたからだつた。

「これが陛下の御手許に渡つたら、きつと誤解を起して、面白くない御下問を受けることだらう。」と彼は請願書を読み終つてから考へた。そして、それをテーブルの上に置き、ベルを鳴らして、ネフリユードフを通すやうに命じた。

彼はこの宗派事件のことを思ひ出した。これに關しては前にも請願書を受取つたことがある。大體はかういふ譯である。——この異宗派は同じく基督教徒でありながら、正教の信條に背いてゐるため最初は説諭、二度目は裁判沙汰になつて無罪を言ひ渡された。ところが、僧正だの縣知事だのが、彼等の結婚は正教の儀式に依らなかつたから不法であるとの理由で、その夫や妻や子供を皆引き離して別々のところへ流刑にしようといふ決議した。彼等は肉親のものに別れたくない、そんなことがあるべきものではないといふ歎願書を呈出した。トボロフは、この事件が持ちこまれた時、どう處分したらいいものか決し兼ねたことを思ひ出した。しかし當時はかう考へた、——彼等の家族を別々に引き離し

て流刑にしたところで、その結果、何等の害が起る譯ではないが、反對に處分しないで置けば、他の百姓に悪い影響を興へて正教を脱するものが出て来るかも知れない……。それに僧正たちが熱心に主張したので、遂に彼も事件をそのまゝ成り行きに委せることにきめたのだつた。

然るに、今、ネフリユードフのやうな、ベテルブルグにも關係のある辯護者があらはれると、殘酷な一事件として陛下に奏請されたり、場合に依つて外國新聞の記事になつたりしないとも限らない。そこで彼は直ぐに實に意外な決心をしたのだつた。

「やあ、いかゞです？」と、いかにも忙がしさうに立つたまゝ、ネフリユードフを迎へて、即座に用談にかゝつた。

「この事件は存じてゐます。名前を見ると同時に、あの可哀さうな一件だと思ひました。」請願書を取り上げてネフリユードフに見せながら、「この事件を思ひ出させて下すつてありがたう。私は忘れてゐました。田舎の役所が熱心になり過ぎたもんだから、こんなことになりました。」とトボロフは言つた。

ネフリユードフは黙つて突つ立つたまゝ、眼の前の青白い假面のやうな顔を、いやな氣持で見つめた。

では、この處分を取消して、みんなを家に歸すやうに命令を出しませう。」
ではこの請願書は出さなくつてもいいのですか。」

「しかとお約束いたしました。いつそ今書いて差し上げませう。どうぞ、お掛け下さい。」
彼はティブルに凭れて書きはじめた。ネフリユードフは立つたまゝ、この男の禿頭や、ペンを走らせてゐる、太い、青筋だらけの手を眺めながら、どう見ても鈍感なこの男が何故かういふ處置を執つてくれるのだらうかと驚いてゐた。

「さあ出来ました。」トボロフは封筒の封をしながら、「請願人たちに譯を話してやつて下さい。」と言つて、微笑するつもりか變に唇を引き延ばした。
一體、どうして彼等はあんな目に會つたんだらう？
ネフリユードフは、封筒を受けとりながら考へた。

二八

ネフリユードフはその夜出發のつもりだつたが、例のマリエットと劇場で會ふ約束がしてあつたので、それを守ることにした。そんな約束は破つても差支へないことはわかつてゐたが、彼にはそれが出来なかつた。

「この誘惑に勝てるかどうか？」彼は、やゝ、ふざけ氣分で考へた。「よし、最後にこれを試してみよう。」
尾服になつて劇場に着いた時、舞臺では「椿姫」の二幕目で、外國の女優が、肺病の女の死にか

かつてゐるところを、新しい型で演じてゐるところだつた。

座席は満員だつた。彼は鄭重にマリエットの棧敷へ案内された。禮服の給仕が馴染のもの、やうにお辭儀をして扉を開けてくれた。

絹とレースの衣裳をつけた、痩せ骨ばつた女優が、不自然な聲でせりふを言ひながら、悶え苦しむさまを演じてゐる、それを看客一同が息を殺して眺めてゐた。ネフリエードフが扉を開けた時、誰かが「しッ」と言つた。冷たいのと、温いのと二つの空氣の流れが彼の頬に觸れて過ぎた。

マリエットの棧敷には、彼の知らない、赤い外套を着た、ごて／＼頭を飾り立てた貴婦人と、他に男が二人ゐた。一人はマリエットの夫で、脊の高い、立派な風采の將軍だつた。

マリエットは胸の開いた服を着て、すつきりした肩をあらはに見せてゐた。ネフリエードフが這入ると直ぐに振り返つて、よくいらつしやいました、ありがたうと言ひたげな微笑を浮べて、自分のうしろの椅子に坐るやうに肩で合圖をした。その微笑には特別の意味が含まれてゐるやうに、彼には思はれた。

彼女の夫はおちついた風でネフリエードフを見て會釋した。そしてマリエットと視線を交したが、その眼つきには、この美人の主人であり持主であるといふ自負が見えてゐた。

舞臺の獨白が終ると、割れるやうな拍手の音がした。マリエットは立ち上つて、さら／＼と鳴る絹の裾をたくし上げながら、棧敷のうしろへ行き、ネフリエードフを夫に紹介した。

將軍は眼許に微笑をたゞへ、どうぞ宜しくと簡單に言つて、それきり黙つてしまつた。

「今日出發の筈でしたが、お約束しましたので。」ネフリエードフは、マリエットに言つた。

「私なんかどうだつてい、けれど、このすばらしい女優だけは御覽になるとい、わ。」と、彼女は答へて、今度は夫の方に向き、「今の場面もすてきでしたわね。」

夫は氣のりのしない頷き方をした。

「私にはどうも、こんなものには興味が持てません。」ネフリエードフは言つた。「私は今日、本當の惱みを見て來ました、といふのは例の……」

「まあお掛けなさいませんか、承はりますわ。」

彼女の夫は黙つて聞いてゐたが、眼許の微笑は次第に皮肉を帯びて來た。

「つまりあなたの御盡力で放免になつた女に會つて來ました。永い間監禁されてゐたので、すつかり氣を取り亂してゐましてね。」

「私からお願ひしたあの女のことを話していらつしやるのよ。」マリエットは夫に注意した。

「あ、さうですか、放免になつたので私も非常に満足してゐます。」夫はしづかに言つて頷いたが、相手にもわかるやうな露骨な皮肉を口髭の下に見せてゐた。「私はちよつと一服して來ます。」

ネフリエードフは椅子にかけて、マリエットが話したいことがあると言つたのは、どんなことだらうと心待ちにしたが、彼女は別に何も話さなかつた。話さうとする素振りもなかつた。そして、ネフ

リュードフが特別の興味を持つてゐるとでも思つたものか、しきりに、芝居のことばかりをしやべりつづけた。

ネフリュードフには漸くおかつた——彼女は別に話したいことがあつた譯ではなく、たゞ、その胸や肩をあらはにした、けばくしい化粧姿を自分に見せたかつたのだといふことが。それは綺麗ではあつたが、胸の悪くなる綺麗さだつた。

ネフリュードフはその化粧美の蔭に何が隠されてゐるかを見た。マリエットは美しい、しかし彼女は、數百數千の人々の涙と生命とを犠牲にして現在の地位を作り上げた夫と一緒に暮してゐて、そのことを何とも思はない女であること、昨日話したことも皆口から出まかせの嘘であること、何のためであるかは彼にも彼女にもわからないが兎に角彼を口説き落さうとしてゐること、それだけのことはネフリュードフによくわかつてゐる。——彼は引き寄せられると同時に押し返した。

「歸らう——」と思つて幾度も帽子に手をかけながら彼はいつまでもぐづぐづしてゐた。

そのうちに彼女の夫が、濃い口髭のあたりに、強い煙草の匂ひを漂はしながら歸つて来て、いかにも横柄な軽蔑した態度でネフリュードフを見下した。彼はそれを機会に、扉がまだ閉まらぬうち、廊下へ出て外套を探し劇場を出た。

途中、ネフスキイ街にかゝると、眼の前の廣いアスファルトの人道を、脊の高い、すらりとした、人目を引くやうに着飾つた女が、しづかな足どりで歩いてゐた。顔にはむろん、姿全體に淫らな空氣

が漂つてゐた。通りがかりものは誰でも、じろくく女を眺めて過ぎた。ネフリュードフも追ひ越して思はず後を振り返つた。顔は、恐らく厚化粧してゐるのだらうが、とにかく美しい女で、につこり笑ひ、眼を光らせてネフリュードフをじろりと見た。

と、不思議なことに、彼はマリエットを思ひ出した。何故といふに、瞬間に、さつきの劇場内と同じく、引き寄せられる魅力と、押し返す嫌悪とを同時にこの女に感じたからだつた。

ネフリュードフはいま／＼しい氣持で急ぎ足にモールスカヤ街へ折れた。そこから海岸に出て、しばらくうろつきながら、女のことを考へて見た。

「あの女も自分が棧敷に這入つた時、今の女と同じやうな微笑を洩らした。微笑の意味はどちらも同じなんだ。多少のちがひがあるとするれば、今の女は露骨に、はつきりと、欲しけれや買つて頂戴、欲しくなきや行つて頂戴、と言つてゐる。あの女の方は、そんなことは夢にも思つたことがない。上品な、つましい生活をしてゐるのだといふ風を装つてゐる。たゞそれだけの相違に過ぎない、底を割つて見れば結局同じものだ。いや、少くとも今の女の方が誠實だ。のみならず、生きんがために必要に迫られてゐるのだが、あの女の方は、恐しい情慾を弄んで楽しんでゐるのだ。例へて見れば、この街頭の女は、きたないなどとは言つてゐられないほどに渴きを覺えてゐるものに捧げる溝の汚水であり、あの劇場の女は、觸れるものを誰にも知られずに殺してしまふ毒藥である。」

ふと、ネフリュードフは例の貴族長夫人との關係を思ひ出し、つゝいて幾多の恥づかしい記憶を眼

の前に浮べた。

「人間の持つ獸性は厭ふべきものである。しかし、それが赤裸々のまゝの姿である間、われ／＼は高い精神生活の見地からそれを見下し観察して輕蔑することが出来る。そして、墮落してゐると否とに拘はらず、われ／＼は以前のまゝの状態でゐることが出来る。ところが、同じ獸性が詩的又は美的感情の外皮をかぶり、その下に隠れて尊敬を要求するやうになると、われ／＼はたちまち呑みこまれて、善惡の區別もわからなくなつてしまふ。實に恐しいことだ。」

ネフリユードフは今、宮殿や哨兵や城塞や河や舟などが眼の前にはつきりと見えると同様、この理窟がはつきりとわかつた。そして、彼の心中にはもう暗黒もなく無智もなかつた。

今は、あらゆる事物が明瞭になつた。世間で重大事であり善事であると考へられてゐることはすべて無意味な厭ふべきことである。その美しさ華やかさの中には昔からの罪惡——罰せられないばかりか、人間の考へ得る限りの光彩をもつて飾られた罪惡が潛み隠れてゐるのである。

彼はかうしたことを忘れよう、見たくないと思つた。しかし一旦見た以上、見ないであるわけには行かなかつた。ベテルブルグを蔽うてゐる光りがどこから來るのかわからないやうに、彼に事物の真相をはつきり見せてくれた光りもどこから來るのかわからなかつた。彼にとつて、光りは薄暗く、陰氣で不自然だつたが、見せてくれるものを見ないわけには行かなかつた。そして彼は喜びと不安とを感じた。

二九

モスクワに歸ると、ネフリユードフは直ぐに監獄病院にマースロワを訪ねた。元老院は前判決を確定し上訴を棄却した、いよいよシベリヤへ行く準備をしなければならないといふ悲しい知らせを聞かせるためだつた。マースロワに署名させるために持つて來た陛下への請願書（辯護士の書いてくれたものだつた）には大して望みをかけてゐなかつた。と言ふよりも、不思議なことは、今ではそれが不成功に終ることの方を寧ろ望んでゐた。つまり彼はシベリヤへ行つて流刑囚たちの仲間に這入つて暮らすことばかりを考へて、マースロワが放免された場合の自分の自分と彼女との生活を如何すべきかに就いては考へることが出来なかつた。アメリカに奴隸制度の存在してゐた時代の思想家トローの言葉に、「罪なくして投獄せられる國家にあつては、正しきもの、眞の住家は監獄である。」とあるのを思ひ出した。特に、ベテルブルグ訪問以後、ネフリユードフはその言葉に同感した。

「さうだ、現代ロシアに於いて正しいものに適した唯一の住家は監獄である。」

病院の門番はネフリユードフだといふことがわかると直ぐに、マースロワはもう病院にゐないと言つた。

「ではどこにゐますか？」
「監房に逆戻りですよ。」

「どうしてそんなことになつたんです？」ネフリユードフは意外に思った。

「實は……一門番はさげすむやうな薄笑ひをして、「あの女、助手に持ちかけましてね。それで戻されました。醫師長の命令です。」

ネフリユードフは打ちのめされたやうな気がした。思ひがけない大きな不幸の知らせを受けた時の感じで、胸を刺すやうな苦しきだつた。彼女の精神が變りつゝあると想像して喜んでゐた自分自身が實に滑稽そのものに思はれた。犠牲になつて結婚しようといふ申し出を斷つた時の女の言葉や非難や涙などはすべて、出来るだけうまく自分を利用しようとする墮落女の手管に過ぎなかつたのか……この前會つた時の素氣ない風もそのためだつたのか……

一瞬の間に、そんなことが閃めいた。彼は無意識に帽子をつかんで病院を出た。

「さてどうしたものだらう。やはり彼女に係り合つてゐるべきだらうか。」別れるのが本當だと思つた。しかし彼女を見棄て、しまつたら、懲らしてやりたいと今思つた女は懲らされずに、却つて自分が懲らされる結果になると氣がついた。

「いや、どんなことが起らうとも、決心を變へてはならない。そんなことがあればあるほど決心を強くしなければならぬ。彼女には心まかせに何でもさせて置かう、助手と關係したかつたらするがい、そんなことは、彼女だけのことだ。自分は良心の命令にしたがつて行動すればいいのだ。自分の良心は自分の自由を犠牲にせよと命じてゐる。だから、たとへ形式だけにして結婚して、彼女の送

られるところまで共に行かうといふ決心を變へてはならない。」

病院から監獄への途中、かたく足を踏みしめて歩きながら、彼はかう考へた。

監獄の當番看守に、マースロワに面會の件を典獄に取次いでくれと頼んだ。看守は顔馴染になつてゐたので、打ち解けた態度で獄内のその後の主な出來事を話したりした。それによると、典獄が交代したといふことだつた。

「ひどく嚴重になりましたね、恐しいくらいですよ。」看守は言つた。「典獄はゐますから早速取次ぎませう。」

新典獄は間もなくあらはれた。脊の高い、頬骨の出た、陰氣さうな、のろくした男だつた。

「面會は面會日に面會所で許すことになつてゐます。」彼はネフリユードフを見もしないで言つた。

「陛下への請願書を持つて來てゐますので、それに署名させたいと思ひまして。」

「私にお渡しになつたら宜しい。」

「直接會はしていただけませんか。今までは許していただけいでゐました。」

「なるほど、以前はさうだつたでせう。」ちらとネフリユードフを流し目に見て言つた。

「知事の許可證も持つてゐます。」ネフリユードフも、ひるまなないで手帳から取り出して見せた。

「ちよつと。」典獄は相變らず眼ではネフリユードフの方を見ないで、人差指に金指輪をはめたほつそりした、かさくの白つばい指で許可證を受け取り、ゆつくりおちついて讀んだ。

「ではどうぞ事務室へ……」

事務室は空虚だった。典獄はテーブルに凭れて、その上の書類を選びはじめた。ネフリュードフは例のウェーラ・ボゴドウホースカヤに面會することは出来まいかと訊いて見たが、典獄の返事は頗る簡單だった。

「國事犯との面會は禁じられてゐます。」

典獄はかう言つたまゝ、また熱心に書類を読みはじめた。シューストワの叔母から預つた手紙をポケットに入れてゐるので、彼は自分が何か罪を犯さうとして、それが發覺したやうな感じがした。

マースロワが這入つて來た時、典獄は書類から眼をはなして顔を上げたが、彼女にも、またネフリュードフにも眼をくれないで、「お話しなさい。」と言つたきりだった。

マースロワは以前監房にゐた時同様、白いジャケツと下袴、それに頭に布を捲いてゐた。ネフリュードフの傍に來て、その冷たい、かた苦しい顔を見ると、眞赤になつて、ジャケツの端を手でいじくりながら伏眼になつた。

その狼狽したさま、それは病院の門番の言葉を裏書きするものだと思はれた。

ネフリュードフは以前通りに、話すつもりで來たのだが、かうなつてはどうも穢らはしい氣がして握手することも出来なかつた。

「今日は悪い知らせに來たよ。」彼はマースロワの顔を見もしなければ無論握手もしないまゝで言つ

た。單調な機械的な聲だった。「元老院では上訴が棄却されてしまつた。」

「さうだらうと思つてゐました。」彼女は喘ぐやうに變な調子で言つた。

以前なら、どうしてさう思つてゐたかと訊くところだったが、彼は黙つて女の顔を見ただけだった。

女の眼には涙が一杯たまつてゐた。

しかし、ネフリュードフは、その涙には慰められなかつた。いや、一層彼女に對するいらだたしい

氣持が募つて來た。

典獄は立ち上つて部屋中を歩き出した。

マースロワに對する嫌惡は別として、とにかく、元老院の議決が残念だつたといふことだけは話す

方がいゝと思つた。

「望みがないわけぢやないんだ。陛下に請願するから、その方が成功するかも知れない。僕はきつと

……」

「そんなこと、私、考へてはゐませんの……」マースロワは潤んだ眼を、虔ましく輝かして言つた。

「では？」

「あなたは病院へいらして、私の噂をお聞きになつたんでせう……」

「それがどうしたんだ？ そんなことはお前だけのことぢやないか。」素氣なく、眉をしかめて言つた。誇りを傷つけられたといふ狂ほしい感じが折角なくなつてゐたのに、病院のことを言ひ出された

ので、再びむら／＼と燃え上つて来た。

この自分——世間で誰知らぬものもない自分、どんな上流社會の娘でも自分と結婚することを幸福だと思つてゐる自分が、敢て犠牲になつてこの女の夫とならうとしてゐる。然るに、彼女はそれを待ちもしないで、病院の助手など、ふざけてゐるとは……彼は憎々しげに女を見ながら考へた。

「さあ、これに署名してくれ。」

ポケットから大きい封筒を出して、テーブルの上に置いた。女は頭巾の端で涙を拭き／＼椅子にかけ、どこへ何と書くのかと訊いた。

彼が教へると、女は左の手の甲に右の袖口を載せてペンを執つた。その後立つて、ネフリユードフは、たまらない思ひに身を震はせてゐる女の姿をぢつと見下してゐた。彼の心中には、善悪の感情が——誇りを踏みにじられた怒りと、苦しみ惱んでゐる女に對する憐れみとが、争つた。そして後者が勝ちを制した。

女を憐れむ心が先だつたか、それとも彼自身の過去に犯した罪を思ひ出す方が先だつたか、兎に角彼は、自分も女と同じことをしたのだ、自分は罪深いものであると思ふと同時に女を憐れに思つた。

署名を終り、インキで汚れた手先を下袴で拭くと、彼女は立ち上つてネフリユードフを見つめた。

「前にも話した通り僕は實行する。お前がどこに送られても一緒に行くよ。」

「何にもならないわ。」彼女は急いで男の言葉を遮つたが、顔は明るく輝いた。

「途中で要るものを考へて置くといふ。」

「別に要るものもありませんわ。」

典獄が傍に来たので、注意を受けないうちにと思つて、ネフリユードフは別れることにした。今までに感じたことのないほどの平和と、喜びと、あらゆる人間に對する愛とを覺えながら外へ出た。「マースロワがどんな行ひをしようと、彼女を愛することゝろに變りはない」と思ふと彼は我ながら嬉しかった。助手と關係したければするが、自分の知つたことではない。自分は、自分のために彼女を愛するのではない、彼女のため、そして神のために彼女を愛するのだ……。

マースロワが病院を追ひ出され、ネフリユードフもそれを信じてゐる事件の顛末はかうである。

看護婦から廊下の端にある藥局に行つて煎じ藥を取つて來いと言ひつけられたので、マースロワは、その通り一人で藥局に行くと、そこに平生からうるさく尾けまはす、にきび面の助手があて、いきなり彼女に抱きついた。それを振りきつて男を突き飛ばす拍子に、男の頭が藥棚にぶつかり、硝子壺が二つ轉げ落ちた。

その時廊下を通りかゝつた醫師長が、硝子の壊れる音を聞きつけ、そして眞赤になつたマースロワを見ると、すつかり怒つて、

「おい／＼、馬鹿な眞似をすると承知しないぞ。」と、マースロワを嘔鳴りつけ、それから助手の方に向き直つた。「一體どうしたんだ。」

眼鏡越しに睨みつけられて、助手はにや／＼しながら辯解をはじめようとしたが、醫師長は聞きもしないで病室の方へ行つてしまつた。そして即日、もつと眞面目なものを寄越すやうに典獄に言つてやつた。

助手との醜關係といふのは、たゞこれだけのことである。情事關係のために病院を出されたといふことは、マースロワにとつて特に辛かつた。何故といふに、男との關係は、ずつと以前から厭でくたまらなかつたからである。彼女の過去及び現在の境遇から推して、すべてのもの（にきび面の助手もその一人だつた）が彼女を輕蔑するのを當然であるかのやうに振舞ひ、助手までが彼女が拒絶したのを寧ろ不思議がつた。かう考へると、マースロワはまつたく悲しかつた。自分自身がつく／＼可哀さうになつて、ひとりで涙がこみ上げて來た。

ネフリユードフに會つた時にも、彼女は、きつと病院で聞いて來たにちがひないから、ありのまゝを話して疑ひを晴らさうと思つた。しかし、辯解したところで、信じてくれないばかりか一層疑ひを増しさうな氣もしたし、涙も咽喉にこみ上げて來たので、つい黙つて押し通したのだつた。

マースロワは今でも、ネフリユードフと二度目の面會の時に言つた通り、飽くまでも彼を許さないで憎みつけようと考へてゐた。ところが、實際に於いては、再び昔のやうな愛を男に感じてゐた。だから知らず／＼のうちに、ネフリユードフの希望する通りを實行してゐたのである。即ち酒も、煙草も、媚びを賣ることも止めた。病院の看護婦になつたのも、彼が喜ぶだらうと思つたからだつた。

ネフリユードフが結婚のことを言ひ出す度に頑固に斷り通して來たといふのは、要するに、一旦言ひ放つた強い言葉を離へしたくなかつたためと、その結婚がネフリユードフの不幸になることをよく知つてゐるからだつた。彼が身を犠牲にして自分のやうなものとは結婚する、それはありがたいけれど、も斷じて受けてはならないと決心した。が、そのネフリユードフも自分を輕蔑し、以前のまゝの自分だと思ひ、自分の心中に起つたい、意味の變化を認めてくれないのかと思ふと、彼女は何よりもそれが悲しかつた。病院にゐてふしだらをしたと彼に思はれてゐることが、シベリヤ行きが決定したといふ知らせよりも、遙かに彼女にとつては苦しかつたのである。

三〇

マースロワは第一護送隊に加へられるかも知れないので、ネフリユードフは出發の準備にかゝつた。が、しなければならぬ仕事は澤山あつて、いくら時間があつても片づきさうになかつた。

仕事といつても以前とはまるで性質のちがつたものだつた。以前は、一個のドミートリイ・ネフリユードフといふ人間のことばかりを考へ、生活の興味が悉く彼を中心としてゐたが、今ではすべて他人のための仕事である。而も以前の仕事は常にいま／＼しく、いらだ／＼しかつたが、今の仕事は常に愉快な氣持ですることが出來た。現在の彼の仕事は三つに分類することが出來る。

第一はマースロワに關するもの、主として陛下への請願書の手續きと、シベリヤ行きの準備。

第二は領地の處分。パノールウオ村では地代を彼等の共同費用にくり入れる條件で土地を百姓にやつてしまつたが、そのために證書と遺言書を作る必要があつた。クヂミンスコエ村の方では、地代を取るには取るが、その中から、いくらを自分の生活費に充て、いくらを百姓たちの費用に残すかをきめなければならなかつた。シベリヤ行きの費用がどのくらゐか、るか不明なので、収入全部を放棄する決心にはまだなつてゐなかつた。

第三は彼に助力を求め、囚徒がますます殖えて来たので、彼等のために出来るだけのことをしてやること。初め囚徒たちに接して助力を求められた時、ネフリュードフは單に彼等の苦痛を軽くしてやらうと思つて當局者との間に立つたのであるが、後になつて救ひを求め、人々が多くなると、一々盡力することがとても出来なくなつた結果、彼には新しい而も興味ある仕事、或ひは研究が生れて来た。

それは、一體裁判と稱する驚くべき制度は何だらうか、といふ問題を解決することである。その裁判の結果、監獄といふものが存在することになり、幾百幾千といふ犠牲者が、その中に收容されて苦しめられてゐるではないか。

ネフリュードフは、囚徒には五種の別があるといふ結論に達した。第一は誤つた判決の犠牲になつた、全然罪のないもの、例へば放火犯にされてしまつたメニシヨフやマースロワなどである。これは無論、少數で、誨教師の見るところでは全體の七パーセントくらゐであるが、この人々が特にネフリュードフの興味をそつた。第二は特殊の事情、例へば憤怒とか嫉妬とか泥酔とかのために犯した行為に對して罰せられた人々であるが、これ等の行為は彼等を裁いて刑に處した裁判官自身も、同じ事情に置かれたら恐らく犯したにちがひないのである。この種類に屬する囚徒は全體の半數以上であるとネフリュードフは考へた。第三は、本人では昔からの習慣で少しも悪いことではない、寧ろい、ことだとさへ思つてした行為が、立法者側から犯罪と見なされた場合で、酒の密賣者とか、密輸入者とか、官有林の草を刈つたり薪を拾つたりした者とかである。第四に屬するものは、より一段精神的に進歩してゐたといふだけの理由で收監されてゐるもの、例へば宗教上の異論者、獨立運動を起したポーランド人、國事犯、社會主義者、ストライキの首謀者などである。第五に屬するものは、彼等が社會に對して犯した罪よりも、その罪に對して社會の負ふ責任の方が遙かに大きいのである。彼等の生活の環境がいゆる犯罪なる行為をどうしてもしないではゐられないやうに出来てゐるのである。ネフリュードフの考へでは、最近見聞した人殺しや泥坊は大部分これに屬してゐた。

そこで、これ等種々雑多の人々が監獄に收容されてゐるのに、一方では、少しもこれと違はない人が自由氣儘に生活してゐるばかりか、平氣で他人を裁いてゐるといふのは一體どうした理由であらう？ これを研究するのがネフリュードフの第四の仕事だつた。

書物によつてこの問題の解答を得ようとして彼は、ロンブローゾー、ガロフプロ、フェリー、リスト、モウズレー、タードなどの著書を買ひこんで食るやうに讀みふけた。が、讀めば讀むほど失望するばかりだつた。著述のためとか議論のためとか教授のためとかでなく、單に日常の人生問題を解決し

ようと思つて科學に向ふ人々が常に失望すると同じ失望を、ネフリユードフもしたのである。なるほど、科學は刑法上の微妙深遠な種々の問題に就いて明確な解答を與へてくれる。が、彼の知らうと思ふことは一つも答へてくれない。而も彼の知らうと思ふことは極めて簡單である、——「何故に、またいかなる權利があつて、同じ人間でありながら、一方が他方を監禁したり拷問したり追放したり、答刑にしたり死刑にしたりするのであらうか？」

ところが書物はそれに答へない。そしてつぎのやうな論議ばかりをしてゐる。——人間には自由意志があるか否か？ 頭蓋骨を計量することに依つて犯罪者を識別し得るか？ 遺傳と犯罪との關係。先天的犯罪性なるものは存在するか？ 發狂、惡化、氣質の意義。氣候、食物、無智、模倣性、催眠術、情慾と犯罪との關係。社會とは何ぞや、義務とは何ぞや？ 等々々々。

ネフリユードフはいつだつたか學校歸りの子供とこんな問答をしたことを思ひ出した。字の綴り方を習つたかと訊くと子供は、「あ、おぼえたよ。」と答へた。

「ぢや足といふ字を書いてごらん。」

「何の足？ 犬の足かい？」と子供はするい目つきをして答へた。

ネフリユードフが根本問題を解決しようとして書物の中に見出したものは、ちやうど、この子供の答へと同じである。興味ある内容ではあつたが、肝心の、「いかなる權利があつて人間が人間を罰するか？」の答へは遂に得られなかつた。

三二

マースロワの屬する護送隊は、七月五日出發ときまつたので、ネフリユードフも同日立つことにした。

その前夜、ネフリユードフの姉が夫と一緒に田舎から出て來た。

姉、ナターリヤ・ラゴージンスカヤは十も年上だつたので、ネフリユードフは子供の時分から随分世話になつたものである。彼女は今は亡くなつてしまつたネフリユードフの親友、ニコーレンカと戀仲になつてゐたが、二十五の時に別の男と結婚した。しかしこの男は、嘗て彼女及びネフリユードフが世の中で一番貴く一番神聖であると思つてゐたすべてのものを顧みなかつたばかりでなく、道徳的完成の熱望、人類奉仕の熱望などの意味さへ全然理解しなかつた。いや、自己流に解釋して、そんなものは世間體を作り見榮を張らうとする野心に過ぎないと思つてゐた。

彼、ラゴージンスキイは名も金もない男だつたが世渡りが巧みで、婦人に取り入ることに殊に妙を得てゐたので、今では相當の裁判官になつてゐた。青年時代をや、過ぎて、外國を放浪してゐる間に、ネフリユードフと知り合ひになり、當時既に盛りを過ぎてゐたナターリヤを口説いて彼女の母、つまりネフリユードフの母が不賛成だつたにも拘はらず、結婚してしまつた。

ネフリユードフは露骨に顔にはあらはさなかつたが、この男が大嫌ひだつた。野卑な感情、狭い自

惚が彼の反感をそつた。けれども、それにも増して、姉が、この浅ましい男を情熱的に官能的に愛して、今まで持つてゐた善いところをすつかり無くしてしまつたことが、彼には、たまらなく不快だつた。

この毛むくじやらな、禿頭の、自惚男の妻が自分の姉のナターリヤだと思ふと、ネフリユードフはいつも胸が痛んだ。その子供たちさへ厭な厭な気がして、どうしても可愛がる事が出来なかつた。そして姉が妊娠したことを聞く度に、自分には何等交渉のないこの男のために、またしても彼女が何か悪い病毒でもうつされたかのやうな悲しみを感ずるのだつた。

姉たちは男女一人づゝの子供を田舎に残して来て、一流の旅館に泊りこんだ。

ナターリヤは早速母の家を訪ねたが、そこには弟がゐなかつたので、アグラフェーナから下宿に移つたことを聞き、その方へ廻つた。

一日中ランプのともつてゐるやうな、暗い、いやな臭氣のする廊下で、いかにも汚ならしい下男が公爵はお留守でございませうと言つた。

ちよつと書き残して置きたいことがあつたので、彼女は部屋へ案内してくれと頼んだ。

ナターリヤは弟の借りてゐる小さな二つの部屋を仔細に見まはした。弟の綺麗好きと整理好きとは昔のまゝ、一切のものにあらはれてゐたが、周囲の閑素なのに彼女は驚いた。書きもの机の上には見覚えのある青銅の犬のついた文鎮が置いてあつた。

今日中には是非来てほしいとの意味を書き残して彼女は旅館に歸つて行つた。實は、彼女は弟ネフリユードフに就いての二つの問題が氣になつて、わざ／＼田舎からやつて来たのだつた。一つはカチュウシャ・マースロワとの結婚の噂で、これは評判になつてゐるので、どこに行つても聞かされた。今一つは、土地を百姓に分配してしまつたことで、これも同様、誰知らぬものもないくらの有名な噂になつてゐて、政治的意味のある危険性を含んだものと思ふ人が多かつた。

カチュウシャと結婚することはナターリヤにとつては或意味で賛成したかつた。そんな風に、きつぱりと話をつけることが彼女も彼も昔は好きだつたからである。が、弟がそんな境遇を経て来た恐しい女と一緒にゐるのかと思ふと恐しくなつた。どちらかと言ふと、この後の方の氣持が強かつたので、無理だとは思ひながらも、何とかして結婚を思ひ止まらせようと決心した。

今一つの問題、つまり土地を放棄したことは、大して彼女の胸を打たなかつたけれど、夫の方が非常に憤慨して、どうしても反對しなければならぬと言ひ出したのだつた。

「地代を百姓どもに使はせる條件で土地を放棄してしまふなんて、一體どうしたんだ？」と、ラゴージンスキイは言つた。「そんなことをするくらゐなら、農業銀行の手を経て奴等に賣却する方がどんなにいゝか知れやしない。その方が、よつほど、意味がある。どう見ても、このやり方は正氣の沙汰とは思へないよ。」

彼はネフリユードフには後見人の必要があると考へ、姉として眞面目に、この亂暴な計畫を中止す

るやうに言はなければいけないと、妻に迫つたわけである。

三三

その晩、ネフリユードフは宿に歸つて、テーブルの上の手紙を見ると、直ぐに姉を訪ねた。夫は隣室に休息してゐたので、ナターリヤだけと會つた。

彼女はしつくりと身に合つた黒の絹服を着て赤いリボンを胸につけ、眞黒い髪を縮らせた流行の型に結つてゐた。同じ年輩の夫の前に、若く見せようと苦心してゐるさまがありくと見えた。彼女は弟を見ると椅子から飛び上つて迎へた。二人は接吻して顔を見合せた。眞實のこもつた、言葉ではとてもあらはせない意味深い瞳を、ぢつと交したが、つきには眞實のこもらない會話がはじまつた。母の死後、彼等ははじめて會つたのである。

「姉さんは肥つて若くなりましたね。」ネフリユードフは言つた。

「お前は少し瘦せたやうだよ。」

「さうですか。義兄さんは？」

「休んでるの。昨夜寝なかつたもんだから。」

言ひたいことは澤山あつたが、口には出さないで眼で話し合つた。

「お前の宿へ今日行つたんだよ。」

「え、知つてゐます。家が廣過ぎるもんだから下宿にしました。家にあるものはみんな要りませんから、姉さんにお譲りませう、家具や何かですね。」

「ありがたう、アグラフェーナもそんなことを言つてたよ。だけど……」

その時、旅館の給仕が茶の用意をして持つて來た。ナターリヤは黙つて茶を注いだ。やがて彼女は決心したやうに言ひ出した。

「ネフリユードフ、私はすつかり聞いたよ。」そして彼を見つめた。

「さうですか、知つていたゞいたら結構です。」

「あゝ、いふ暮しをして來た女を直せる見こみがあるの？」

ネフリユードフは小さな椅子にきちんと坐つて、姉の言ふことをはつきりよくのみこみ、適當な答へをしようと思つた。この前マースロワに會つた時に感じた氣持は今も彼の魂を、靜かな喜びと、あらゆる人間に對する善意とで充たしてゐた。

「女を直したいとは思つてゐません。僕自身を直したいと思つてゐるんです。」

ナターリヤは吐息をついて、「そのためなら、結婚しなくても他に方法がありはしない？」

「僕は結婚が一番いゝと思ふんです。それに、さうすれば僕も世間に出て何か役に立つ方面で働きますから。」

「それにしてもお前が幸福になるとは思へないが。」

「僕の不幸は問題ぢやありません。」

「女も幸福にはなれない。望まれもしないけれど。」

「あの女は望んでもあません。」

「わかつてるよ。だけど人生は……」

「え、人生は？」

「それとはちがつたものを要求してるよ。」

「いや、しなければならぬことを要求してるだけです。」

かう言つてネフリユードフは、眼や口許にいくらか小皺が寄つてゐても、まだ色艶を失はぬ姉の顔を眺めた。

「私にはわからない。」彼女はまた溜息を洩らした。

「可哀さうな姉！ どうしてこんなに變つたらう？」とネフリユードフは考へた。結婚前の彼女を思ひ出して當時がなつかしくなつた。

そこへ、ラゴージンスキイが、頭を反らし胸を突き出し、いつもの軽い足どりで部屋へ這入つて來た。眼鏡と禿頭と黒い顎鬚とが、きら／＼光つた。

「やあ、御機嫌よう。」彼は、言葉にわざとらしく力をこめて言つた。

「話の邪魔になりやしませんでしたか。」握手を済まし肘掛椅子にとつかりと腰を下してから彼は言

つた。

「い、えちつとも。僕は自分の言つたり爲たりすることを誰にも隠さない主義ですから。」

この男の毛むくじやらな手を見、鷹揚に氣どつた聲を聞くと、たちまち、落ちついた氣分が消えてしまつた。

「今、この人の計畫のことを話してましたの。」ナターリヤは、かう言ひながら急須を取上げた。「あなた、お茶は？」

「注いでおくれ。ところで何か特別の御計畫がおありなんですか。」

「何、僕が責任を負はなきやならぬ女が、シベリヤ送りときまりましたので、僕も一緒に行かうといふのです。」ネフリユードフは答へた。

「一緒に行かれるだけでなく、それ以上の話があると聞きましたが。」

「え、女が承知すれば結婚するつもりでゐます。」

「ほう。差支へなかつたら、その動機を聞かせていたげませんか。よくわかりませぬのでね。」

「動機といふのは、つまり、その女が……その女の墮落した最初の一步が……」彼は適當な説明が出来なくていら／＼した。「つまり、罪を犯したのは僕であるのに、罰せられたのは女であるといふのが動機です。」

「罰を受けたとすれば、その女にも罪があるでせう。」

「いや、まったくないので。」

ネフリュードフは必要でもない興奮を感じながら前後の事情を詳しく話した。

「なるほど陪審員側の軽率な答申に基づいて裁判官がまちがった判決を下したわけですね。そんな場合には元老院があるぢやありませんか。」

「ところが元老院では棄却しました。」

「棄却したとすれば、上訴の理由が薄弱だったにちがひない。」ラゴージェンスキイの言葉の裏には、眞理は判決の結果であるといふ意味を含んでゐた。「元老院は事件の本質にまで立ち入つて調査することは出来ないのです。若し本當にまちがひがあるのだつたら、皇帝陛下に請願なすつたらいい。」

「その手續きはしましたが、見こみはなささうです……。やはり罪のない者が刑を受けることになるんです。」

「罪のない者が刑を受けることはありませんよ。あつたにしても、ごく稀です。刑を受けるのは罪があるからです。」

「僕は反対だと思ひます。」ネフリュードフは姉婿に反感を覚えながら、「裁判所で有罪の判決を受けた大部分のものが無罪だと信じてゐます。」

「どういふ意味で？」

「文字通り罪がないと思ふのです。この女だつて毒殺なんかしないのに徒刑です。他にも何もしない

のに人殺しにされたり、放火犯にされたりしてゐるものが澤山ありますよ。」

「なるほど。むろん裁判上の過失は今までもあつたし、今後もあるでせう。人間の作つた制度ですから完全ぢやありません。」

「それに、自分の育つて来た環境の影響で、悪いことではないと思つて犯罪行爲をするものも澤山ありますが、これにも罪はないと思ひます。」

「いや、それはちがひます。どんな泥坊だつて物を盗むのが悪いことは知つてゐる。」

ラゴージェンスキイは相手をいらだたせるやうな薄笑ひを浮べて、いやに落ちつきはらつた調子で言つた。

「いや、知らないのです。みんなが盗んではいけないと言つて聞かせる。ところが、工場主は碌々給金を拂はないで自分たちの努力を盗んでゐるし、政府は租税といふ形式でやはり自分たちの金を盗んでゐると彼等は思つてゐます。」

「おや、アナーキズムだな。」ラゴージェンスキイは義弟の言葉に、靜かに定義を下した。

「そんなことは知りませんが、僕は事實を言つてゐるんです。政府が自分たちの金を盗んことを彼等は知つてゐます。すべての人間の共有たるべき土地をわれわれが占有してゐることを彼等は知つてゐます。彼等は地主によつて土地を盗まれたのです。ところが、この盗まれた土地から、小枝一本でも拾つたら、泥坊の悪名を着て監獄にぶちこまれてしまひます。泥坊とは、彼等の土地を盗んだ

ものであり、盗まれたものを取り返すのは自分たちの家族に對する義務であることを彼等は知つてゐます。」

「私にはわからない。わかつたところで賛成出来ない。第一、土地といふものは誰かの所有たるべきものです。いくら、あなたが土地を公平に分配したところで、明日になれば、また、勤勉で利口なものの手に這入つてしまひます。」

ラゴージンスキイは、ネフリユードフを社會主義者扱ひにした。社會主義は土地の平等分割を主張するが、そんな分配方法は愚の骨頂であることを證明しようとした。

「土地を平等に分配しようとは思つてゐません、土地は誰の所有であつてもいけない。賣買したり貸借したりすべきものぢやありません。」

「しかし人間は生れながら所有の權利を持つてゐます。それがなければ土地にしたつて耕作する興味がありません。所有の權利を奪つて御覽なさい、われ／＼は野蠻時代へ逆戻りです。」彼は土地所有の慾望は土地所有の權利を證明するものだとの見地から堂々と自説を主張した。

「反對です。誰の所有でもなくなつたら、今日のやうな、乾草に寝てる犬ころみみたいに何もしい地主が、自分では耕作することも出来ない癖に、耕作しようとするものに土地の使用を許さない、といふやうなことがなくなりますよ。」

「しかし、どう見ても、あなたの説は狂氣じみてゐる。現代に於いて、土地の私有制度を廢止するこ

とが出来るとせうか。これはあなたの昔からのお道楽ですよ、率直に言ひますから氣を悪くしないで下さい。」ラゴージンスキイは青くなつて聲を震はした。この問題が一番彼の胸に觸れたらしかつた。

「實際問題にかゝる前に、もつとよく熟考される方がいゝでせう。」

「僕の一身上のことに就いて言つてゐられるんですか。」

「さうです。われ／＼は先祖から譲り受けたものを子孫に傳へる責任があると思ひます。」

「しかし僕のしなければならぬことは……」

「いや、私は、私自身や私の子供たちのことを言つてるんぢやありません。子供は心配しなくても樂に食つてゆけるだけの財産が作つてあります。率直に言ふと、あなたのやりかたはあまりに一身上のことを考へてゐない。これは主義として賛成出来ません。もつとよくお考へになるがいゝと思ひます。讀む本にしても……」

「僕一身上のことは僕に委して下さいませんか。本の選擇なども自由にさせて下さい。」

ネフリユードフも青くなつて言つた。手が冷たくなつたので、口を嚙んで茶を飲み出した。

三三三

マースロワが加はつてゐる護送隊は、翌日の午後三時發の汽車でモスクワを出發することになつてゐたから、ネフリユードフは、一緒に停車場に行くため、十二時前に監獄に出かけようと思つた。

姉のところから歸つて、着物や書類を整理してあるうちに、日記が眼についたので、ばらばらとあちこちを拾ひ讀みした。最後の一節には、かう書いてあつた。

「カチユウシヤは自分の犠牲的申込みを容れないで、彼女自身犠牲にならうとしてゐる。彼女は勝つた、自分も勝つた。彼女の心中に或變化が起りつゝあるらしいことは喜ばしい。彼女は魅つたと信じていゝだらうか。」

「自分は非常に苦しいと同時に非常に嬉しい氣持を味はつた。彼女の病院での不行跡を聞いて自分はたまらない苦しきだつた。こんな苦しきだらうとは思はなかつた。自分は嫌悪と憎悪とのこもつた口のきゝ方をしたが、考へて見ると、こんなことを自分は今までに幾度くり返したことだらう。自分は自分が厭になり、彼女が可哀さうになつた。するとまた喜ばしきを感じた。常に自己の眼にある梁木を見ることが出来たなら、どんなにわれわれは善い人間になることが出来るだらう。」

その後へ彼は書きつづけた。

「今日姉を訪ねた。勝手なことを言つたり振舞つたりしたので、重苦しい氣持が残つてゐる。しかし、どうにも出来なかつたのだ。明日は新生活への第一歩。今までの生活ともお別れだ。種々新しい印象があるけれど、まだはつきりまとまらない。」

翌朝、眼をさますと、ラゴージンスキイと議論したことを悔いた。

「このまゝ出發してはいけない、行つて仲直りをして來よう。」

しかし時計を見ると、護送隊の出發に間に合ふためには、急がなければならぬ時刻だつた。そこであわて、支度をし、汁馬車を備つて監獄に出かけた。

護送隊出發の二時間後の汽車で立つことになつたので、彼は下宿の支拂ひも済まして別れを告げた。

三四

七月の暑い日だつた。むしむしする前夜のほとぼりの冷めきらない敷石や壁やタン屋根からは、動かぬ空氣の中に熱氣を發散した。たまに微風があつたが、それは塵や、ペンキの臭ひのこめた、むつとする空氣を送つて來るだけだつた。

通りには人影が少く、それも日蔭ばかりを歩いてゐた。道路人夫が日にやけた顔に汗を流しながら、焼けた砂地に金鎚で石をたゞきこんでゐた、白い夏服の巡査は、ピストルを腰に吊るして、道の真中に、いかにもたるさうに立つてゐた。時々、白い頭巾をすつぱり被り兩耳だけ突き出してゐる馬をつけた鐵道馬車が鈴を鳴らし、往つたり來つたりした。

ネフリエードフが監獄に着いた時には、まだ一行は出發してゐなかつた。朝の四時から開始した囚徒を受け渡す面倒な仕事は片づいてゐなかつた。一行は男囚六百二十二名、女囚六十四名だつたが、それを一々囚徒名簿と對照し、病人と虚弱者を選び出して護送兵に引き渡すのだつた。中庭の

日蔭には、テーブルの傍に、典獄と、二人の典獄補と、醫者と、その助手と、士官と、書記とがゐる。囚徒をつぎつぎに呼び出して調査訊問した結果を紙片に書きつけてゐた。

日は次第にテーブルに射して来た。風がないのと囚徒の人のいきれとで苦しくてたまらなかつた。「やれ、いつまで経つても済まないぢやないか。」脊の高い根ら顔の護送士官が、濃い口髭の中へ煙草の煙を吸ひこみながら言つた。

「やりきれないね。どこからこんな連れて来たんだ？ まだ大勢あるのかい？」

書記は名簿を調べた。

「男囚が二十四人、それに女囚が全部残つてゐます。」

「そんなところに立つて、どうしたんだ？ こちらへ来るんだ。」士官は、まだ調べが済まないでまごまごしてゐる囚徒たちを唖鳴りつけた。彼等は列をつくつて、三時間以上も太陽に直射され順番を待つてゐた。

中庭でこんなことが行はれてゐる間、門の外では、囚徒の荷物や、歩けない囚徒を乗せて行く荷馬車が二十臺許り並び、傍にはいつもの通り銃を持った兵卒が立番をしてゐた。曲り角に囚徒の身寄り（身寄り）のものが一かたまりになつて、若し出来れば別れの挨拶をし、錢別の品を渡さうと思つて待ちかまへてゐた。ネフリュードフもこの群の一人だつた。一時間ばかり立つてゐるうちに、門内から鎖の音、響音、役人らしい聲、咳聲、大勢の咳聲などが聞えた。

それが五分間もつゞき、役人が門を出たり這入つたりして漸く出發の命令が下つた。雷のやうな響きを立て、門が開かれると、鎖の音が一層やかましく鳴り、白服の護送兵が大きな圓形を作つて並んだ。いかにも慣れきつた様子だつた。

囚徒は二列になつて出て来た。最初は重罪のもので、一様に鼠色のズボン、背中に記號のある上着をつけてゐた。若者、老人、瘦せたのや肥つたのや、青いのや赤いのや、鬚のあるのやないのや、それから、ロシア人、鞆鞆人、ユダヤ人——種々様々の男が、鎖の音も高く、両手を元氣よく振りながら、遠い旅に出るのだと覺悟してゐるらしかつた。出て来て、十歩くらゐも歩くと、立ちどまつて四列になつた。

つぎの連中には足に鎖はついてゐないが、手錠で二人づつなぎ合されてゐた。そして、やはり元氣よく出て来て四列になつた。それから女囚、自ら進んで一緒に行く囚徒の女房などが續いた。女囚の中には乳呑兒を抱いてゐるものも數人ゐた。

男囚は時々咳をしたり、ちよつと口を利いたりするきりで靜かだつたが、女囚の方は、のべつにしやべりつゞけた。

あ、マースロワが出て来た、とネフリュードフは思つたが、つぎの瞬間にはもう見失つてしまつた。大勢の中にもまぎれこんでしまつて、眼に入るものは、人間らしい姿を失ひ女らしい姿を失つた鼠色の生きもの、群だけだつた。

人数調べはさつき済んだ筈なのに、護送兵はまた名簿と照し合せた。二三の男囚が動いたり場所を變へたりしたので、その度に數へかたをまちがへて初めからやり直した。

漸くそれが終つて護送兵が何か號令をかけると、病氣の男囚や、女囚や子供たちが先を争つて馬車の方へ突貫し、我勝ちに車内へ袋を投げこんで飛び乗つた。乳呑兒が泣きわめいた。子供たちは場所争ひでたゞ喧嘩した。

四五人の男囚が士官の前に来て、帽子を照ぎ、何か頼んでゐた。ネフリユードフは後で知つたが、それは馬車に乗せてくれと頼んでゐたのだつた。士官はその方を見向きもしないで煙草を吹かしてゐたか、突然、その一人の鼻面へ、ふとい腕を振りまはした。毆られるのかと思つて、その男は坊主頭をちぢめ、あわて、飛び退いた。

「ひどい目に會はしてくれろぞ！ 歩ける足を持つてろぢやないか。」士官はかう嘸鳴りつけた。しかしよぼよぼの年寄りだけを一人乗せることにした。この年寄りは喜んで、帽子を脱ぎ十字を切つて馬車に近づいたが、足についた鎖が重くて、體を持ち上げることが出来ないほど老衰してゐた。車内の女が手を引つ張つて乗せるのを、ネフリユードフは見てゐた。

士官は軍帽を覗ぎ、額や禿頭や赤い頸筋の汗を拭いてから十字を切つた。

「進め！」

兵卒の銃ががちや／＼鳴つた。見送人が何が叫ぶと囚徒も何か叫んで答へた。女囚たちがが／＼ざわめき立てた。そして白服の兵卒に護られた一隊は、鎖につながれた足を蹴立て、砂塵を上げながら出發した。先頭は兵卒、つぎに徒囚、流囚、町村組合から追放せられた囚徒、女囚といふ順序たつた。

最後に、袋や荷物や、歩くことの出来ない者を載せた馬車がやつて来た、一つの馬車の上では、服をぐる／＼固く結びつけられてゐる女が、時々何か悲しさに叫んでは、啜り上げてゐた。

三五

護送隊はかなり長かつたので、最後の、荷物や、歩けない者を載せた馬車が砂塵を上げはじめた頃には、先頭がもう見えなくなつてゐた。馬車の一番おしまひが動き出した時、ネフリユードフは待たして置いた辻馬車に乗りこんで、先頭に追ひつ／＼やう馭者に命じた。男囚の中に自分の顔馴染のものが交つてはゐないか、また女囚の中にマースロワがあるにちがひないから贈つた品々が届いたかどうかを聞いて見るつもりだつた。

はげしい暑さで、それに風がなかつた。千人からの囚徒の立てる砂塵が舞ひ上つて、街の眞中を動いて行く一隊を包んでしまつた。足が早いので、のろ／＼したネフリユードフの馬車で追ひつくにはかなり時間がかつた。見知らぬ不気味な恐しい生きもの、群、——同じ服、同じ靴をつけ、元氣をつけようとして同じやうに手を振りながら彼等は進んで行つた。こんなに多くのものが、同じ様子を

して、同じ不可思議、不自然な状態に置かれてゐるのを見ると、ネフリユードフには、それが人間ではなく、言はゞ一種奇怪な生きものであるとしか思へなかつた。しかし、彼等の中に、殺人犯のフヨードロフと、道化もの、オホーチンと、嘗てネフリユードフの助力を求めたことのある浮浪人とを發見したので、その印象はたちまち消えてしまつた。

囚徒たちは、傍を追い越して行く馬車を眺め、中のネフリユードフを眺めた。フヨードロフは彼を認めたといふ合圖に首を後に反らし、オホーチンは眼ばたきをして見た。しかし反則になると思つたらしく、頭を下げて挨拶はしなかつた。

女囚の群に追ひつくと直ぐにマースロワを發見した。彼女は二列目にゐた。その列の一番端にゐるのは足の短い、黒瞳の、顔のみにくい例の洒落女、そのつぎは足を重さうに引きずつて歩いてゐる身持ち女、三番目がマースロワだつた。彼女は袋を背負ひ、落ちついた覺悟の様子で、眞正面を見つめてゐた。四番目は若くて美しいフヨードシヤで、元氣よく歩いてゐた。

ネフリユードフは馬車を降りて近づいた。品物は届いたか、その後氣分はどうかなどと訊くつもりだつたが、たちまち護送士官が認めて駈けて來た。

「いけません。近寄ることは禁じられてゐます。」と嘯鳴りつけた。しかし、ネフリユードフだとわかる(監獄内のものは今では誰でも彼を知つてゐた)敬禮をして附け加へた。「今はいけないのです。停車場へ着くまでお待ち下さい。こゝでは許されません……おくれちやいかなぞ、歩けく。」

士官は一行を嘯鳴つて置いて、駈足で元の位置にかへつた。新しい長靴が、びか〜と光つた。

ネフリユードフは馭者に後からついて來るやうに命じて歩き出した。行列は至るところ、憐憫と恐怖との入り交つた視線をもつて迎へられた。馬車の人々は首を突き出して見送り、歩行中のものはしばらく立ちどまつて茫然と見つめてゐた。金を寄附して行くものもあつた。(これは護送兵が受け取つた。)中には、催眠術にでもかゝつたやうに、行列の後をつけて歩いてゐたかと思ふと、急に棒立ちになつて、首を振り〜見送るものもあつた。誰でも、門から、また扉から、人を呼び立てながら駈け出して來たり、窓から首を出して身動きもせずに見つめたりした。

ある四辻では、立派な馬車が、この行列のために立往生しなければならなかつた。その座席には夫婦と子供二人が掛けてゐたが、細君は青白い顔の瘦せた女で、明るい色の帽子を冠り、手に派手な傘を持ち、夫はシルクハットを冠つてゐた。女の子は花のやうに美しく、男の子は長いリボンのついた水兵帽を冠つてゐた。父親は行列にぶつからないやうに通り過ぎてしまへばよかつたと言つて馭者を叱りつけた。母親は傘を頬に當て、日射しと埃とを避けながら、さも氣持が悪いといふ風に、目をなかに閉ぢ肩をしかめてゐた。

巡査は何とかして行列を止め、この立派な馬車を通してやらうと骨折つた。が、この一行には、いかなる金持の紳士のためでも犯すことの出來ない陰惨な威嚴とでも言ふべきもの、あるのを感じた。そこで巡査は、彼の富に對する敬意を示す爲に、唯擧手の禮をしただけで、萬一の場合には、この車

内の人々を保護するぞと言はん許りに、殿めしい顔付をして行列を睨みつけてゐた。たうとう、馬車は、別荘へ遊びに行く途中だったが、すつかり行列が通過するまで待つてゐなければならなかつた。この行列は一體何だらう？ 父母は説明してくれなかつたので、子供たちは、めい／＼に解釋したのである。女の子は、父母の顔つきから察して、これ等の人々は父母や知り合ひの人々とは全然別個の、悪い種類の人間であり、かういふ取扱ひを受けるのが當然であると考へたから、たゞ恐いと思つただけで、行列が見えなくなると喜んだ。

が、瘦せた、ほつそりした頸の男の子は、眼ばかりもせず一行を見つめながら、これとは違つた解釋を下してゐた。これ等の人々も同じ種類の人間である。たゞ、してはならない何かの悪事をしなければならぬやうに誰かゞしてしまつたのである、といふことを、神の啓示を直接受けでもしたかのやうに知つた。だから彼は可哀さうに思ふと同時に、兩者——鎖につながれたものと鎖につないだものと、この兩者を等しく恐いものと感じた。

男の子は泣きたくなつたが、こんな場合に泣くのは恥づかしいと思つたので、懸命に我慢してそれを堪へた。

三六

ネフリユードフは囚徒たちと並んで足早に歩きつゞけた。薄着をしてゐたが、それでも、たまらなく暑かつた。埃の立ちこめた、そよともしない蒸し／＼する空気が呼吸するのも苦しかつた。

四五町も歩いて彼はまた馬車に乗つた。そして昨夜の姉婿との争論を思ひ出さうとしたが、それは最早今朝ほどに彼を興奮させなかつた。囚徒の出發する時の光景、行列の通過する街々の光景、殊にこの暑熱、そんなもの、ために争論などは蔽ひかくされてしまつた。

ある塀の傍の木蔭では、水屋がしやがんで、その前に、二人の小學生が立つてゐた。一人は角製の匙で氷をしやくつて食べ、一人は水屋が何か黄色いものをコップに入れてくるのを待つてゐた。

「何か飲みたいんだが、どこかにないかね。」

ネフリユードフは何か清涼水が欲しくなつて馭者に聲をかけた。

「そこにいゝ家があります。」

馭者は角を曲つて、大きな看板の出でゐる家へ案内した。帳場のうしろの肥つた亭主と、テーブルに凭れてゐた給仕とが、見慣れない客が這入つて來たのをじろ／＼見ながら註文を聞いた。ネフリユードフはゼルツェル水を命じて、窓からや、離れたところにある、汚い卓布のかゝつた小さなテーブルに向つて腰を下した。

二人の客が茶器と白い瓶の載つたテーブルを圍んで、額の汗を拭きながら何かしきりに、話しこんでゐた。その一人が、ラゴージンスキイによく似てゐたので、ネフリユードフはまた例の争論を思ひ出し、彼とも姉とも會つてから出發したいと思つた。

「發車までに會ふことはとても出来まい。それよりも手紙にしよう。」

そこで彼は紙と封筒を取り寄せ、泡を立て、ある冷たい水を飲み、何と書かうかと考へこんだ。が、考へは少しもまとまらず、手紙がどうしても書けなかつた。

「親愛なる姉上、昨日御主人と議論した重苦しい印象を残したまゝで、出發することは出来ません。」と、まづ書いたが、「さてつぎに何と書かう？ 昨日言つたことを許してくれと書かうか。だが自分は思つたことをありのままに言つただけだ。さう書けば、自説を取り消したとあの男は思ふだらう。それにあの男が自分の仕事に干渉すると……いや、止さう……」

自分とあまり交渉のない男に對する憎悪が再びむら／＼と頭をもたげさうになつたので、彼は書きかけの手紙をポケットにしまひ、急いで勘定を済まして外に出た。そして馬車に乗つて護送隊を追つかけた。

暑さはますますひどくなり、敷石や壁土は苦しい呼吸をして喘ぎ、靴は焼けるやうだつた。馬車の漆塗りの泥よけに手を觸れた時、ネフリユードフはまるで火傷したやうに感じた。

馬は埃ッほい道を、蹄の音もだるさうに、のろ／＼と歩き、馭者は居眠りばかりしてゐた。ネフリユードフは何を考へるでもなく、たゞぼんやり前方を眺めてゐた。

道が坂になつたところに大きな家があつて、その門前に黒山のやうな人だかりがして銃を持つた兵卒が見張りをしてゐた。

ネフリユードフは馬車を止めた。

「どうしたんです？」彼は門番に訊いた。

「囚人がどうかしたんです。」

ネフリユードフは降りて人だかりに近づいた。敷石の上に、頭を足よりもだらりと下げて、胸の廣い、かなりの年の囚徒が横たはつてゐた。斑点だらけの両手の指を廣げ、仰向けになつて、血走つた眼を空に見据ゑながら、大きな胸を時々波打たせて呻き聲を擧げてゐた。意地わるさうな巡査、行商人、郵便配達、番頭、日傘を持つた老婆、空籠を背負つた小僧などが、立つてそれを見てゐた。

「みんな體が弱つてゐますよ。何しろ監獄にぶちこまれてゐて、思ひきつて暑いこんな日に引つ張り出されるんですからね。」と、番頭らしい男がネフリユードフに話しかけた。

「死んでしまふんでせうか。」傘を持つた老婆が悲しさうな聲を出した。

「シャツを脱がしてやらなくちや。」郵便配達が言つた。

巡査は太い震へる指先を不器用に動かして赤く筋ばつた頸にまきついてゐるシャツの紐を解きにかかつた。興奮し狼狽してゐたが、群衆を制する必要があると考へて、

「何だつて突つ立つてるんだ。風が通らなくて暑いぢやないか。」

「一應醫者に診察させて弱いものは残すのが當然だ。見す／＼殺しに連れ出すやうなもんだ。」番頭は法律の知識を振りまはすつもりで言つた。

巡査はシャツの紐を解いて立ち上り、あたりを見まはした。

「たかつちやいかん。見せものぢやないぞ。」と、ネフリュードフの方を同情を求めやうに見たが、相手が知らぬ顔をしてゐるので、今度は護送兵の方に向いた。しかし護送兵も巡査の當惑してゐる様子にも目もくれなかつた。

「何て亂暴な連中だらう。こんなにして人間を殺すつて法があるのか。いくら囚人だつて、やはり人間ぢやないか。」

群衆の中から今までとは違つた聲がかう言つた。

「頭の方を高くして水を飲ませておやんなさい。」ネフリュードフが注意した。

「水は取りに行きました。」巡査は囚徒の體を抱へて少し引き起した。

「こら、なぜたかるんだ？」といふ嚴めしい唸鳴り聲が聞えて、びか／＼とした制服、長靴の警部が、急ぎ足でやつて來た。

「退け／＼。たかつちやいかん。」

何でみんなが集まつてゐるのか、自分では知らなかつたが、漸く傍に寄つて死にかつた囚徒を見ると、ちやんと豫期してゐたらしく大きく頷き、靜かに巡査を振り返つた。

「どうしたんだ？」

巡査の説明によると、護送隊がこゝを通過する際に、この囚徒が倒れたのを士官は置き去りにする

やうに命じたといふのである。

「さうか、宜しい。警察へ連れて行かなきゃならんから辻馬車を呼べ。」

「門番が呼びに行きました。」

番頭らしい男はまた、「こんな暑い日に……」と、何か言ひ出した。

「お前の知つたことぢやないだらう。さつさと退いたく。」と警部は言つて睨みつけた。番頭は黙りこんでしまつた。

「水を飲ましてやらなきや。」ネフリュードフが口を出した。警部はじろりと睨んだが、別に何とも言はなかつた。そこへ門番が水を持つて來たので、巡査はだらりとしてゐる頭を持ち上げ、口へ水を流しこまうとした。しかし囚徒にはもう飲む力がなくなつてゐた。水は顎鬚をつたはつてシャツを濡らした。けだつた。

「頭からぶつかける。」

警部の命令で、巡査はその通りした。囚徒は恐々と眼を大きく開いたが身動きさへしなかつた。

埃まみれの顔に水がざあと流れた。口は一定の間を置いて絶えずはあく／＼と喘ぎ、體は小さきみに震へてゐた。

「そこにある。あれにしよう。」警部はネフリュードフの乗つて來た馬車を指して、「おい、こつちへ來てくれ。」と馭者に言つた。

「お客があるんです。」馭者はいやな顔をして振り向きもしないで答へた。
「私のですが、お使ひになつても構ひません。代は私が拂ふよ。」と、後の方は馭者に向つて附け足した。

「さうですか。おい、ぐづぐづしないで、早く乗せろ。」

巡查と門番と護送兵が力を合して囚徒を抱き上げ、馬車に運んで坐らせようとしたが、手を離すと頭がぐくりと垂れて座席から江り落ちてしまつた。

「寝かしとけ。」と警部は命じた。

「いや、このまゝで警察まで運びませう。」巡查は囚徒の横に坐り、その逞ましい腕で病人の體を抱へながら言つた。兵卒は囚徒の足を持ち上げ、馭者臺の下に伸ばしてやつた。

警部はあたりを見まはして、囚徒のバン菓子型の帽子が落ちてゐるのを拾ひ上げ、濡れて滴のたれてゐる頭に冠せてやつた。

「行け。」

馭者はむつとしたらしく頭を振つて馬車を進めた。ネフリュードフは、その後からついて行つた。

三七

馬車は警察に来て、中庭のある扉の前でとまつた。

中庭には消防夫たちが袖をまくり上げて何かの車を洗ひながら大聲でしゃべつてゐた。數人の巡查が馬車を圍んで、死にかゝつた囚徒を運び出した。

囚徒は二階に運ばれた。ネフリュードフも従つた。狭い汚い部屋に粗末な寢臺が四つ置いてあり、そのうち二つは病人が占領してゐた。頭に繃帯した口の曲つた男と肺病患者とだつた。

警部が醫員助手を連れて這入つて來た。助手は囚徒に近寄つて、まだ柔くはあつたが、すつかり蒼ざめて冷たくなつた、斑點だらけの手を執つて脈を見た。やがて離すと、その手は既に死體になつてしまつた腹の上に力なく落ちた。

「呼吸が絶えました。」

助手はかう言つて、規定通りにするため、囚徒の濡れたシャツを廣げて、高く盛り上つた黄色い動かぬ胸に、自分の耳を押し當てた。あたりのものは黙つて見てゐた。助手は體を起して首を傾げ、開いたまゝ、ちつとしてゐる腫に指を觸つて見た。

警察病室に收容されてゐる狂人が下着と靴下一つでのこゝ這入つて來て、「恐かあねえぞ、恐かあねえぞ。」と助手の方に唾を吐きかけながら嘔鳴り立てた。

「どうです？」警部は訊いた。

「え、死體室へ運ばなきやなりません。」

「本當ですか。」

「手おくれでした。」助手は死體の胸をシャツで隠しながら、「けれども念のため、マトウェイを呼んで見させることにしませう。」と言つて死體を離れた。

「死體室に運んで行け。」と、警部は命じた。

「それから君は、」と、すつと囚徒に附き添つてゐた護送兵に向つて、「事務所に行つて報告書に署名してくれたまへ。」

「承知しました。」

巡査は死體を階下に運んだ。ネフリユードフもついて下りようとしたが、例の狂人に引き止められた。

「君は悪黨の仲間ぢやねえだらう。ぢや煙草を一本寄せ。」

ネフリユードフは一本出してやつた。すると狂人は眉毛をびく／＼震はせて恐しく早口に、皆が催眠術で自分をどんなに苦しめてゐるかといふことを、べら／＼としやべり出した。

「失禮。」ネフリユードフはそれに耳を留めないで、どこに死體を持つて行つたかを知らうと思つて中庭に出た。

巡査たちは中庭を過ぎて穴倉の入口にかゝつてゐた。そこへ行かうとすると、警部が呼び止めた。

「何か御用ですか。」

「いゝえ。」

「いゝえ、では行つて下さい。」

ネフリユードフは引き下つて馬車のところへ行つた。馭者は居眠りをしてゐたので、それを起して停車場へ急がせた。

百歩ばかりも行かないうちに、銃を擔いだ護送兵に守られた荷馬車に出會つたが、その上にも既に死んでしまつたらしい囚徒が横たはつてゐた。ネフリユードフは馭者の肩をそつと叩いた。

「こゝでもやつてゐますね。」馭者は馬を止めて應じた。

ネフリユードフは馬車を下り、荷馬車について、また警察署の中庭に這入りこんだ。

警部は荷馬車に近づいて、いま／＼しきうに首を振つた。

「どこで拾つて来た？」

「ゴルバトーフスカヤ街です。」と一緒に来た巡査が答へた。

「囚徒か。」横にゐた消防部長が訊くと、「さうだ。今日は二人目だよ。」と警部が言つた。

死體は前と同じやうにして二階の病室へ運ばれた。ネフリユードフは催眠術でもかけられたやうに後に従つた。

「何か御用ですか。」

巡査に咎められたが返事をしないで病室に侵入した。

狂人は寢臺の端に坐つて、ネフリユードフに貫つた煙草を食るやうに吹かしてゐたが、

「おや、歸つて来たな。」と言つて、げらく笑つた。しかし、死體を見ると、急にいやな顔をして、
「またか、もう澤山だよ。俺は子供ぢやねえぞ、おい、さうだらう？」

ネフリユードフは、さつきは帽子に蔽はれてゐた死顔を漸く見ることが出来た。この囚徒は顔も體も美しく、年も働き盛りだつた。

この男に高尚な精神生活をする可能性が失はれてゐることは誰にも想像されたが、體だけは、その手や鎖にながれた足などの骨組にしても、均齊のとれた逞ましい筋肉にしても、いかにも立派なものであつた。美しい強い敏捷な男だつたことを一目で領くことが出来た。

而もこの男はかうして殺されてしまつて、むろん、誰からも人間としては惜しまれなかつた。いや、よく發達した立派な動物としても惜しまれなかつた。その死によつて人々の起す氣持といへば、たゞ死體が腐敗しないうちに、どこかに早く片づけなければならぬ、厄介なことだといふ不平感のみだつた。

醫者と助手と、後から署長とが這入つて来た。醫者は前に助手がやつた通り脈を見たり胸に耳を當てたりしたが、立ち上つてズボンの皺を伸ばした。

「完全に死んでゐます。」

背の低い緒ら顔の圓々と肥つた署長は、いつもやる癖で空氣を一杯腹に吸ひこんで吐き出しながら、護送兵に向つて訊いた。

「どこの監獄だね？」

護送兵は説明してから足についてゐる鎖を指した。

「これは外してやらう。幸、鍛冶屋があるから。」

署長は頬をふくらまし、しづかに呼吸を吐き出しながら戸口の方へ行つた。

「どうしてこんなことになつたんでせう？」ネフリユードフは醫者に訊いた。

醫者は眼鏡越しに彼を見て、「どうしてこんなこと、おつしやると、——どうして日射病になつて死ぬるかとおつしやるんですか。それは、冬中、運動もせず日の目も見ないで監獄にとちこめられてゐたものが、急に、引つ張り出されて太陽に直射されるからです。殊にこんな暑い日に、大勢がかたまつて歩いては、空氣も何も通しませんからね、日射病が起るのは當然ですよ。」

「ぢや何故こんな日に護送するんでせう？」

「それは護送する人に訊いて下さい。だが、あなたは一體どなたですか？」

「私はたゞ通りが、りのものです。」

「あ、さうですか。では失禮、暇がありませんから。」

醫者はまたズボンの皺を伸ばしながら、病人の寢臺の方に行つた。

「どうだい、具合は？」醫者は頭に纏帯した口の曲つた青白い男に聲をかけた。

ネフリユードフは外に出て、再び停車場へ向つた。

停車場に着いて見ると、護送隊はもう窓に格子のはまつた汽車に乗りこんでゐた。見送りに來てゐるものもかなりあつたが、みんなプラットフォームに立つてゐるきりで、汽車に近づくことを許されなかつた。

この日、護送兵は實に忙しかつた。停車場まで來る間に、日射病で死んだものが、ネフリユードフの見た以外に三人あつた。そのうち、一人は近くの警察に收容され、二人は停車場まで來て倒れてしまつた。(これは事實としても、一八八〇年代、モスクワにあつたことで、ブツイルスキイ獄からニゼゴロドスカヤ驛に護送の途中、一日に五人の囚徒が日射病のために斃れた)護送兵たちは自分たちの手當如何によつては、この五人の囚徒が生命を取りとめたかも知れないといふことに就いては少しの心配もしてゐなかつた。いや、心配どころか、こんな場合でも、法の規定した通りにしなければならぬといふこと以外に何も考へてゐなかつた。死體を指定の場所に移したり、その書類や所持品をその筋へ届けたり、護送兵に持つて行かなければならぬ名簿からその名前を除いたり——そんなことはすべて、殊にこの暑い日には、たまらなく苦しいことだつた。

護送兵たちがこんなことに忙殺されてゐたため、それが終るまでは、面會を願ひ出でゐるネフリユードフ以下のものが、列車に近寄るのを許されなかつたのである。しかし、ネフリユードフは下士に心づけをしたので直ぐに許された。が、下士は、上官の眼に觸れぬやう、さつさと話を済まして來るやうにと注意した。

車輛は全部で十八、指揮官用の一輛以外は囚徒の詰めたつた。その窓下を通りながらネフリユードフは彼等が何を話してゐるか、それに耳を登ました。どの車輛でも鎖の音や、がやくやかましい意味のない話し聲は聞えて來たが、途中で日射病のために死んだものゝことは誰も話してゐる容子がなかつた。話題は大抵背負つてゐる袋のこと、飲料水のこと、座席のことなどだつた。

ネフリユードフは車輛の一つを覗いて見た。そこでは二人の護送兵が多勢の囚徒たちの手錠を外してゐるところだつた。囚徒が兩手を高く差上げると一人が鍵でガチャリと外し一人がその外した手錠を集めてまはつてゐた。

男囚の車輛を全部過ぎて、女囚のところへかゝつた。その二輛目からは、「お、お、神様、神様！」といふ女の悲鳴が聞えて來た。

ネフリユードフはそこも過ぎて下士の教へてくれた第三輛目の窓下に寄つた。顔を近づけると、汗臭い、熱のこもつた空氣が鼻を衝いて、甲高い女の話し聲が、はつきり聞えて來た。

どの座席にも、獄衣に白いジャケツを着て赤く汗ばんだ、おしやべりの女囚が一杯だつた。窓下にあらはれたネフリユードフの顔はたちまち彼女等の視線を惹いた。近くのもののは話をやめて立ち上つた。マースロワは白いジャケツのまゝ、頭巾も取つて、向う側の窓に掛けてゐた。にくくしたフ。

ードシヤがその少し前に坐つてゐて、ネフリユードフの姿を見ると、肘でちよつとマースロワをついて窓の方を指した。

マースロワは急いで立ち上り、眞黒な髪を頭巾で蔽ひながら、赤く火照つた顔に微笑を見せて窓際に寄つて来た。

「あゝ、お暑いですわね。」彼女は格子につかまつて言った。

「品物は受取つた？」

「えゝ、ありがたう。」

「他に欲しいものはないかね？」

その窓からはかまどから来るやうな蒸し／＼する空気が絶えず流れ出してゐた。

「別に欲しいものもないわ、ありがたう。」

「何か飲みものが頂けるといゝね。」と、フォードシヤが口を出した。

「さうだつた。飲みものが頂けるといゝけれど。」と、マースロワも思ひ出したらしく言つた。

「だつて飲みものはくれるんだらう。」

「少しはくれますけれど直ぐなくなつちまふわ。」

「ぢや直ぐに頼んであげよう。ニージュニイに着くまではもう會へないね。」

「あら、あなたもいらつしやるの？」

マースロワは、全然豫期しなかつたらしく言つた。そして、嬉しさうにネフリユードフの顔を見つめた。

「つぎの汽車で行くよ。」

マースロワは何も言はないで、たゞ深い溜息を洩らした。

「旦那、十二人死んだちうが本當だかね？」と男のやうな聲で年寄りの女囚が訊いた。つまり、これはコラブリヨワだつた。

「十二人とは聞かないよ。僕の見たのは二人だつた。」

「十二人殺してしまつたと言ふだよ。そねえなことをして罰を食ふこともねえのかね、畜生めが！」

「女の方ではどうだつた？ 別に倒れたものもあなかつたかね？」

「みんな元氣でござえましたよ、旦那。」小柄の女が言つて笑ひながら、「たつた一人子供を生みかけてうんうん唸つてる女があやすだ。ほれ、そこに……」と言つて、さつきから變な聲の聞えて来る隣りの車輛を指した。

マースロワはその時、いかにも嬉しさうに、口許に溢れる微笑を抑へながら、

「さつき何か欲しいものはないかつておつしやつたわね。ではあの女を、あんなに苦しんでるんですから、後廻しにして貰ふことは出来ないものでせうか。話して頂いて若し……」

「あゝ話して見よう。」

「それから、も一つ——このフォードシヤを、御主人のタラスさんに會はして上げるわけに参りませんか。タラスさんも、御一緒にいらつしやるんでせう？」
「もしく、話してはいけません。」と、護送兵が聲をかけた。さつき許可を與へた男ではなかつた。ネフリユードフは、そこを離れて、お産をしかつてゐる女のことや、タラスのことなどを頼んで見ようと思つて士官を探しました。しかし探しあてることも出来なかつたし、又護送兵たちから満足な返答も得られなかつた。彼等はそれ／＼に忙しくて、或者は囚徒をあちこち引つ張りまはしたり、或者は食料品の準備をしたり、或者は荷物を車輛に運びこんだり、或者は士官連について婦人たちの世話をしたり、などしてゐたため、誰もネフリユードフの言ふことに氣持のいい返事をするものはないなかつた。

第二回目のベル（註。ロシアでは發車前十五乃至二十分第一回のベルが鳴り、十分前に第二回のベルが鳴る。むろん途中の驛では、そんな長い間隔はない）が鳴つた時、ネフリユードフは漸く護送士官を探し當てた。士官は短い手を伸ばして口髭を撫でまはしながら、肩を怒らせて何か下士を叱りつけてゐるところだつた。

「何の御用ですか。」彼はネフリユードフに向き直つて言つた。

「女囚の中にお産をしかつてゐる女がありますが、あれを後廻しに……」
「なるほど、さうですね。後で何とかしませう。」

かう言ひ棄て、士官は手を振り／＼自分の車輛の方に駆けて行つた。

その時、呼子の笛を持つた車掌が通つた。プラットフォームに見送る人々の中と女囚の車輛の中とから啜り泣く聲と祈禱の聲とが聞えて來た。

ネフリユードフはタラスと竝んで、列車の動き出すのを眺めた。マースロワは窓際に立つてゐたが彼を見て悲しい微笑を洩らした。

三九

ネフリユードフの乗る列車が出るまでにはまだ二時間あつた。その間にも一度姉を訪問するつもりだつたが、朝から種々の事件にぶつかつて興奮もしてゐたし疲れてもゐたので少し休むことにした。ところが、一等休憩室の長椅子に腰を下すと直ぐに眠氣を催して、思はず横になり手枕をしたまゝ寢こんでしまつた。

手にナブキンを持つた給仕がネフリユードフを起しに來た。

「もし／＼、ネフリユードフ公爵ではございませんか。御婦人の方が探していらつしやいます。」

ネフリユードフは飛び起きた。眼をこすりながら、今どこにあるのか、朝からどんなことがあつたかを思ひ出した。

囚徒の行列、日射病で倒れた死體、窓に格子のはまつた護送列車、その中の女囚、出産に苦しんで

あつた女、窓から悲しきうな微笑を見せた。マースロワ、彼はそんなものを思ひ浮べたが、今、眼の前の光景はすつかり一變して、酒瓶、花瓶、燭臺、ナイフ、フォークなどの載つたテーブルがあり、そのまはりを幾人かの給仕がぐるぐるまはつてゐた。部屋の前には戸棚、その前に果物籠や酒瓶などを置く臺、それから賣子、そこに立つてゐる大勢の客の背中などが、つきづくに眼に映じた。

氣がついて見ると室内にゐるものは皆、入口の方を珍らしきうに眺めてゐた。なるほど、そこには、薄い網のやうなものを頭から冠つた貴婦人を腕椅子に載せて運んで行く一行があつた。椅子の前を持つた下僕にも、後を持つた金筋入りの帽子を冠つた門番にも、ネフリユードフは見覚えがあつた。椅子のつぎにエプロンをかけた綺麗な小間使が、包みや傘や圓い革箱などを持つてつき、それから、旅行帽を冠つたコルチャーギン公爵、令嬢のミッシイ、その従兄のミーシャ、外交官のオーステン、最後に醫者といふ順序でやつて来た。この一家は都會に近い所領から公爵夫人の妹の所領の方へ引越して行くところだつた。

椅子を運んでゐる連中と小間使と醫師とは見物に好奇心と敬意とを感じさせながら婦人待合室に入つた。が、老公は残つてテーブルに就き、給仕に料理を命じた。ミッシイとオーステンもさうするつもりらしかつたが、丁度その時、知り合ひの婦人が入口にあらはれたので、その方へ挨拶に行つた。婦人といふのはつまり、ネフリユードフの姉のナターリヤだつた。

ナターリヤは、アグラフェーナ・ベトロウナを連れて這入つて来たが、偶然にミッシイにも合

ひ、弟をも探し當てることが出来た。そこで、弟にはたゞ頷いて見せたきりで、まづミッシイに近づいた。が、接吻を済ますと直ぐに弟の方へ来た。

「やつと探し當てたよ。」彼女は言つた。ネフリユードフは立ち上つて、ミッシイ、ミーシャ、オーステンに會釈し、一言三言話した。ミッシイは、今までの別荘が焼けたから仕方なく叔母のところへ行くのだと言つた。オーステンはその火事に就いて何か話し出した。

ネフリユードフはそれを聞き流して姉の方を向いて言つた。

「よく来て下さいましたね。」

「さつきから来てたんだよ。アグラフェーナも一緒。」

アグラフェーナは話の邪魔にならないやうに、少し離れて立ち、やさしい品位と、いくらかの狼狽とを見せながら挨拶した。

「方々お探ししましたわ。」

「こゝで眠つちやつたもんだから。よく来てくれましたね。」ネフリユードフは同じことをくり返して、「姉さんには手拭を書きかけたんですよ。」

「本當？ 何を書いたの？」

ミッシイたちは姉弟の間に内密な話をはじめつたのに氣づいて場を外した。ネフリユードフたちは窓際の天鵞絨の長椅子に並んで腰かけた。

「昨日は一旦歸つてから、また出懸けて行つてお詫びしようと思つたんです。が、ラゴージェンスキイがそれをどう思ふかと考へたもんですから。」とネフリュードフは言ひ出した。「少し無様に言ひ過ぎたので氣になつて困りましたよ。」

「私にはわかつてゐたよ。お前もそんなつもりぢやなかつたんだらう。ねえ。」ナターリヤはかう言つて手を弟の手の上に置き、眼に涙を浮べた。

言葉は曖昧だったが、ネフリュードフはその意味をはつきり理解した。そして、心を打たれた。姉の言葉には、彼女を支配してゐる夫に對する愛の他に、弟に對する愛を非常に重大視してゐること、したがつて、夫と弟との間の誤解は、彼女にとつて、大きな苦痛である。といふ意味を含んでゐた。

「ありがたう。」ネフリュードフはかう言つてから話題を變へた。「今日、僕は大きなものを見て來ましたよ。二人の囚徒が殺されましてね。」

「殺されたつて？ どうして？」

「え、殺されたんです。この炎天に引つ張りまはされたので、日射病になつて倒れてしまひました。」

「まあ！ 今日？ さつき？」

「え、さうです。僕はその死體を見ました。」

「何故殺したの？ 誰が殺したの？」

「無理に引つ張りまはした連中が殺したんです。」

ネフリュードフは、姉がこの問題を、夫と同じ眼で見ているのを感じて、少しぢり／＼しながら言つた。

「可哀さうに！」と言つて、アグラフェーナが寄つて來た。

「さうです、僕たちは彼等不幸な人間が、どんな取扱ひを受けてゐるか、全然考へて見たこともないので、が、知つて置く必要がありますよ。」

ネフリュードフはかう言つて、コルチャーギン公爵の方を見たが、恰度、ナブキンを胸に垂らし、酒瓶を前に置いて坐つてゐる公爵の視線とぶつかった。

「ネフリュードフ君、こつちへ來て氣つけに一杯やらないか。長旅の前にはこれが一番だよ。」

ネフリュードフはそれを辭退して眼を逸らした。

「これからどうするつもり？」ナターリヤは訊いた。

「僕の出来ることは全部やるつもりです。はつきり見當はつかないが、やらなきやならぬことがあることを感じてゐます。」

「その氣持はよくわかるよ。ところで、あの方はどうなつてるの？」

彼女は微笑を含んでコルチャーギンの方を眼で指した。

「すつかり關係はありません。お互ひに未練はないと思ひます。」

「私は残念だと思ふよ。ミッシイといふ方も好きだけれど……そんなわけなら仕方がないねえ、お前も束縛されたくはないだらうから……」彼女は控へ目に言った。「が、何故シベリヤなんかへ行くんだらう？」

「行かなきゃならんから行く、たゞそれだけです。」ネフリュードフはこの話をうち切りたいといふ風に、きつぱりと言つた。

しかし直ぐに自分の冷淡さを恥ぢて、「何故考へてゐることをすつかり話さないのだ？ 話してアグラフェーナにも聞かしてやつたらいいぢやないか。」と思つた。そこで改めてシベリヤ行きの決心を話した。

「姉さんはカチユウシヤと結婚しようといふ僕の意志を氣にしてるんでせう？ むろんそのつもりだつたのですが、女の方で拒絶してしまひました。」こゝを話す時はいつもさうであるが、聲が震へを帯びて来た。「カチユウシヤは僕の犠牲の申込みを受けたくないといふのです。いや、彼女自身がその境遇としては過ぎる程の犠牲を拂はうとしてゐるのです。たとひそれが一時的の氣持であらうとも、僕としては、その犠牲を受けることは出来ません。だから、彼女と一緒に、行くところへはどこへでも、ついて行くつもりです。そして出来るだけ彼女の苦痛を軽くしてやりたいのです。」

ナターリヤは何も言はなかつた。アグラフェーナは何か聞きたげな視線をナターリヤに送つて首を振つた。

婦人待合室から家僕のフィリップと門番とが公爵夫人を運んで来た。夫人はネフリュードフを招いて哀れつぽい調子で言つた。

「きびしい暑さですね。これではたまりません。殺されてしまひさうです。」

それからロシヤの氣候の恐しいことを少し話して、今度は非遊びに来てくれと言つた。

彼等の一行は右の方の一等車の方へ曲つた。ネフリュードフは手荷物を持つた赤帽と、袋を背負つたタラスと一緒に左の方へ行つた。

「これは僕の連れです。」ネフリュードフはタラスを姉に紹介した。

「三等ぢやないんだらう？」姉は訊いた。

「三等です。この方がいゝのです。タラスと一緒にですからね。」彼は言つた。「それから、クヂミンスコエ村の方の土地は百姓にやつてはありませぬから、若し僕が死んだら、姉さんの子供に相續させてやつて下さい。」

「そんな話は止ませうよ。」

「土地をやつてしまつたとしても、他の財産がそつくり子供たちのものになります、多分僕は結婚しないのでせうし、したところで子供はないのでせうから。」

「そんな話はしないで言つたら。」とナターリヤは言つたが、事實は、この話を喜んで聞いたらしかつた。

一等車の前には人だかりがして、公爵夫人が運びこまれたのを眺めてゐた。車掌が扉を一つ閉めながら遅れた客を急ぎ立てた。

ネフリュードフは一旦暑苦しい車内に這入つたが、直ぐに後の昇降口に出て来た。ナターリヤはアグラフエーナと並んで、何か言ふことはないかと考へてゐた。「手紙をおくれ」といふ別れる時のきまり文句は、平生から弟と笑ひ話の種にしてゐたので言ふ氣になれなかつた。それに、財産の相續だのといふ話が一時的に姉弟愛の氣持をぶちこはしたので、二人とも他人同志のやうな氣がしてゐた。それで汽車が動き出すと、ナターリヤはほつと安心した。悲しさうな、しかし優しい視線を投げて、彼女はたゞ、「さやうなら、さやうなら。」とだけ言つた。それだけしか言へなかつた。

しかし發車してしまふと、弟と交した話をどんな風に夫に傳へていゝかと考へて、やゝ心配さうな、生真面目な顔つきになつた。

ネフリュードフも、彼女に對しては懐かしい氣持を感じ、別に何も隠し立てすることもなかつたのであるが、一緒にゐると、重苦しく、落ちつかないので、早く別れたかつた。嘗て自分とあんなにまで親しくしてゐたナターリヤは既に存在しない。そこには、奇怪な、不愉快な、毛むくじやらの男の奴隷があるばかりだつた。彼女の夫が特に興味をもつてゐる問題——つまり、土地の處分と財産相續のことを自分が話し出した時に、姉の顔は確かに明るく輝いた、それを見て彼は、はつきりと現在の姉の正體を見たと思つた。そして悲しくなつた。

四〇

焼けつくやうな夏の太陽に一日中照らされてゐる三等車内の暑さは、ネフリュードフにはまつたく堪へられなかつた。で、彼は車内に這入らないで昇降口に立つてゐた。しかし、そこにも爽やかな空氣はなかつたので、列車が建物の間を通過して風が吹きこむ時だけ大きく呼吸することにした。

「さうだ、殺されたのだ。」姉に言つた言葉を自分に向つてくり返した。と、彼の想像裡には、今日のさまじい印象の中から、二番目に見た囚徒の死體の、肩に微笑を浮べた立派な顔が特に鮮やかに思ひ出された。

「殺されてゐながら誰が殺したかを誰も知らないといふのは實に恐いことである。彼は他の囚徒同様、マースレンニコフの命令に依つて引き出されたんだ。マースレンニコフは恐らく印刷した命令書に署名したきりで、自分に罪があるなどは考へないに違ひない。囚徒の健康診断をした慎重な醫師は尙更さう考へないにきまつてゐる。彼は職務を正しく遂行して虚弱者を選び分けただけのことだ。こんな暑さになるとも、あんな時刻に、あんな大勢を護送することも、前から知つてゐる筈がない。では典獄の罪か？ いや、典獄にしても、たゞ、何月何日、囚徒幾名を護送せよといふ命令書を受けとつて、その通りしたに過ぎない。護送士官にしても何處で幾名を受取り何處で幾名を渡すといふのが職務で、あんなに屈強な人間が幾人も途中で倒れて死ぬなどは夢にも思はなかつたに違ひない。

かう考へて來ると誰にも責任はないことになる。而も、その責任のない人々に依つて幾名かのものが殺されたのである。

「かういふことが生じるのは、彼等、即ち知事とか典獄とか警部とか巡査とか、ある境遇のものに對しては、人間らしい待遇をしなくてもいゝと考へてゐるからである。普通の者ならば、こんな炎天にこんな大勢を護送するのはどうであらうかと幾度も考へたに違ひない。また途中でも二十回くらいは休息させ、弱つて苦しがつてゐるものを見れば日蔭に連れて水でも飲ませたに違ひない。そして萬一の時には悲しみの色をあらはしたに違ひない。然るに彼等はそんなことをしなかつたばかりか、他のものがさうしようとするこゝろへ妨げた。何故ならば、彼等は、囚徒を人間として待遇する必要はない、たゞ自分たちの職務を果しさえすればいゝと考へてゐるからである。同胞に對する人間愛が何物よりも重大であることを認めよ、さうすれば、かうした犯罪は世の中になくなるであらう……」

ネフリユードフは考へこんでゐたので、空模様の變つたのに氣がつかなくつた。ふと見ると、太陽は低く垂れたちぎれ雲に蔽はれ、西の方から薄鼠色のもく／＼した雲があわたしく押し寄せて來た。時、雲間に電光が閃き、雷鳴が列車の響きと入り交つて聞えた。雲は次第に近づき、風に送られた雨粒がぼら／＼と昇降口やネフリユードフの上着にかゝつた。ネフリユードフは反對側に行つて、長らく雨に飢ゑてゐた草木の匂ひに充たされた爽やかな空気を胸一杯吸ひこんだ。そして、沿線の庭や、

森や、黄ばんだライ麥の畑や、白い花をつけた馬鈴薯の畑などを眺めやつた。地上にあるあらゆるものが光澤を帯びて、綠はますます／＼綠に、黄はますます／＼黄に、黒はますます／＼黒くなつた。

「もつと降れ、もつと降れ。」

ネフリユードフはこの驟雨に魅つた田園の光景を嬉しうに眺めてゐたが、長くはつゝかなかつた。雲のなかばは雨となつて落ち、なかばは空を走り過ぎ、やがて最後の滴が降つてしまふと、やがて再び太陽があらはれて、あらゆるものがきら／＼輝き出した。東の方に、地平線の遙か上に、端のやゝぼやけた、董色が一際目立つ美しい虹が浮び出た。

「お、さうだ、あの連中のことを考へてゐたのだ。典獄だの護送士官だのといふやうな職に就いてゐるものは大抵個人としてはいゝ人間であるが、たゞその職に就いてゐるために慘酷になるのだ……」彼は監獄内の様子を話してやつた時のマースレンニコフの冷淡さや、體の弱い囚徒が馬車に乗せてくれと頼んだ時に頭から刎ねついたり女が出産で苦しんでゐるのに眼もくれなかつたりした護送士官の無情などを思ひ出した。彼等はたゞその職務に就いてゐるために單なる同情心さへ頭に湧かないのである。

「むろん知事、典獄、警官、かういふものは必要であらう。けれども人間の屬性たる、同胞に對する愛と憐れみとを失ふことは恐いことである。何故、愛と憐れみとを失ふか？ それは彼等が戒律でないものを戒律と認めるからである。神が人間の心に刻んだ永久不變の戒律を認めないからである。

自分が彼等と面接して憂鬱になるのはそのためである。自分にとつてまったく彼等は恐ろしい。強盗よりも恐ろしい。いくら強盗でも人を憐れむ心は持つてゐる。しかるに彼等は持つてゐない。彼等は成長しようとする植物を抑へてゐる石のやうなもので、他のものには決して同情しようとはしないのである。」と彼は考へた。

四一

ネフリユードフの車室には客が約半分くらゐで、大抵は、下男・労働者、職工、屠殺者、番頭、ユダヤ人、兵卒といった連中だったが、他に二人の奥様然とした女（二人は若かつた）と、黒い帽子の、いかめしい顔つきの紳士とがゐた。

座席争ひも終つて皆おとなしく、何かほりくく嚙つて食べてゐるもの、煙草をふかしてゐるもの、おしやべりを始めてゐるものなどさまざま、だつた。

タラスは非常に幸福さうで、通路の右側にネフリユードフの席をも取り、向う側の肥つた男と話しかんでゐた。その男は（ネフリユードフは後で知つたが）新しい仕事先に出かける植木屋だつた。タラスのところへ行かうとして、ネフリユードフは通路の途中で立ちどまると、そこには白い髪を生やした上品な老人が百姓風の女と話してゐた。その女の隣りでは、新しい百姓服の七つくらゐの女の子が、絶えず向日葵の種子を嚙んでゐた。老人はネフリユードフを見ると、外套の裾を片寄せて、親し

さうに聲をかけた。

「どうぞ、お掛けなさい。」

ネフリユードフは會釋してそこに掛けた。百姓風の女はときれた話をまたつづけた。

この女は村へ歸る途中で、都に出稼ぎしてゐる亭主が今度訪ねて行つたらどんなにして迎へてくれたかをしきりに話した。

「謝肉祭の時にも會ひに行きましたが、今度も神様のお蔭で會へました。クリスマスの際にもまた行かうと思つてゐますよ。」

「それや結構なことだ。」老人はネフリユードフの方を見て相槌を打つた。行つて會ふのが一番だよ。でねえと若い男は都住居をして、よくねえところに足を入れるでな。」

「なあに、そんな男ぢやありませんよ。堅いもんでさあ、まるで生娘みたいな暮しをして、稼いだお金はそのまゝ、そつくり家へ送つて寄越しますよ。この娘の顔を見るのを何よりの楽しみにしてゐるんです。」と女は言つて、につこりした。

女の子は向日葵の種子を嚙んでは皮を吐きだしながら母親の話に耳を傾けて、いかにもさうだといふ風に、賢さうな眼をネフリユードフと老人とに向けた。

「なるほど、そんな利口もんなら尙更結構だ。ぢや、あれはやらねえだらうな？」
「あれ、」といふのは酒の意味らしく、老人は向うにある職工らしい夫婦ものゝ方を眼で指して言つ

た。その亭主は仰向きになつて、ウツカを喇叭飲みにしてゐるし、女房はその瓶の這入つてゐた袋を手にして、亭主をぢつと見てゐた。

「いゝえ、うちの人は酒も煙草もやらねえです。」女はまた亭主自慢のきつかけが出来たので嬉しうに、「ほんとに、うちの人みてえなのはさうざらにはあませんよ。まあ、この旦那のやうな男つぶりです。」と、ネフリユードフを指して言つた。

「それや結構だね。」老人は職工の方に顔を向けたまゝで應じた。その女房は亭主からウツカの瓶を受け取ると、それを自分の口に持つて行つた。亭主は皆の視線が自分たちに注がれてゐるのに氣がつくと、ネフリユードフに聲をかけた。

「何だつて言ふんでさあ。がぶくやつてるツて言ふんですかい？ わつちが働いてるところは誰も見ねえが、一杯やつてると、みんながじろく〜と見やがる。わつちは自分で稼いで自分で飲んで、そして女房を養つてるんですぜ。何も文句はねえでせう。」

「うん、さうだ。」ネフリユードフは挨拶に困つて言つた。

「本當ですよ、旦那。女房はしつかりもんでしてね、わつちを大事にしてくれるし、まったく本望ですよ。なあ、お前、さうぢやねえか。」と女房に聲をかけた。

「今度はお前さんだよ。わしアもう澤山だ。」女房は瓶を亭主に返しながら、「何をつべこべ話してるんだよ？」

「ほらね、いゝ女房でせう。もつとも時には、油の切れた車みてえなキイ〜〜を張り上げることもありますがね、ね、お前、さうだらう。」

女房は笑つて、酔つぱらひらしく手を振りまはして、「おやまたはじまつた。」と言つた。

「まつたくいゝ女房でさあ……旦那、御免なさいよ、すつかりいゝ氣持になつちやつて、もうどうにも仕様がねえ……」職工は、にこ〜してゐる女房の膝を枕にしてごろりと横になつてしまつた。

ネフリユードフはそれからしばらく老人の傍にゐて、その身の上話を聞いてから、初めにタラスが取つて置いてくれた自分の席へ行つた。タラスと向ひ合つた植木屋は手荷物を片づけて、

「さあ旦那、お掛けなせえ。」と言つた。

タラスは平生から酒の氣がないとしやべれないと言つてゐたが、事實その通りで、素面の時は黙りやのくせに、稀に、而も何か特別の場合に、一杯やると、非常に愉快なおしやべりになるのだつた。今日のタラスは丁度さういふ状態だつたので、植木屋の顔を真正面に見つめながら、しきりに、女房のフールドシャのことを話してゐた。女房がシベリヤへ護送されるまでの顛末であるが、ネフリユードフも詳しい事情は知らなかつたので、興味をもつて耳を傾けた。彼が來た時は、フールドシャがタラスを毒殺しようとしたことが家の人たちに見つかつたといふところだつた。

「といふやうなわけではれつちまひましたよ。おふくろは、その毒入りの菓子を持つて『警察へ行つて來る』と言ふし、親爺の方は『まあ待ちな、小娘のしたことだ、自分では何にも知らずにやつたん

だらう。可哀さうぢやねえか。そのうちには正氣になるよ』と言ひましたが、おふくろはどうしても承知しねえ。『うちぢやつて置いて見ろ、今に家中のものが油蟲みたいに殺されるに違えねえ』といふのでね、たうとう警察へ訴へて出ました。直ぐに巡査さんが女房を連れにやつて来る、證人が呼び出されるつてことになりました。』

「で、お前さんは？」と植木屋は口を入れた。

「わしは腹が痛くつてたまらねえので、そこいら中ころげまはつて嘔き散らしましたよ。腹の中がひつくり返るやうで口も利けねえ始末さ。親爺が荷馬車にフォードシャを乗つけて、警察から裁判所へ連れて行くと、フォードシャは、そこで何も彼も白状しましたよ。どうして亜硫酸を手に入れたか、どうして菓子を拵へたかといふやうなことをね。『何だつてそんなことをしたんだ？』と訊かれると『だつて、あの男が憎らしくてたまらねえからです。あんな男と暮すくらゐなら、シベリヤへ送られ方がよつぽい』と、女房のやつ、わしのことを言つたさうですよ。』

かう言つて、タラスは微笑した。

「何も彼も白状しちまつたんで、つまりは監獄へぶちこまれることになつて、親爺ひとりか歸つて来ました。もう刈り入れの時が來てゐるのに、家にあるのは、おふくろきりで、これがまた、體を悪くしてゐるので、いろ／＼相談したあげく、女房の保釋を許してもらへねえだらうかと、親爺が役人のところへ出懸けて頼みました。五人までつき／＼に詰めて頼みました、みんな駄目だといふので、も

う諦めてゐたところ、ひよつとしたことから書記と知り會ひになりましたね、こいつがまたずるい奴で、五ループリ寄越せば出してやらうと言ふのです。たうとう三ループリに値切つて書付を書いてもらひましたが、その金も、女房の着物を質に置いて拵へたやうな始末でさあ。

「わしの體も、その時は癒つてゐたので、さつそく町の監獄へ行つて書付を見せると、ちよつとそこで待つてろ、といふので、わしはベンチに掛けました。もうお午過ぎでしたが、まもなく役人がやつて來て『お前がタラスといふものか』とおつしやる。『さやうでございます』『では連れて行け』といふので、見ると、門が開いてフォードシャが元氣さうに出て來ましたよ。そこで『さあ、一緒に歸らう』と言ふと、『お前さん歩いて來たの？』と訊きます。『いや馬で來た』と答へて一旦宿屋へ引き上げました。馬の用意をして、車に馬秣を積み、その上に覆ひをかけて腰をかけられるやうにしてやると、女房は、そこに乗つて布を頭からすつぱりかぶりしました。

「途中ではあれも何も言はず、わしも黙りこくつてゐたつげが、家の間近に來ると、不意にフォードシャはこんなことを訊くのです。『お母さんはどうしてゐるかしら？ 丈夫かしら？』とね、『あゝ丈夫だよ』と言ふと、『お父さんは？』と、また訊きます。『お父さんも丈夫だよ。』『堪忍してよ、お前さん。わしは馬鹿だつたね。何てことをしたんだらうねえ。』『くよくよしなくつてもいゝよ。わしはもつとつくに堪忍してゐるんだから』と言つてやると、それきり黙りました。家に這入ると、おふくろの足もとに突つぶしてしまつたが、『神様が許して下さいよ』と、おふくろも言ふし、親爺も『濟んで

しまったことは仕方がある。これから氣をつけることだ。もう刈り入れだから一生懸命働いてくれ。ありがてえことは、鎌の刃も當てられねえくらゐ麥の豊年だ。明日はタラスと一緒に野良へ出かけるがいい』と言ふので、あれもやつと安心したやうです。

「その時から、フォードシャはまるで生れ代つたやうに働きました。みんながびつくりしたくらいでさあ。わしが刈ると、あれが束ねるといふ具合にやりましたが、あんまり精出すので、わしの方が根負けして早く仕事を切り上げるやうな始末でさ……」

「ぢや、お前さんにもよくするやうになつたぢやうね。」

「それや言ふまでもねえ。魂が一つになつたやうなもんでね、わしの考へることが、あれにはちやんとわかるんでき。初め怒つたおふくろまでが『うちのフォードシャは、すつかり變つたね、まつたく生れ變つたんだよ』と言ふやうになつたんだからね。いつだつたか、二人きりの時に、わしはあれとこんな話をしました。『どうしてあの時、あんなことをする氣になつたんだい？』『お前さんと暮すのが嫌でくたまらねえで、いつそ死ぬはうがいい』と思つたんだもの』『今はどうだね？』『今はお前さんのことばかり思つてますよ』ところが、刈り入れがやつとおしまひになつた頃、裁判所からの呼出狀が舞ひこみましてね、あれは取調べを受けなきゃならねえことになりました。わし等はそんなことをすつかり忘れちまつてたのに……」

「わしの村にもこんなのがあつたよ……」と、植木屋は自分の話をはじめたが、その時、汽車は急に徐行した。

「停車場に來たな。ちよつと一杯やつて來よう。」

ネフリーユードフも、植木屋の後から、濡れたプラットフォームに降りて見た。

四二

停車場の構内には、三頭立または四頭立ての立派な馬車が數臺とまつてゐるのに、ネフリーユードフは氣がついた。一等車の前に集まつた一群の中に、羽毛飾りのついた贅澤な帽子をかぶり、レインコートを着た、でぶ／＼した婦人と、脊の高い自轉車服の、大きな犬を連れた青年とが一際目立つて見えた。その後、膝かけや傘を持つた下僕と馭者とが立つてゐた。彼等は、全體に共通した金持らしい様子と落ちついた自信とを持つてゐた。

犬をつれた青年はコルチャーギン家の息子、でぶ／＼の婦人は公爵夫人の妹で、一行がその領地へ來ることになつたので出迎へに來てゐたのだつた。

公爵夫人は相變らず椅子のまゝ運び出された。箱馬車がいゝか輦馬車がいゝかなどとフランス語でしやべりながら一行は出入口の方へ歩いて行つた。

ネフリーユードフは挨拶したくなかつたので、その方へは行かないで、彼等が出てしまふまで立つて待つてゐた。

「あゝ、あれは上流社會の人間だよ。」といふ老公爵の傲慢な調子のフランス語が聞えて來たが、やがてでぶくの婦人を最後にして一行は出てしまつた。

その時、袋を背負つた汚い労働者の一群がプラットフォームに駆けこんで來て、一番目の客車に乗りこまうとしたが、たちまち車掌に追つ拂はれてしまつた。すると彼等は互ひの足を踏み合ひながらあわて、隣りの客車に飛びこみ、背負つてゐた袋をおろして、隅つこに置かうとした。ところが、また別の車掌が停車場の入口からこの有様を見て、がみく、呷鳴りつけた。労働者たちは驚いて、そのつぎの車、つまりネフリユードフの車に這入つて來た。そこでも車掌がやかましく言つたが、ネフリユードフは、空席が澤山あるから這入つたつていゝよと教へてやつた。

彼等がぞろぞろと這入つて來て席を取らうとすると、そこにゐた女連れの紳士風の男が、これは無禮だと叱りつけて追ひ出さうとした。干乾びた顔をした二十人ばかりの労働者たちは即座に袋を抱へて隣りへ移らうとした。悪いことでもしたと思つたにちがひない。行けと言はれたら世界の果までも、坐れと言はれたら針の上にも、といふ風に彼等は見えた。

「どこへ行くんだ、こらく。こゝにゐろ。」と別の車掌が呷鳴りつけた。

紳士と並んでゐる腕輪をはめた女は、鼻を鳴らし顔をしかめて、こんな汗臭い連中と同車するのはたまらないと、ぶつ／＼言つたが、労働者たちは災難を遁れたやうにほつ／＼として、めい／＼に重い袋をおろして腰掛の下に押しこんだ。タラスと話すために自分の席を離れてゐた植木屋が歸つて行つた

ので、向う側に二人分、隣りに一人分の空席が出來た。そこで労働者が二人直ぐに腰をおろした。が紳士風のネフリユードフが傍に來たので、狼狽して逃げ出さうとした。ネフリユードフはそれを止めて通路に接した座席の腕木に腰をかけた。

その中の一人は五十年輩の男だつたが、驚いた、やゝおびえたやうな眼をして若い方の男を見た。ネフリユードフが、普通紳士のするやうに、呷鳴りつけたり、追つ拂つたりしないばかりか、自席までを譲つてくれたので、彼等は却つて不氣味に思つたのである。何か悪いことになるのではなからうかと恐れたほどだつた。

しかし、まもなく、ネフリユードフがタラスと氣輕に話してゐるのを見て、別に悪企みがあるのではないといふことがわかつたので、やつと安心して、若い方が袋の上にかけて、ネフリユードフに是非席に就いてくれと言ひ出した。向う側の年寄りの労働者は、最初、この紳士に觸りでもしたらいけないと思つて體を縮め兩足を引つこめてゐたが、次第に慣れて、打ち解けた様子で、自分の身の上話などをはじめ、時にはネフリユードフの膝を軽く叩くほどになつた。

この年寄りには泥炭掘りをしてゐたが、今は止めて故郷へ歸るところだと言つた。二ヶ月半稼いだけれども、給金の前借をしたので、十ルーブリしか自宅へ送ることが出来なかつた。食事時間として二時間の休息があるきりで、日の出から日の暮れるまでぶつ通しに、膝まで泥水の中に浸けて働くのだと言つた。

「馴れねえものにや、それや辛い仕事でさあ。だが段々平氣になつちまひますよ。初めは食物がまづくつて食へなかつたが、みんなが苦情を持ちこんで、よくして貰つたので、稼ぐのも大きに樂になりました……」

この男は今まで二十八年間出稼ぎをして、その給金をすつかり家へ送り、自分では煙草代とかマツチ代とかに年二三ルーブリ費ふだけだと言つた。

「だが疲れてウツカを引つかけることも稀にやありますよ。」と彼は、にゆつと笑つて言つた。そして最後に、

「わしや方々旅をして歩いたが、且那みてえな方に出會つたのは初めてだね、何しろ、頭を引つぱたくどころか、席まで譲つて下すつたんだから豪氣なもんだ。且那方にもピンからきりまであると見えるね。」と、タラスに向つて言つた。

「さうだ、これは自分にとつては全く新しい世界だ。」ネフリユードフはかう思つて、労働者たちの細い筋ばつた手足や、ざら／＼した手織の上着やズボン、やつれてはあるが、いかにも善良さうな、日にやけた顔を見まはした。さうして、自分が、この新しい人々と、労働生活の眞面目な興味、喜悅、苦痛とに圍まれてゐるのを感じた。

コルチャーギン、その他上流と稱する社會に屬する人々の、怠惰な贅澤な生活と、下等な野卑な興味とを想起して、彼は今、未知の美しい世界を發見した探險家の喜びを感じたのである。

第三篇

マースロワの加はつてゐる護送隊は三千マイル近く進んで來た。彼女は初め刑事犯の仲間に入れられてゐたが、ベルム町まで來た時、漸く、彼女を國事犯の方へ入れようといふネフリユードフの願ひが容れられた。その注意をしてくれたのは國事犯に屬するウエーラだつた。

ベルムまでの旅は、精神的にも肉體的にもマースロワには非常に苦しかった。肉體的には、人數が多すぎるので窮屈で汚く、それに蚤や虱があて安眠出來なかつた。精神的には、その蚤や虱同様な男たちが煩はしくてたまらなかつた。その男たちは宿場々々で變つたが、どこでもうるさくたかつて來るので少しも油斷が出來なかつた。女囚と、男囚や看守や護送兵などの間には、由來忌はしい淫蕩な空氣があるので、眞面目な女囚は絶えず警戒してゐなければならなかつた。殊にマースロワは綺麗ではあつたし前身がわかつてゐたので、餘計に挑まれ勝ちだつた。手厳しく劬ねつけられた男たちは大抵立腹して、今度は逆に彼女を憎み出すのがきまりだつたが、幸ひ、フォードシャヤタラスと懇意にしてゐたので、その割には安全だつた。(タラスは、フォードシャヤ男たちに手出しをされかけたことを聞いて、女房保護のために今では護送隊に加はつて旅をしてゐるのだつた。)

國事犯の方に移されてからは萬事が楽だつた。種々の設備から食物までが比較的、上に、取扱ひもあまり亂暴ではなかつた。男たちに惱まされることもなかつたので、マースロワの氣持も安らかに、忘れようと焦つてゐた過去の生活を思ひ出すこともなく、暮すことが出來た。が、それにも増して彼女には大きな變化があつた。それは、こゝで四五人の人々と知己になり、その人々が彼女の人格の上に、いゝ意味の大きい影響を及ぼしたことである。

但し、マースロワが國事犯に入れられるのは宿場に泊る時だけで、途中は、體が丈夫だつたから、刑事犯と一緒に歩かなければならなかつた。トムスクからは、ずつとさうして來たのだが、その歩く仲間の中に、二人の國事犯が交つてゐた。一人はマリヤ・パーウロウナといふ栗色の瞳をした美しい娘、(ネフリユードフがウエーラを監獄に訪問した時、面會所にて彼の注意を惹いた女である)一人は、ヤクーツク州に送られるシモンソンといふ、眼の窪んだ、髪をもちやくにした淺黒い青年だつた。(これもウエーラ訪問の時に目についた男である。)マリヤは刑事犯の身持ちの女に馬車の席を譲つてやつたので、また、シモンソンは國事犯であることを利用して馬車に乗るのは正しくないと考へたので、二人とも徒歩にしたのだつた。

マースロワ、マリヤ、シモンソン、この三人は馬車で送られる他の國事犯に先立つて、毎朝早く出發することにしてゐた。

じめじめした九月の朝、寒い風がさつと吹きつけて、雨になりまた雪になつた。隊の全部がもう宿

場の構内に集合して、二晝夜分の囚徒費を一定の總代に渡さうとする護送兵の周圍に集まつたり、物賣女から何か買つたりしてゐた。

長靴に、短い毛皮の外套、それに頭巾をかぶつたマースロワとマリヤとは北側の壁際に風を避けて腰をおろしてゐる物賣女の方に行つて見た。そこには、あたゝかい肉饅頭、魚、粥、牛肉、卵、牛乳などの食料品が並べてあつた。

やがて、いつもの通り、囚徒の人數調べ、鎖の検査などがはじまつた。ところが、その時、突然、どこからか士官の嘸鳴り散らす聲が聞えたかと思ふと、人を殴り飛ばしたらしい音と赤ん坊の泣聲とが同時にした。一瞬、あたりがしんと靜かになつたが次第にあちこちから、がや／＼と呟きが聞えて來た。マースロワとマリヤとは騒ぎのあつた場所に行つて見た。

二

行つて見ると、そこではこんなことが起つてゐた。立派な口髭の、逞ましい士官が顔をしかめ、下等な罵詈雑言を今殴りつけたばかりの男囚に浴せながら、その痛む右手の掌を左手でこすつてゐるところだつた。前には頭髮を半分剃られた、げつそりと瘦せ細つた男が、たらく／＼血の垂れる顔を片手で拭き、他の片手で悲鳴を擧げる女の子をショールに包んで抱きかゝへてゐる。

「つべこべ理窟を言ふとまたやつ／＼けるぞ。餓鬼は女どもに渡しちまへ。さ、嵌める。」

この男は、トムスクまで来た時に女房がチブスに罹つて死んだので、そこから残された女の子を抱き通して来たが、今、士官から手錠を嵌めると言はれ、それでは子供を抱くことが出来ないと言はれたため、機嫌の悪かつた士官の痾癪を破裂させてしまつたわけである。

彼等の傍には、片手に手錠を嵌められた黒い鬚の男囚が立つて、悲しき限つきで士官と女の子を抱いた男とを見比べてゐた。士官は子供を取り上げると護送兵に命じた。囚徒の間からは、がやがやいふ聲が次第に高くなつた。

「トムスクからこつちは嵌めなかつたんだよ。」といふ嘆れ聲がうしろの方から聞えた、「人間の子なんだよ、犬ころちやねえんだよ。」

「その子をどうしようつてんだ？ そんな法はあるめえ。」と、また誰か言つた。

「誰だ、今のは？」何かに刺されたやうに士官は嗚咽して囚徒の列を押し分けた。「法を教へてやう、どいつだ？ 貴様か？ あん、貴様か？」

「みんなが言つてるよ。だつて……」

づんぐりした男が、かう言ひかけると、皆まで言はせず、士官の両手がその顔に飛んで行つた。

「手向ふ氣だな。よし、手向つて見ろ、眼に物見せてくれるから。犬ころ同様、ズドンと銃殺しちまつてくれるぞ。その方がお上でも助かるんだ。さ、餓鬼を取り上げろ。」

誰も口を利かなくなつた。護送兵の一人が、ひいひい泣き叫んでゐる子を引き離すと、他の一人が、今は諦めておとなしく手を差し出してゐる男に、かちやりと手錠を嵌めた。

「女囚の方へ連れて行け。」士官は帯革を直しながら命じた。

顔を真赤に泣き腫らした赤兒は、シヨールの中から手を出さうとして、もがきつづけ、泣きつづけ

た。マリヤ・ペーウロウナは一步進んで士官の前に立つた。

「この子は私が連れて行つても宜しいでせうか。」

「お前は？」士官は訊いた。

「國事犯のものです。」

マリヤの美しい顔がこの際はたしかに役に立つた。士官はしばらく思案でもしてゐるらしく黙つて彼女を眺めてゐた。

「こちらは構はない、よかつたら連れて行きます。しかし萬一この親爺が逃亡でもしたら誰が責任を持つんだ？」

「子供を抱いて逃亡することなんか出来ないぢやありませんか。」と、マリヤは答へた。

「お前と話してゐる暇はない。よかつたら連れて行け。」

「渡ませうか。」と、護送兵が訊いた。

「よし。」

「さあ、こつちへおいで。」マリヤは子供をあやしなから受け取らうとした。

護送兵に抱かれた子供は父親の方に反りかへつて悲鳴を擧げるばかりで、マリヤの手には來さうもなかつた。

「マリヤさん、ちよつと。私なら來るかも知れないから。」マースロワは聲をかけて袋の中からパンを取り出した。子供は以前からマースロワとは馴染になつてゐたので、顔とパンを見ると直ぐに抱かれてしまつた。

すべてが靜かになつた。門が開かれて愈々出發することになつた。マースロワは赤ん坊を抱いて女囚の中に這入りフードシャの隣りに行つた。さつきからの騒ぎを黙つて見てゐたシモンソンは、馬車に乗らうとする士官の前に、つかくと進み寄つて言つた。

「あなたのやり方はいけませんね。」

「自分のところに引つこんである。お前なんかの出る幕ぢやない。」と、士官は吐りつけた。

「いや、出る幕です。やり方がいけないことを申し上げる必要があるから申し上げたまでです。」

シモンソンは濃い眉毛をびくりとさせて士官の顔をちつと見つめた。

「用意はい、か。出發！」士官は耳を藉さないで號令を掛けて、そのまゝ馬車に乗りこんだ。

三

國事犯の仲間入りをして暮すことは、都會で數年間の墮落生活を送り更に數ヶ月間の監房生活を刑

事犯と共に送つて來たマースロワにとつて、決して樂ではなかつたが、兎に角非常にいゝことだつた。一日十五マイル乃至二十マイルの行程で、食物も悪くなく、それに二日目ごとに一日の休息があるので、體も丈夫になつたが、それよりもよかつたのは、精神的方面で、新しい交友が、嘗ては夢想もしなかつた興味に充ちた世界を見せてくれたことである。現在一緒に暮してゐるやうな不思議な人は、今までに會つたことがないのは無論、想像さへも出來なかつた。で、マースロワは考へた。「あの宣告を受けた時、私は悲しくて泣いた。けれども、本當はそれを神様に感謝しなくてはいけない。それが機縁となつて、こんな、今までの生活をしてゐたのではどうしても知ることの出來ないことを知るやうになつたのだから。」

今のマースロワには、これ等の人々が何に依つて動いてゐるかを容易に理解することが出來た。そして深く共鳴したのである。民衆の味方として貴族階級に反抗して立つた彼等は、彼等自身が貴族階級に屬する人間でありながら、その特權、自由、生活を、民衆のために放棄し犠牲としてゐる。そのことが彼女にはよくわかつた。そして彼等を尊敬した。

彼等新しい知己の中でも、彼女は特にマリヤ・パウロウナが好きだつた。好きと言ふよりも狂熱的に敬愛してゐた。この美しいマリヤが將軍の娘として生れ、三ヶ國語を自由に練つる程の教育を受けてゐるのに、富裕な兄から讓られた財産をすべて見棄て、ごくつまらない女工同様の生活を、なりふりに少しも構はないといふ事實に、まづマースロワは感動した。そして次には他人に媚

びるやうなところが微塵もないのに驚くと同時に惹きつけられた。

マリヤは自分の美しいことを知り、それを喜んでゐたが、美しさが異性の上に影響を及ぼすことを嫌ひ、いや寧ろ恐れて、戀愛感情なるものを一切拒否した。男の方でもそれを知つてゐたので、戀の氣持を感じるものがあつても決して素振りに見せないで、男としての彼女に接した。しかし、そんなことを知らないで、しつこくつけまはす男もあるので、そんな時には止むを得ず得意の腕力を揮つて遁れることにしてゐた。

彼女が革命家になつたのは、子供の時からいはず上流生活を嫌つて、一般大衆の生活を好いたからだつた。女中部屋、臺所、厩などに這入りこんでゐて、座敷にあまりゐなかつたので始終吐られ通しだつた。だから、彼女はよく言ひくした。「コックや馭者と一緒にあるのは面白いものですよ。貴婦人だの紳士だの退屈で仕様がないわ。そのうちに物心がついて來ると、私たち上流生活といふものが本當にいけないと、はつきりわかつて來ました。それに、私にはお母さんはなかつたし、お父さんは厭だつたので、十九の時に家を友だちと一緒に出て、或工場の女工になりました。」

その工場を止めてからはしばらく田舎で暮してゐたが、またモスクワに來て、同志の秘密出版物を印刷する家に下宿してゐて捕縛されたのである。マースロワの聞いたところによると（マリヤは一度も口外したことがなかつた）彼女が懲役を宣告されたのは、家宅搜索を受けた時に、同志の一人が警官をビストルで射撃した、その罪を背負つたといふことだつた。

カチュウシヤはマリヤと知り合ひになると直ぐに、彼女がどんな場合でも自分自身のことを思はず常に他人のために心配してゐることに氣がついた。或男がこれを慈善道樂だと評したが、たしかにさうだつた。つまり、彼女の全生涯の興味は、丁度獵師が獲物を探すやうに、他人のために盡す機會を探すことだつた。そして道樂は一生の習慣となり仕事となつた。而も、そのやり方が極めて自然だつたので、彼女を知るものは次第に感謝することを忘れて當然して貰ふものと思ふやうになつた。

カチュウシヤが仲間入りをした當座、マリヤは彼女に非常な反感を持つた。カチュウシヤにはそれがよくわかつたが、同時に、彼女がその感情を殺して特に自分に優しく親切にしてくれることもわかつた。普通では有り得ないさうした心づくしが、カチュウシヤを感動せしめて、全精神を彼女に捧げ、知らずく彼女の意見を容れ、萬事彼女の眞似をせしめるやうになつた。マリヤのはうでも、カチュウシヤの獸身的愛情に動かされて、當然それに報いるやうになつた。

二人とも異性との戀愛を拒否する氣持は同じだつた。但しカチュウシヤはその恐しさを飽くまで體驗したからであるが、マリヤの方は全然知らないで、これを、何か理解し得ない、同時に嫌惡すべき、人間の品性を汚すものであると考へてゐた。

四

カチュウシヤは、マリヤを愛することに依つて彼女の影響を受けたが、同時に、シモンソンに愛せ

られることに依つてその影響をも受けた。

人間はすべて、半ば自己の思想、半ば他人の思想にしたがつて生き且つ動くものである。その程度の如何が人を區別するには重大である。ある人々は思索することを精神的遊戯の如く、又自己の理性を調子を外した滑車の如く見做して、實際の行爲に於いては、多くの場合、他人の思想、慣習、傳説、法律などの命ずるまゝになつてゐる。またある人々は自己の思想をあらゆる行爲の元動力と考へて、多くの場合、自己の理性の命令に従ひ、他人の意見を容れることは極めて稀である。(而も充分調査研究の上でなければ受け容れない。) シモンソンは、その後者に屬する人間で、一切の事物を彼自身の理性に依つて決定し、その決定に従つて行動した。

中學生時代の彼は、政府の財務官をしてゐた父親が不正な利得をしたのを知つて、それは全部一般に施すべきであると意見した。父親は意見を容れるどころか、反對に叱り飛ばしたので、斷然家出を決行して、以後父親の世話にならなかつた。大學を出てからは村の小學校長となつて、兒童や農民に彼が正しいと信じたことを大膽に鼓吹し、正しくないと信じたことを赤裸々に攻撃した。

そのため彼は捕縛されて裁判を受けた。審理中、彼は裁判官が自分を裁く権利がないと考へたので、その通りを申し立てた。しかし裁判官はそんなことには耳を藉さないで審理を續行したので、彼は答辯しないことにして頑強に押し通した。そこで流刑を宣告された。

流刑地アルハンゲリスク縣にある間に、彼は、その後の彼の活動一切を支配すべき一種の宗教的信念を作り上げた。それに依れば、宇宙間に在るあらゆるものは生命を持つてゐる。死物は一つもない。われ／＼が無生物もしくは無機物と考へるものも、實はわれ／＼の測り得ない或大きな有機物の一部たるに過ぎない。人間も、その大きな有機物の一部であるから、その生命を支持することを以て職務とすべきである。

この見地から、彼は生命を絶つことを罪惡と考へ、戦争、死刑、その他あらゆる殺害に(動物の殺害にも)反對した。

結婚に關しても彼は独自の意見を持つてゐた。生殖行爲は人間の下等な機能に過ぎない、より高等な機能は既に存在する生物に奉仕することにありと考へてゐた。血液中に殺菌細胞のある事實が更にこの信念を強めた。彼の説に依れば社會に於ける獨身者は血液中の殺菌細胞のやうなものであり、従つて、弱者や病者を救ふのがその使命である。若い時には遊蕩をしたこともあるが、この結論に達してから、彼は、必ずその通り實行し、マリヤと共に、人間界の殺菌細胞を以て任じてゐた。

カチュウシヤに對する彼の愛は、決してこの思想と矛盾するものではない。何故ならば、彼の愛はプラトニックであり、而もプラトニック愛は、殺菌細胞としての活動を妨げるところか、かへつて助長するものだからである。

彼はまた精神的方面ばかりでなく實際問題に於いても彼一流に振舞つた。例へば何時時間活動し、何

時間休息し、何を食べ、何を着るといふやうなことで、ちやんとした規定があつた。性質は臆病で謙讓だつたが、一日決心したら何もものにも動かされなかつた。

かういふ男が、愛によつて、カチュウシヤに影響を及ぼした。カチュウシヤは女性の本能によつて忽ち彼の愛を感じると同時に、彼のやうな人物に想はれるといふことが彼女の誇りを高めた。ネフリュードフは一つには高潔な氣持、一つには過去の事情のために結婚を申しこんだのであるが、シモンソンは、現在あるがまゝの彼女を愛し、たゞ愛するが故に愛するといふのである。彼女はシモンソンが自分を稀に見る女、高い道義性を持った女であると考へてゐることが感じられた。どんな性質の女だと思つてゐるかは、まだはつきりしなかつたが、とにかく、男が失望することのないやうに全力を盡して自分の裡にある最高の性質を目覺まし、出来るだけ立派な女にならうと努めた。

これはまだ監獄にゐた時からのことだつた。カチュウシヤは或面會日に、シモンソンの優しさうな、やゝ黒味を帯びた青い瞳が、濃い眉の下から、ぢつと自分に注がれてゐるのに氣がついた。その時既に彼女には、彼が特別な男であること、そして特別に自分を見てゐることがわかつてゐた。

護送されて來る途中、カチュウシヤはトムスクで國事犯の仲間に入れられ、そこで再びシモンソンに會つたが、その時にも、別に言葉は交さなかつた。しかし互ひに、おぼえてゐますよ、あなたは私にとつて大切な人だからといふ意味の視線を交した。その後これといふほどの話をしたのではないが、何だかカチュウシヤには、彼が他人に話してゐるのを聞いても、自分に話しかけられてゐるやうな氣がした。「あの方は私のために話してゐるのだ、あの方を私にはつきりさせようと思つて話してゐるのだ。」と彼女は思つた。

しかし二人が次第に親密の度を加へたのは彼が刑事犯と一緒に歩き出してからである。

五

ネフリュードフはベルムに着くまでに、二度しかカチュウシヤに會はなかつた。二度とも彼女は控へ目で冷淡だつた。何か入用なものはないかと、氣持の具合はどうかと訊いても曖昧な、含羞んだやうな返事ばかりして、或ひは以前に示したやうな彼に對する憎惡を感じてゐるのではないかと思はれた。その沈んだ調子が（實はこれは當時男たちに附けまはされた結果に過ぎないのではあるが）ネフリュードフには苦しかつた。彼は彼女が辛い、而も淫らな空氣の中にあるので、再び自暴自棄になつて酒や煙草をはじめめるやうになりはしまいかと恐れたが、初めは會ふことが出来なかつたので、どうにもならなかつた。

ところが、その後、國事犯の方に移されてから會つて見ると、彼の心配は杞憂に過ぎなかつたこともわかり、更に會ふ度數が重なるにつれて、彼の希望した通りの精神的變化が益々彼女に起りつゝ、あることも明らかに認められた。トムスクで會つた時には再びモスクワ出發前そつくりのカチュウシヤになつて、もう厭な顔をしたり含羞んだりすることもなく、いそぐと彼を迎へて、その骨折りに對

する禮を言つたり、特に國事犯に入れて貰つたことを感謝したりした。

二ヶ月の行程を経て、今日では彼女の内部に生じた變化が外貌を見てもわかるやうになつた。顔が日に焼け體が痩せ、年もふけて見えた。顚顚や口のあたりには皺が寄り、服の着こなしてから應對ぶりに至るまで、どこにも媚を賣つた昔の面影は見られなくなつた。こんな風に變つたこと、また現に變りつゝあることはネフリユードフの喜びだつた。

彼は今までにおぼえない感じを彼女に持つやうになつた。この感情は、彼女に對する最初の夢のやうな詩的戀愛とも違ふし、その後の肉慾的戀愛とも違ふし、といつて最近の義務履行の満足（これには彼の自己讚美の氣分も交つてゐないとは言へないが、とにかく、これに依つて裁判が濟んだら結婚しよう）と決したのである）とも違つてゐた。現在にはたゞ憐憫の氣持だつた。それは、監獄で初めて會つた時にも、後に病院助手との噂を聞いて許した時にも（それは何でもなかつたことを彼も後で知つた）感じた氣持ではあつたが、今のは、さうした一時的のものでなく、永久的のものであつた。つまり何を考へ何をするにつけても憐憫の感情を抱くやうな彼になつてゐたのである。カチュウシヤに對してばかりではない、誰に對してもさうだつた。この感情がネフリユードフの心内に溜つてゐた愛の泉に出口を作つた。そして溢れ出した愛があらゆる人々を潤ほしたのである。

カチュウシヤが國事犯の仲間入りをしたので自然ネフリユードフは彼等の多くを知るやうになつた。その結果、彼等に對する考へが以前とは一變してしまつた。

ロシアに革命運動が起つて以後、いや特に、アレキサンドル二世が虚無黨のために暗殺された三月一日事件以後、ネフリユードフは革命黨員を輕蔑憎惡してゐた。何故といふに、彼等が政府と戰ふに用ひる手段（殊に暗殺の方法）が残酷陰險だつたからである。彼等に共通の特徴は自負心の強い點だつたが、それも彼は嫌ひだつた。しかし親しく彼等と交はるやうになり、いかに彼等が政府の手で苦しめられてゐるかを知つて、初めて彼等がさうなるのも無理はない、他になりやうがない、といふことがわかつた。

いはゆる刑事犯なるものに課せられる罰がいかにも恐ろしいかに無意味なものであるにもせよ、少くとも彼等は宣告の前には裁判らしいものを受けるのであるが、國事犯となればそれすら行はれない場合が多い（シユーストワの場合でもさうである）彼等はちやうど網にかつた魚のやうな扱ひを受けるのである。すなはち網にかつたものは悉く一旦岸に引上げられて、大きな魚だけが選り出され、小さなものはそのまゝ岸にはふり出されて干乾しにされてしまふ。かうして捕へられた全然罪のない、或ひは全然危険性のない數百の人々が數年の間獄に投ぜられ、そこで肺病になつたり精神に異狀を呈したりしてしまふのである。政府はたゞ放免の理由がないからといふので監禁して置くのであるが、實はさうして置けば安全であり、また何か裁判上の參考になることもあるだらうと考へてゐるのである。時には政府の眼から見ても無罪と思はれるこれ等の人々の運命は、たゞ警察、探偵、檢事、判事、知事、大臣などの氣まぐれ、御機嫌の如何に依つて左右されてゐる。彼等役人中の或ものは、

退屈になつたり、手柄をあらはさうと思つたりすると、たちまち家宅搜索をしたり検挙したりして、自分または上官の気分次第で投獄したり放免したりする。その上官にしても同じことで、いゝ加減な情實に依つて、罪がないとわかつてゐるものを、流刑にしたり死刑にしたり、時には放免したり（貴婦人に歎願でもされやうものなら）するのである。

國事犯は言はず、戦時と同じ取扱ひを受けるのであるから彼等の方でも自然、官憲に對して同じ手段方法を執るやうになる。戦時に於ける軍人の行爲が處罰されないばかりか英雄的動功として賞讃されるところと同じく、國事犯の間では、自由または生命の危機に際して執つた殘虐な行爲は決して非難すべきでなく寧ろ拍手すべきであると思はれてゐた。

これに依つてネフリユードフは、蟲けらの苦しきも見てゐられないほど穩順な人々が平然として暗殺の計畫をすゝめるといふ不思議な現象を漸く理解することが出来た。彼等の大多數は、或殺人行爲も或場合には正しい、——高い目的を達するため、または一般民衆の幸福のためにする一種の自衛手段であると考へてゐた。彼等が自己の仕事を重大視し、従つて自己自身をも重大視するのは、政府がそれを重大視して極刑を課することから生じたのである。事實、彼等の受けてゐる苦しきは、餘程自己を高く評價しなければ到底堪へて行けるものではない。

ネフリユードフは彼等が次第にわかつて來てかう思つた。「彼等は一部の人が想像するやうに、極惡無道な人間でもなく、といつて英雄でもない。ごく普通の人間である。だから、どこにもゐる通

り、彼等の中には、善人もあれば惡人もあるし、中間のものもあるのだ。」と。

世の中の罪惡と戦ふのが自分の義務であると正直に考へて革命運動に携つてゐるものも無論あるが、中には、利己的、賣名の動機に依つて身を投じたものも少くない。しかし大部分は危険を冒して見たいといふ氣持から革命運動に惹きつけられたので、既にネフリユードフが軍隊生活に於いて味つたやうに、生命を弄ぶといふ感情は、青年氣鋭に共通したものである。とは言へ、彼等は常人よりも道義心が遙かに高いやうにネフリユードフには見受けられた。節制、辛苦、眞實、清廉などを義務と考へてゐる上に、民衆のためにはすべてを、自己の生命までを犠牲にしなければならぬと考へてゐるやうだつた。だから彼等の中の或者は容易に達することの出来ない程度の道徳的水準に立つてゐたが、中には、眞實のない偽善家、威張りちらす自惚家なども澤山交つてゐて、まつたくの玉石混交だつた。

ネフリユードフは、或者には尊敬を拂つて心からの愛を示したが、同時に或者には全然冷淡な態度を執るやうにした。殊に彼は、カチュウシヤと同じ組にゐるクルイリツォーフといふ肺病の青年が好きだつた。

六

赤兒のことで護送士官が囚徒を叱り飛ばした日、その村の宿屋に泊つてゐたネフリユードフは、朝

寝をした上に、つぎの町で投函しようと思ふ手紙を數通認めたりしたので、いつもより出發が遅れてしまつた。で、これまでのやうに途中で護送隊に追ひつくことが出来なかつたが、でも日暮れ前に、宿場ときまつた村に辿りつくことが出来た。

中年のよく肥つた女將が經營してある宿屋に這入つて茶を飲んでから、カチユウシヤに面會の許可を得ようと思つて士官を訪ねることにした。今までの六つの宿場では、どの士官からもその許可が得られなかつた。彼等は七回も交代したに拘はらず、皆、申し合したやうに宿所に入れてくれなかつたので、もう一週間もカチユウシヤに會はないわけである。こんなに嚴重にするのは監獄を監督する或地位の高い官吏が視察するかも知れないといふ理由に依るのである。ところが、その官吏は視察しないで通過してしまつたといふことがわかつたので、今度の士官は、ずつと以前の士官同様、面會を許可してくれるだらうとネフリユードフは思つた。

宿場は村はづれにあるので、宿の主婦は馬車で行くことをすゝめてくれたが、彼は歩いて行くことにした。大きな長靴の、づんぐりした若い奉公人が案内しようと言ひ出した。

もう日がとつぷりと暮れ、それに深い霧が降りてゐたので、窓から灯が洩れてゐないところでは、三步くらゐ離れても案内者の姿が見えないくらゐだつたが、どろ／＼の泥濘に吸ひつかれるやうな重い長靴の音だけは、はつきりと聞えた。教會の前の廣場と軒竝に明るい灯の輝いてゐる長い通りを過ぎて、漸く村はづれに出た。ネフリユードフは案内者の後について歩いた。霧の中に、宿場の火が見

え、次第に、柵や、歩哨の黒い影や、白黒に塗り分けた柱や、番小屋などが見えて來た。

「誰だ。」と、歩哨は人影の近づくのを見て誰何した。そして見かけない者だとわかると更に嚴しくなつて、柵の傍で待つことも許さないといふ風だつた。が、案内者は、そんなことにはびくともしないで言つた。

「お前さん、なんでそんなにがみ／＼言ふんだね。こゝで待つてるから、軍曹を呼んで來ておくんなさい。」

歩哨はそれには答へないで、門内に向つて何か大聲で嗚鳴つた。案内者はネフリユードフの長靴を木片でごし／＼こすつた。柵の向うからは男女のがや／＼と騒ぐ聲が聞えた。

三分くらゐ経つて、がちやりと音がしたかと思ふと、門が開き、外套を着た下士があらはれて用件を訊いた。下士は歩哨ほど嚴しくはなかつたが、その代り根ほり葉ほり訊きたがつた。ネフリユードフが何で士官に面會を求めたのか、またネフリユードフとは一體何ものであるかを知つて、賄賂にありつかうと思つてゐるらしかつた。そこで彼は特別の用事があつて訪問したこと、お禮もするつもりであることを述べて、この書面を士官に渡してくれないかと頼んだ。下士は差し出した書面を受けとり、黙つて頷いて奥に消えた。

しばらくすると、また門が開いて、籠や箱や桶や袋を持つた一群の女が、べちや／＼しやべりながら出て來た。田舎ものらしい風をしたのは一人もなくて、みんな都會風の毛皮の外套などをつけてゐ

た。そして、珍らしさうに灯の下に立つてゐるネフリユードフと案内者とを、じろく眺めた、中の一人は案内者の馴染と見えて、こゝで會つたのが、ひどく嬉しさうだつた。

「まあお前さん、そんなところで何してるのさ？」と、その女は聲をかけた。

「この方を案内して來たんだよ。お前は何かを持って來たんだい？」と、案内の若ものは言つた。

「牛乳だよ。明日も持つて來るのさ。」

「泊つて行けつて言はなかつたかい？」

「何の、馬鹿をお言ひでねえよ。」女は笑ひながら、「さ、村まで送つてくれねえか、一緒に行かうよ。」

若ものはそれに答へて何か言つたが、それには女たちは無論、歩哨さへも釣りこまれて笑ひ出した。

若ものはネフリユードフの方に向き直つて、

「旦那お一人で道がわかるでせうか。迷ひ子になりやしませんか。」

「大丈夫だよ。」

「ぢやね、教會の前の廣場を通り過ぎて二階家から二軒目ですよ。さうだ、この杖をお持ちなせえ。」

彼は自分の脊よりも高い杖を渡して言つた。そして、長靴の音を泥濘の中に、ばちやく言はせながら女たちと一緒に闇の中に消えた。

彼の聲は女たちの聲に交つて霧の中に聞えた。と、さつきの下士があらはれて、士官が面會するから自分について來るやうにと言つた。

七

柵内には平家が三つあつて、一番大きいのが囚徒用、他に護送兵用と士官用兼事務用のがあつた。

三つの家の窓からはあか／＼と灯が洩れて中には何か楽しいことでもあるやうに見えた。

下士はネフリユードフを一番小さい家の階段に案内した。應接の部屋には兵卒が體を前屈みにして

サモワルのかゝつたストロブの下を煽いでゐたが、ネフリユードフの姿を見ると、外套を取る手傳ひ

をしてから奥の部屋に這入つて行つた。

「參りました。」

「では、こちらへ。」

それは何だか怒つてるやうだつた。兵卒はネフリユードフに「どうぞ奥へ——」と言つて、またサ

モワルの方にかゝつた。

釣りランプに照らされたつぎの部屋には、大きな口髭の、緒ら顔の士官が、晩食の残りや酒瓶二本

との竝んだテーブルの前に掛けてゐた。煙草の臭ひに交つて安香水の臭ひがぶん／＼した。

士官は立ち上つて、皮肉な、探るやうな眼つきをしてネフリユードフを眺めた。

「御用件は？」と、まづ訊いたが、返事を待たずに開けつばなしになつた扉に向つて叫んだ。

「ベルノフ、サモワルはどうした？ 何をぐづ／＼してるんだ。」

「はい、直ぐに持つて参ります。」

「こちらにも直ぐにぶん殴るぞ。しつかりしろ。」

「はい、只今。」兵卒は唳鳴るやうに言つてサモワルを持つて這入つて来た。

ネフリユードフは兵卒がサモワルをテーブルの上に置くのを待つた。士官は、いかにも意地の悪さうな眼で、どこを殴つたら一番こたへるか考へてゐるらしく兵卒の姿を眼で追ひまはしてゐたが、やがて、茶を入れ、旅行カバンの中から四角な瓶とビスケットとを取り出してテーブルに並べた。

「さあ、どんな御用ですか。」

「實はある女囚に面會させていたゞきたいのですが。」ネフリユードフは腰もかけないで言つた。

「國事犯でせう？ 法律で禁じられてゐます。」

「いゝえ、國事犯ぢやないのです。」

「さうですか。まあ、お掛けなさい。」

ネフリユードフは椅子に掛けながら、

「國事犯ではありませんが、實は私がお願ひして國事犯の方に入れていたゞいてゐるのです。」

「なるほど、それなら知つてゐます。小柄の、淺黒い女でせう。えゝ、何とかありますよ。あなたは煙草は？」

煙草入れを出し、茶を二つの茶碗に念入りに注いで、一つをネフリユードフの前にすゝめた。

「どうぞ。」

「ありがたう。それよりも早く面會させていたゞけませんかしら。」

「夜は長いですよ。時間はたつぷりあります。こちらへ呼び出すやうにしませう。」

「向うへ參つちやいけないでせうか。呼び出さなくても宜しいのでせう。」

「國事犯のところへは嚴禁といふことになつてゐますから。」

「でも私は今までに幾度となく許されてゐるのです。若し私が何か危険なものでも渡しはしないだらうかといふ御懸念だつたら御無用に願ひます。そんなことなら、その女の手を通して今までに出来たわけですからね。」

「いや、さうぢやありません。どうせ女の體はあらためるのですから。」と言つて、士官は厭な顔をして笑つた。

「では私をおあらためになつたら宜しいでせう。」

「いや、そんなことをしなくても何とかありますよ。」士官は栓を抜いた酒瓶を、ネフリユードフのコップの方に突き出したが、「いかゞですか。お厭ですか。——人間もこんなシベリヤなんかで暮してると、稀に學問のある方にお目にかゝるのが楽しみになるものです。御承知の通り、われゝの仕事は實に厭なので、他の仕事に慣れたものには尙更辛くてたまらないのです。護送士官などといふものは粗野な無學な人間ばかりのやうに世間では思はれてゐるやうですね。生れた時から他の仕事は

何にも出来ない人間のやうに思はれてゐるのは非常に心外です……」

この士官の緒ら顔や、安香水や、指輪や、殊に不愉快な笑聲などが、ネフリユードフにはとてもたまらなかつた。しかし、今は、旅行中であるから、いかなる人に對しても眞剣な態度を以て接するこゝとしてゐた。だから士官の言葉を聞いても、その氣持がわかつたので、頗る眞面目な調子で、

「でも、あなたのお仕事にしたつて、他人の苦しみを軽くしてやるといふ楽しみがあるぢやありませんか。」と言つた。

「苦しみですつて？ あなたはあの手合がどんな人間だか御存知ないんです。」

「あの連中だつて別誂への人間ぢやないでせう。やはり普通の人間ですよ。中には全然無實の罪を着てゐるものもあります。」

「むろん、いろんな人間がゐますから、中には可哀さうなものもあるでせう。同僚たちはびし／＼やつつけますが、私は出来るだけ樂にしてやらうと努めてゐます。あの手合を苦しめるよりも、こちらが苦しんだ方がいゝのです。同僚の中には下らないことにも一々法律を楯にとつて銃殺でもやり兼ねないのがゐますが、私は可哀さうに思つてゐるのです。……さあ、どうぞ。」と、そこで新しく茶を注ぎ代へて、「あの女は一體何物ですか。つまり、あなたの面會したいとおつしやる女は？」

「遊女屋にまで身を沈めた不幸な女でしてね、毒殺の嫌疑から、まちがつた判決を受けたのです。實際は非常にいゝ人間なのです。」

士官は頷いて、「なるほど、そんなことはありがちですね。カザンにエムマといふ女がゐましたが、ハンガリー生れの癖に、ベルシヤ式の眼をしてゐて……」と言ひかけて、思ひ出すと微笑しないではゐられぬといふ風だつた。「まるで伯爵夫人といつてもいゝくらの風采でしたよ……」

ネフリユードフは士官の話を遮つて、

「あの連中はあなたの手でどうにでもなるんだから今までも随分樂にしておやりになつたことでせう。さうなされば、あなた自身にも樂しみがあるわけですね。」

士官は眼を光らせてネフリユードフの顔を見てゐた。鮮やかな印象を残してゐる、ベルシヤ式の眼をしたハンガリー女の話のつきがしたくて、むづ／＼しながら、ネフリユードフが話を止めるのを待つてゐた。

「え、それは無論さうです。だが、それはそれとして、今の話をしたいんですが、一體そのエムマといふ女は何をしたと思ひます。……」

「失禮ですが私は……」と、ネフリユードフは話の腰を折つて、「率直に申しますと、以前はさうでもなかつたのですが、今は女の話がすっかり厭になつちまつたものですから……」

士官は呆氣にとられたやうにネフリユードフを見た。

「お茶をもう一杯いかがです。」

「え、もう澤山です。」

「ベルノフ」士官は勢ひよく、「この方をワクロロフのところへ案内してくれ。國事犯の特別監房に御通しするやうに。點呼の時間までは居られても差支へない。」

八

ネフリュードフは兵卒に案内されて、ランプの赤い灯に薄明るく照らし出された中庭に出た。

「どこへ？」護送兵が案内役の兵卒に聲をかけた。

「特別監房の五號室。」

「ここからは駄目だよ、錠がかつてる。向うへまはらなきや。」

「どうしたんだ？」

「下士が錠をかけたま、鍵を自分で持つて村へ出かけたんだ。」

「さうか、ぢや、こつちへいらつしやい。」

兵卒は他の入口に案内した。庭にある時から、内部の人々のざわめきが巢を飛び出す前の蜜蜂のやうに聞えてゐたが、愈々傍に近づいて扉を開けると、そのざわめきは急に大きくなつて、唵鳴つたり罵つたり笑つたりする騒々しい聲に變つてしまつた。例のかちや／＼と鳴る鎖の音が聞えて、むつとする臭氣が鼻を衝いて來た。

いつもの通り、このがや／＼騒ぐ聲と、鎖の音と、たまらない臭氣とは、一つの感覺に溶けこん

で、ネフリュードフの心内に一種の精神的嘔吐の氣持を起させた。そして次第にそれが肉體的嘔吐の氣持に變化して行つた。

内部に這入つて最初眼についたのは大きな臭い桶だつた。桶の傍には一人の女囚がしがみ、その前に帽子を横かぶりにした男が立つてゐた。彼等は何か話してゐたが、ネフリュードフの姿を見ると、男は眼ばたきをして言つた。

「天子様だつて小便は我慢が出来ねえよ。」

しかし女は裾を下して顔を赧くしたやうだつた。

入口から廊下になり、監房の扉が幾つか開いてゐた。一番目は夫婦者用、二番目は獨身者用、端にある小さな二つは國事犯用であつた。

この建物は全體で百五十名を收容するやうに作られてゐるのに、今は四百五十人も詰めこんだので、部屋には這入りきらないで廊下までぎつしり溢れ出してゐた。床の上に坐つたり寝ころんだりしてゐるもの、土瓶を持つて出て行くものなどもあつた。

タラスもその中に交つてゐた。彼はネフリュードフに追ひすがつて懐かしさうに挨拶した。その優しい顔には、鼻と眼の下とに打傷の跡らしい黒い痣が出来てゐた。

「どうしたんだ、その傷は？」と、ネフリュードフは訊いた。

「へえ、ちよつとしたことがありましてね。」と、タラスは、にや／＼して言つた。

「この連中と來たら喧嘩ばかりしてるんです。」とい、兵卒が言った。

「みんな女のことであらう。」タラスの後にゐる男が引き取つて、「盲目のフェーヂカと掴み合ひをやつたんでさあ。」

「で、フォードシヤは元氣かね。」

「お蔭さまで丈夫です。今お茶を入れるつてので、お湯を持つて行つてやるところです。」
そして、タラスは夫婦者用の監房に這入つて行つた。

九

國事犯用の部屋は二つあつて、その扉はいづれも廊下の仕切りをしたところについてゐた。その仕切りのところに這入ると、そこにはシモンソンが、薪を手にしてストーブの前にしゃがんでゐた。

ネフリュードフの姿に氣づく、彼は、しゃがんだまゝ、例の濃い眉の下から、ぢつと見上げながら手を差し出した。

「よくいらつしやいました。お話したいこともあります。」と、意味あり氣に言つた。

「ほう、どんなことですか？」

「後で申し上げませう。今ちよつと手が離せませんので。」

シモンソンはまたストーブの方に向いたが、これは彼一流の理論にしたがつて、出来るだけ熱のエネルギーを失はないでストーブを焚かうとしてゐるところだつた。

ネフリュードフが最初の扉を開けようとするところへ、つぎの扉から、マースロワが、前屈みになつて、ごみ屑の大きなかたまりを箒でストーブの方に押しやりながら出て來た。白いジャケツに、裾を端折り、埃よけに眉のところまで頭巾をすつぱりかぶつてゐた。

ネフリュードフを見ると、彼女は腰を伸ばして、羞かしさうに、しかし元氣よく、箒を棄て、兩手をスカートで拭いた。そして彼の前に來た。

「お掃除をしてるんだね。」ネフリュードフは握手して言つた。

「え、昔私にしてた仕事ですわ。」と彼女は笑つて、「でもこの埃つたら、それや大變なんですのよ、掃除の仕通しですわ。——さうだ、あの服、乾きまして？」

マースロワはシモンソンの方を向いて訊いた。

「もうちよつとだ。」シモンソンは、ネフリュードフがはつとするやうな一種特別の眼つきで、ちらと彼女を見ながら答へた。

「さう、では外套を持つて來て乾きませうね……私たち、みんなここにゐますのよ。」

彼女は二番目の扉から中に這入りかけて、一番目の扉の方をネフリュードフに指し示した。

ネフリュードフは指された扉を開けて中に這入つた。寢臺の端に小さなブリキのランプが置いてあ

つて、ぼんやり室内を照らしてゐた。空気が冷たくて、塵や湿気や煙草の煙などが立籠めてゐた。ランプは間近の者だけを明るく照らしたが、寢臺は陰になつてゐて、壁には黒い影がゆらく動いた。食事係になつた二人の男が湯や食物を調へるために出てゐるきりで、殆んど國事犯の全部がこの小さな部屋に雑居してゐた。ネフリュードフの古馴染のウエーラは、以前よりも瘦せて顔が黄色味を帯び、大きな、びつくりした時のやうな眼つきをして、新聞紙の上に坐つたまゝ、紙煙草を捲いてゐた。その手先が震へてゐた。

ネフリュードフが國事犯中で一番愉快な人物だと思ふエミリヤ・ランツェーワもゐた。この女は、この家事萬端の世話をして、苦しい境遇の中にも、親しみと樂しみの氣持をみんなに味はせたいと骨折つてゐるのだつた。そこで今、彼女は、袖をまくり上げてランプの傍に坐り、日焼けのした赤い手を器用に動かしてコップや茶碗を拭き、それを寢臺の端に擲げた白い布の上に竝べてゐた。年が若く、利口で優しきやうな顔をした女で、その顔は、につこりすると、人のこゝろを捕へてしまふやうな生々した、いかにも樂しきやうな表情に變つた。今も彼女はさうした笑顔をしてネフリュードフを迎へた。

「まあ、私どもは、ロシヤへお歸りになつたこと、思つてゐましたわ。」
隅の暗いところには、マリヤ・パーウロウナもゐた。彼女は片言交りにしやべりつゞけてゐる小さな女の子の相手で忙がしかつた。

「よくいらつしやいましたね。カチュウシヤにお會ひになりましたか。こゝにもこんな客が來てゐますのよ。」と言つて、マリヤは女の子を指した。

瘦せ衰へた肺病のクルイリツォーフは、足を折り曲げ、兩腕を外套の袖に深く引つこめて、ぶるぶる震へながら、熱病患者のやうな眼でネフリュードフを眺めてゐた。

ネフリュードフはその方に近寄らうとしたが、扉の右手に、眼鏡をかけた、赤い縮れ毛の男が立つてゐるのに氣がついた。これは有名な革命家のノウォドウォーフだつたので、彼は急いで會釋だけした。この男は國事犯中、ネフリュードフの一番嫌ひな男だつた。

果してノウォドウォーフは顔をしかめ、眼鏡越しに青い眼を光らせながら細い手を差し出して言つた。

「どうです、旅は？ 愉快ですか。」

それは明らかに皮肉だつたが、ネフリュードフはそれに氣がつかない風を装つて、

「え、面白いことも澤山あります。」と答へた。そしてクルイリツォーフのところへ行つた。

ネフリュードフは表面知らぬ顔をしてゐたが、内心不愉快でたまらなかつた。何か厭がらせを言つたり、爲たりしてやらうといふ彼の氣持がはつきり現れてゐるその言葉に依つて、ネフリュードフの今までの、なごやかな氣分はすつかり毀されてしまつた。

「具合はどうですか？」ネフリュードフは、憂鬱を感じながら、クルイリツォーフの冷たい震へる手を

握りながら言った。

「悪くはありませんが、寒いのでやり切れません。ぶぶ濡れですからね。」彼は外套の袖に兩腕をたたみこむやうにしながら、「恐しい寒さですね。そら、御覽なさい、窓硝子が毀れてるでせう。——それはそれとして、あなたはしばらくお見えになりませんでしたね。」

「許されなかつたのです。なか／＼やかましくつてね。しかし、今日は士官が寛大に計つてくれましたよ。」

「寛大ですつて！今朝その士官がどんなことをしたかマリヤに聞いて御覽なさい。」

マリヤは隅から、今朝宿場を出發する時に赤兒のことから起つた騒ぎの顛末を話した。

「みんなが團結して抗議する必要がありますね。」と、ウェーラは、周圍を見まはしながら言ひ出した。「シモンソンさんが抗議したけれど、それくらゐでは足りませんわ。」

「あなたはカチュウシヤを探してらつしやるんぢやないんですか。」クルイリツォーフがネフリュードフに言った。「カチュウシヤは一日中働いてゐますよ。さつきはこゝを掃除してゐましたが今度はあちらの女部屋の方をやつてゐるんです。これで蚤を退治することが出来たら申し分ないんですがね。おやマリヤは何をしてゐるんだらう？」

「子供の髪を梳いてるんだよ。」と、ランツェーワが答へた。

「虱が飛んで来やしないかな。」

「大丈夫、注意してまゝから。この子も少しは清潔になりましたよ。ちよつと抱いて、くれない。」とマリヤはランツェーワの方に向いて、「私、カチュウシヤのお手傳ひして来るから、お願ひよ。」ランツェーワは女の子を受けとつて、そのまる／＼と肥つた、むき出しの兩手を自分の胸に當てがつて、砂糖のかけらを少しやつた。

マリヤが出て行くと、入れちがひに食事係になつた男が二人、湯と食物を持って這入つて来た。

10

やがて、ストーブには火がよく燃えて温かく、お茶はコップや茶碗に注がれて牛乳まで加へられた。みんなはテーブル代りの寢臺の端に寄つて、食べたり飲んだりした。ランツェーワは箱に腰をかけてお茶の給仕をした。大抵は彼女のぐるりに集まつてゐたが、クルイリツォーフだけは濡れた外套を脱ぎ、乾いた綿の服にくるまつて、もとの自分のところでネフリュードフと話してゐた。

道中で雨に會つたりなどして一時は寒くてたまらなかつたが、この汚い、埃だらけの部屋をすつかり掃除し、きちんと散らかつたものを片づけてから、出来たてのパンを食べ、熱いお茶を飲んだので彼等はみんな、のんびりしたい、氣持になつた。

壁一重へだて、刑事犯たちの聲音や叫び聲や罵り聲などが聞えて来た。すると、自分たちの周圍を思ひ合して、彼等は尙更のびやかな楽しさを感じるのだつた。少しの間にしても苦しみをのがれた

い氣持で、彼等は興奮しきつてゐた。そして、いろんなことを元氣よく話し合つた。

どこの男女間にも起るやうなことが、彼等の間にも起つてゐた。好きだとか嫌ひだとか戀だとか愛だとか言ひ合ふ間柄に大抵のものがなつてゐた。ノウオドウォーフは綺麗で愛嬌のあるグラベツといふ若い女と戀仲だつた。この女は考へも何もなくて、革命問題などにも無頓着だつたが、時代の風潮に捲きこまれて、どうかした拍子に追放の憂目を見るやうな事になつたのである。昔から男を手に入れることを何よりの楽しみにしてゐたので、裁判中も入獄中も追放中も、そのことばかりに憂身をやつして來た。今度ノウオドウォーフをとりこにしたので大得意であるが、實は自分の方でも、すつかり男に參つてしまつてゐた。

ウエーラは戀はしたかつたが何しろ相手がなかつた。で、ナバートフだの、ノウオドウォーフだのに片思ひを寄せてゐた。クルイリツォーフも同じく片思ひではあつたがマリヤに對して戀らしいものを（普通男が女に感じる通りの）感じてゐた。しかし彼女の戀愛觀を知つてゐたから、止むを得ず、その切ない思ひを押しかくして、たゞマリヤの示してくれる友情だけで満足しなければならなかつた。

ナバートフとランツェーフとも深い仲になつてゐた。

そんなわけで、この連中で全然戀を知らぬものといつたら、マリヤと、コンドラティエフといふ女くらゐのものだつた。

一一

隣室かゝ役人の聲が聞えたので、一齊に靜かになつた。點呼の時間になつたので、軍曹が二人の護送兵を從へて這入つて來た。

軍曹は一人々々數へたが、ネフリユードフの前に来ると、慣れくしく言つた。

「點呼が濟んだらもういけません。直ぐにお歸りにならなきや……」

その言葉の意味がよくわかつたので、ネフリユードフは傍へ寄つて用意して置いたニループリを握らせた。

「あゝ宜しい。では御ゆつくり……」

軍曹が出て行かうとする途端に、今一人の軍曹が這入つて、その後から瘦せこけて薄い髭を生やした、眼の下に傷跡のある男囚が、のこくついて來た。

「わしは娘のことで參りましたが。」と、その男は言つた。

「あ、父ちゃん、來た。」

鈴のやうな子供の聲がした。今、ランツェーフはマリヤやカチュウシャと一緒に、彼女自身の下袴を縫ひ直して子供の着物をつくつてやつてゐるところだつた。

「おゝあたか、わしだよ。」父親はやさしい聲をかけた。

「この子は氣持がよささうですよ。こゝに置いといておやんなさい。」マリヤは傷跡のある男の顔を氣の毒さうに見ながら言つた。

「をばちやんたち、あたいに、きれいなおべ、作つてくれるんだよ。」女の子はランツェーワの手許を指して、「ほら、赤いおべ。」と、しやべりつづけた。

「をばちやんたちとお寝んねしたい？」ランツェーワは子供を撫でながら訊いた。

「あ、お寝んねするわ。父ちやんも？」

ランツェーワはにつこりして、「いえ、父ちやんはいけないの。」と言つて父親の方へ向いた。「こんな風だから置いときなさいよ。」

「さうだ、預けておけ。」と軍曹も口を出した。そして扉口から消えた。

兩腕を枕にして、ぢつと黙つて横たはつてゐたシモンソンが、靜かに立ち上つて、なるべく坐つてゐる人々の眼に觸れないやうに、ネフリユードフの傍に寄つて來た。

「さつき、お話があると申し上げましたね、今、ちよつとお耳を貸していた、けませんか。」と言つた。

「どうぞ。」

ネフリユードフも立つて、彼の後にしたがつた。

カチュウシヤは、はつとしたらしく見上げたが、ネフリユードフの視線とぶつかつて、さつと顔を

根らめ、どきまぎして首を振つた。

「實は……」シモンソンは廊下に出ると言ひ出した。そこには刑事犯の騒がしい聲が聞えて來るので、ネフリユードフは眉をしかめたが、シモンソンは、そんなことには平氣で、極めて眞面目な、何も彼も打ち明けるといふ調子だつた。

「カチュウシヤとあなたとの關係はよく知つてゐるのですが……だから、お話しなければならぬと思ふのですが……」

その時、扉の傍で、誰かの争ふやうな嘸鳴り聲がしたので話をつづけることが出来なかつた。

「この間抜け野郎。俺の知つたことぢやねえよ。」と、一つの聲が喚いたかと思ふと、「何を、こん畜生、息の根のとまらねえうちに消え失せろ！」と、嘎れた聲が應じた。

そこへ、マリヤが部屋から出て來た。

「こんなところで話なんか出来ないぢやありませんか。」彼女はネフリユードフ達に聲をかけた。「向うへいらつしやいよ。ウエーラだけしかゐないから。」

そして彼女は片一方の扉を開けて、やはり小さな部屋に案内した。それは獨房として作られたらしいが、今は女囚用に當てられてゐた。ウエーラは頭から布をかぶつて寢臺に横たはつてゐた。

「ウエーラは頭痛がするつて伏せつてゐるんですから、お話なんか聞きはしませんよ。私は今向うへ參ります。」とマリヤは言つた。

「いや、こゝにあて下さい。僕は誰にも秘密といふものを持つてゐないのです。あなたにはなほさらです。」

「さうですか。」

マリヤは子供のやうに體を左右にもぢく動かしながら、寢臺の向うにやゝ離れて腰を下し、その美しい眼をどこか遠いところを追ふやうに見据ゑた。

「で、カチュウシヤとあなたとの關係はよく知つてゐるのですが……」と、シモンソンは同じことをくり返して、「だから、僕とカチュウシヤとの關係もお話しなければならぬと思ふのです。」

ネフリユードフはシモンソンの調子が極めて單純率直なのに感心した。

「とおつしやると？」

「僕はカチュウシヤ・マースロワと結婚したいのです。」

「まあ！」マリヤはシモンソンの顔を見つめて驚きの聲を擧げた。

「で、結婚の申込みをすることに決心しました。」

「僕にはどうにもなりません。あれの一存にあることですから。」

「え、ですが、あなたに相談しないでこれを決定することは、カチュウシヤには出来ないでせう。」

「どうして？」

「あなたとの關係がきつぱり片づかないうちは、どうにも決心が出来ませんからね。」

「しかし僕の方ではきつぱり片づいてゐるのです。僕はたゞ僕の義務と考へてゐることを實行して、出来るだけあれの苦しみを軽くしてやりたいと思つてゐるのです。どんな場合でも、束縛なんかしようと思つてゐません。」

「ところが、あれはあなたの犠牲を受けたくないのです。」

「これは犠牲といふほどのことぢやありません。」

「而もその受けたくないといふ氣持は決定的のものです。」

「なるほど、そんなら別に僕にお話しになるには及ばないでせう。」

「カチュウシヤはそのことをあなたに承認していただきたいといふのです。」

「といふと、僕が義務だと考へてゐることを實行してはならない。それを承認しろといふのですね。そんなことは出来ません。僕は自由ぢやないのです。しかし、あれは自由ですから何をしようと勝手です。」

シモンソンは、それに對しては黙つてゐた。そして、ちよつと考へてから言つた。

「さうですか、あれに話させう。が、僕たちが戀愛關係になつてると誤解されては困ります。僕はたゞあれを、非常な苦しみを通つて來た、稀に見る秀れた人間として愛してゐるだけです。だから、あれからは何を求めようともしません。あれの境遇を、少しでも樂にしてやりたいと思ふばかりです

……

シモンソンの聲の震へてゐるのにネフリユードフは驚いた。

「あなたのお世話になりたくないといふのだつたら、僕が代つて世話をしやりませう。」とシモンソンはつづけて言つた。「あれの送られるところへはどこへでも一緒に行つてやりませう。四年は永くはありません。僕がその間傍にあたら少しばあれの荷も軽くなるだらうと思ひます……」

「僕としては、どう言つたらいいか、さうです、あれがあなたのやうな保護者を得たことを心から喜び……」

「それが實は聞きたかつたのです。」と、シモンソンはネフリユードフの言葉を遮つて、「あなたがあれを愛し、あれの幸福を望まれるなら、僕との結婚をも喜んで下さるに違ひない……」

「さうです！ 喜びます。」ネフリユードフは強く言つた。

「すべてあれの心に委せませう。僕としては、この惱める魂に慰安所を與へてやればいゝと思ふのです。」シモンソンは意外と思はれるほどの無邪氣な優しい調子で言つた。

シモンソンは立ち上り、氣はづかしさうな微笑を浮かべ、ネフリユードフに接吻した。

「では、あれに話しませう。」と言つて出て行つた。

一一一

シモンソンを見送つてから、マリヤは、「あなたはどうお思ひになりますの？ 戀ですわね。まつ

たく戀ですわね。あの人の、あのシモンソンさんが戀、而も馬鹿々々しい子供みたいな戀をしようとは夢にも思はなかつた。妙なものですわね、正直に言ふと、可哀さうだわ。」と言つて、溜息をついた。

「だが、あれは、カチュウシヤはどう思つてるでせうか。」と、ネフリユードフは訊いて見た。

「あの人は……」言ひかけて、出来るだけはつきりした返事をしようと思つたらしく、しばらく考へた。「あの人は、御承知の通り、あんな生活をして來たのに、ごく堅い、美しい心の持主です。そしてあなたを本當に愛してゐます。愛してゐるからこそ、あなたがあの人からお離れになるのを、あなたのために望んでゐるのです。あなたと結婚することは以前の生活よりもつと恐いことだと思つて、お断りしてゐるのでせう。それに、あなたが傍にいらつしやると落ちつかないのです。」

「ぢや僕はどうしたらいいだらう？ 消えてしまはなきやいけませんか。」

マリヤは可愛い子供のやうな微笑を浮かべて、「まあ或程度まで消えておしまひになるんですね。」

「どうしたら或程度まで消えてしまへますか。」

「それは冗談ですけど……カチュウシヤは、きつと、あの人の有頂天になつた馬鹿々々しい戀を見て——もつともまだ打ち明けてはあませんけれど、嬉しいやうな恐いやうな氣持であるんでせう。私は御存知の通り、こんなことに就いてかれこれ言ふ資格はありませんが、シモンソンさんの愛といふのも要するに世間普通の男の感情なんで、それが假面をかぶつてゐるんだと思ひます。ブラトニック愛のやうなことを言つてはあませんが、その底には、やはり卑しいものが……ノウオドウォーロフとグラベ

ツとのやうなものが潜んであると思ひますわ。」
マリヤは自分の得意な問題に論及して横道に逸れてしまつた。

「それはそれとして僕はどうしたらいいでせう？」

「カチュウシヤにすつかりお話しなすつたらいいでせう。萬事はつきりさせて置くことが肝心です。お話しなさい、私が呼んで来て上げますから。」

「さうですね、ではお願いします。」

マリヤは出て行つた。

ネフリユードフは小さな部屋に一人残された。隅に眠つてゐるウエーラの微かな呼吸が聞えて来た。扉をへだてた向うから刑事犯たちの聲も絶間なく騒がしかつた。

シモンソンの話したことは、ネフリユードフが時々気が弱くなつた時には堪へられさうにないと思ふほどの重苦しい義務から救つてくれるものだつた。しかし、彼は今、單なる不快ではなく、寧ろ苦痛に近い氣持だつた。「シモンソンの申し出に依つて自分の犠牲的精神の特殊性は失はれてしまつた。したがつて、誰から見てもその價值が低下してしまつた。何等因縁のないシモンソンのやうな立派な男が一生の運命を彼女と共にしようといふのだから、自分の犠牲性も、さまで大したことではなくなるのだ。」と、ネフリユードフは思つた。そこには普通の意味の嫉妬も多分に交つてゐたかも知れない。彼女の愛には慣れきつてゐたので、彼女が自分以外の男を愛すのをゆるす氣持にはなれなかつたのである。

また、彼女の服役中、一緒に暮してやらうといふ計畫を中絶しなければならぬのも残念だつた。シモンソンと結婚すれば自分の必要はなくなるからである……。

かうして自分の感情を解剖して行つたが、それが済まぬうちに、扉が開いて、カチュウシヤが這入つて来た。

「マリヤが呼びに來ましたので。」

「あ、話したいことがある。まあ、おかけ。實はさつきシモンソンから話があつたんだ。」

彼女は腰を下し、兩手を膝の上に重ねて落ちついてゐるやうだつたが、シモンソンの名を聞くと眞赤になつた。

「どんなことを話しましたの？」

「お前と結婚したいと言ふのだ。」

彼女は急に困つたらしく顔をしかめたが、別に何も言はず、伏眼になつた。

「僕は同意、いや助言を求められたが、それはお前の一存にあることで、お前がきめなきやいけないと答へて置いた。」

「まあ、どうしたつてことでせう。」

彼女はいつも不思議にネフリユードフの心を惹きつける例の心持ち斜視の眼でちつと男の眼に見入

つた。

二人は数秒間、互ひに見合つたまゝ、黙つてゐたが、その眼差しは口よりも雄辯だつた。

「お前がきめなければいけない。」

「何をきめるんでせう？ 何も彼も、とづくにきまつてしまつてゐるのに。」

「シモンソンの申込みを承諾するかしないかをきめるんだよ。」

「人の妻に——私のやうな、こんな罪人が、なれるものですか。シモンソンさんの一生まで臺なしにすることはありませんわ。」と言つてまた彼女は澁面をつくつた。

「しかし放免になつたら？」

「あゝ、もうそんなことはおつしやらないで下さい。」

彼女は立ち上つて部屋を出て行つた。

一三

ネフリユードフはカチュウシヤの後から男囚の部屋に歸つて見ると、そこでは皆が興奮してゐた。誰をでもよく知り何をでもよく嗅ぎ出すので有名なナバートフが、今一同を驚かすやうなニュースを得たところだつた。それは革命家のベトリンが、壁に書きつけて置いた覺え書を彼が発見したといふので、それに依つて、徒刑を宣告されて、もうとづくにカーラへ到着してゐるものと誰からも思はれ

てゐたベトリンは、ごく最近、刑事犯申た一人の國事犯として、こゝを通過したといふことがわかつた。

覺え書には「八月十七日、自分はたゞ一人刑事犯とともに護送された。初めはネウエーロフもゐたのであるが、彼はカザンの精神病院に於いて縊死した。自分は心身ともに健全である。諸君の健在を祈る。」

一同はベトリンはどうしてゐるだらうかとか、ネウエーロフ自殺の原因は何だらうかなどと盛んに論議してゐたが、クルイリツォーフだけは黙つて何か考へこんでゐた。

「夫がいつだつたか話してゐましたわ、ネウエーロフはまだ要塞監獄にゐる時分から幻影を見るくせがあつたんですつて。」とランツェーワが言つた。

「さうだ、あの男は詩人で夢想家だつたからね。あゝ、いふ種類の人間は獨房では堪へられないよ。」と、ノウオドウォーロフも口を出した。「僕も獨房にゐたことがあるが、決して空想なんかしないで、日々の豫定を系統的に立て、ゐたから、いつだつて平氣だつたよ。」

「それや平氣であられるさ、僕なんか收監されるととても嬉しかつたもんだ。」ナバートフは陰氣な空氣を一掃するつもりで元氣よく、しやべり出した。「娑婆にありや、いろんなことが氣がかりになるものさ。——掴まへられやしないか、同志に迷惑がかゝりやしないか、仕事全體をしくじりやしないかなどとね。ところが、愈々掴まつて見ると、すつかり責任といふものがなくなつて、やつと休息が

出来る、——つまり寝ころんで一服することが出来やうなものである……」

マリヤはクルイリツォーフの俄かに一變した顔色を、さつきから、まじく見つけてゐたが、「あなたはあの人をよく知つてゐるの？」と、その時、ふいに訊いた。

「ネウエーロフが夢想家だつたらうか？」クルイリツォーフは長い間叫んだり歌つたりした後のやうな喘ぎ方をして言ひ出した。「僕等の這入つてた監獄の門番が始終言つてたが、あのネウエーロフといふ男は『世の中にくれぬに現れない』男だつた。さうだ……水晶のやうな質を持つてゐたから誰だつて腹の底まで透き通して見ることが出来たんだ。嘘も決して言はなかつたし、陰日向もなかつた。皮膚が薄かつたばかりぢやない、神経までが外部に露出してゐたのだ。さうだ……複雑な、豊富な天分を持つてゐた。このへんにござるくしてゐる連中などは……いや、そんなこと、言つたつて始まらない。」と、ちよつと一休みして、今度は、ぶりくした調子でつづけた。「われくはまづ大衆を教育した後、社会生活の様式を變へようか、それとも、まづ社会生活を變へる方がいゝか、といふやうなことを論じてゐる。また、戦ふ方法はどうか、平和宣傳がいゝか、恐怖主義がいゝかなどと論じてゐる。然るに彼等（政府當局者）は論議などはしない、仕事だけをどしくやる。人が何百何千殺されやうと、そんなことは平氣なのだ。どんな人間が死なうと平氣なのだ、いや、立派な人間が死ぬることを願つてゐるのだ。さうだ、ヘルツェンは十二月黨員が根絶した時、われくは社会の水準が低下してしまつたと言つたが、僕もたしかにさう思ふよ。その後、ヘルツェンとその一黨も根絶してしま

ひ、また今ネウエーロフも……」

「みんなやられることもあるまいよ。」ナバートフがさつきからの陽氣な調子で應じた。「いつだつて根分けをするくらは残るさ。」

「いや、彼等（政府當局者）を可哀さうだなどと思つたら、みんなやられてしまふぞ。」クルイリツォーフは聲を高くして、他人に口を入らせなかつた。「煙草を一本くれないか。」

「煙草？ あなたにはいけなわい。お止しなさいな。」と、そこへマリヤが口を出した。

「うつちやつといひ下さい。」

彼はぶりくして火を點けたが、直ぐに咳をはじめ胸をつまらせた。漸く痰を吐き出してから更につづけた。

「われくのやつて来たことはまちがつてゐた。議論にあらず、團結して彼等を……滅ぼしてしまふのだ。」

「だつて彼等も人間ですよ。」と、ネフリユードフが言つた。

「いや、人間ぢやない。あんなことの出来る奴は人間ぢやない……。爆弾だの氣球だのといふものが發明されたといふ話だから、誰か氣球に乗つて爆弾を投じ、南京蟲か何かのやうに、奴等を皆殺しにしちまふといふ。何故つて……」

そこまで言ひつづけて彼は眞赤になつたかと思ふと、前よりもひどく咳をしはじめた。——口から

血が流れ出した。

ナバートフは雪を取りに駆け出した。マリヤは何か薬草の水を出してすゝめた。が、彼は苦しきうに喘いで、ほつそりした白い手で彼女を押し退けるやうにして眼を瞑つた。やがて、雪や冷水でや、落ちつかせてから寢床に運びこんだ。「さよなら。」と、ネフリュードフは皆に言つて、そこに來てしばらく待つてゐた軍曹と一緒に部屋を出て行つた。

刑事犯たちは大抵寢靜まつてゐた。部屋の中に收まりきらないので、一部は廊下に寢ころんで袋を枕にしたり、濕つばい獄衣にくるまつたりしてゐた。開けつばなしになつた扉からは軒や唸りや寢言などが洩れて來た。獨身者用の部屋で數人のものが蠟燭をつけて起きてゐたが軍曹の通るのに氣がついて直ぐに灯を消してしまつた。

もう一人、廊下に裸體になつてランプの下で、シャツの虱を取つてゐる年寄りがゐた。この邊の臭氣に比べれば國事犯の部屋の不潔な空氣の方がどれほどいゝか知れないくらゐだつた。煤けたランプは薄暮くて、まるで霧の中を歩いてゐるやうで呼吸をするのも苦しかつた。廊下を歩くには、空いてゐるところを念入りに探して、一歩々々と、そこに足を嵌めて行かなければならない。うっかりしてゐると寢てゐる者を踏みつぶさうだつた。

門を出ると、ネフリュードフはほつとした。そして、しばらく凍つた空氣を深くく胸一杯に吸ひこんだ。

一四

空は晴れて星が瞬いてゐた。ところ／＼に泥濘があるきりで道は大抵かたく凍てついてゐた。ネフリュードフは宿に辿りついて眞暗な窓を叩いた。肩のいかつい下男が素足で扉を開けてくれた。女關右手の小屋からは、そこに眠つてゐる馭者の大きな軒が聞え、前方の庭からは澤山の馬が燕麥を食べる音が聞えて來た。

ネフリュードフは服を着代へて長椅子の上に旅行用の枕を當て、横になつた。そして、今日見たり聞いたたりしたことを考へて見た。彼は歸る時の廊下で、十歳くらゐの少年が、或囚徒の足を枕にして、汚物の一杯流れ出してゐる監房用の桶の横に、ぐつすり眠つてゐるのを見たが、それが何より一番恐ろしいものに思はれた。

その夜、シモンソンやカチュウシャと話したことは、實に意外なことでもあり、重大なことでもあつたが、ネフリュードフはいつまでもそれを考へてゐなかつた。この事件に對する彼の立場は餘りに複雑であり餘りに漠然としてゐたので、かへつて考へないことにした。が、あの不幸な人々の姿——あの不潔な空氣の中に喘ぎ、あの臭氣の桶の傍に眠る人々の姿、ことに囚徒の足を枕にして汚物の上に横たはつてゐる少年の姿は、實に鮮やかに彼の心に蘇つて來た。そして拂はうとしても拂へなかつた。

どこかで、遠いところで、或人間にあらゆる侮辱と虐待とを課して苦しめてあるものがあるといふことを聞くのと、現在三ヶ月間に亙つて毎日、その課せられる侮辱と虐待とを直接見るのとの間には、非常に大きい相違がある。で、ネフリュードフは、かう考へた。この三ヶ月間に一再ならず「他人の見ないものを見てゐる自分が狂者なのだらうか、それとも、自分の見てゐることを平氣でする彼等が狂者なのだらうか？」と自問して見た。しかも、彼等（その彼等の數は實に多かつた）は、ネフリュードフにとつては慄然とするやうな行爲を、極めて平氣で行つてゐる。恰も必要なことをしてゐる、重大な有益なことをしてゐるかのやうに。して見ると彼等を狂者であると認めるわけにも行かない。といつて、自分の考へがはつきりしてゐることを意識する以上、自分を狂者だと認めることも出来ない。——そのため、彼は始終どちらが本當か、思ひ迷つてゐたのである。

この三ヶ月間に見聞したことによつて、ネフリュードフは次のやうな感想を得た。——自由には解放された人々の中から、裁判と行政との手段によつて選り出されるもの、つまり捕縛せられるものは、最も神經質のもの、最も激烈なもの、最も感激するもの、最も天分のあるもの、最も強いもの（しかし同時に比較的用心深くない、狡猾でないもの）である。而もこれ等の人々は自由に勝手に振舞つてゐる人々に比して少しも危険ではないのに、監獄にぶちこまれたりシベリヤに流されたりして、何ヶ月も何ケ年も、たゞ食物だけを與へられて怠惰な生活を強ひられてゐる。自然からも家庭からも有益な労働からも離れてゐなければならぬ。つまり自然的、精神的な生活に必要なあらゆる

要件から隔離されてゐる。——これがまづ第一の印象だつた。

第二に、これ等の人々は、この制度の下にあらゆる無用な侮辱——鎖だの、剃髪だの、獄衣だの、侮辱を蒙つてゐる。即ち弱きものが正しい生活をする重大な原動力となつてゐるところの、輿論の認識、廉恥心、人格の意識などといふものを悉く剝奪されてゐる。

第三に、これ等の人々の生命は、監獄内に共通の傳染病、疲勞、毆打（日射病、溺死、燒死等の特殊の場合をわざ／＼擧げる必要はない）等に依つて不斷に脅やかされてゐる。であるから極めて道義心に富んだ人物でも、自己防禦の感情から、恐るべき殘虐行爲を犯さざるを得ない（また他人のさうした行爲を許さざるを得ない）やうになるのである。

第四に、これ等の人々は無賴漢や人殺しや強盜などと接觸しなければならぬので、さまで墮落してゐないものも忽ちその影響感化を受けてしまふのである。

第五に、いかなる暴虐、殘忍、無道も、それが政府の目的に適つてゐる時には公然許されてゐるといふ事實が非常に強くこれ等の人々の頭には印象されてゐる。何に依つてか？ 即ちこれ等の人々に加へられる政府側の恐るべき非人道的行爲に依つて——例へば、子供や女や老人を苛酷に扱つたり、吾や棒で毆打したり、脱走者を、その生死如何に拘はらず捕へて突き出したものに褒美を與へたり、夫婦を引き離して、他人の妻と夫、他人の夫と妻とに性的共同生活を営ましたり、銃殺または絞刑に處したりすることに依つて。

であるから、それ等の自由を剝奪せられた人々、困苦悲惨の境遇にある人々が、自分たちの殘虐行為もまた許されて然るべきだと思ふのは當然のことである。

すべてこれ等の制度は、墮落と惡徳とを醸成し、その醸成された墮落と惡徳とを廣く民衆の間に傳播せしめるために、わざ／＼作られたもの、やうに思はれる。他のいかなる制度も、その點に於いては匹敵し得ないのである。

「人民の大多數を最もよく最も確實に墮落せしめるには、いかなる手段方法を要するか」といふ問題が呈出されてあるやうなものである、とネフリュードフは考へながら、改めて監房内や宿場などで見聞したことを思ひ出した。年々、何萬、何十萬といふ人間が墮落の頂點まで運ばれ、愈々完全に墮落すると、その墮落菌を廣く民衆の間に分布するために放免せられるのである。

ネフリュードフはテューメン、トムスクその他の監獄や、護送中の宿場などに於いて、いかにこの目的が首尾よく果されてゐたかを親しく目撃した。ロシア農民としての社會的、基督教的道徳心を持つてゐる極めて單純素朴な人々も、いつのまにか一變して、利益になることなら他人にいかなる暴行を加へたつて一向差支へないと考へるやうになつてしまふ。監獄生活をして來た人々は、自己の經驗した事實から推して、教會の牧師や、道學者などの説く愛と憐憫との道徳律は現實の生活に於いては決して存在しない、だから、吾々もそれを守る必要はない、と心の底から思ひこむやうになる。ネフリュードフはそれを自分の知つたあらゆる囚徒の上に見た。フォードロフにしても、マカールにしても、

も、タラスにしても皆さうである（タラスの如きは護送隊と僅々二ヶ月間一緒にゐたばかりで既に道徳念を失つた議論をするやうになつてネフリュードフを驚かした）この旅行中に聞いた話であるが、或脱走囚は密林に逃げこむ時に仲間のもの無理につれて行き、殺してその肉を食つたといふことである。而もこの鬼畜に等しい蠻行はしばしばあるといふことであつた。

こんな風に、あらゆる惡徳が、かうした制度に依つて特別に養成せられて行つたらどうなるであらうか。恐らくロシア人は「一切の行爲は許さるべきである、禁すべき行爲は何一つない」といふ最近のニイチエ主義にかぶれた無賴漢と同じやうなものになつてしまふであらう。初めはこの主義が囚徒の間に、やがては一般民衆の間にひろがつて行くであらう。

かうした制度を何故存続するか？ それに對する辯解は要するに、犯罪を防止し、恐怖の念を興へ、犯人を矯正するのが目的で、法律書に記載されてある通りの「合法的復讐」であるといふに盡きてある。しかし、實際に於いては、その目的は少しも果されてゐないのである。即ち、惡徳は防止されるどころか、益々蔓延してある。恐怖の念を起すどころか、益々元氣づいてある（浮浪人の中には監獄志願のものさへ澤山あるのだ）矯正されるどころか、益々あらゆる罪惡を組織的に宣傳してあるのである。

「では何故こんなことが行はれてゐるのか？」とネフリュードフは自問したが答は得られなかつた。殊に、彼にとつて不思議だと思はれるのは、これが偶然に、過失に依つて、一時的に行はれたのでは

決してないといふことである。幾世紀の間、絶えず行はれて来たといふことである。たゞ最初は鼻や耳を切り、つきには焼印を押ししたり鐵棒に縛つたりしたものが、今では手錠を嵌めて汽車で運搬されるといふだけの相違である。

當局者は言ふ。「ネフリユードフの憤慨するやうなことは、監獄の設備不完全のために生じるのである。したがつて、最新式の監獄さへ設立すれば忽ち改善されるものである」と。しかし、この議論は彼を満足させなかつた。何故なら、彼の憤慨する事實は監獄の設備の不完に依つて生じたのではないからである。彼は電鈴を装置した模範的監獄のことも、電氣死刑のことも書物で讀んで知つてゐたが、さうした美化された殘虐に對しては、より以上の反感を覺えざるを得なかつた。

では、何が最もネフリユードフの反感を唆つたか？ それは裁判所その他諸官省の官吏である。彼等は或人民の行爲を、彼等同様の官吏の手で書かれた法文に照らし合せ、無理やりに或條項に當て嵌めて、その條項通りに、そのいはゆる犯罪者を再び出會はないやうなところに送つてしまふといふだけの仕事をしてゐるために、人民から擄取した莫大な俸給を貰つてゐるのである。而も一方の人間は殘忍無情な典獄や看守や護送兵などの意のままに苦しめられて遂に精神的にも肉體的にも滅びてしまふのである。

ネフリユードフは監獄のことを親しく知つて、かう考へた。「囚徒の間に蔓延してゐる惡徳、例へば淫酒、賭博、暴行、その他一切の蠻行は（食人行爲の如きですらも）決して、偶然に起るのではない。變質性、または先天的犯罪性なるものが存在してゐるために起るのでもない。實は、人間が人間を罰し得るといふ間違つた考へから必然的に起る結果である。人間の肉を食ふといふ鬼畜の所業も、密林中で始まつたのではなく、各官省や裁判所などで蒔かれた種子が、たまく密林中で實を結んだに過ぎない。法官といふ法官、官吏といふ官吏は悉く、正義をも、人民の幸福をも全然顧慮しようとはしない。たゞ俸給を貰ふために、これ等すべての墮落の原因となる仕事をしてゐるだけのことである。

「では、すべては單なる誤解に基づいてゐるのであらうか？ 法官、官吏に俸給と賞與とを保證してやつて現在行つてゐることを止めさせるわけには行かないものか……」

ネフリユードフは、そんなことを考へつゞけた。そして漸く二番鶏が鳴きやむころになつて、深い眠りに落ちた。

一五

あくる朝、眼をさますと、宿の主婦が、兵隊さんが持つて来たといつて、一通の手紙を渡した。マリアから寄越したもので、クルイリツォーフの發作は豫想外に悪いので、「彼をこゝに残し、私たちも一日滞在しようと思つたのですが、それは許されませんでした。で、連れて出發しますけれど尙悪くなりはいかないかと心配です。つぎの町へ着きましたら彼を残して置くやうに、そして誰か一人附

き添つてやるやうにしたいのですが、その御盡力を願へませんでせうか。その許可を得るために、私
が彼と結婚しなくてはいけないやうでしたら、無論私はさうするつもりでをります。一とあつた。
ネフリュードフは下男に馬車の用意を頼んで出發の準備にかゝつた。二杯目のお茶を飲み終らない
うちに、三頭立の馬車が、鈴を鳴らしながら、石のやうに凍つた道に鞭の音も高くやつて來た。
護送隊に追ひつづけたために、出來るだけ早くと命じたので、馭者は鞭をびしく鳴らした。共同牧場
の門を過ぎたところで、荷物や病人を載せた囚徒用の馬車に漸く追ひつくことが出來た。
士官は先頭だったのでそこにはあなかつた。一杯やつて來たらしい兵卒たちが陽氣にしやべりなが
ら道の片側を歩いてゐた。

最後の馬車三臺には、三人づゝの割合で國事犯の連中が乗つてゐた。クルイリツォーフはその三番
目の車の乾草を積み重ねた上に、枕をして横になり、その傍にマリヤが座を占めてゐた。ネフリュー
ドフは下車して、彼の前に近づいた。

酔つぱらつた護送兵の一人が片手を舉げて振つたが、ネフリュードフは見向きもしないで、クルイ
リツォーフの車の縁を掴んだまゝ、歩き出した。口をハンカチで蔽つたクルイリツォーフは昨日よりも
顔が青くて瘦せたやうに見えた。

がたつく馬車に體を揺られながら彼はネフリュードフの顔に、その大きな美しい眼を据ゑた。が、
容態を訊かれると、眼を閉ぢ頭を振るきりで何も答へなかつた。馬車の動搖を我慢するために全精力

を費してゐるといふ風だつた。附き添ひのマリヤは、彼の容態をいかにも案じてゐるといふ意味のこ
もつた視線をネフリュードフに送つてから、直ぐに快活な調子になつてこんなことを話し出した。

「あの士官は自分ではづかしくなつたらしいのですよ。あの女の子の父親は今日は手錠を許されて、
嬉しさに子供を抱いてゐますわ。カチュウシヤとシモンソンも一緒です。それから、私のかはりに
ウエーラがそちらに這入つてゐます。」

その時、クルイリツォーフが何か言つたやうだつたが、車輪のひゞきが高いので聞きとれなかつ
た。彼は咳を咳へようとして顔に皺を寄せながら首を振つた。ネフリュードフが耳を近づけると、彼
はハンカチから口を出して、小さな聲で、「大分よくなりました。風邪さへ引かなきゃいゝのです。」
と言つた。ネフリュードフはさうだといふやうに頷いて見せた。

「三體の問題はどうになりました？ 解決は困難でせう？」と、クルイリツォーフは、苦しむやうに微笑
して言つた。

ネフリュードフには何のことかわからなかつたが、マリヤの説明に依ると、それは太陽と月と地球
との位置を決定する有名な數學上の問題を意味するのだつたが、クルイリツォーフは冗談半分に、そ
れをネフリュードフと、カチュウシヤと、シモンソンとの、三角關係に比較したのである。クルイリ
ツォーフは、マリヤが自分の冗談をちゃんと解釋してくれたので満足らしく頷いた。

「なるほど、さうですか。」ネフリュードフは答へた。「然しこの解決は僕がすべきぢやありません。」

「手紙はお手に這入りまして？ 御盡力願へますでせうか。」

「え、。」

マリヤの不意の質問に、ネフリユードフはたゞかう答へたが、クルイリツォーフの顔に不快の色が漂つてゐるのに気がついたので、そのまゝ自分の馬車のところへ引き返した。

長蛇のやうな列は一マイル近くもつゞいてゐた。ネフリユードフは馭者をせき立て、次第にそれを追ひ越して行つた。

カチュウシャの青いシヨール、ウエーラの黒い外套、シモンソンの編細工の帽子が見えて來た。三人竝んで歩きながら何か熱心に話してゐた。

彼等はネフリユードフを見るとお辭儀をし、シモンソンは眞面目臭つて帽子をつまみ上げた。ネフリユードフは別に話すこともなかつたので、その儘馬車を走らせて、彼等をも追ひ越した。道が平らになつて速力は益々速くなつたが、時々、荷車の行列を避ける爲に横に逸れなければならなかつた。深い轍の跡の刻まれた道は、針葉樹の密林に這入つた。兩側には黄ばんだ葉を蹴へしてゐる樺などの樹が入り交つてゐたが、やがて護送隊のおよそ半ばを追ひ越して、その森の端れに出ると、兩側に廣々とした野原が開け、遠くの方に、修道院の金色の十字架と圓屋根とが幾つか見えて來た。雲は散り、空はからりと晴れた。太陽に照らされた木葉や水溜りや會堂の圓屋根や十字架などが、きら／＼光つた。右手には遠い連山が青白く見えて來た。

馬車は大きな村に這入つた。この邊でなければ見られぬ風變りな帽子や上着をつけた人々が騒がしく村の往還を歩いてゐた。愈々町に近づいたらしい。馭者は右側の馬をぎゅツと引きしめ一鞭當て、更に勢ひよく走らせた。

眼の前には筏で渡らなければならぬ河が見えてゐた。筏は、今丁度こちらに向つて、河の眞中あたりまで進んで來たところで、約二十臺ばかりの車が岸にとまつてそれを待つてゐた。流れに逆らつて河上に漂つてゐた筏は、やがて急流に運ばれつゝ下つたかと思ふ間に、忽ち乗場に近づいて來た。

船頭は慣れた手つきで綱をはふり投げて棒杭に縛りつけた。そして横木をはずして、筏の上の馬車を岸に上げ、岸に待つてゐた馬車を乗せはじめた。

筏は一杯になつた。馬は水流におびえて脚をばた／＼させた。渦まき流れる水は筏の腹にぶつかつて飛沫をあげた。

ネフリユードフも馬車と一緒に、その筏に乗りこんだ。船頭は乗りきれなかつたものゝ不平などには耳をも傾けないで綱を解いて出發した。

筏の上はひつそりした。船頭の蹺音と馬の蹄の音としか聞えなかつた。

一六

ネフリユードフは筏の端に立つて、廣々とした河を眺めてゐた。と、二つの畫面が心の中に浮び上

つた。「一つは死の瀬戸際にあるクルイリツォーフの、ぐらく揺れてゐる頭、今一つはシモンソンと竝んで元氣よく歩いてゐるカチュウシヤの姿だつた。第一の、死を豫期しないで死にかゝつてゐるクルイリツォーフの印象は、實に重苦しい傷ましい感じがした。今一つの、シモンソンのやうな男の愛を得て、今や正しい道に向つて一歩々々堅實な歩みをつゞけてゐる元氣に充ちたカチュウシヤの印象は、當然嬉しくなければならぬのに、ネフリユードフは、やはり同じ重苦しさを感じて、どうしてもその氣持に打ち勝つことが出来なかつたのである。

ちやうど、町のほうから、教會の鐘が餘韻をのこして聞えて來た。ネフリユードフを乗せて來た馭者をはじめ、すべてのものが十字を切つてお祈りをした。ところが、たゞ一人（ネフリユードフははじめ氣がつかなかつたが）脊の低い、髪をぼうくさせた年寄りだけが、十字も切らないで、傲然としてネフリユードフのほうをながめてゐた。つきはぎだらけの上着とズボン、靴にも穴が開いてゐた。

「爺さん、どうしてお祈りをしねえんだよ？」と、ネフリユードフの馭者は帽子をかぶつて眞直に直しながら聲をかけた。「洗禮を受けてゐねえのか？」

「誰に祈るんだね？」年寄りは、待つてゐたと言はぬばかりに、一語々に力をこめて言つた。

「誰にだつて？ きまつてるぢやねえか、神様によ。」

「神様——その神様ツてえのはどこにゐるんだ？」

年寄りの言葉つきには、生真面目な、きつぱりしたところがあつたので、馭者の方は、いさゝか、たじくとした風だつたが、そんな素振りはなるべく見せないやうにして、

「どこつて、きまつてるぢやねえか、天にいらつしやるんだよ。」と答へた。大勢が聞いてゐるので恥をさらしたくないと思つた。

「お前、行つて見たのかえ？」

「行つたつて行かなくなつて、神様にお祈りしなきやいけねえなことは誰だつて知つてら

あね。」

「爺さんは基督教信者ぢやねえな。邪宗門だらう。ぢや、勝手に何にでも祈るがいゝさ。」

誰か笑ひ出した。

「爺さんは何を信心してゐるんだね？」筏の端に自分の荷車にくつついて立つてゐた中年の男が口を出した。

「わしは何も信心してゐねえよ。自分の他には何も信じねえのだから。一年寄りの口調は相變らずきつぱりしてゐた。

そこで、ネフリユードフも話の仲間入りをして訊いて見た。

「どうして自分を信じるこゝが出来るかね？ 爺さんだつて間違ひをすることがないとは限らないだらう。」

「いや、わしにはねえよ。」年寄り首を振つて何の躊躇もなく言ひ放つた。

「では何故いろんな宗旨があるんだらう？」と、ネフリュードフは更に問答をつづけた。

「それや人間が他人を信じて自分を信じねえからさ。わしもやはり他人を信じたため、藪の中に迷ひこんで、どうしても出られなかつたものさ。古い宗旨も新しい宗旨も、モロカン宗もスコベツ宗も、みんな手前味噌ばかり並べてあやがる……。世の中に宗旨は多いが魂は一つだよ。——わしにもお前さんにもあの男にも、魂は一つなんだ。だから、めい／＼が自分を信じさへすれや、皆が結びついちまふんだ、一つになつちまふんだ。」

老人は時々あたりを見廻しながら、大聲でしゃべり立てた。なるべく澤山のものに聞いて貰ひたいらしかつた。

「その信仰は以前から持つてるのかね？」

「以前からだとも。そのためにいちぢめられ出してから今年が二十三年目だよ。」

「いちぢめられるとは、どうして？」

「キリストをいちぢめたやうに、わしをいちぢめるんだよ。わしを掴まへて、法廷や牧師や、ろくでもねえ學者のところを引つぱりまはすのさ。氣違ひ病院へ入れられたこともある。だが、奴等、わしをどうすることも出来やしねえ、わしは自由だからさ。『お前の姓名は何といふか』なんて奴等は訊くが、わしには姓名も何もありません。わしは一切を棄てたんだ、名もなきや、住居もなきや、故郷もねえ。唯この通りのわしだ。『名は？』『人間といふんだ。』といふより他ねえ。と『年は幾つか？』と来る。『年なんか数へたことはねえ、また数へることも出来ねえ』と言ふと『両親は？』と来る。わしには親はねえ、父は神、母は大地、それがあるばかりだ。『では皇帝はどうだ？ 皇帝を認めるか？』と奴等は言ふ『認めねえかつて。皇帝は自分自身の皇帝、わしはわし自身の皇帝ぢやねえか。』と言つてやると『こんな奴とは話は出来ん。』『わしも話してくれつて頼みやしねえ。』といふやうなわけで、いちぢめられるやうになつたのさ……』

「これからどこへ行くんだね？」と、ネフリュードフはつづけて訊いた。

「氣の向いたところへ行くのさ。仕事があつたら働くが、なけれや乞食でもするさ。」

老人は筏が向う岸に着いたので話を止めてぐるりを見まはした。

ネフリュードフは財布を出して幾らかの金を恵まうとしたが、老人は受けなかつた。

「そんなものはいらねえ。パンならいたゞくが。」

「いや、失禮。」

「別に失禮でもねえ。わしは怒つたんぢやねえから。」

馬や車が筏から岸に運ばれた。ネフリュードフの馭者は言つた。

「旦那があんな奴と口をお利きになつたんで、びつくりしやしたよ。あいつア、ろくでなしの浮浪人に違えねえ……」

坂の頂上へ登りつくと馭者は振り返つた。

「宿はどこにしますか？」

「お前の好きなところにしてくれ。」

この町は屋根裏の窓、緑色の屋根、會堂、商店、巡査、どれを見ても、ごくありふれた、どこにでもあるやうな町だった。しかし、家が殆んど全部木造で、道路には鋪石がなかつた。

ネフリユードフは二ヶ月振りで、これまで住み慣れたやうな、やゝゆつたりした清潔な宿に落ちつくことが出来た。案内された部屋は、がらんとして何の裝飾もなかつたが、長らく旅馬車や田舎宿や護衛隊の宿所などで暮して来た後なので、さすがにのんびりした気分になつた。そこで第一の仕事は虱を取つて體を綺麗にすることだった。まづ荷物を解いて風呂に行き、それから都會風に姿を改めて、糊のついたシャツ、ズボン(かなり皺にはなつてゐたが)フロックコート、外套、といふ服装で、この地方の長官を訪問することにした。

宿で呼んでくれた馬車に乗つて、彼は、番兵や巡査が門前に見張りをしてゐる宏莊な邸宅に着いた。邸宅の前後は庭園になつてゐて、白楊や樺の裸木が立つてゐる中に、松や樅などの常緑樹が濃い葉を擴げてゐた。

將軍は病氣引籠り中だったが、ネフリユードフは無理に取りつきを頼んだ。

「お目にかゝるさうです。」と、受付は引き返して來て言つた。

ネフリユードフは書齋に案内された。

「さあどうぞ。寢間着のまゝで失禮ですが、お目にかゝらぬよりはましだと思つて。」と言つて、將軍はだぶ／＼ふとつて皺の寄つた頭を上着の中に引きずりこむやうにしながら、

「少し體の具合を悪くして、どこにも出ないでゐます。ところで、あんたはまた何だつてこんな遠國に來られたのかな？」

「囚人の一行と一緒に參りました。その中に私と密接な關係のあるものがあまして。」と、ネフリユードフは言つた。「實は、その人間のこと、他にもう一つお願ひしたいことがあります。上つたわけでございます。」

將軍は茶を一口飲んで煙草の吸殻を孔雀石の灰皿の中に入れた。そして細い眼を、ちつとネフリユードフに向け、眞面目に耳を濟ましてゐた。

ネフリユードフはマースロワのことを大體話して、皇帝陛下へ請願書を差し出してあることを言つた。

「なるほど。それで？」

「で、その女の運命をいづれかに決する通告書が、遅くとも今月中には、當地に届くことになつてを

ります……」

將軍は煙草にむせかへつて激しく咳きこみながら、テーブルの上の呼鈴を鳴らした。ネフリュードは一休みしなければならなかつた。

「で、その通告書が参りますまで、その女が當地に滞在することをお許し願ひたいのでございますが。」

制服姿の召使が這入つて来た。

「アンナはもう起きたか訊いて来てくれ。それからお茶をもう少し。」將軍は召使に命じて置いて、ネフリュードを促した。

「なるほど。もう一つの事件といふのは？」

「それは同じ一行中の或國事犯のことでございまして……」

「さうか。」將軍はひとり言のやうに言つて意味あり氣に頷いた。

「その男は非常に重態で——死にかつてゐるのですから、多分當地の病院に残されるやうになるでせう。それで、やはり國事犯の女囚が一人、その附添ひに残りたいと申してゐます。」

「その女囚は男の親戚か何かですか。」

「いや、さうぢやありません。しかし、都合によつては結婚してもいゝと言つてゐます。」

將軍は眼をばち／＼させて相手を見たが、黙つてしばらく煙草ばかり吹かしてゐた。

話が一通り済むと、將軍は一冊の本を取り上げて、ばら／＼とめくり、結婚に関する條文を探し出した。

「その女囚はどんな判決を受けました？」

「徒刑です。」

「では結婚したところで減刑にはなりません。」

「ですが……」

「お待ちなさい。自由な男と結婚したところで、刑期だけは服役しなきゃならないのです。ところでその女と男と、どちらが重い刑を受けてゐるのです？」

「どちらも徒刑です。」

「ぢや同罪だ。」と、將軍は笑ひながら、「男は病氣だから當地に残ることを許され、少しは寛大な取扱ひを受けることも出来ますが、女の方は、結婚したところで残ることは出来ません……」

「奥様は珈琲を召し上つていらつしやいます。」と、さつきの召使が不意に顔を出して報告した。將軍は頷いてまたつづけた。

「しかし——考して見ませう。名前は何といひますか、これへ書いて下さい。」

ネフリュードはマリヤたちの名前を書いて渡した。そして、病人に會はして貰へないだらうかと頼んだ。

「いや、それや私には出来ない相談だ。むろんあなたを疑って許さないわけぢやない。そこで、い、ことを教へて上げませう、——あなたは、あの連中に非常に同情してゐられる。そして金も持つてゐられるやうだ。その金をお使ひになつたらどうです。この地方では何事も金次第ですよ。賄賂を受けてはいけないと、その筋からは言つて寄越しますが、今の世の中では誰でもやつてるんですからね。下役のものほど欲しがつてゐますよ。三千マイルも遠く離れてるんだから何をしたつて、ばれることはないんです。こちらでは役人はまあ小さな帝王ですよ、はつはつは………」と言つて彼は笑ひ出した。「あなたも今まで國事犯に面會なさるには、やはり賄賂をおつかひになつたでせう？」

「え、さうです。」

「その事情がよくわかりますよ。——あなたは囚徒に面會したいからお金を出す。典獄だの護送兵だのは何しろ四十コペイカそこゝの日給で家族を養つてるんだから、出せば無論取りますよ。取らずにはゐられないのです。かりに私が、あなたとつたとしても、また彼等だつたとしても、その通りにするに違ひないので……。しかし私は職責上、少しでも法文にはづれたことを自分に許しません……いや、こんな話は止しにして今度は都のお話を承はることにませうか。」

一八

將軍はネフリユードフを送り出しながら、

「ときに、どこにお泊りです？ 宅の晚餐にいらつしやいませんか。時間は五時です。實は今、イギリスの旅行家が来てゐましてね、その人は流刑問題と、シベリヤの監獄とを研究調査してゐるのです。が、やはり晚餐に来ることになつてゐますから、あなたもいらして下さい。いづれ、その時、お話しの方囚や病人をどうするかといふ御返事をいたませう。多分誰か、附き添ひとして残ることになるでせう。」と言つた。

ネフリユードフは元氣よく馬車を走らせて郵便局へ行つた。

天井の低い郵便局の窓には、數名の局員が、詰めかけてゐる人々に應接してゐた。ネフリユードフが名前を言ふと、局員はかなり澤山の手紙類をわたしてくれた。彼はベンチに掛けて、それを調べ出した。

立派な封筒に赤い封印を施した一通の書留郵便があつたがそれはセレニンからの手紙で公文書様のものが同封してあつた。彼は顔に血が上り鼓動が止るのを感じた。言ふまでもなく、カチュウシヤの請願に對する返事だつた。彼は大急ぎで眼を通して、ほつと救はれたやうな吐息を洩らした。

「ネフリユードフ君。君と會つて話した事は僕に非常な感銘を與へた。マースロワに對する君の解釋は正しい。僕も事件を慎重に調査して、驚くべき不法が彼女に對して行はれたことを發見した。幸ひ、僕もこの事件に微力を盡すことが出来たので、減刑命令書の寫しを同封して送ることにする。(君の叔母上、カテリーナ夫人から君の宿所を聞いた)命令書の原本は、

彼女が判決前に收監されてゐた監獄に送られたから、恐らく、そこからシベリヤ地方廳へ廻送されるだらう。以上、取りあへず、この吉報をお傳へする。セレーニン」

命令書はつぎの意味のものである。

「皇帝陛下には、マースロワの請願に對し格別の御思召を以て、前判決の徒刑を破棄し、シベリヤの餘り遠隔ならざる地方に移住せしむべき御沙汰ありたり。」

たしかに吉報に相違なかつた。ネフリュードフがカチユウシャのため、また彼自身のために願つてゐたことが實現されたのである。かくして彼女の境遇が變れば、それに従つて、今までは違つた複雑な關係が生じて来る。即ち、マースロワが徒刑囚である間は、彼女との結婚といふことは單なる空想で、たゞ彼女の苦役を慰めるといふ以外に何の意味もなかつたのであるが、かうなれば彼等の同棲を妨げるものは何一つなくなつたわけである。ところが、ネフリュードフはそれに對する準備をしてゐなかつた。のみならず彼女とシモンソンとの關係はどうなのだらうか？ 昨日の彼女の言葉は、どう解釋したらいいのだらうか？ また、彼女がシモンソンとの結婚を承諾したら？ それはいいことか悪いことか？ これらの問題は容易に解けなかつた。で、考へることを止めてしまつた。

「後で何とか解決がつくだらう。今はそんなことを考へるよりも早く彼女に會つてこの吉報を傳へ、釋放してやらなきや。」

彼は命令書の寫しだけで、それが出来ると思つてゐたので、局を出ると直ぐに、馬車を監獄に走ら

せた。

彼は監獄訪問の許可を得てゐなかつたが、これまでの経験によれば、上官の許さないことを下役がしてくれることもあるので、とにかく當つて見ようと思つた。首尾よく彼女に會へれば吉報を傳へて釋放の手續きを執ることにし、ついでに、クルイリツォーフの安否も訊き、今朝將軍の言つたことを彼とマリヤとに知らせてやらうと思つた。

典獄は脊の高い、堂々たる風采の男で、口髭や頬髯が口の端へまくれこんでゐた。彼は非常に嚴格な態度でネフリュードフを迎へ、長官の特別命令がなければ絶対に面會を許可しないと云つた。市町の監獄では今まで許されたと話すと、

「そんなこともあるでせう。が、私は許可しません。」と、きつぱり斷つたが、その語調には、「君たち都會人はわれ／＼を驚かし狼狽させようと思つてゐるらしいが、シベリヤにあるわれ／＼も、法のいかなるものであるかを知つてゐる。」といふ意味が含んでゐた。

皇帝陛下直屬の官廳からの命令書の寫しもこの典獄には何等の利目もなかつた。飽くまでも許さないの一張點りだつた。この寫しだけで釋放することが出来はしないと云ふと、輕蔑したやうに笑つて、直接上官の命令がない限り絶対に駄目だと言つた。で、結局、彼が應じてくれたことは、マースロワに減刑命令書が來たのを傳へること、上官から命令があれば一時間内に釋放すること、その二點だけだつた。クルイリツォーフの安否に就いても、そんな囚徒があるかどうかも語る自由を持たない

と彼は言つた。

典獄の嚴格なのは、主として、定員の二倍から收容したため、獄内にチブスが流行してゐるからだつた。ネフリユードフの馭者が歸途話したところに依ると、一日に二十名ぐらゐの囚徒が斃れてゐるといふことだつた。

一九

ネフリユードフは監獄での不首尾を氣にもしないで相變らず勇み立ち、その足で地方廳を訪問し、命令書の原本が到着したかどうかを調べた。しかし、着いてゐなかつたので更に宿に引き返して、その頭末を、セレーニンと辯護士ファナーリンとに報告することにした。書き終つて時計を見ると、もう將軍邸の晩餐に列席しなければならぬ時刻になつてゐた。

途中でネフリユードフは、また、カチユウシヤが滅刑命令書を受けとつたらどう思ふだらうか。今度はどこで暮すやうになるだらうか、同棲生活をどんなふうにしたらよからうか。シモンソンはどうなるか。彼と彼女の内心に生じたい、意味の變化をあらためて思つたり、過去の生活の回想に耽つたりした。

「いや、こんなことは今は忘れなきやいけない。時が来れば自然にわかるのだ。」
カチユウシヤのことを頭から一掃して、今度は將軍に話すことを考へはじめた。

將軍邸の晩餐は、いはゆる上流社會に共通の贅澤なもので、ネフリユードフには無論珍らしくはなかつたが、何しろ、數ヶ月も贅澤どころか、あらゆる日常生活の不便を忍び通して來た後なので、すべてが彼には楽しかつた。

夫人はニコラス一世陛下に仕へたこともあるといふ話で、ロシア語よりもフランス語の方が上手だつた。いつもきちんと姿勢を正して、手は動かしても肘を腰から離すことはなかつた。夫に對しては、靜かな、やゝ遠慮した態度だつたが、客には、多少相手によつて變つても大體、非常に丁寧親切だつた。殊に、ネフリユードフは、身内のものゝやうな待遇をされたので、今更のやうに自分が公爵であることに氣がついた。彼女はネフリユードフを正直な、しかしシベリヤまでもやつて來るくらゐだから一風變つた人間だと思つてゐるらしかつた。

ネフリユードフは久しぶりに、自分が嘗て接したやうな學問のある上流階級の人々の仲間入りをし、たまらなく愉快になつた。と同時に、この數ヶ月間にあつたことは一切夢で、今自分は現實に眼ざめたのではなからうかといふ氣さへするのだつた。

席には、將軍夫妻、その娘夫妻、副官、イギリスの旅行家、遠方から來た知事、金鑛業の商人などがゐたが、いづれも、ネフリユードフにとつて氣持のいい人々だつた。

が、中でも一番好きだつたのは、將軍の娘夫妻だつた。その若い妻は清楚な感じのする無邪氣な女で、子供二人を夢中になつて可愛がつてゐた。夫といふのは、頗る謙遜なモスクワ大學出の自由思想

家で、或官廳に奉職し統計事務を執つてゐたが、かたはら士人の研究に没頭しその滅亡救済の方法を考へてゐた。彼等は永らく親たちと争つた末に戀愛結婚をしたのだつた。

軍服姿の將軍は挨拶を済ましてから、ネフリユードフにあれからなにをしてゐたかと訊いた。そこで郵便局へ行つてマースロワ滅刑の通知にせつしたことをはなして、監獄訪問の許可を得たいと言つた。將軍は、この席上で事務の話をするのは不愉快なので、ちよつと眉をしかめたきり、返事をしなかつた。

「ウォツカはいかゞですか？」將軍は傍にやつて來たイギリス人に聲をかけた。

イギリス人は、ぐつとグラスを乾してから、今日は教會と工場を參觀して來たが、監獄も拜見したいと言つた。

「それや都合がいゝ。」と、將軍はネフリユードフの方を向いて、「あんたも一緒に行かれたらいいでせう。——許可證を書いてお上げ。」と、副官に命じた。

「いついらつしやいますか？」ネフリユードフは訊いた。

「今晚にませう。みんな監房に這入つてゐるでせうし、何等の用意がしてないでせうから、ありのままが見られます。」

「異彩を放つてるところを見ようといふんですな。それもいゝでせう。私も監獄に就いては種々執筆したこともあるが、一向に誰も注意してくれません。」と、將軍は言つた。

食事が終り、珈琲にうつると、ネフリユードフは皆と興味の盡きない話を交した。おいしい御馳走、上等の酒、その後で、ふつくらした安樂椅子に凭れて珈琲をすゝりながら、陽氣な教養のある人と話をしてゐると、彼は益々うれしくなつた。そこへ、夫人と地方知事とがイギリス人の所望によつてピアノに向ひよく練習して置いたベートーヴェンの第五シムフォニイを弾きはじめた。——ネフリユードフは自分がどれほど善良な人間だつたかを今更のやうに氣づいたかのやうに、陶然とした自己満足の氣持を味はつた。

グラランドピアノも素晴らしく立派だつたし、演奏ぶりもなか／＼見事だつた。少くともこの第五シムフォニイの好きな彼にはさう思はれた。美しいアンダンテ、——それに耳を澄ましてゐると、ネフリユードフは鼻の奥がむづ痒くなるのを感じると同時に、自分の美しい行爲を思ひ出して我ながら感激した。

ネフリユードフが久しぶりに味はつた楽しみに對してお禮を述べ、暇を告げて歸らうとしてゐるところへ、將軍の娘の、若い妻が、さも決心したといふ顔つきをして、やゝ顔を根らめながら言つた。

「さつき、あなたは子供のことをお聞きになりましたわね。お眼にかけませうか？」

「まあ、この子は誰でも自分の子を見たがつてと思つてるのね。お止しよ、公爵は、そんなことに

興味をお持ちではないよ。」

母親は娘の無作法に、にこ／＼しながら言った。

「いや、それは違ひます。僕は子供が大好きです。」ネフリユードフは、この溢れるばかりの母性愛に打たれて、「どうか見せていたげませんか。」と言つた。

「おや／＼、公爵を連れて自分の赤ん坊を見せに行くんだからなあ、はつはつは……。」と將軍は後を見送つて、カルタ席の方から大聲を浴せかけた。「まあ、それもい、だらう……。」

子供をどう評されるだらうかと、わく／＼しながら、若い夫人は先に立つて奥の部屋に這入つて行つた。ランプが一つついて二つの寢臺が並んでゐた。その寢臺の間に乳母が、白いケープを掛けて坐つてゐたが、彼等の姿を見ると、黙つて立つてお辭儀をした。

若い母親は第一の寢臺を覗きこんだ。そこには、小さな口を開いて、長い縮れた髪を枕の上まで垂らした二つくらゐの女の子が、すや／＼と眠つてゐた。

「これがカーチャですよ。」母親は言つて蒲團を直してやつた。小さな白い踵が、その下に突き出てゐた。「可愛いぢやございませんか。二つなんでございますよ。」

「ほんとに可愛い！」

「それから、こちらがワシユークと申します。まるで似てませんわね。シベリヤつ子でせう？」

「立派な坊ちゃんですね。」

ネフリユードフは腹を下にして眠つてゐる子を見守りながら、かう言つた。

「さうですわね。」と、若い母親は意味のこもつた微笑を浮べて應じた。

ネフリユードフは、その時、ふと、足にからまる鎖、剃りとられた頭などと一緒に、瀕死のクルイリツォーフ、カチュウシヤの現在と過去、——いろんなことを思ひ出した。そしてこの場の光景に一種の羨ましさを感じ、これが純真にして洗練された幸福のやうな気がして來た。

幾度も子供を賞めてから、そして、その賞め言葉に貪るやうに聞き惚れてゐる母親を幾分満足させながら、漸くネフリユードフは、客間に戻つて來た。そこでは、例のイギリス人が、一緒に監獄訪問に出懸けるつもりで待つてゐた。

空模様は一變して、綿のやうな雪が降りしきつて、既に道路、屋根、庭の樹々、馬車などは眞白になつてゐた。イギリス人は別に馬車を持つてゐたので、別れ／＼に乗つて、不愉快な義務を果すつもりで、そろ／＼と出懸けた。

一一一

監獄の正面は、他が清らかな白い雪に蔽はれてゐるのに、窓ばかり光つてゐて、朝よりも寧ろ陰慘な気がした。

例の堂々とした典獄があらはれて、ランプの灯に照らして將軍の許可證を讀んだ。そして、ちよつ

と驚いたらしく首を縮めたが、命令だから仕方がないと諦めて、イギリス人と、ネフリユードフとの不意の訪問者を案内することになった。

階段を登つて事務室に行くと、典獄は二人に椅子をすゝめて、それぐの用件を聞き、まづネフリユードフがマースロワに面會したいといふと、直ぐに看守に命じて彼女を呼びにやつた。そして、イギリス人の方にかつた。

「この監獄は何人收容されますか？ 現在何人收容されてゐますか？ 男は何名？ 女は何名？ 子供は何名？ 徒刑囚は？ 流刑囚は？ 病囚は？」

イギリスの監獄研究家はネフリユードフに通譯して貰つて、つぎぐにいろんな質問を連發した。ネフリユードフは、カチュウシヤとの面會のことばかり考へてゐて、イギリス人の質問も典獄の答辯も、いゝ加減な、うはの空で通譯してゐた。と、事務室の扉が開いて、いつもの通り、まつさきに看守、つゞいて、カチュウシヤが這入つて来た。頭巾をまぶかにかぶつてゐる獄衣姿が今更のやうに眼についた。

ネフリユードフは急に重苦しい氣持に蹴落された。

「僕は生きたい。僕は家庭が欲しい。子供が欲しい。人間としての生活がしたい！」

カチュウシヤが元氣よく近寄つた瞬間に、彼の腦裏には、こんな考へが閃めいた。

彼女の方から立ち上つて彼女を迎へた。彼女の顔は固くつて不快だつた。いつぞや彼を責めた時の表

情とそつくりのやうに彼には思はれた。赤くなつたり、青くなつたりして、體を神經的に動かして上着の端を引つぱりながら、彼女はちらとネフリユードフの方を見、また直ぐに眼を伏せた。

「お前、減刑命令書が届いたことを聞いたかい？」

「え、看守さんから聞きました。」

「だから、原本が着き次第、どこにでも移ることが出来るよ。僕たちはよく考へて……」

と、彼女は慌しくネフリユードフを遮つた。

「何も考へることはありませんわ。私、シモンソンさんの行くところへ、ついて参りますわ。」

興奮してゐながらも彼女はきつと眼を上げて男を見つめながら、それだけの言葉を、口早に、そしてはつきり言つてのけた。

「さうか！」

「え、ネフリユードフ様、あの人は私と一緒に暮したいのです……」と言ひかけて、彼女は、急にどきまぎして言ひ直した。「いえ、私を傍に置きたいのです。私としては、それ以上の望みはございませんわ。それを幸福と思はなければなりません。私としては、それ以上……」

カチュウシヤの言葉を聞きながら、ネフリユードフは考へた。

「どちらだらう？ 彼女はシモンソンと戀愛關係になつたために、僕の捧げてゐる犠牲的行爲を容れないのか？ それとも、やはり僕を愛してゐるがために、つまり、このネフリユードフのために、

自己を犠牲にして、シモンソンと一生を共にし、永久に埋もれてしまふつもりなのか？」

ネフリユードは氣はづかしくて顔が赧くなつた。

「で、お前、あの男を愛してるのかい？」

「愛してるだの、愛してないだの、そんなこと何でせう？ 私、みんな棄て、しまひましたわ。ただ、シモンソンさんは特別な方なんです。」

「それや無論、立派な男だ。だから僕は……」

カチュウシヤはまた彼の言葉を遮つた。彼に言ひ過ぎられてもいけないし、といつて、自分の言ふことだけは言はなければ、といふ風だつた。

「いゝえ、ネフリユード様、私があなのお氣に召さないことをしてるんでしたら、どうぞお許し下さい、お願ひでございます。だつて、かうなるより他ありませんもの。それに、あなたもお生きにならなきやありませんもの。」

つい先刻ネフリユードが自分自身に言つたことを彼女はこゝで言ふのだつた。しかし、今は、彼はさうは思つてゐなかつた。全く別の變つたことを思つてゐた。それで恥づかしくなつたばかりでなく、すべてを彼女と共に矢はねばならぬことが悲しかつた。

「かうならうとは思はなかつたよ。」

「こんなところで御苦勞なさるのは、もう澤山でございますわ。」といつて彼女はにつこりした。

「いや、別に苦勞はしないよ、僕には爲になつたし、出来ることなら、今後もお前のために盡したいのだ。」

「私たちは……」彼女は、その「私たち」と言つてネフリユードを見た。「私たちは、何も要りません。随分していただいたんですもの。これが、あなたのためでなかつたら……」

彼女は、かう言ひかけたが、聲が震へて言へなくなつてしまつた。

「お前は、とにかく、僕にお禮を言ふわけはないよ……」

「え、神様が私たちの勳定をして下さいますわね。」

彼女の黒い眼には涙が一杯たまつて光り出した。

「何ていゝ女だらう！」

「何がいゝ女？」涙の中から彼女は言つた。悲痛な微笑が顔を明るくした。

イギリス人は待ちくたびれたらしく、「もういゝですか。」と、その時、聲をかけた。

「すぐです。」

ネフリユードは大急ぎで、クルイリツォーフの容態を訊いた。

カチュウシヤは無理に元氣を出して、知つてゐるだけのことを話した。クルイリツォーフは途中で非常に衰弱したので入院することになつた。マリヤは心配しきつて看護婦として残りたいと願つたが許されなかつたといふことである。

「失禮して宜しいでせうか。」

彼女はイギリス人が待つてゐるのを氣にしてかう言つた。

「まだ、さやうならとは言はないよ。そのうち會ふことにしよう。」

ネフリユードフは手を差し出して言つた。

「御免なさい……」

彼女は聞きとれないくらいゐの聲で言つた。眼と眼とが合つた。ネフリユードフは、その不思議な眼差しと、悲しい微笑を含んで「御免なさい」と言つた語調の中に、彼女がシモンソンの結婚を決意した假定理由のうち後者が眞實であることを、明らかに認めた。つまり、彼女はネフリユードフを愛してゐる、而も彼と一緒にゐるは彼の一生を汚すことになる。だからシモンソンと同棲して彼に自由な生活をさせようといふのだ。彼女は思ひ通りになつたので、その點は嬉しかつたが、さすがに彼と別れるのが苦しかつたのである。

彼女は握手して、くるりと身を翻して部屋を出て行つた。

二二

ネフリユードフとイギリス人と典獄とは、看守に案内せられて監房を見てまはつた。臭氣の烈しく鼻を衝く廊下を通つて行くと、驚いたことに、そこには二人の囚徒が、床に放尿してゐるのを見た。

第一の監房には、徒刑囚が約七十人、皆、頭と頭を突き合せ、腹と腹とをくつ、けて寝てゐたが、彼等が這入つて行くと一齊に跳ね起きた。が、高い熱に惱んでゐるらしい眞赤な顔をした若い男と、のべつに呻き聲をあげてゐる老人とだけは起きなかつた。

イギリス人は彼等と少し話して見たいから通譯を頼むとネフリユードフに言つた。彼は單にシベリヤに於ける流刑問題と監獄とを研究視察するばかりでなく、信仰と贖罪とに依る救ひを傳道する目的をも持つてゐた。

「話してやつて下さい。——キリストは彼等を憐れみ、彼等を愛し、彼等の身代りになつて十字架に上られました。このことを信じれば救はれるのであります。」

囚徒たちは黙つたまゝ、両手を垂れて聞いてゐた。

「この本にはそのことがすつかり書いてあります。文字の讀めるものは？」

二十幾人讀めるものがあつた。そこで、イギリス人は手提袋の中から五六冊の聖書を取り出した。と、節くれ立つた逞ましい腕が、あつちからもこつちからも、によき／＼と出た。彼は二冊だけ與へて次の監房に移つた。

第二の監房でも大體同じで、やはり三人ばかりの病人を除いては皆起きたので、彼は話をして、同じく二冊の聖書を與へた。

第三の監房には病人が四人あつた。イギリス人が何故病人だけを一室に集めないのかと聞くと、本人

がそれを厭がるのだと典獄は説明した。それに、傳染病でもなし、監獄醫もよく巡回して必要だけの手當はしてあるといふことだった。

「へえ、醫者のやつ、もう二週間も足を見せねえぜ。」といふ聲がした。

典獄は何とも言はないで、次へ案内した。どこへ行つても、囚徒はすべて、凍えてゐるもの、飢ゑてゐるもの、怠けてゐるもの、病氣になつてゐるもの、などはかりが野獸のやうな生活をしてゐるのだつた。イギリス人は豫定の冊数だけ與へると、黙々として、たゞ歩いた。陰惨な光景、殊に息づまるやうな臭氣に、さすがの彼も辟易してしまつたらしく、終りには、典獄から何を説明されても、たゞ「なるほど」をくり返すだけだった。

ネフリユードフも今更、自分だけ歸るとも言ひ出せないで、やはり同じ疲勞と絶望とを感じながら、まるで夢遊病者のやうに、後をついて歩いた。

二三

流刑囚の或監房には、ネフリユードフが今日渡し場で出會つた風變りな年寄りが這入つてゐたので彼はびつくりした。

老人は相變らず肩や膝の抜けた、きたないシャツとズボンを着け、はだしのまゝ、寢臺の横に坐つて、彼等の一行を、鋭い眼つきで睨んでゐた。瘦せ衰へた體は、見るも痛々しかったが、顔だけは筏

の上で見た時よりも更に嚴肅な生氣に充ちてゐた。

この監房でも典獄たちが這入つて行くと、皆起立したが、この老人だけは動かなかつたばかりでなく、眼を輝やかし眉をしかめた。

「起立！」と、典獄は呶鳴りつけた。

老人は、にやりとしたきりで立たうとしなかつた。

「お前の手下は前に立つてるぢやねえか。わしはお前の手下ぢやねえよ……」

「何だと！」典獄は嚇しつけて一歩にじり寄つた。

「私はこの男を知つてゐます。どうして收監されたんです？」ネフリユードフはあわて、口を出した。

「何、旅行免状を持つてゐないので警察から送つて超越すんです。こんなのは超越してくれるなど言つてゐるんですがね。」典獄はいまゝしきうに老人を睨み据ゑながらかう言つた。

「ぢや、お前も反基督軍の一人か。」老人はネフリユードフに聲をかけた。

「いや、僕は參觀者だよ。」

「なに、反基督の連中が人間を虐げてるのを參觀に来たつてんだな。うん、よく見る。人間を掴へてこんな檻の中へ詰めこんでるぢやねえか。人間は額に汗してパンを食はなきやならねえもんだ。それに仕事もさせねえで、豚かなんぞのやうに飼つてるんだから、みんな畜生になつちまふなア當りめ

えだよ。」

「何を話してるんですか。」と、イギリス人が訊いた。

人を監禁するのは不都合だと言つてゐるのですとネフリユードフは通譯した。

「法律を守らないものをどう處置して、か、この老人の意見を聞いて見てくれませんか。」

それを通譯して聞かすと、老人は齒竝を見せて嘲るやうに笑つた。

「法律か？ はじめに一切の土地、一切の權利を人民の手から奪つて、それに逆らふものを皆殺しにして置き、後に、奪ふなかれ、殺すなかれといふ法律を作つたんぢやねえか。もつと前に法律を作りやよかつたんだ。」

ネフリユードフが通譯すると、イギリス人は微笑した。

「なるほど。それにしても、現在、強盜や殺人をどうすればいい、か聞いて下さい。」

老人はこの質問を聞くと峻しい顔つきをして、

「まづお前自身、反基督の印を棄て、見ろ、さうすれば強盜も殺人もなくなつちまふよ、と言つてやつてくれ。」

「この男は氣が觸れてる。」と言つて、イギリス人は監房を出た。

「自分のしなきやならんことをしろ。他人のことはうちやつて置くが、誰を罰し誰を許すかつてことは神様の御思召にあることで、人間にやわからねえんだ。さあ、歸れ。」老人は、そこにぐ

づぐづしてゐるネフリユードフを尻目にかけて更に附け加へた。「反基督軍の連中が人間を餌にして

餌を飼つてるのがよくわかつたさう。さあ、歸つたく。」

廊下に出ると、イギリス人は、開けつばなしになつてゐる或屏の前に立つて典獄に何か訊いて

めた。

「これは死體室です。」と言つて、イギリス人は中に這入つた。ネフリユードフもつゞいた。

別にひろくもない普通の監房で、壁に小さなランプが一つともつて、四つの死體を灰白く照らして

めた。

手前から三番目の男の死體が藤色のものを着けてゐるのにネフリユードフは眼をとめて、はつと思つた。この色に彼は何かの記憶があつたからである。

彼は近寄つて覗きこんだ。美しい鼻、高く白い額、縮れた髪——それは見慣れた顔ではあつたが、

急には自分の眼を信じてゐることが出来なかつた。彼は昨日、この顔が怒つたり、苦しんだりしてゐるの

を見た。それに今は、微動もしないで凄いほどの美しさを保つてゐる……。さうだ、クルイリツォー

フだつた。少くともクルイリツォーフの残されたる物質的存在だつた。

「何故彼は苦しんでゐたのか？ 何故生きてゐたのか？ 今、それが彼にはわかつたらうか？」

ネフリユードフは、かう考へたが、答へはない、死の他には何もものもないやうに思はれた。そして

暗い氣持に襲はれた。

ネフリユードフは黙つてイギリス人に別れて、今夜見聞したことを一人で熟考しなければならぬと考へながら宿に馬車を急がせた。

二四

ネフリユードフは寢臺には這入らないで、いつまでも部屋中をぐる／＼歩きまはつてゐた。カチュウシヤの一身に就いて彼のしなければならぬことは既に終つてゐた。彼は今となつては不要の人間である。さう思ふと悲しく恥づかしかつた。

しかし、今一つの彼の仕事は、まだ終つてゐなかつた。いや、終つてゐないどころではなく、彼を益々惱まし、彼の活動を益々要求してゐるのである。數ヶ月の間親しく見聞した末に、漸くわかつて來た恐しい罪惡（この罪惡はクルイリツォーフをも殺してしまつた）が、今や地上を支配して勝利の凱歌を奏しつゝある。而も彼には、これを打ち倒すことは無論、打ち倒す方法を知ることさへ出來なかつた。彼の腦裏には、無情極まる將軍や檢事や典獄などの手に依つて牢獄に監禁されてゐる數百數十の虐げられた人々の姿が浮んで來た。つゞいて、官吏を罵つて狂人扱ひをされてゐる不思議な老人の姿、クイリツォーフの美しい蠟細工のやうな顔などが浮んで來た。と、またしても、一體かう考へる自分が狂人なのか、それとも、かゝる罪惡を當然のこと、思つてゐる人々が狂人なのか、といふ疑

問が、新しい力を以て迫つて來た。

歩き疲れ、考へ疲れたネフリユードフは、ランプの傍の長椅子に腰を下して、イギリス人から記念に贈られた聖書を、ぼら／＼とめくつた。

「一切の解答はこの中にあると言はれてゐる。」と思ひながら偶然に眼についたところを読みはじめた。馬太傳第十八章である。

「その時、弟子達、イエスに來りて曰ひけるは、天國に於いて大なる者は誰ぞや。イエス、嬰兒を呼び之を彼等の間に立て、而して曰ひけるは、われまことに爾等に告げん、若し心を改めて嬰兒の如くならずば、天國に入ることを得じ、されば、この嬰兒の如く自ら謙遜する者は、これ天國に於いて大なる者なり。（第一節——第四節）」

「たしかにさうである」と、ネフリユードフは思つた。彼自身も、自己を謙遜した時にのみ、生の平和と歡喜とを味はつたからである。そこで更に讀みつゞけた。

「またわが名のために、かくの如き一人の嬰兒を接くる者は我を接くるなり。されど我を信するこの嬰兒の一人を躓かす者は、碾臼をその頸にかけられて、海の深みに沈められん方なほ勝るべし。（同章、第五節——第六節）」

「この接くる者といふのは何たらう？ どこへ接くるのか？ わが名のためといふ意味は？」彼は、これ等の言葉から何も得られないので考へた。

「それ人の子は亡びたる者を尋ねて之を救はんために來れり。爾等如何に思ふか。人もし百匹の羊あらんに、その一匹迷はゞ、九十九匹を捨て置きて、迷ひし一匹を尋ねざるか？もし尋ねて之に會はゞ、我まことに爾等に告げん、彼は迷はざる九十九匹の羊よりも、尙その一匹を喜ばん。かくの如くこの小兒の一人の亡ぶるは、天にあます爾等の父の御旨に非ず。」

(同章、第十一節—第十四節)

「さうだ、彼等の亡びるのは神の御心ではないのだ。而もこゝでは幾百幾千のものが亡びつゝあるのに、それを救ふことは出来ないのだ。」と彼は考へた。

「その時、ペテロ、彼に來りて曰ひけるは、主よ、幾次までわが兄弟のわれに罪を犯すを赦すべきか、七次までか？ イエス、彼に曰ひけるは、爾に七次とは言はじ、七次を七十倍せよ。このゆゑに、天國は、その臣下と會計とを調べんとする王の如し。調べ始めし時、千萬金の負債ある者を彼に曳き來りしに、償ひ方なかりければ、王は彼に命じて、その身、その妻、子供等、あらゆる所有を皆賣りて償へと曰へり。そのとき、臣下俯伏し拜して曰ひけるは、王よ、われを赦し給へ、さらば皆償ふべし。王はその臣下を憐れみて、之を釋き、その負債を免したり。然るにその臣下は出でて己れより銀一百の負債ある友に逢ひければ、之を捕へ、喉を抑へて、負債を返せと曰へり。その友、足下に俯伏して願ひ曰ひけるは、われを赦し給へ、皆償ふべし。然るに、これを肯かすして、往き、その負債を償ふまで彼を獄に入

れぬ。友、その爲せる事を見て、甚だ哀しみ、往きてこの事を王に告げたり。その時、王、彼を呼びて曰ひけるは、悪しき臣よ、爾、われに願ひしに因りて、われ爾の負債を悉く免したり。わが爾を憐れみし如く、爾も亦その友を憐れむべきにあらずや。(同章、第二十一節—第三十三節)

「これだけのことか？」ネフリユードフはこゝまで讀んで考へた。内心の聲が「さうだ。これが全部だ、これ以外に何も無い」と答へた。

ネフリユードフにも、精神生活を送つてゐる者に屢々あるやうなことが起つた。それはつまり、初めは、空虚な、お笑草にしか過ぎないと思つてゐた思想が、生活の經驗に依つて急に單純確實な眞理になつてしまつたのである。すなはち、この罪惡——人間が人間を虐げつゝあるといふ罪惡を救ふ道は、彼等が常に彼等自身を神の前の罪人であると認め、したがつて他の人々を罰したり矯正したりし得るものではないといふことを悟ることにある。この思想が彼にはつきりわかつたのである。また、監獄その他で目撃したあらゆる恐しい罪惡や、その罪惡を行ふ人々の平然とした自信などは皆、人間として不可能なこと、つまり、自ら惡人でありながら他の惡を直さうとする不可能事を、敢てしようとするから生じたのであることも明らかになつた。惡が惡を、而も器械的方法に依つて矯正しようとする、その結果は、貪慾きはまる人々が他人の懲罰と矯正とを職業にして、自ら墮落すると同時に他をも絶えず墮落せしめるやうになるのである。

今、ネフリユードフには、彼の見聞した惨事の一切が何に依つて生じたか、またそれを根絶せしめるにはいかにすればよいか、明白になつた。今までどうしても發見し得なかつた解答、實に、それはヤリストがベテロに與へた言葉に他ならないのである。すなはち、神の前に罪なきものはゐないのだから、従つて他人を懲罰し矯正し得るものはゐないのだから、われ／＼すべての人々を、常に、無限に赦さなければならぬのである。

これは一見非常に簡單であるが、理論としてのみならず實際としても、これを以て問題を解決し得るとネフリユードフは思つた。「では惡漢をいかに處置するか？ 罰しないで放任して置いていゝのか？」といふ異論がこの際生じるに相違ないが、それに對しても彼は最早狼狽しなかつた。懲罰なるものが犯罪を滅じ、或ひは犯罪者を矯正するといふことが證明されるならば、この異論には意味がある。ところが實際に於いては、それが證明されないばかりか、却つてその反證があがつてゐる以上、また他人を矯正する權能を持つたものがゐないといふことが明白になつた以上、こんな無用、有害、殘忍、苛酷なことを廢止してしまふのが最も合理的な唯一の方法である。過去幾世紀の間、いはゆる犯罪者は處罰されて來たが、果して犯罪は絶えてしまつたか？ 否、益々増加したのである、一方では刑罰を受けたために墮落したその罪人に依つて、また他方、他人を裁き且つ罰する裁判官、檢事、獄吏等に依つて。故に、ネフリユードフは考へた。——この社會及び一般秩序が保たれてゐるのは、決して彼等法官が存在してゐるからではなく、人間が、さうした罪を持ちながらも、互ひに憐れみ合

ひ愛し合ふからである。

ネフリユードフは、この考への確證を聖書の中に見出さうとして最初から讀みはじめた。そして有名な山上垂訓の中に、實行しなすれば神の國が出現するに相違ない五ヶ條の戒律を發見した。

第一（馬太傳第五章第二十一節——二十六節）は、人は同胞を殺してはならない、怒つてもならない。何人をも馬鹿と思つてはならない。誰かと争つたら仲直りして神に祈らなければならぬ。

第二（同章第二十七節——三十二章）は、人は姦通してはならない、女の美を見て心を動かしてはならない。一日女と結合したならば永久不變でなければならぬ。

第三（同章第三十三節——三十七節）は、人は誓つてはならない。

第四（同章第三十八節——四十二節）は、人は眼に眼を以て報いてはならない。一方の頬を打たれたら他方の頬をも向けてやらねばならない。

第五（同章第四十三節——四十八節）は、人は敵を憎んだり争つたりしてはいけぬ、敵を愛し、助け仕へてやらなければならぬ。

ネフリユードフは、若し人間が、この戒律に従つたならば、その生活がどんなものになるだらうかを考へた。と、久しくおぼえなかつた大きな喜びが胸に迫つて來た。困憊苦惱をつゞけてゐるうちに不意に安易自由を見出したやうな喜びだつた。

その夜、ネフリユードフは眠らなかつた。

19299

「こゝに自分のしなければならぬ仕事があるのだ。やつと一つの仕事が終わったかと思ふと、もう次の仕事待っている。」

ネフリュードフには全然新しい生活が始まった。新しい生活条件に這入ったからでなく、その夜以來彼のこと、すべて、今までとはすっかり違った新しい意義を持つてゐたからである。この新生活はどんな結末になるであらうか、それは時が示してくれるであらう。

カチユウシヤ 終

世界大衆文學全集第十六卷
カチユウシヤ
近松秋江
山本美
竹内喜太郎

昭和四年五月一日印刷
昭和四年五月三日發行



世界大衆文學全集第十六卷
カチユウシヤ

譯者 近松秋江
發行者 山本美
印刷者 竹内喜太郎
東京市芝區愛宕下町四ノ六
東京市牛込區榎町七番地

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

改造社

振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一一二一
至一一二四番

(刷印社會式株刷印清日)

[Blank page with faint bleed-through text from the reverse side]

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY

CHICAGO, ILL. 60607

UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY

CHICAGO, ILL. 60607

UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY

CHICAGO, ILL. 60607

[Book binding edge showing the thickness of the pages]

